

早稲田大学

大学院人間科学研究科 要項

2010

GRADUATE SCHOOL of HUMAN SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY





早稲田大学教旨

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ全ウシ、学問ノ活用ヲ效シ、模範国民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト爲ス。

早稲田大学ハ学問ノ独立ヲ本旨ト爲スヲ以テ、之カ自由討究ヲ主トシ、常に独創ノ研鑽ニカメ以テ世界ノ学問ニ裨補セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ学問ノ活用ヲ本旨ト爲スヲ以テ、学理ヲ学理トシテ研究スルト共ニ、之ヲ實際ニ応用スルノ道ヲ講シ以テ時世ノ進運ニ資セン事ヲ期ス。

早稲田大学ハ模範国民ノ造就ヲ本旨ト爲スヲ以テ、個性ヲ尊重シ、身家ヲ發達シ、国家社会ヲ利濟シ、併セテ広ク世界ニ活動ス可キ人格ヲ養成セン事ヲ期ス。

2010年度大学院人間科学研究科暦

行 事			日 程
大学院入学式（全学）			2010年 4月 2日（金）
前期	前期開始日		4月 1日（木）
	前期授業開始日		4月 6日（火）
	授 業 終 了		7月26日（月）
	補 講 期 間		7月27日（火）～8日2日（月）
	夏季休業	自	8月 3日（火）
		至	9月20日（月）
9月学位授与式			9月20日（月）
後期	後 期 開 始 日		9月21日（火）
	後 期 授 業 開 始		9月27日（月）
	冬季休業	自	12月23日（木）
		至	2011年 1月 5日（水）
	授 業 終 了		1月29日（土）
	補 講 期 間		1月31日（月）～2月5日（土）
	春季休業	自	2月 6日（日）
		至	3月31日（木）
学位授与式			3月26日（土）

[行事等]

体育祭（授業休講）： 11月 5日（金）
 早稲田祭（授業休講）： 11月 6日（土）・7日（日）
 夏季一斉休業期間： 8月 9日（月）～8月13日（金）
 創立記念日（授業休講）： 10月21日（木）
 年末年始一斉休業期間： 12月29日（水）～2011年1月5日（水）

[成績発表]

修士2年生以上、修士1年制コース：2011年2月28日（月）
 修士1年生、博士後期課程：2011年3月17日（木）

日曜日および国民の祝日に関する法律に規定する休日（一部）に授業を実施する。

早稲田大学学則第9条および早稲田大学大学院学則第26条第3項にもとづき、授業日数を確保するため、休業日に授業を行う。2010年度は以下の休業日に授業を実施することとする。

7月19日（月）：海の日

10月11日（月）：体育の日

※十分な授業回数を確保するために休業日に授業を実施することから、臨時の休業日を設ける。

2010年度は、4月30日（金）～5月1日（土）を休業日とする。

目 次

大学院人間科学研究科暦

I	大学院人間科学研究科沿革	1
II	大学院人間科学研究科の理念－3つの方針－	2
III	大学院人間科学研究科の研究領域	3
IV	早稲田大学大学院学則(抜粋)	5
V	早稲田大学学位規則(抜粋)	11
VI	修士論文・課題研究論文作成に関して	13
VII	博士論文作成に関して(課程による者)	16
VIII	人を対象とする研究および動物実験に関する規程	18
IX	研究生制度について	18
X	人間科学研究科学科目配当	19
XI	修了要件・学科目の履修方法	21
XII	教育職員免許状取得について	29
XIII	学費	59
XIV	学生生活等	61
	1. 学籍番号	61
	2. 学生証(身分証明書)	61
	3. 各種証明書の交付	62
	4. 諸願および諸届	62
	5. 各種補助	63
	6. 所沢総合事務センター	64
	7. 掲示	64
	8. 交通機関のストライキと授業	65
	9. 天候悪化(台風・大雪等)による休講等の取り扱いについて	65
	10. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について	65
	11. 早稲田大学健康センター所沢分室	67
	12. 早稲田大学学生健康増進互助会案内(学生早健会)	67
	13. 奨学金制度	68
	14. 学生教育研究災害傷害保険	68
XV	所沢図書館および中央図書館の利用について	69
XVI	研究指導・演習・講義科目の概要	72
XVII	全学共通設置科目の概要	288
XVIII	教員名簿	328
	大学院人間科学研究科学科目配当表	331

I 大学院人間科学研究科沿革

早稲田大学では創立100周年記念事業の一環として、1987年4月に森と湖に囲まれた狭山丘陵に所沢キャンパスを開設した。この狭山所沢キャンパスには、旧来の学問体系を基盤とする既存の学部とは異なる、人間を中心においた総合科学を形成する新しい人間科学部が創設された。ここには同時に大学内の共同利用研究施設として、人間総合研究センターが開設されて、人文科学・社会科学・自然科学にわたる学際的な人間総合科学の研究プロジェクトが展開されることとなった。

早稲田大学大学院人間科学研究科の設置は、人間科学部の設置準備段階で提案されていたものであるが、学部発足後まもなく、その完成年度に大学院人間科学研究科を開設することが教授会で承認され、設立準備検討委員会が具体的な活動を始めた。1990年の学内理事会において、人間科学研究科という名称のもとに、人文科学・社会科学・自然科学の多様な分野を含む、生命科学専攻と健康科学専攻を擁する大学院を設置する計画が承認され、その後文部省に申請して認可された。

1991年4月に人間科学研究科の修士課程として24の研究指導が開設され、2年後の1993年3月には49人の修士(人間科学)を送り出した。これに続いて、1993年4月には博士課程として19の研究指導が設置され3年後の1996年3月には、課程内学位論文審査により4人の博士(人間科学)が誕生した。翌1997年からは課程外学位論文の審査も開始された。

2008年度までに、1239人が修士号を取得し、課程内・課程外あわせて、176人が博士学位を取得している。これら修了生や学位取得者は、人間科学の種々の分野での研究の成果を活かして、教育・研究機関、官公庁、企業・マスコミなど、社会の各分野で活躍している。

2000年度以降には、社会人入試の開始、研究指導の再編成と人間科学専攻への一本化、入学定員の増加などを通して、新しい人間科学研究科の創造と展開に取り組んでいる。

2004年9月に人間科学部・人間科学研究科からなる人間科学学院が組織されたのを機に、2006年度より、5つに分けられていた研究領域を8つに分けることで、研究・教育の内容の特徴を明確に打ち出した。

社会的ニーズに敏速且つ柔軟に応え、2007年度より社会人入試の一環として修士課程1年制コース(教育臨床コース)を開設し、実践的高度職業人の育成に努めている。

Ⅱ 大学院人間科学研究科の理念

－ 3つの方針 －

1. ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）

早稲田大学の総合性・独創性を生かし、体系的な教育課程と、全学的な教育環境と学生生活環境のもとに、多様な学問・文化・言語・価値観の交流を育み、地球社会に主体的に貢献できる人材を育成する。人間科学研究科では、科学技術の飛躍的な進歩のなかで失われた人間性を回復するために、人間と環境の調和や心身の健康の維持増進などを通して生活の質の向上に貢献するような、人間を中心においた総合科学を形成することを目的としている。

人間の総合的な理解のために、人間科学研究科ではきわめて多岐にわたる研究が行われているが、それらを相互に連携させるために、各研究指導を「地域・地球環境科学」、「人間行動・環境科学」、「文化・社会環境科学」、「健康・生命医学」、「健康福祉科学」、「臨床心理学」、「感性認知情報システム」、および「教育コミュニケーション情報科学」の8つの研究領域に分けた。さらに、社会的ニーズに迅速かつ柔軟に応え、高度で実践的な職業人の育成を目指した「教育臨床コース」を加え、人間科学専攻を構成している。

各研究領域およびコースにおいては、国際社会で活躍できる高い専門性を備えた研究者・実践家の育成を目的とすることは言うまでもない。それと同時に、人文・社会科学と自然科学が相互浸透する総合科学としての人間科学を追求するわが国で最初期の大学院のひとつであることから、高い専門性とそれを取り巻く広い学際性を背景に、人間をめぐる多様な諸問題に柔軟に対応できる、新しいタイプの研究者・実践家の育成を目指している。

2. カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）

各研究領域に所属する学生は、所属する研究領域の演習に専念するだけでなく、同じ研究領域内の関連する多様な演習や講義科目をはじめ、他の研究領域の講義科目などを広く履修して、学際的な人間総合科学の全体像を把握した上で研究を行う。各課程の標準修業年限までに学位を取得することを目標に、多くの演習と講義科目、および多様な研究指導を設置した。ただし、特に優れた研究業績を上げた学生については、標準修業年限以下で修了できる制度も設けた。

人間科学研究科の研究分野では、国際的なフィールドを調査・研究の対象とするケースが多いことも特徴のひとつである。そこで、海外を含む学外でのフィールド調査・実験・研究を促進し、国際的な場で活躍できる研究者・実践家を育成するため、特に海外での授業・調査・実習などの活動を含む科目を8つの研究領域に数多く設置するとともに、インターネットを介したオンデマンド科目を積極的に導入して、これら学外での研究・調査活動と勉学の両立を容易に実現できるようにした。また、「教育臨床コース」においては、おもに夕方以降に開講する科目、およびオンデマンド科目を設置し、演習と研究指導を含むこれらの科目を、社会人が仕事を続けながら履修して、実践修士の学位を取得できるように配慮した。

3. アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）

早稲田大学では、『学問の独立』の教育理念のもとで、一定の高い基礎学力を持ち、かつ知的好奇心が旺盛で、本学の理念である進取の精神に富む、勉学意欲の高い学生を、わが国をはじめ世界から多数迎え入れている。

とくに人間科学研究科では、総合科学としてだけでなく、各研究指導ごとに新しい研究も行っている。つまり、人間の総合理解に貢献する人間科学という研究は8つの研究領域、あるいはそれを越えた新しい枠組みで展開されている。そのため、本学人間科学部からの内部進学者はもちろんのこと、他大学（国内外）の理学部、工学部、医学部、文学部、法学部、経済学部等の出身者などを積極的に広く受け入れている。修士課程では、他領域で学士号をもつ者には一般入試において、本学人間科学部の学生には一般入試・推薦入試において選抜を行っている。また、博士後期課程にも多数の研究指導が設置され、すでに多くの博士号取得者を輩出し、高度に専門的な研究や総合科学的研究をリードする人材を育成している。人間科学研究科は、本学人間科学部から進学して総合科学を目指すだけでなく、ある領域の専門性をすでにもっているみなさんにも広く門戸を開いている。

Ⅲ 大学院人間科学研究科の研究領域

人間科学研究科にある地域・地球環境科学、人間行動・環境科学、文化・社会環境科学、健康・生命医科学、健康福祉科学、臨床心理学、感性認知情報システム、教育コミュニケーション情報科学の8研究領域のそれぞれの内容は次のとおりである。

【博士後期課程・修士課程(2年制)】

(1) 地域・地球環境科学研究領域

本研究領域では、持続可能な社会の構築に向けて、地域・地球環境を自然科学および社会科学の分野から解析することを目的とする。自然科学分野では生態学、環境科学など、社会科学分野では環境社会学、人口学、人類学などの研究を行う。また、自然と地域社会との統合的な視野を大切に、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(2) 人間行動・環境科学研究領域

本研究領域では、環境と人間の複雑多様な関係のあり方について、物理的、社会的、文化的環境を人間が創り出し、自ら創出した環境によって人間が形づくられる、という双方向性に等しく注目し、その関係のあるべき姿について心理学および建築学を中核とした学際的な研究を行う。また、環境創造と人間の心理行動発達の双方向の視野に立ち、国際的水準の研究・教育能力を有する研究者や実務家などの優秀な人材を育成する。

(3) 文化・社会環境科学研究領域

本研究領域では、日本をはじめ、アジア、アフリカ、中東、欧州、北南米などを対象として、実践的なフィールドワークと文献研究を駆使した文化と社会の解読を目的とする。さらに、社会科学、人文科学の多様な領域を横断する学際的な研究を通じて、現代社会の諸問題の解明および多文化・多民族共生の持続可能な社会の構築に向けて、人間総合科学としての体系的な研究・教育能力を有する研究者や専門的能力に秀でた実務家などの人材を育成する。

(4) 健康・生命医科学研究領域

本研究領域では、健康科学と生命科学の研究領域とを融合させることにより、生命現象の本質を解剖学、生化学、生理学、栄養学、内分泌学、免疫学、神経科学、バイオメカニクス等の立場から解明すると共に、健康の増進や生活の質の向上、疾患の一次予防を視野にいたした健康科学の確立を目指す。併せて、これらの領域における国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成すると共に、研究成果を踏まえて、健康に関わる行政、教育に対しても有意義な提言を行える人材を育成する。

(5) 健康福祉科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている人間の健康医療福祉の充実を目指し、医学および人間工学・支援工学、福祉ロボット開発・産業化、ならびに社会保障政策、老年社会福祉、障害児福祉、幼少児福祉教育の研究、さらにスポーツ健康マネジメントや緩和医療学など、多方面から健康福祉を調査研究する。その成果を健康福祉政策・行政や実践に反映させるとともに、行政や実践の場で活躍できる国際的水準の人材を育成する。

(6) 臨床心理科学研究領域

本研究領域では、現代社会に求められている心身の健康の維持増進にかかわる心身医学、認知行動カウンセリング学、学校カウンセリング、心理臨床学、行動臨床心理学を中心に研究を展開する。さらに、臨床心理学の基盤的な研究から実践的な研究を通じて、臨床心理科学研究と心理臨床実践の双方の能力を兼ね備えた心身の健康の維持増進に携わる国際的水準の人材を育成する。

(7) 感性認知情報システム研究領域

本研究領域では、人間の「感性」を感覚－知覚－認知という一連の情報処理プロセスの中に位置づけ、生体情報をベースに、感性、情動、言語、イメージなどの心の構造と機能ならびにその測定法を研究する。さらに、

認知科学、情報科学、人間工学、システム工学などの基盤的研究から実践的研究を通じて、さまざまな人間の営みにおける安全性、快適性、生活の質の向上に貢献する国際的水準の人材を育成する。

(8)教育コミュニケーション情報科学研究領域

本研究領域では、学際的な視点に立ち、教育やコミュニケーションと情報科学とを融合して、高度情報化社会における人間の営みと情報行動について探究する。多様性を尊重しながら、快適さを追求する人間中心のシステムと社会の在り方を、国際的な視野から多面的に研究するとともに、従来の研究分野にとらわれず、文理融合・理工連携を図り、人間社会にとって有用なシステム開発研究を行い、体系的な国際的水準の研究・教育能力を有する人材を育成する。

ー2005年度以前入学者対象ー

スポーツ科学研究領域

スポーツ科学研究領域では、スポーツにかかわる諸問題を自然科学や社会科学や人文科学の手法によって学際的に研究する。また、競技スポーツの必要な技能向上にかかわる指導方法、組織の在り方について、理論と実践からの研究と人材育成を行う。

【修士課程1年制コース】

(1)教育臨床コース

本コースでは、総合的・科学的な視野をもった実践的方法論の習得を目指す。また現役職業人の勉学・職業の両立を可能とする勉学機会の拡大を考慮しながら社会人の育成を目指す。児童・生徒の立場に立脚し、集団生活の基盤である学級での教育法を習得し、個々の多様性や個性を重視した指導方法等にかかる知識・方法論を修得する。

IV 早稲田大学大学院学則（抜粋）

第1章 総 則

（設置の目的）

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて、文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

（博士課程）

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取り扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

5 修士課程の標準修業年限は、2年とする。

6 前項の規定にかかわらず、修士課程においては、主として実務の経験を有する者に対して教育を行う場合であって、教育研究上の必要があり、かつ、昼間と併せて夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適切な方法により教育上支障を生じないときは、研究科、専攻または学生の履修上の区分に応じ、標準修業年限を1年以上2年未満の期間とすることができる。

（課程の趣旨）

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うものとする。

（研究科の構成）

第4条 本大学院に次の研究科をおき、各研究科にそれぞれの専攻をおく。

研 究 科	課 程	
	修 士 課 程	博 士 後 期 課 程
人間科学研究科	人間科学専攻	人間科学専攻

第2章 教育方法等

（教育方法）

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。

（教育方法の特例）

第6条の2 本大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間または時期において授業または研究指導を行う等の適当な方法によって教育を行うことができる。

（履修方法等）

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。

3 本大学院の講義、演習、実習などの授業科目の単位数の計算については、本大学学則第12条および第1

3条の規定を準用する。

(他研究科または学部 of 授業科目の履修)

第8条 当該学術院教授会または研究科運営委員会(以下「研究科運営委員会等」という。)において、教育研究上有益と認めるときは、他の研究科の授業科目または学部 of 授業科目を履修させ、これを第13条、第13条の2または第13条の3に規定する単位に充当することができる。

(入学前の既修得単位の認定)

第8条の2 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、本大学院に入学する前に本大学院または他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)において修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)は、10単位を超えない範囲で、第13条に規定する単位に充当することができる。

(授業科目の委託)

第9条 当該研究科運営委員会等において教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院(外国の大学の大学院を含む。)と予め協議の上、その大学院の授業科目を履修させることができる。

2 前項の規定により履修させた単位は10単位を超えない範囲で、これを第13条に規定する単位に充当することができる。

(研究指導の委託)

第10条 当該研究科運営委員会等において、教育研究上有益と認めるときは、他大学の大学院または研究所(外国の大学の大学院または研究所を含む。)と予め協議の上、本大学院の学生にその大学院等において研究指導を受けさせることができる。ただし、修士課程の学生について認める場合には、当該研究指導を受ける期間は、1年を超えないものとする。

(単位の認定)

第11条 授業科目を履修した者に対しては、試験その他の方法によって、その合格者に所定の単位を与える。

(試験および成績評価)

第12条 授業科目に関する試験は、当該研究科運営委員会等の定める方法によって、毎学年末、またはその研究科運営委員会等が適当と認める時期に行う。

2 授業科目の成績は、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C \cdot F$ の五級に分ち、 $A^+ \cdot A \cdot B \cdot C$ を合格とし、 F を不合格とする。

3 前項の規定にかかわらず、学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、必要な学修を考慮して単位を認めることができる。なお、成績は、 P 、 Q の二級に分ち、 P を合格とし、 Q を不合格とする。

第3章 課程の修了および学位の授与

(修士課程の修了要件)

第13条 修士課程の修了の要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

2 前項の場合において、当該修士課程の目的に応じ適当と認められるときは、特定の課題についての研究成果の審査をもって修士論文の審査に代えることができる。

3 2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にあつては第1項の前段に規定する在学年数については、当該標準修業年限以上在学するものとする。

(博士課程の修了要件)

第14条 博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学

院博士課程に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

- 2 第2条第6項の規定により標準修業年限を1年以上2年未満とした修士課程を修了した者および第13条第1項ただし書の規定による在学期間をもって修士課程を修了した者の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に修士課程における在学期間に3年を加えた期間以上在学し、各研究科の定めた所定の単位を修得し、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に3年(修士課程における在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。
- 3 前2項の規定にかかわらず、第29条第2号、第3号および第4号の規定により、博士後期課程への入学資格に関し修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者が、博士後期課程に入学した場合の博士課程の修了の要件は、大学院博士課程に3年以上在学し、各研究科の定めた所定の博士論文提出資格要件を満たし、所要の研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者について当該研究科運営委員会等が認めた場合に限り、大学院博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。
- 4 専門職学位課程を修了した者の博士課程の修了要件は、大学院博士課程に5年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた上、当該研究科運営委員会等の行う博士論文の審査および試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、標準修業年限を1年以上2年未満または2年とした専門職学位課程を修了した場合は、大学院博士課程に3年から当該専門職学位課程の標準修業年限を差し引いた期間以上在学すれば足りるものとする。
- 5 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ、必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り、当該研究科運営委員会等の許可を得て、博士論文を提出し、試験を受けることができる。

(博士学位の授与)

第15条 本大学院の博士課程を修了した者には、博士の学位を授与する。

(修士学位の授与)

第16条 本大学院の修士課程を修了した者には、修士の学位を授与する。

(課程によらない者の博士学位の授与)

第17条 博士学位は、第15条の規定にかかわらず、博士論文を提出して、その審査および試験に合格し、かつ、専攻学術に関し博士課程を修了した者と同様に広い学識を有することを確認された者に対しても授与することができる。

第5章 学年、学期および休業日

(学年および学期)

第25条 本大学院の学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

2 学年は次の2期に分ける。

前期 4月1日から9月20日まで

後期 9月21日から翌年3月31日まで

(休業日)

第26条 定期休業日は、次のとおりとする。

- 一 日曜日
- 二 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- 三 本大学創立記念日(10月21日)
- 四 夏季休業 8月上旬から9月20日まで

五 冬季休業 12月下旬から翌年1月7日まで

六 春季休業 2月中旬から3月31日まで

2 夏季、冬季、春季休業期間の変更または臨時の休業日については、その都度公示する。

3 休業日でも、特別の必要があるときは授業を行うことがある。

第6章 入学、休学、退学、転学、専攻の変更および懲戒

(入学の時期)

第27条 入学時期は、毎学期の始めとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

一 大学を卒業した者

二 学校教育法第68条の2第3項の規定により学士の学位を授与された者

三 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者

四 文部科学大臣の指定した者

五 大学に3年以上在学し、または外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた者

六 各研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者

(博士後期課程の入学資格)

第29条 本大学院の博士後期課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について入学を許可する。

一 修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を得た者

二 外国において修士もしくは修士(専門職)の学位またはこれに相当する学位を得た者

三 文部科学大臣の指定した者

四 各研究科において、個別の入学資格審査により、修士または修士(専門職)もしくは法務博士(専門職)の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者

(入学検定の手続)

第30条 本大学院に入学を志願する者は、第40条に定める入学検定料を納付し、必要書類を提出しなければならない。

(入学手続)

第31条 入学を許可された者は、別に定める入学金および授業料等を添えて、本大学院所定の用紙による誓約書、保証書および住民票記載事項証明書を指定された入学手続期間中に提出しなければならない。

(保証人)

第32条 保証人は、父兄または独立の生計を営む者で、確実に保証人としての責務を果し得る者でなければならない。

2 保証人として不適当と認めたときは、その変更を命ずることができる。

3 保証人は、保証する学生の在学中、その一身に関する事項について一切の責任を負わなければならない。

4 保証人が死亡し、またはその他の理由でその責務を果たし得ない場合には、新たに保証人を選定して届け出なければならない。

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程および専門職学位課程にあつては4年、博士後期課程にあつては6年を超えることはできない。

2 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分にお

ける修士課程および専門職学位課程の在学年数にあつては当該標準修業年限の2倍を超えることはできないものとする。

(休 学)

第34条 病気その他の理由で引き続き2カ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の研究科長に願い出なければならない。

2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程および専門職学位課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。

3 前項の規定にかかわらず2年以外の標準修業年限を定める研究科、専攻または学生の履修上の区分における修士課程および専門職学位課程の通算年数にあつては当該標準修業年限を超えることはできない。

4 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。

5 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。

6 休学期間は、在学年数に算入しない。

(専攻および研究科の変更等)

第35条 専攻および研究科の変更または転入学に関する願い出があつた場合には、当該研究科運営委員会等の議を経てこれを許可することができる。

(任意退学)

第36条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を付し、保証人連署で願い出なければならない。

(再入学)

第37条 正当な理由で退学した者が、再入学を志望したときは、選考の上これを許可することがある。この場合には、既修の授業科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(懲 戒)

第38条 学生が、本大学の規約に違反し、または学生の本分に反する行為があつたときは懲戒処分に付することがある。

2 懲戒は、戒告、停学、退学の3種とする。

(処分退学)

第39条 次の各号の一に該当する者は、退学処分に付す。

- 一 性行不良で改善の見込みがないと認められる者
- 二 学業を怠り、成業の見込みがないと認められる者
- 三 正当の理由がなくて出席常でない者
- 四 本大学院の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

第7章 入学検定料・入学金・授業料・演習料・実験演習料および施設費等

(入学検定料)

第40条 本大学院に入学を志願する者は、第30条の定める手続と同時に別表に定める入学検定料を納めなければならない。

(入学時の学費)

第41条 入学または転入学を許可された者は、入学金、授業料、演習料、実験演習料および施設費等を指定された入学手続期間内に納めなければならない。

(授業料等の納入)

第41条の2 学生が納めるべき入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料は、別表のとおりとする。

(授業料等の納入期日)

第42条 前条の入学金、授業料、施設費、演習料および実験演習料の納入期日は次のとおりとする。ただし、

入学または転入学を許可された者が第41条の規定により指定された入学手続期間内に納める場合は、この限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

(納入学費の取扱)

第43条 すでに納入した授業料およびその他の学費は、事情の如何にかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

第9章 科目等履修生

(科目等履修生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、科目等履修生として入学させることができる。

(科目等履修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託履修生という。

2 前項に定める履修生以外の者を一般履修生という。

(科目等履修生の選考)

第53条 科目等履修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(科目等履修生の履修証明書)

第54条 科目等履修生が履修した科目について試験を受け、合格したときは、単位を授与し、本人の請求によって証明書を交付する。

第10章 研究生

(研究生)

第57条 本大学院博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、研究生として入学させることができる。

(研究生の選考)

第58条 研究生として研究指導を受けようとする者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

(研究生の入学手続、学費および在学期間等)

第59条 研究生の入学手続、学費および在学期間等については別に規程をもって定める。

(正規学生の規定準用)

第60条 研究生については、本章の規定および別に定める規程によるほか、正規の学生に関する規定を準用する。

V 早稲田大学学位規則（抜粋）

（目的）

第1条 この規則は、早稲田大学学則（昭和24年4月1日。以下「大学学則」という。）および早稲田大学大学院学則（昭和51年4月1日教務達第1号。以下「大学院学則」という。）に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

（学位）

第2条 本大学において授与する学位は、学士、博士、修士とする。

2 博士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	博士（人間科学）

3 大学は、前項に定める学位のほか博士（学術）の学位を授与することができる。

4 修士の学位は次のとおりとする。

研 究 科	専 攻	学位（専攻分野）
人間科学研究科	人間科学専攻	修士（人間科学） または 修士（実践人間科学）

（博士学位授与の要件）

第4条 博士の学位は、大学院学則第14条により博士課程を修了した者に授与する。

2 前項の規定にかかわらず、博士の学位は本大学院の博士課程を経ない者であっても、大学院学則第17条により授与することができる。

（修士学位授与の要件）

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

（課程による者の学位論文の受理）

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程および専門職学位課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科長に提出するものとする。ただし、研究科長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科運営委員会の審査に付さなければならない。

（学位論文）

第10条 博士、修士および専門職学位の学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項により、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

（審査員）

第12条 研究科運営委員会は、第7条第2項の規定により、学位論文が審査に付されたとき、または第8条お

よび第9条の規定により、学位の審査を付託されたときは、当該研究科の教員のうちから、3人以上の審査員を選任し、学位論文の審査および試験または学識の確認を委託しなければならない。

- 2 研究科運営委員会が必要と認めたときは、前項の規定にかかわらず本大学の教員または教員であった者を、学位論文の審査および試験または学識の確認の審査員に委嘱することができる。
- 3 研究科運営委員会が必要と認めたときは、第1項の規定にかかわらず他の大学院または研究所等の教員等に学位論文の審査員を委嘱することができる。
- 4 研究科運営委員会は、第1項の審査員のうち1人を主任審査員として指名しなければならない。ただし、研究科委員会が必要と認めたときは、第2項の審査員のうち、本大学の教員である者を主任審査員として指名することができる。

(論文審査要旨の公表)

第20条 博士の学位を授与したときは、その論文の審査要旨は、大学が適当と認める方法によってこれを公表する。

(学位論文の公表)

第21条 博士の学位を授与された者は、授与された日から1年以内に、当該博士論文を、書籍または学術雑誌等により、公表しなければならない。ただし、学位を授与される前に、印刷公表されているときは、この限りではない。

- 2 前項の規定にかかわらず博士の学位を授与された者は、やむを得ない理由がある場合には、研究科運営委員会の承認を受けて、当該論文の全文に代えて、その内容を要約したものを印刷公表することができる。この場合、大学はその論文の全文を求めに応じて閲覧に供するものとする。
- 3 第1項の規定により、公表する場合は、当該論文に「早稲田大学審査学位論文(博士)」と、また前項の規定により公表する場合は、当該論文の要旨に、「早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨」と明記しなければならない。

(学位の名称)

第22条 本大学の授与する学位には、早稲田大学と付記するものとする。

(学位授与の取消)

第23条 本大学において博士、修士学位を授与された者につき、不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したときは、総長は、当該研究科運営委員会および研究科長会の議を経て、すでに授与した学位を取り消し、学位記を返還させ、かつ、その旨を公表するものとする。

VI 修士論文・課題研究論文作成に関して

【 修士論文〔修士課程（2年制）〕】

1. 学位

本研究科修士課程に通常2年以上4年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文の審査および最終試験に合格した者に対して「修士(人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

修士論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。
- (2) 提出日までに学費が完納されていること。
- (3) 修士論文計画書が提出済みであること。

3. 修士論文計画書

- (1) 修士論文を提出する者は、その年度の6月下旬に、所定の用紙を使った修士論文計画書を提出しなければならない。
- (2) 修士論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印を受けていなければならない。
- (3) 修士論文計画書の提出については、5月に掲示にて知らせる。

4. 修士論文提出期日および受付期間

- (1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて伝達)
- (2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(時間厳守のこと)(ただし、12:30～1:30を除く)
- (3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)
- (4) その他
 - ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。
 - ②郵送による提出は一切認めない。
 - ③代理人による提出には委任状を必要とする。

5. 修士論文要旨の作成

修士論文要旨はA4版2枚で作成する。

6. 修士論文の作成

- (1) 提出部数は審査員の人数分とする。
- (2) 修士論文は、横書きとし、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとする。
また、欧文の場合はダブルスペースとする。
- (3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員などを記入する。
- (4) 製本の仕方 修士論文要旨、表紙、目次、本文の順に、A4判ファイルにとじる。
表側に、所定の用紙を使用した審査依頼書を貼付して提出する。

7. 公開審査会の開催

修士論文審査会は学生発表部分を公開とし、修士論文要旨は要旨集として予め配付する。

8. 修士論文審査員

- (1) 修士論文の審査員は、人間科学研究科の修士課程研究指導担当教員3名以上をもって構成し、その

内1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

(2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用修士論文の提出

口頭試問などでの指示を受けて修正したもの1部を、審査のあとで提出する。

図書館では、学内外から要望があった場合は、希望者にコピーを配付する。この件について、予め了承願いたい。

10. 学術誌『人間科学研究』掲載用修士論文要旨の提出

修士論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、提出すること。

【課題研究論文〔修士課程1年制コース〕】

1. 学位について

本研究科修士課程1年制コースに通常1年以上2年以内在学し、別に示すところによる所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、課題研究論文の審査および最終試験に合格した者に対して、「修士(実践人間科学)」の学位が授与される。

2. 提出資格

課題研究論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

(1) 所定単位の取得あるいは取得見込みの者であること。

(2) 提出日までに学費が完納されていること。

(3) 「課題研究論文計画書」が提出済みであること。

3. 課題研究論文計画書

(1) 課題研究論文を提出する者は、その年度の所定の期日(10月頃)までに、所定の用紙を使用した「課題研究論文計画書」を提出しなければならない。

(2) 課題研究論文計画書の提出にあたっては、記載内容について、指導教員の指導を受けたのち、承認印をうけていなければならない。

(3) 課題研究論文計画書の提出についての詳細は、入学時に知らせる。

4. 課題研究論文提出期日および受付期間

(1) 提出締切日 1月中旬予定(詳細は掲示にて発表)

(2) 提出受付時間 午前10時～午後4時(ただし、12:30～1:30を除く)

(3) 提出受付場所 大学院人間科学研究科(所沢総合事務センター)

(4) その他 ①受付時間を過ぎた場合は理由の如何を問わず受理しない。

②郵送による提出を認める。

③代理人による提出には委任状を必要とする。

5. 課題研究論文要旨の作成

課題研究論文要旨はA4版2枚で作成する。

6. 課題研究論文の作成

(1) 提出部数は審査員の人数分とする。

(2) 課題研究論文は、横書きとし、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとする。

また、欧文の場合はダブル・スペースとする。

(3) 表紙は、所定の見本にならって、題目(和文・英文)、氏名(和文・英文)、研究指導教員などを記入する。

(4) 製本の仕方 課題研究論文要旨、表紙、目次、本文の順に、A4のファイルにとじる。

表側に、所定の用紙を使用した審査依頼書を貼って提出する。

7. 公開審査会の開催

課題研究論文審査会は学生発表部分を公開とし、課題研究論文要旨は要旨集として予め配付する。

8. 課題研究論文審査員

(1) 課題研究論文の審査員は、人間科学学術院の専任教員2名以上をもって構成し、その内の修士課程研究指導担当教員1名を主査とする。必要な場合には、本学および他の大学の大学院・学部あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

(2) 各審査員は、研究科運営委員会の議を経て決定する。

9. 所沢図書館保管用課題研究論文の提出

口頭試問などでの指示を受けて修正した課題研究論文を提出し、図書館に保管する。図書館では、学内外から希望があった場合はコピーを配付する。この件について、予め了承願いたい。

10. 学術誌『人間科学研究』掲載用課題研究論文要旨の提出

課題研究論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、提出すること。

VII 博士論文作成に関して（課程による者）

1. 学位について

本研究科博士後期課程に通常3年以上6年以内在学し、所要の研究指導を受けた上、博士学位論文の審査および試験に合格した者に対して「博士（人間科学）」の学位が授与される。

2. 提出資格について

博士学位論文の提出資格は、次の要件が満たされていなければならない。

- (1) 早稲田大学大学院学則第14条に定めるもののほか、次の(2)または(3)の要件を満たしていなければならない。
- (2) 博士後期課程在学が3年以上の場合、原則として研究業績が、博士学位論文に関連して、申請者が第一著者である公表学術論文または著書が、印刷中のものを含めて1編(冊)以上あること。
- (3) 博士後期課程在学が3年に満たずに提出しようとする場合は、(2)の条件を満たした上で、申請者を第一著者とする公表学術論文または著書が、申請者の所属する研究グループ以外の研究者により、積極的な評価を受けて、公表学術論文または著書に3回以上引用されていること。

なお、公表学術論文とは、日本学術会議に登録された学会が発行する審査規定が明記された学会誌に掲載された論文、およびそれに準ずる論文、または、海外において第三者審査委員が明記されている学会誌・学術雑誌に掲載された論文を指す。

3. 博士学位申請に関する提出書類について

(1) 学位申請書(大学所定)	1部
(2) 学位論文	3部
(3) 論文概要書	1部
(4) 履歴書(人間科学研究科所定)	1部
(5) 研究業績書(人間科学研究科所定)	1部
(6) 研究業績書に記載した学術論文等の抜刷	各1部
(7) 大学院における成績証明書(修士課程)	1部

4. 博士学位論文等の提出期日について

例年、5月と10月の2回受け付ける。詳細な期日等はその都度掲示等で伝達する。

5. 博士学位論文等の作成要領について

(1) 博士学位論文

使用言語は原則として日本語とする。ただし、英語での提出を妨げないが英語の場合は和訳を提出させることがある。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。英文の場合はダブルスペースとする。

(2) 論文概要書

使用言語は原則として日本語とする。

書式は横書きとし(用紙は縦)、A4判用紙等にパソコン等で片面打ちとし、活字またはその他印字によるものとする。

字数は、2,000字以内とする。

6. 博士学位論文審査員について

論文審査員は、人間科学研究科の博士後期課程研究指導担当の教員または教員であった者3名以上をもって構成し、その内研究科運営委員の教員1名を主任審査員とする。必要な場合には、修士課程研究指導担当教員および他の大学院あるいは研究所等の教員等をさらに審査員として加えることができる。

7. 審査について

(1) 予備審査

提出された学位論文および書類等をもとに学位論文の受理を決定する予備審査を行う。

(2) 公開審査会

論文審査にあたり、公開審査会を開催する。

8. 学術誌『人間科学研究』掲載用博士論文要旨の提出

博士論文要旨は、別に定める作成要件に従って作成のうえ、提出すること。

※ 博士後期課程に3年以上在学し、かつ所要の研究指導を受けて退学した場合（通称、満期退学または単位取得退学）は、退学した日から起算して3年以内に限り『課程による者』として博士学位論文を提出することができる。なお、退学後3年以内とは、博士学位論文の「受理」を決定する運営委員会の開催日が、3年以内にあることであり、例年、受理を決定する運営委員会は6月と11月に開催される。

※ 審査に合格した学位論文は、本学中央図書館・所沢図書館・国会図書館に配架し閲覧に供する。

また、学内外から要望があった場合は、希望者にコピーのサービスをするのであらかじめご了承ください。

Ⅷ 人を対象とする研究および動物実験に関する規程

「人を対象とする研究に関する倫理規程」および「動物実験実施規程」は、大学で定められている。人間科学研究科に所属する学生は、上記規程を充分遵守のうえ研究活動に精進されることを期待する。

なお、規定に従い研究計画を申請する際は、指導教員と充分相談のうえ申請すること。

Ⅸ 研究生制度について

本研究科は、大学院学則第57条の定めるところにより本研究科博士後期課程に6年間在学し、博士論文を提出しないで退学した者のうち、引き続き大学院において博士論文作成のため研究指導を受けようとする者があるときは、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上、研究生として入学を許可することがある。(出願の時期、手続き方法等については掲示で伝達する。)

以下「大学院研究生に関する規程」の抜粋

(出願手続)

第2条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書により、当該研究科長に願い出なければならない。

(入学手続、学費)

第3条 研究生として入学を許可された者は、次の区分による所定の学費を納入して、学生証の交付を受けなければならない。

一 研究指導料	博士後期課程の新3年生の授業料の半額。
二 演習料・実験実習料	博士後期課程の新3年生の演習料または実験実習料の全額。ただし、その年度の前期において学位を取得した場合は半額。

2 前項の学費の分納期は、次のとおりとする。

一 研究指導料	第1期 全額
二 演習料・実験実習料	第1期 半額 第2期 半額

(在学期間)

第4条 研究生の在学期間は1年とする。ただし、研究指導を継続して受けようとする時は、原則として2回に限り延長することができる。

2 在学期間の延長を希望する者は、毎年度の終わりまでに、理由を付して、当該研究科長に願いでなければならない。

X 人間科学研究科学科目配当

1. 学科目配当の構成

課 程	研究領域・コース	科目区分
修士課程 (2年制)	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域	研究指導 修士論文 演習(1) 演習(2) 講義科目 実習科目
修士課程 1年制コース	教育臨床コース	研究指導 課題研究論文 コース必修(演習) コース必修(実習) コース選択必修 コース選択 選択科目
博士後期課程	地域・地球環境科学研究領域 人間行動・環境科学研究領域 文化・社会環境科学研究領域 健康・生命医科学研究領域 健康福祉科学研究領域 臨床心理科学研究領域 感性認知情報システム研究領域 教育コミュニケーション情報科学研究領域 (2005年度以前入学者対象) スポーツ科学研究領域	研究指導 博士論文

2. 科目の説明

課 程	科目区分	配 当	期 間	単 位	備 考
修士課程 (2年制)	研究指導	1・2年	通年	無	曜日時限設定なし
	修士論文	2年	—	無	
	演習(1)	1・2年	通年	4単位	
	演習(2)	1・2年	通年	4単位	
	講義科目	1・2年	半期	2単位	
	実習科目	1・2年	通年	2単位	臨床心理実習ⅠⅡは2年配当
修士課程 1年制 コース	研究指導	1年	通年	無	曜日時限設定なし
	課題研究論文	1年	—	無	
	コース必修(演習)	1年	通年	4単位	
	コース必修(実習)	1年	通年	2単位	
	コース選択必修	1年	半期	2単位	
	コース選択	1年	半期	2単位	
博士後期 課程	選択科目	1年	半期	2単位	修士課程(2年制)配当科目
	研究指導	1・2・3年	通年	無	曜日時限の設定なし
	博士論文	3年	—	無	

注意: 集中講義として行う場合は期間相当分を実施

3. 大学院人間科学研究科学科目担当表

巻末に掲載。

備考:大学院人間科学研究科は、修士課程、博士後期課程共、人間科学専攻のみの学科目担当となっている。

X I 修了要件・学科目の履修方法

— 修士課程 —

【 修了要件 】

1. 修士課程（2年制）

修士課程（2年制）の修了要件は、通常2年以上4年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ（研究指導の評価が2年以上にわたり合格「P」であること）、修士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士（人間科学）」の学位が授与される。

ただし、優れた業績を上げた者について本研究科運営委員会が認めた場合に限り、修士課程に1年以上在学すれば修了できる。

2. 修士課程1年制コース

修士課程1年制コースの修了要件は、通常1年以上2年以内在学し、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けたうえ（研究指導の評価が合格「P」であること）、課題研究論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には、「修士（実践人間科学）」の学位が授与される。

【 授業科目の履修方法 】

1. 修士課程（2年制）

(1) 研究指導および修士論文

研究指導を2年以上にわたり合格し、修士論文に合格しなければならない。

(2) 必修科目

各自が所属する研究指導の演習科目（1）、（2）の計8単位を履修しなければならない。

一部、研究指導教員が担当する研究指導名と演習科目名が異なる科目があるが、この場合、研究指導教員が担当する演習科目（1）・（2）を履修するものとする。

(3) 選択科目

演習科目、講義科目の中から研究領域にとらわれずに22単位（以上）を履修しなければならない。

各自が所属する研究指導以外の演習科目は、2科目8単位以内に限り、修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(4) 各学年において登録できる授業科目の登録制限単位は34単位とする。

(5) 上記の履修方法を表にすると下記ようになる。

必修/選択	科目区分	科目の説明（単位数）	修了要件
必修	研究指導		2年分合格（単位なし）
	修士論文		合格（単位なし）
	演習科目	所属する研究指導の演習（1）（2）	8単位
選択	演習科目	所属する研究指導以外の演習（1）（2）	22単位（以上）
	講義科目	領域にとらわれず自由に選択	
修了単位			30単位（以上）

2. 修士課程1年制コース

(1) 研究指導および課題研究論文

研究指導および課題研究論文に合格しなければならない。

(2) コース必修科目

①コース必修科目(演習)

各自が所属する研究指導の演習科目(1)の4単位を履修しなければならない。

②コース必修科目(実習)

心理教育臨床実習、心理臨床事例実習の各2単位、4単位分を履修しなければならない。

(3) コース選択必修科目

コース選択必修科目から12単位(以上)を履修しなければならない。

(4) コース選択科目

必要に応じてコース選択科目から履修する。

(5) 選択科目

修士課程(2年制)に設置されている演習科目、講義科目の中から研究領域・コースにとらわれずに、30単位を満たすように履修する。各自が所属する研究指導以外の演習科目は、演習(1)に限り1科目4単位を修了に必要な単位として算入することができる。各自が所属する研究指導以外の演習科目を登録する場合は、事前に当該演習科目の担当教員に了解を得なければならない。

(6) 1年間に登録できる授業科目の登録制限単位は46単位とする。

(7) 上記の履修方法を表にすると下記のとおりとなる。

科目区分	科目の説明	修了要件
研究指導	所属する研究指導	合格(単位なし)
課題研究論文		合格(単位なし)
コース必修科目(演習)	所属する研究指導の演習(1)	4単位
コース必修科目(実習)	心理教育臨床実習 心理臨床事例実習	4単位 (2単位×2科目)
コース選択必修科目		12単位(以上)
コース選択科目		30単位より上記で取得した単位を除いた単位数を取得
選択科目	修士課程(2年制)設置科目	
修了単位数		30単位(以上)

3. 通年科目履修の弾力化

半期休学・半期留学をした際の通年科目(研究指導、演習)の履修について、研究指導担当教員の許可がある場合に限り、通年科目を半期に分割し、継続して履修することができる。ただし、継続履修できるのは、同じ担当教員の科目を登録した場合に限る。

4. 他箇所設置科目および入学前修得科目(修士課程(2年制)・修士課程1年制コース共通)

(1) 本大学の他箇所に設置されている大学院生対象科目を指導教員の許可を得て履修することができる。

修得した授業科目の単位のうち、10単位以内に限り講義科目の代替科目として修了に必要な単位に算入することができる。この場合の登録単位数は、当該年度の登録制限単位数の中に含まれる。

上記の他に、自由科目(修了に必要な単位とはならない科目)として他箇所で開催されている科目を履修することができる。

- (2) 本研究科在学中に外国の大学院へ留学し、留学先で修得した講義科目の単位のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて認定することがある。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (3) 本研究科入学前に、本大学の研究科または他大学大学院(外国の大学院を含む)において修得した講義科目の単位(科目等履修生として修得した単位を含む)のうち、本研究科に設置されている講義科目(研究領域は問わない)のいずれかに該当すると認められるものに限り、10単位を限度として、当該講義科目に振り替えて、認定することがある。なお、本研究科の科目等履修生として在学し、本研究科に設置されている演習科目を履修している場合も同様の取り扱いとする。この場合の認定した単位数は、認定した年度の登録制限単位数の中に含まれない。
- (4) 上記に規定する単位は、併せて10単位を限度とする。
- (5) 本研究科入学前に人間科学部の学生として、本研究科の科目を先取履修で修得した単位は、14単位を限度として自動的に本研究科の修了単位に計上する。この場合の計上された単位数は、登録制限単位数の中に含まれない。

【 9月修了について 】

修士課程の学位授与の要件中、3月までに

- ① 修士論文または課題研究論文に関する要件を満たさなかった場合
- ② 所定の単位を充足することができなかった場合
- ③ 上記 ① ② いずれの要件も満たさなかった場合

のために、修了に関する要件を具備することができず、そのために引き続き在学する者については、以下の基準によりその年の9月に修士の学位を授与(9月15日付)することができる。

1. 修士論文について

- ① 修了できなかった年度に修士論文計画書または課題研究論文計画書を提出していること
- ② 9月修了を希望する年度に指導教員の「研究指導」を登録していること
- ③ 9月修了を希望する年度の9月までに修士論文または課題研究論文に関する要件を具備すること

2. 授業科目について

- ① 修士課程(2年制): 修了所要単位に4単位以内の不足であること
修士課程1年制コース: 修了所要単位に8単位以内の不足であること
- ② 不足単位を修得する場合は、前期終了科目であること
演習科目または講義科目の通年科目を履修する場合は、9月修了の対象とはならない。

3. 手続について

9月修了を希望する場合は、その年度の4月の科目登録時に研究科所定の書類で、その旨研究科長へ届け出なければならない。その場合、指導教員の承認印が必要となる。

— 博士後期課程 —

【 修了要件 】

1. 博士後期課程の修了要件は、通常3年以上6年以内在学し、論文作成のために必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければならない。合格者には「博士(人間科学)」の学位が授与される。
2. 授業科目について必要単位はないが、指導教員の指示により、修士課程の授業科目を履修しなければならない場合がある。
3. 博士論文を提出しないで退学した者のうち、博士後期課程に3年以上在学し、かつ必要な研究指導を受けた者は、退学した日から起算して3年以内に限り博士論文を提出し審査および試験を受けることができる。「3年以内」とは、提出された博士論文の受理を決定する研究科運営委員会が年2回(5月と11月)開催され、その開催年月日が退学後3年以内であれば審査および試験を受けることができるということである。

※課程内延長生(実質4年生以上)が博士論文の審査および試験に合格した場合、学位取得日は、合否判定が行われた研究科運営委員会開催日である。また同日を博士課程修了日とするので、学生証を速やかに所沢総合事務センターに返却すること。学費については、学位取得日を含む学期分を納入しなければならない。

— 修士課程・博士後期課程 —

【 成績 】

成績は、次のとおり表示する。なお、入学年度により表記の方法が異なる。

1. 2006年度以降入学者

(1) 研究指導

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	P	記載なし

(2) 授業科目、修士論文、課題研究論文

合否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	A+	A	B	C	記載なし

2. 2005年度以前入学者

(1) 研究指導、修士論文

合否区分	合 格	不合格
成績通知書	P	Q
成績証明書	合 格	記載なし

(2) 授業科目

可否区分	合 格				不合格
点 数	100～90	89～80	79～70	69～60	59以下
成績通知書	A+	A	B	C	F
成績証明書	優		良	可	記載なし

【 G P A (Grade Point Average)】

本研究科では、成績を数値に換算し、科目登録した単位あたりの平均値をもとめている。海外に留学する際に、主に用いられ、算出方法は次のとおり。

成績	換算値	算 出 方 法
A+	4	修了算入科目について、左記の換算値により 1 単位あたりの平均値を算出する。 $GPA = \frac{\text{科目の単位数} \times \text{その科目に対応する換算値}}{\text{総登録単位数 (不合格科目を含む)}}$ ※GPAは、小数第2位まで表示する
A	3	
B	2	
C	1	
F	0	

※GPAは成績通知書により通知する。また、研究科として証明する。

※研究指導、博士学位論文の評価区分(合格:P、不合格:Q)はGPA計算の対象外。

— 科目名称変更 —

【 修 士 課 程 】

1. 研究指導

下記の研究指導は名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

2010年度以降研究指導名	2009年度以前研究指導名
緩和医療学・臨床死生学研究指導	緩和医療学研究指導

2008年度以降研究指導名	2007年度以前研究指導名
児童家庭福祉論研究指導	障害児福祉論研究指導

2006年度以降研究指導名	2005年度以前研究指導名
生物圏生態学研究指導	生物圏情報科学研究指導
学習動機づけ論研究指導	学習動機づけ研究指導
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導
移住論研究指導	応用言語学研究指導
物質文化論研究指導	考古学研究指導
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導
生体構造学研究指導	神経形態学研究指導
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導
予防医学研究指導	環境保健学研究指導
学校カウンセリング学研究指導	学校カウンセリング研究指導
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導

2006年度以降研究指導名	2005年度以前研究指導名
知識情報科学研究指導	データサイエンス研究指導
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導
スポーツ倫理学・教育学研究指導	スポーツ倫理学研究指導
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導
スポーツビジネスマネジメント論研究指導	スポーツビジネス・マーケティング研究指導
スポーツ神経精神医科学研究指導	精神医学研究指導
スポーツ健康管理学研究指導	スポーツ内科学研究指導
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導

2. 演習科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

2010年度以降科目名	2009年度以前科目名
緩和医療学・臨床死生物学演習(1)、(2)	緩和医療学演習(1)、(2)

2008年度以降科目名	2007年度以前科目名
児童家庭福祉論演習(1)、(2)	障害児福祉論演習(1)、(2)

2006年度以降科目名	2005年度以前科目名
生物圏生態学演習(1)、(2)	生物圏情報科学演習(1)、(2)
学習動機づけ論演習(1)、(2)	学習動機づけ演習(1)、(2)
建築環境学演習(1)、(2)	環境・行動学演習(1)、(2)
移住論演習(1)、(2)	応用言語学演習(1)、(2)
物質文化論演習(1)、(2)	考古学演習(1)、(2)
生体発達科学演習(1)、(2)	細胞生物学演習(1)、(2)
生体構造学演習(1)、(2)	神経形態学演習(1)、(2)
生体機能学演習(1)、(2)	健康生体機能学演習(1)、(2)
神経内分泌学演習(1)、(2)	神経行動学演習(1)、(2)
運動制御・バイオメカニクス演習(1)、(2)	身体運動科学演習(1)、(2)
応用健康科学演習(1)、(2)	身体行動科学演習(1)、(2)
予防医学演習(1)、(2)	環境保健学演習(1)、(2)
学校カウンセリング学演習(1)、(2)	学校カウンセリング演習(1)、(2)
感性認知科学演習(1)、(2)	色彩認知科学演習(1)、(2)
安全人間工学演習(1)、(2)	安全行動学演習(1)、(2)
知識情報科学演習(1)、(2)	データサイエンス演習(1)、(2)
ネットワーク情報システム学演習(1)、(2)	ネットワーク情報システム演習(1)、(2)
スポーツ倫理学・教育学演習(1)、(2)	スポーツ倫理学演習(1)、(2)
健康スポーツ論演習(1)、(2)	体力科学演習(1)、(2)
スポーツビジネスマネジメント論演習(1)、(2)	スポーツビジネス・マーケティング演習(1)、(2)
スポーツ神経精神医科学演習(1)、(2)	精神医学演習(1)、(2)
スポーツ健康管理学演習(1)、(2)	スポーツ内科学演習(1)、(2)
スポーツ神経科学演習(1)、(2)	生体機能学演習(1)、(2)

2005年度以降科目名	2004年度以前科目名
心理臨床学演習(1)、(2)	医療心理学演習(1)、(2)

3. 講義科目

下記の科目は、科目名称が変更となっている。変更以前の科目を履修した場合、変更以降の科目は履修することができない。

2010年度以降科目名	2009年度以前科目名
野生動物学特論	動物行動学特論
ワークショップデザイン特論	学習科学特論

2006年度以降科目名	2005年度以前科目名
環境生態学特論	自然環境論
学習動機づけ特論	ヒューマン・モチベーション特論
学習環境心理学特論	環境認知学特論
自然人類学特論	人類学特論
生体発達科学特論	発生生物学特論
運動制御・バイオメカニクス特論	身体運動科学特論
健康医学特論	健康管理医学特論
応用健康科学特論	健康行動科学特論
老年社会福祉学特論	老年福祉学特論
安全人間工学特論	応用実験心理学
教授学習過程特論	認知科学特論
スポーツ表象特論	スポーツ表象論
健康スポーツマネジメント特論	健康スポーツ特論
スポーツビジネスマネジメント特論	スポーツビジネス特論
メディカルコンディショニング特論	メディカルコンディショニング論
スポーツ統計学特論	スポーツ統計学
運動器解剖実習	運動器解剖学実習

【博士後期課程】

下記の研究指導は、名称が変更となっている。変更後と変更前とは同一科目として取り扱うものとする。

2006年度以降研究指導名	2005年度以前研究指導名
建築環境学研究指導	環境・行動学研究指導
生体発達科学研究指導	細胞生物学研究指導
生体構造学研究指導	神経形態学
生体機能学研究指導	健康生体機能学研究指導
神経内分泌学研究指導	神経行動学研究指導
運動制御・バイオメカニクス研究指導	身体運動科学研究指導
応用健康科学研究指導	身体行動科学研究指導
予防医学研究指導	環境保健学研究指導
感性認知科学研究指導	色彩認知科学研究指導
安全人間工学研究指導	安全行動学研究指導
ネットワーク情報システム学研究指導	ネットワーク情報システム研究指導
健康スポーツ論研究指導	体力科学研究指導
スポーツ神経科学研究指導	生体機能学研究指導
スポーツ心理学研究指導	精神生理学研究指導

2003年度以降研究指導名	2002年度以前研究指導名
色彩認知科学研究指導	環境色彩認知科学研究指導
教育開発論研究指導	教育工学研究指導
スポーツ生理学研究指導	運動生理学研究指導
身体形態学研究指導	トレーニング科学研究指導

— 授業時間 —

授業時間は下記のとおりである。所沢キャンパス以外のキャンパスで行う授業については、移動に伴う時間を考慮し、科目の登録を行う必要がある。

1時限目 9:00～10:30

2時限目 10:40～12:10

3時限目 13:00～14:30

4時限目 14:45～16:15

5時限目 16:30～18:00

6時限目 18:15～19:45

7時限目 19:55～21:25

X II 教育職員免許状取得について

1. 人間科学研究科で取得できる免許の種類及び教科は、次のとおりである。

○印が取得できる免許状

免許状の種類 / 教科	社会	地理・歴史	公民	福祉	情報	保健体育
中学校教諭専修免許状	○					○ 注参照
高等学校教諭専修免許状		○	○	○	○	○ 注参照

注:保健体育の免許状の取得は、2005年度以前入学者のみ対象

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、当該教科の中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条第一項別表第1の所要資格を充たしている者。(「5条第一項別表第1の所要資格」とは、一種免許状取得に必要な「教職および教科に関する科目」の法令で定める単位数を言う)

3. 免許状取得に必要な科目

別表の人間科学研究科設置科目のなかから該当する免許状に関する科目を24単位以上履修し、修士の学位を得ることにより、専修免許状が取得できる。(24単位の履修方法は科目区分・分野に関係なく任意に履修して可) ただし、科目設置以前の年度に修得した科目については、専修免許科目として申請することはできない。

4. その他

(1) 免許状の申請は、本人が、自分の住所地又は教員採用学校所在地の授与権者(都道府県教育委員会)にたいして行う。ただし、日本の大学(学部)を卒業しており、かつ3月の修了予定者に限り、大学がとりまとめて申請を代行(一括申請)し、学位授与当日に免許状を手渡せるようとりはかっている。

また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。

(2) 1997年6月「教育職員免許法の特例等に関する法律」が成立し、保健体育の中学校免許状を取得する場合は、7日以上介護等体験が義務付けられた。詳細については、教育学部から交付される「各種資格取得の手引」を参照すること。

別表 社会専修免許 2010年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 民族誌学特論 人間環境変遷特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論

別表 社会専修免許 2009年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 民族誌学特論 人間環境変遷特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 社会専修免許 2008年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 民族誌学特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論 (つづく)

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習教授評価法 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 社会専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
社会の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 環境社会学演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 民族誌学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論 環境社会学特論 発達行動学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 (つづく)

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 地理歴史専修免許 2010年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 人間環境変遷特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論

別表 地理歴史専修免許 2009年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 人間環境変遷特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 地理歴史専修免許 2008年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 水域環境学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習教授評価法 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 地理歴史専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
地理歴史の教科に関する科目	社会人類学演習(1)・(2) 文化生態学演習(1)・(2) アジア社会論演習(1)・(2) 移住論演習(1)・(2) 日本物質文化論演習(1)・(2) ドイツ政治社会文化論演習(1)・(2) フランス表象文化論演習(1)・(2) 技術史・技術文化論演習(1)・(2) 民族誌学特論 歴史人類学特論 アジア地域研究特論 移民研究特論 考古学特論 フランス表象文化史研究特論 ドイツ近代国民国家特論 生活文化史研究特論 スペイン社会文化特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 公民専修免許 2010年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論 生態心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論

別表 公民専修免許 2009年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 地域資源特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 建築環境学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論 生態心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 公民専修免許 2008年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 地域資源論演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 建築環境学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 生態心理学演習(1)・(2) 環境社会学特論 開発援助実践学特論 発達行動学特論 社会文化心理学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習教授評価法 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 公民専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
公民の教科に関する科目	環境社会学演習(1)・(2) 発達行動学演習(1)・(2) 産業職業社会学演習(1)・(2) 家族社会学演習(1)・(2) 都市社会学演習(1)・(2) 科学史科学哲学演習(1)・(2) 感性認知科学演習(1)・(2) 心理行動学演習(1)・(2) 環境社会学特論 発達行動学特論 産業職業社会学特論 家族社会学特論 都市社会学特論 科学史科学哲学特論 感性心理学特論 感情心理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 福祉専修免許 2010年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 児童家庭福祉論演習(1)・(2) 精神保健福祉論演習(1)・(2) 健康福祉支援工学演習(1)・(2) 健康福祉管理論演習(1)・(2) ソーシャルワーク論演習(1)・(2) 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 児童家庭福祉特論 精神保健福祉特論 健康福祉支援工学特論 ソーシャルワーク特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 臨床心理学校地域援助特論

別表 福祉専修免許 2009年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	障害者支援論演習(1)・(2) 老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 児童家庭福祉論演習(1)・(2) 精神保健福祉論演習(1)・(2) 健康福祉支援工学演習(1)・(2) 健康福祉管理論演習(1)・(2) 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 児童家庭福祉特論 精神保健福祉特論 健康福祉支援工学特論 ソーシャルワーク特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 福祉専修免許 2008年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	障害者支援論演習(1)・(2) 老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 児童家庭福祉論演習(1)・(2) 精神保健福祉論演習(1)・(2) 健康福祉支援工学演習(1)・(2) 障害者支援論 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 障害者福祉特論 児童家庭福祉特論 福祉援助特論 比較高齢社会特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習教授評価法 学習科学特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 福祉専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
福祉の教科に関する科目	障害者支援論演習(1)・(2) 老年社会福祉学演習(1)・(2) 社会保障政策論演習(1)・(2) 福祉教育論演習(1)・(2) 障害児福祉論演習(1)・(2) 障害者福祉特論 障害者支援論 老年社会福祉学特論 社会保障政策特論 健康福祉管理特論 福祉教育特論 児童家庭福祉特論 福祉援助特論 比較高齢社会特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学

別表 情報専修免許 2010年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報処理心理学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) 対話情報処理論演習(1)・(2) 情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 情報処理心理学特論 言語情報科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論 対話情報処理特論 マルチメディア特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 インターネット科学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 情報メディア教育論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 臨床心理アセスメント学演習(1)・(2) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 ワークショップデザイン特論 情報メディア教育特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学 学習環境デザイン特論 臨床心理学校地域援助特論

別表 情報専修免許 2009年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報処理心理学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) 対話情報処理論演習(1)・(2) 情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 情報処理心理学特論 言語情報科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論 対話情報処理特論 マルチメディア特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 インターネット科学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 情報メディア教育論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習科学特論 情報メディア教育特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 情報専修免許 2008年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報処理心理学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) 情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 情報処理心理学特論 言語情報科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論 対話情報処理特論 マルチメディア特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 インターネット科学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 情報メディア教育論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育システム工学 学習教授評価法 学習科学特論 情報メディア教育特論 教育心理学特論 臨床認知発達学特論 臨床心理学特論Ⅲ 特別支援教育特論 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 教育集団心理学

別表 情報専修免許 2007年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) 情報処理心理学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) マルチメディア特論 言語情報科学特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 情報処理心理学特論 インターネット科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理学特論
教職に関する科目	学習動機づけ論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教育実践学演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校臨床心理学演習(1) 臨床認知発達学演習(1) 学習動機づけ特論 学習環境心理学特論 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 教授学習過程特論 教師学特論 インストラクショナルデザイン特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教育心理学特論 臨床心理学特論Ⅲ 教育臨床査定特論 学校臨床生徒指導学特論 学校臨床心理学特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育集団心理学 情報メディア教育特論 学習科学特論 臨床認知発達学特論 特別支援教育特論

別表 情報専修免許 2006年度設置科目

免許法施行規則に定める科目区分	左記に該当する当研究科設置科目
情報の教科に関する科目	情報コミュニケーション科学演習(1)・(2) 言語情報科学演習(1)・(2) ネットワーク情報システム学演習(1)・(2) 情報処理心理学演習(1)・(2) インターネット科学演習(1)・(2) 知識情報科学演習(1)・(2) 感覚情報処理学演習(1)・(2) マルチメディア特論 言語情報科学特論 ソフトウェア工学特論 情報コミュニケーション技術特論 情報処理心理学特論 インターネット科学特論 知識情報科学特論 感覚情報処理特論
教職に関する科目	教育実践学演習(1)・(2) 学習動機づけ論演習(1)・(2) インストラクショナルデザイン論演習(1)・(2) 教育情報工学演習(1)・(2) 教育開発論演習(1)・(2) 学校カウンセリング学演習(1)・(2) 教師学特論 学習動機づけ特論 インストラクショナルデザイン特論 学習環境心理学特論 教育情報工学特論 教育開発特論 教授学習過程特論 教育システム工学 学習教授評価法 教育臨床心理学特論 行動療法特論 心理療法特論Ⅰ 学校臨床心理学特論

別表 保健体育専修免許 2007年度設置科目

※2005年度以前入学者のみ対象

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) 身体形態学演習(1)・(2)
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) 運動制御・バイオメカニクス演習(1)・(2) 生体機能学特論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) 予防医学特論
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) 行動理論特論 行動医学特論

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	武道論演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) スポーツ倫理学・教育学演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 健康スポーツ論演習(1)・(2) スポーツビジネスマネジメント論演習(1)・(2) 身体形態学演習(1)・(2) 武道思想史特論 スポーツ人類学特論 スポーツ表象特論 スポーツ社会学特論 スポーツ経営学特論 健康スポーツマネジメント特論 スポーツビジネスマネジメント特論 スポーツクラブビジネス特論 トップスポーツビジネス特論 スポーツ統計学特論 スポーツ情報処理特論 コーチング特論 コーチ学特論 コーチングバイオメカニクス特論 コーチング心理学特論 パフォーマンス評価
生理学(運動生理学を含む)	生体ダイナミクス演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) 運動制御・バイオメカニクス演習(1)・(2) 生体機能学特論 生体ダイナミクス特論 スポーツ栄養学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 スポーツ生理学特論 コンディショニング特論
衛生学及び公衆衛生学	運動免疫学演習(1)・(2) 予防医学演習(1)・(2) 予防医学特論

つづく

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	スポーツ神経精神医科学演習(1)・(2) スポーツ健康管理学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) スポーツ神経科学演習(1)・(2) メディカルコンディショニング特論 スポーツ神経精神医科学特論 スポーツ内科学特論 運動器発育・発達特論 スポーツ外科学特論 運動器解剖実習 精神生理学特論 行動理論特論 行動医学特論
保健体育の教職に関する科目	スポーツ教育学特論

別表 保健体育専修免許 2005年度設置科目

※2005年度以前入学者のみ対象

教科に関する法定科目(分野)	左記に該当する当研究科設置科目
体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学」及び運動学(運動方法学を含む)	身体形態学演習(1)・(2) スポーツ人類学演習(1)・(2) ストレスマネジメント演習(1)・(2) スポーツ倫理学演習(1)・(2) スポーツビジネス・マーケティング演習(1)・(2) スポーツメディア論演習(1)・(2) 武道論演習(1)・(2) スポーツ統計学 スポーツ社会学特論 スポーツ人類学特論 スポーツ教育学特論 スポーツ表象論 武道思想史特論 スポーツビジネス特論
生理学(運動生理学を含む)	身体運動科学演習(1)・(2) スポーツ生理学演習(1)・(2) バイオメカニクス演習(1)・(2) 体力科学演習(1)・(2) 運動栄養学演習(1)・(2) 運動生化学演習(1)・(2) 生体ダイナミクス演習(1)・(2) 生体機能学演習(1)・(2) スポーツ生理学特論 食品機能学特論 運動生化学特論 バイオメカニクス特論 生体ダイナミクス特論 生体機能学特論
衛生学及び公衆衛生学	環境保健学演習(1)・(2) 健康スポーツ疫学演習(1)・(2) 疫学・医療情報 I・II 健康スポーツ特論
学校保健(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	精神生理学演習(1)・(2) 身体行動科学演習(1)・(2) 運動器スポーツ医学演習(1)・(2) スポーツ内科学演習(1)・(2) 精神医学演習(1)・(2) スポーツ外科学演習(1)・(2) 運動免疫学演習(1)・(2) スポーツ内科学特論 スポーツ外科学特論 精神生理学特論 行動医学特論 行動理論特論 運動器発育・発達論 メディカルコンディショニング論 運動器解剖実習

X III 学費

1. 修士課程(2年制)

2010 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	357,000	75,000	35,000	1,500	668,500
	後期	—	357,000	75,000	35,000	1,500	468,500
	計	200,000	714,000	150,000	70,000	3,000	1,137,000
二年度	前期	—	359,500	75,000	35,000	1,500	471,000
	後期	—	359,500	75,000	35,000	1,500	471,000
	計	—	719,000	150,000	70,000	3,000	942,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2009 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
二年度	前期	—	336,000	75,000	35,000	1,500	447,500
	後期	—	336,000	75,000	35,000	1,500	447,500
	計	—	672,000	150,000	70,000	3,000	895,000

2. 修士課程 1年制コース

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	446,500	75,000	35,000	1,500	758,000
	後期	—	446,500	75,000	35,000	1,500	558,000
	計	200,000	893,000	150,000	70,000	3,000	1,316,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

3. 博士後期課程

2010 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
初年度	入学時	200,000	296,000	40,000	35,000	1,500	572,500
	後期	—	296,000	40,000	35,000	1,500	372,500
	計	200,000	592,000	80,000	70,000	3,000	945,000
二年度	前期	—	298,000	40,000	35,000	1,500	374,500
	後期	—	298,000	40,000	35,000	1,500	374,500
	計	—	596,000	80,000	70,000	3,000	749,000
三年度	前期	—	300,000	40,000	35,000	1,500	376,500
	後期	—	300,000	40,000	35,000	1,500	376,500
	計	—	600,000	80,000	70,000	3,000	753,000

* 本大学卒業生(修了生)の入学金は免除する。

2009 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
二 年 度	前期	—	273,500	40,000	35,000	1,500	350,000
	後期	—	273,500	40,000	35,000	1,500	350,000
	計	—	547,000	80,000	70,000	3,000	700,000
三 年 度	前期	—	273,500	—	35,000	1,500	310,000
	後期	—	273,500	—	35,000	1,500	310,000
	計	—	547,000	—	70,000	3,000	620,000

2008 年度入学者

(単位:円)

年度	納入期	学 費				諸会費	合 計
		入学金	授業料	施設費	実験 演習料	学生健康増 進互助会費	
三 年 度	前期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	後期	—	273,500	—	35,000	—	308,500
	計	—	547,000	—	70,000	—	617,000

4. 所定年限以上在学する学生(延長生)

判定	授業料	施設費	実験演習料
研究指導のみ残っている	算出基準の 50%	算出基準の1/2 (博士後期課程は 徴収せず)	算出基準の 全額
不足単位数はあるが研究指導は修了している			
不足単位数が 14 単位以下で研究指導と授業科目を履修	算出基準の 70%		
不足単位数が 15 単位以上で研究指導と授業科目を履修	算出基準の100%		

※算出基準とは、修士課程 2 年生、博士後期課程 3 年生の学期所定額。

他に、学生健康増進互助会費も併せて徴収する。

5. 学費未納による抹籍

学費未納の場合は、以下の日程で自動的に抹籍（本学学生の身分を失う）となり、学費が納入された学期末に遡って退学とみなす。この場合、学費未納学期の在学年数および成績が無効となるので注意すること。また、抹籍日以降、抹籍の取消しは一切認められない。

なお、特別の事情により学費納入が遅れる場合は「学費延納願」を提出すること。提出のない場合は、各学期の終了日を以って抹籍となる。抹籍日以前に離籍を希望する場合は、「退学願」を提出のこと。

「学費延納願」を提出した場合

判定	授業料	施設費	実験演習料
前期分	5 月 1 日	翌年 1 月 1 0 日	3 月 3 1 日
後期分	1 0 月 1 日	翌年 7 月 1 日	9 月 2 0 日

「学費延納願」を提出しない場合

判定	授業料	施設費	実験演習料
前期分	5 月 1 日	9 月 2 0 日	3 月 3 1 日
後期分	1 0 月 1 日	翌年 3 月 3 1 日	9 月 2 0 日

XIV 学生生活等

1. 学籍番号

学生は各自学籍番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

2010年4月に人間科学研究科の1年次に入学者の学籍番号は次のとおりである。

3 8 1 0 C □ □ □ - □

a b c d e

a : 箇所コード (人間科学研究科)

b : 入学年度 (西暦下2桁)

c : 専攻コード : C-人間科学専攻

d : 個人番号

百の位は次の課程を示す

0~2: 修士課程 (2年制)、3: 修士課程1年制コース、5: 博士後期課程、9: 科目等履修生

e : チェックデジット (CD)

2. 学生証 (身分証明書)

本大学の学生には入学と同時に学生証(身分証明書)を交付する。この学生証は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要であるから破損・紛失のないように注意し、下記のことを留意すること。

- (1) 学生証は、入学時に人間科学研究科より交付する。
- (2) 学生証は、「学生証(カード)」(以下「学生証」という)と有効年限を明示した「裏面シール」とからなり、学生証の裏面に「裏面シール」を貼り合わせてから、効力が生じる。
- (3) 学生証の交付を受けたら、速やかに学生証の裏面に「裏面シール」を貼り学生証の表の氏名欄に、黒い油性のペンまたはボールペンで氏名(漢字)を楷書で記入すること。なお、漢字を持たない留学生は、裏面シールの氏名欄に印刷されているアルファベットと同じように、活字体で記入すること。
- (4) 学生証は、在学期間中使用し、「裏面シール」は、毎学年度末に所沢総合事務センターで交付するので、貼り替えること。
- (5) 住所を変更したときや、通学定期券発行控欄が一杯になったときは、速やかに所沢総合事務センターに届け出て、追加のシールの交付を受けること。
- (6) 学生証を紛失したり盗難にあたりすると悪用されるおそれがあるので十分注意し、その際は、ただちに所沢総合事務センターに届け出ること。
- (7) 紛失などのために再交付を受ける場合は、所沢総合事務センターに再交付願(カラー写真1枚と手数料2,000円)を提出すること。なお、同一年度内に一度を超えて再交付を願い出る場合は、保証人の連署が必要になる。再交付は通常1週間程度かかる。
- (8) 試験、図書館や学生読書室の利用、各種証明書・学割・通学証明書の交付、種々の配付物を受け取る時、その他本学教職員の請求があったときは、学生証を呈示しなければならない。
- (9) 有効期間は、「裏面シール」に示された有効年度の4月1日から翌年3月31日までの1年間である。
- (10) 学生証は、修了または退学などにより学生の身分がなくなると同時に、その効力を失うので、ただちに所

沢総合事務センターに返却しなければならない。修了の場合は、学生証と引き換えに学位記が授与されるので、その日まで必ず携帯すること。

3. 各種証明書の交付

- (1) 在学中の課程の在学証明書・修了見込証明書・学業成績証明書及び健康診断証明書は、「自動証明書発行機」(各キャンパスに設置されているどの機械からも発行可)により発行される。(但し、健康診断証明書は当該年度の健康診断を受診したものに限る。)

その際、学生証・暗証番号(入学手続き時に登録)および発行手数料が必要となる。

上記以外の証明書については、「自動証明書発行機」では発行できないので、所沢総合事務センターへ申し出ること。

- (2) 通学証明書を必要とする者は、所沢総合事務センターにおいて所定の手続きをとり、その交付を受けること。

- (3) 学校学生生徒旅客運賃割引証(学割と略称)は、本人に限り年間10枚を限度として各キャンパス内に設置されている「自動証明書発行機」により発行される。

有効期間は発行日より3ヶ月間である。特別の理由(研究活動等)により年間10枚以上の学割証が必要になった場合は、所沢総合事務センターに申し出ること。

- (4) 各種証明書の料金は所沢総合事務センターに掲示してある。

4. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があった場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その要領を説明する。

- (1) 諸願・諸届の作成についての注意

- ① 用紙は所沢総合事務センターで交付する所定の用紙を用いること。
- ② 楷書ではっきり記入すること。(鉛筆不可)
- ③ 休学願、復学願、退学願の本人氏名および保証人氏名の記入は、それぞれの自署とする。押印も同じ。

- (2) 諸願・諸届提出についての注意

- ① 留学願

留学をしようとする者は、所沢総合事務センターに問い合わせること。

- ② 休学願

ア. 病気その他の正当な理由により、引き続き2ヶ月以上授業(試験を含む)に出席することができない者は、必ず指導教員に相談したうえで所定の「休学願」を提出し、学術院教授会の承認を得て休学することができる。

イ. 休学は当該学期限りであるが、特別の事情のある場合には、継続して合計2年に限り休学を許可することがある。

ウ. 病気で休学する場合は必ず医師(公立病院等)の診断書を添えなければならない。

エ. 休学中の学費については、所沢総合事務センターに問い合わせること。

- ③ 復学願

ア. 復学は学年始めに限られる。

イ. 病気による休学で復学する場合は、必ず就学可能と認める医師の診断書を添付しなければならない。

ウ. 復学が許された者は、復学する学期分の授業料等を納入し、裏面シールの交付を受ける。

④退学願

- ア. 退学を願いでる場合は、退学願のほかには学生証を添えなければならない。
- イ. 学年の途中で退学する場合でも、その期の学費を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

⑤現住所変更届、改姓(名)届、その他

- ア. 本人または保証人が住所等を変更した場合には、ただちにその旨を所沢総合事務センターに届け出なければならない(本人の住所等についてはWaseda-net Portalからも変更可能)。
- イ. 改姓(名)を行った場合には、その届に戸籍抄本を添付しなければならない。
- ウ. 保証人が死亡した場合、またはそのほかの理由で変更を必要とする場合には、新しい保証人を選定して届け出なければならない。

5. 各種補助

(1) 複写代補助費

複写代の補助として、博士後期課程在学者(助手・休学者は除く)に対して、年間5,000円相当のコピーカードを配付している。配付時期については、その都度掲示で通知する。

(2) 国際会議論文発表補助費

博士後期課程の学生に対して、国際会議・シンポジウム等に参加し、研究論文等の発表を行う際に必要な経費(①登録料、②海外旅費)の一部を補助する。

(補助対象者)

博士後期課程に在学する学生(助手、特別研究員DC奨学金の交付を受けている者、休学者は除く。ただし、海外留学による休学者は対象)。

(補助の対象となる国際会議等)

二ヶ国間以上の参加者を対象とする、専門学会等が主催する国際会議・シンポジウム等。

(補助額および補助回数)

- ①国際会議論文発表登録料: 55,000円を上限として登録料(学会参加費)の一部を補助する。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4月～3月・懇親会等は対象外)
- ②海外論文発表出張補助費: 海外で行われる国際会議・シンポジウム等において研究論文の発表を行う場合、110,000円を上限として海外旅費の一部を補助する。原則として、学会開催の前日に開催地に到着し、学会終了当日に開催地を出発して、帰着に要するまでの期間を対象とし、それを越えた場合は補助されない場合がある。学生1人に対する補助回数は年間1回(1学会)とする。(当該年度4～3月)

(申請手続)

「国際会議論文発表補助費交付申請書」に、申請者が研究論文等の発表を行うことが明記されている、国際会議・シンポジウム等のプログラム等および登録料が記載されているものと登録料の領収書等を添付し、所属研究科を経由して、大学に申請すること。

海外論文発表出張補助費も申請する場合は事前に「出張願」と航空賃見積書等を所属研究科に提出し、後日、航空賃の領収書、航空券半券を提出すること。

(3) 学会発表補助費(2002年度以前入学者のみに適用)

学生本人が発表代表者として、学会発表に要した費用の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程および修士課程に在学する学生。

(補助の対象となる学会等)

①博士後期課程:全国規模の学会等。

②修士課程:全国規模の学会等または、国内および国外で開催される二ヶ国間以上の参加者を対象とする国際学会等。

(補助額および補助回数)

補助の対象は参加費のみとし3,000円を上限とし年度内一人1回(交通費・懇親会費は含まない)。

(申請手続)

この補助費を受けようとする場合は、「申請書」「参加費の領収書」「学会の案内」「発表抄録」「プログラムの写し」を所沢総合事務センターへ提出すること。

なお、申請の時期は領収書の日付から3ヶ月以内で原則として年度内。

(4) 学術論文掲載料補助費(2002年度以前入学者のみに適用)

学生本人が第一著者である原著論文の学術雑誌掲載に要した費用の一部を補助する。

(補助対象者)

大学院博士後期課程および修士課程に在学する学生。

(補助の対象となる費用)

投稿料・別刷代・追加別刷代(振替・送金の手数料は対象外)

(補助額および補助回数)

1件10,000円を上限とし年度内に一人1件。

(申請手続)

学会等の請求書および学生本人が宛先になっている領収書(コピー不可)を所沢総合事務センターへ提出すること。

なお、申請の時期は領収書の日付から3ヶ月以内で原則として同年度内。

6. 所沢総合事務センター

大学院に関する諸手続は、100号館4階にある所沢総合事務センターで行っている。開室時間は、午前9時から午後5時を原則としているが、期間により変更することがあるため、事務センター前に掲示される開室時間を確認すること。

なお、日曜日、国民の祝日、創立記念日、夏季・冬季休業中の土曜日、夏季事務所一斉休業期間、年末年始、大学が指定する休日は、事務センターを閉室する。ただし、これらの日で全学で授業を行う日は、事務センターを開室する。

また、土曜日は取り扱う業務が限定されるため、可能な限り平日に事務センターを利用されたい。

7. 掲示

大学および大学院からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必ず見る習慣をつけること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意されたい。

掲示板は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および大学院からの伝達、その他事務所からの連絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示板は、Dゾーン(所沢総合事務センター・図書館開放閲覧室横)に設置されている。

8. 交通機関のストライキと授業

首都圏のJR等がストを実施した場合の授業休講措置について

1. JR等交通機関のストが実施された場合(ゼネスト)

首都圏におけるJRのストが

- A 午前0時までに中止された場合、平常どおり授業を行う。
- B 午前8時までに中止された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- C 午前8時までに中止の決定がない場合は、終日休講とする。

上記はJRの順法闘争および私鉄のストには適用しない。

2. 首都圏JRの部分(拠点)ストが実施された場合平常通り授業を行う。

3. 首都圏JRの全面時限ストが実施された場合

- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- B 正午までストが実施された場合、6時限目(17時55分)から授業を行う。
- C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

4. JRを除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。

5. ただし、所沢キャンパスに設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・3は適用されるが4については

- ① 西武鉄道の新宿線または池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合
- ② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バスのストが実施された場合次のとおりとする。
- A 午前8時までストが実施された場合、3時限目(13時)から授業を行う。
- B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

9. 天候悪化(台風・大雪等)による休講等の取り扱いについて

台風、大雨、洪水、暴風、暴風雪、大雪等の天候悪化に伴いキャンパスが危険であると大学が判断した場合、授業休講・試験延期の措置をとることがある。

その場合は、原則として各時限の授業・試験開始 60 分前までに決定し、本学ホームページ(<http://www.waseda.jp/top/index-j.html>)にて広報・周知する。ただし、気象状況が悪化し、危険であると判断した場合は、60 分前を過ぎても休講・試験の延期を決定することがある。

また、台風や大雪等、気象状況が時間の経過とともに悪化することが十分予測される場合は、前日に授業の休講・試験の延期措置の決定を行うことがある。

その場合は、前日の午後 7 時までに決定の判断を行い、本学ホームページに前日の午後 9 時までに掲載して広報・周知する。

なお、授業および試験が実施される場合でも、学生はキャンパスまでの交通経路内に気象庁による気象警報が発表され、気象状況等に鑑みて通学することが危険又は困難であると自身で判断し、欠席した場合には、所属研究科による承認済みの欠席届をもって、該当科目の担当教員へ申し出ること。

10. 自転車・自動車・オートバイの駐輪場・駐車場の利用について

所沢キャンパス内は、安全を確保するために、やむを得ない事情のない限り自動車・オートバイ(原付二輪車)の乗り入れはできない。

ただし、自転車で通学する場合には、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐輪場の利用許可を得なければならない。また、事情により自動車・オートバイで通学する場合にも、所定の申請書を所沢総合事務センターへ提出し、駐車場・駐輪場の利用許可を得なければならない。

自転車・自動車・オートバイでの通学にあたっては、交通の安全、災害・騒音の防止等をはかり、教育環境の保持に努めなければならない。

1) 自転車で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)

② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

2) 事情により自動車で通学する場合

(1) 駐車許可証の交付を受けるには、次の書類等を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

① 駐車許可申請書(所沢総合事務センターに備付)

② 学生証

③ 前年度分駐車許可証(前年度からの継続利用者のみ必要)

④ 駐車場利用料金(年額5,000円)

※ 駐車場利用料金については、年度途中からの申請でも同一額とする。

(2) 駐車許可証の有効期間は、交付を受けた年度(1年間)限りとする。次年度も利用する場合には、新規の申請時と同様の手続が必要である。

(3) 駐車許可申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

(4) 駐車許可証を他人に貸与し、または他人から借用してはならない。

3) 事情によりオートバイ(原付二輪車)で通学する場合

(1) 登録ステッカーの交付を受けるには、次の書類を所沢総合事務センターに提出しなければならない。

① 登録申請書(所沢総合事務センターに備付)

② 学生証

※ 駐輪場利用料金は無料

(2) 登録ステッカーの有効期限は、大学院在学中とする。

(3) 登録申請事項の内容に変更が生じた場合、登録車を変更する場合は、すみやかに所沢総合事務センターに届け出ること。

4) 駐輪・駐車

(1) 自転車・自動車・オートバイは、それぞれ指定された駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場に駐輪・駐車しなければならない。駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は厳禁する。

① 自転車…正門自転車駐輪場または北門駐車場の自転車駐輪指定場所

② 自動車…北門駐車場

③ オートバイ…北門駐車場のオートバイ駐輪指定場所

ただし、フロンティア・リサーチセンターに所属する学生は、B地区の駐輪場・駐車場を利用することができる。また、フロンティア・リサーチセンターに所属する博士後期課程の学生は、南門の駐輪場を利用する

ことができる。

(2) 正門駐輪場の利用時間は、8:00から22:30(土日は21:30)までとする。(この時間帯以外は閉門となる。)

(3) 自転車は登録ステッカーを後輪カバーに貼り、自動車は駐車許可証をフロントガラスに表を向けて置き、オートバイは登録ステッカーをナンバープレート付近に貼っておくこと。

5) 注意事項

(1) 登録した自転車・自動車・オートバイ以外の駐輪・駐車は厳禁する。

(2) 大学・大学院等の行事、施設・設備の工事等により、駐輪場・駐車場の使用制限をすることがある。

(3) 駐輪場・駐車場内では徐行し、所定の区分に従って、整然と駐輪・駐車すること。

(4) 駐輪場(駐輪指定場所)・駐車場以外の駐輪・駐車は、通行の妨げや災害時等の避難の妨げになるので厳禁する。駐輪場・駐車場以外に駐輪・駐車している場合、長期間放置されている場合は、管理上支障をきたすので排除または処分することがある。

(5) キャンパス内、駐輪場・駐車場での人為的事故、損傷等は、当事者間で解決すること。また、駐輪・駐車中の事故、災害、盗難等には、大学は一切責任を負わないので、各自十分に注意すること。(警察が指導する「防犯登録」は必ずしておくこと。)

(6) 上記の事項に違反した場合、または大学の警告に従わない場合は、駐輪場・駐車場の利用許可を取り消すことがある。

1 1. 早稲田大学保健センター所沢分室

学生食堂近くの308号室にあり、次の業務を行っている。

内線 3308、緊急内線 3000、DI:04-2947-6706、Fax:04-2947-6804

業務内容

(1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断

(2) 各種健康診断書の発行 (ただし、定期健康診断を受診した者に限る。)

(3) 健康相談

(4) スポーツ障害相談、リハビリ相談

(5) 内科相談

(6) 精神保健相談、心理相談相談

※心療内科医および心理専門相談員による相談は、予約制

(7) 保健統計、健康管理に関する調査研究

(8) 健康教育

1 2. 早稲田大学学生健康増進互助会(学生早健会)

学生早健会は、早稲田大学学生の相互扶助の精神に基づき、在学中に会員が医院で支払った保険診療適用分の医療費につき、年間60,000円までの補助を行うなど、学生の経済的負担をできる限り軽減させることを目的としている互助組合です。医療給付の他にも歯科検診・体組成検査等を実施しています。

会員資格や医療給付の詳細については、「早稲田大学学生健康増進互助会案内」(所沢総合事務センターに常備)を参照のこと。

ホームページ:<http://www.waseda.jp/student/hoken/gojyokai/>

1 3. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・若手研究者養成奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本学生支援機構・民間団体・地方公共団体の奨学金がある。

いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、所沢総合事務センターで配付している「CHALLENGE(奨学金情報大学院学生用)」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の募集時期は、毎年4月上旬(全学年)であるので、それ以前に「CHALLENGE(奨学金情報) 大学院学生用」を受け取る必要がある。

1 4. 学生教育研究災害傷害保険

本学は、教育研究活動中や課外活動中の不慮の災害事故補償のために、保険料全額大学負担で、全学部、全大学院、日本語研究教育センターの正規学生(過年度生を含む)、科目等履修生に対して、「学生教育研究災害傷害保険(学研災)」に加入している。

この保険は財団法人日本国際教育支援協会と国内損害保険会社との契約により実施されているもので、大学施設内外の正課中、大学行事中、課外活動中(大学施設外の場合は事前の届け出が必要)、大学施設内の事故を保険適用範囲にしている。

適用範囲や手続き方法については、早稲田大学ホームページを参照のこと(関連ホームページ 学生教育研究災害傷害保険 <http://www.waseda.jp/student/hoken/gakusaiho/> 学生教育研究賠償責任保険 <http://www.waseda.jp/student/hoken/gakkenbai/>)。

課外活動中の事故の場合は、事前の届け出がなければ、適用を受けることができない。

各サークルは、大学外での諸活動(合宿・研究・見学旅行・試合など)を行う場合は、必ず、学生生活課事務所(学生会館1階)に事前に届け出ること。特に、学研災は本学の学生のみ適用されるため、他大生がサークル活動に参加する場合には個別に保険に加入すること。また、大学院におけるゼミ合宿は所沢総合事務センターへ、体育各部の部活動はオープン教育センター戸山分室(35号館)に事前の届け出を行うと共に、万一事故が発生した場合は、必ず事故報告を行うことを徹底すること。

特に、夏季・冬季授業休止期間中などに国外において課外活動を行う際には、事前に綿密な計画を立て、予備調査を行った上、届け出を行うと共に、早稲田大学学生であると同時に社会的責任を負うべき市民であることを自覚し、節度ある行動をとることを希望する。

X V 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢図書館は、人間科学、スポーツ科学に関連する専門書や学習書、学術雑誌を中心に、利用者の一般教養に資する図書、雑誌等を収蔵している。早稲田大学図書館では、近年、外国雑誌を中心に電子資料やデータベースの充実を図っており、全学的に学内ネットワークからアクセスできるようになっている。所沢キャンパスの研究分野に関連するものとして、PsycINFOやSportsDiscus、医中誌Webなどが利用できる。

所沢図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置し、中庭に面して「コ」の字形に配されている。館内は、開架図書エリア、バックナンバー書庫、新刊雑誌コーナー等の資料収蔵施設と、一般閲覧席、教職員・大学院学生を対象とした閲覧個室、グループ学習ができるグループ閲覧室といった閲覧用の施設からなっている。

利用について

詳細は所沢図書館ホームページ(<http://www.wul.waseda.ac.jp/TOKOROZAWA/index.html>)を参照のこと。

1. 開館時間

平日 9:00～21:00

土曜日 9:00～18:00

授業休止期間 月曜日～金曜日 9:00～18:00（春季は、月曜日～土曜日 9:00～18:00）

2. 休館日

日曜日、祝日（授業実施日を除く）、休業日、大学創立記念日（10月21日）、夏・冬季休業期間の一定期間。
そのほか、業務上休館の必要がある場合。

3. 利用者カード

- (1) 図書館の入館および図書の貸出には、学生証を利用者カードとして使用する。
- (2) 学生証は、在学中有効なので大切に扱うこと。
- (3) 学生証は、本人以外は使用できない。
- (4) 学生証を紛失したときは、ただちに大学院事務所に届け出ること。

4. 入退館

- (1) 入館するときは、学生証を自動入館装置にスキャンして入館する。
- (2) 退館口には、BDS(図書帯出防止装置)が設置されている。
図書を館外に借用する時は、必ずカウンターで手続きをすること。

5. 資料の探し方

- (1) 全ての図書は、日本十進分類法(NDC)によって分類され、配架されている。
- (2) 早稲田大学学術情報検索システム「WINE」(<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>)で所蔵資料を検索することができる。使い方がわからないときは館員に相談すること。

6. 貸出・返却

- (1) 貸出・返却は、カウンターで手続きをすること。なお、閉館時の返却には、専用のブックポストが利用できる。
- (2) 貸出冊数は30冊、貸出期間は30日とする。
- (3) 参考図書および雑誌等は、館外に貸出できない。
- (4) 返却期間が過ぎても返却がない場合には、反則規定が適用される。

- (5) 貸出図書を大切に扱うこと。図書紛失したり、汚損・破損したときには、ただちに届け出ること。図書館のルールにしたがった弁償をすることとなる。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では他人に迷惑をかけないよう、雑談などは慎むこと。
(2) 閲覧した図書は、配架されていた元の正確な位置に戻すか、返却台に置くこと。
(3) 館内は禁煙とする。
(4) 館内への飲食物の持ち込みは禁止されている。
(5) 入館の際は携帯電話のスイッチを切るか、マナーモードに設定すること。
(6) 館内では貴重品などを机に放置せず、自分で管理し、紛失や盗難に気をつけること。

8. 施設の利用

(1) 開放閲覧室(46席)

エントランスホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは図書館の開館時間外も利用できる。

(2) 新聞閲覧コーナー

継続している新聞は18誌で、原則として前月分までを保管している。

(3) AV資料室

図書館所蔵のビデオ・DVD等を、AV資料室の機器で利用できる。複製や館外貸出は不可。

(4) 情報検索室

WINE検索用端末機、学術情報検索専用端末機およびCD-ROM専用端末機、マイクロリーダー・プリンター等が利用できる。

(5) エントランス

入・退館ゲート脇にカウンターを配し、貸出・返却および問合せへの対応を行っている。書庫へのアプローチには新着図書コーナー、新刊一般雑誌および新書・文庫コーナーを置いている。

(6) グループ閲覧室(10席/2室)

少人数授業が優先だが、空いた時間はグループで学習および研究等を行うときに手続きして利用できる。

(7) コピーコーナー

カード式複写機が、コピーコーナー、新刊学術雑誌コーナー、情報検索室に設置されている。利用は図書館所蔵資料のコピーに限る。コピーカードは学内図書館共通。

(8) 参考図書コーナー

辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が配架されている。

(9) 開架閲覧室(200席)

和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側に閲覧席がある。

(10) 新刊学術雑誌コーナー

①新刊学術雑誌コーナー、②コピーコーナー、③検索コーナー、④閲覧個室等で構成されている。

(11) バックナンバー書庫

合冊製本された雑誌が、和雑誌は誌名のアイウエオ順、外国雑誌は誌名のABC順に電動書架に配架されている。

(12) 洋書コーナー

洋書は、バックナンバー書庫隣の電動書架に配架されている。

中央図書館およびキャンパス図書館の利用について

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設された中央図書館は、蔵書数・座席数ともに大学図書館としては日本有数の設備規模である。また、学内の各キャンパスには、高田早苗記念研究図書館、戸山図書館、理工学図書館があり、それぞれ特色ある資料を収集し、利用に供している。

所沢図書館は、キャンパス図書館の一つとして位置づけられ、上記の各図書館と連携してサービスの拡充に努めている。WINEで各館の所蔵検索が可能であり、図書や文献複写の取り寄せもできる。また、中央図書館、各キャンパス図書館へ直接出向いて利用することもできる。利用の方法は各館の利用案内を参照のこと。

XVI 研究指導・演習・講義科目の概要

－ 修士課程 －

【研究指導】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学研究指導

天野 正博

地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題に焦点を当てながら、地球環境問題の現状を統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、地球環境問題を解決するための様々な国際的取り決めに対する各国の利害関係と取り組み方を、京都議定書の吸収源を中心に検討する。

Keywords: 地球環境問題、地球温暖化、温暖化ガス、熱帯林、環境計画、京都議定書

人口学研究指導

阿藤 誠

ディスカッションを通じて、学生の興味と関心に沿った(修士論文のための)研究課題の選択をサポートし、必要な分析技術の習得を勧め、各自の研究構想づくりをアドバイスする。研究構想が固まった段階で、研究指導スケジュールをたて、修士論文の各段階で適切なアドバイスを与え、修士論文の作成につなげていく。

生物圏生態学研究指導

太田 俊二

人間圏を含む生物圏の動態をいかに定量化するかが修士研究の鍵となるであろう。本研究指導では、毎週各自の修士研究の進捗状況を報告、討論していく過程を通じて、新しい知見を得られるような研究デザインを描けるように指導する。また、研究成果を学会発表、学術雑誌などで公表する具体的な方法についても指導する。

環境生態学研究指導

森川 靖

産業革命以降、「人」は化石燃料と近代科学を手にし、生産活動を飛躍させた。このような人間活動は、環境に影響を与え、またその影響は「人」の存在そのものを危うくし始めた。本研究指導では、環境生態学演習(1)(2)での習熟をふまえ、人間活動が地域、地球環境に及ぼす影響を総合的に考察し、今後の人間生存に関する問題を具体的にとりあげて、研究をすすめる。

環境社会学研究指導

鳥越 皓之

論文作成にあたっての具体的な指導をおこなう。各自のテーマに合わせて指導をおこなうことになるが、それに必要な基本文献の検討なども随時おこなう必要があろう。基本的には環境社会学の分野での研究指導になるだろう。なお、評価は学生の報告内容によって行なう。

社会人類学研究指導

矢野 敬生

〈異なる文化〉を対象として、それぞれの文化を成り立たせている社会システムを中心に解析することを目的と

する。履修院生各自の研究課題に即して具体的な研究テーマを設定する(たとえば、「東南アジア島嶼部社会の分析視角に関する再検討」・「東アジア社会の基層構造」など)。こうした理論的研究に加えて、各自の研究発表・フィールド調査の指導・論文プロポーザルの作成等について研究指導を行う。

水域環境学研究指導

井内 美郎

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、分析方法の学習及び実施、分析結果の考察・発表及び討論を行う。

地域資源論研究指導

柏 雅之

地域資源管理の担い手システム再建、持続可能な農業生産、地球環境時代に相応した持続可能な地域システム、フードシステム再編、などについての論理と方法について指導する。そこでは EU(欧州連合)での取り組みからわが国が学べるものについても考えていく。なお、方法論としての農業農村経済学、環境経済学、食料経済学、地域政策論などについて初年度ではより理解を深めてもらう指導をおこなう。

動物行動生態学研究指導

三浦 慎悟

野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理のうち、特定分野について深く学ぶために、専門学術誌の最新の論文、学会報告を中心に個別的に検討を行い、方法や知見、その意義について議論すると同時に、研究課題の設定、方法の検討、データの蓄積、進捗状況を点検し、論文作成へと導く。

[人間行動・環境科学研究領域]

学習動機づけ論研究指導

青柳 肇

教育に係る心理学のなかから、特に発展の著しい領域として、学習動機づけ(達成動機づけ、内発的動機づけ、自己決定傾向、原因帰属、学習性無力感)を取りあげるが、そればかりでなく親和動機、アタッチメント、愛他動機などそれに付随する領域も取り上げる。学生各人の専門領域の研究(卒業研究、学会発表、修論計画)を発表させ、それについて、研究方法と考察の仕方両面からアドバイスを与える。

発達行動学研究指導

根ヶ山 光一

各自の研究テーマについて、研究計画(いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかに originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか)・実施(フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか)・分析(どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか)・考察(データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか)・発表(研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか)の指導を行う。

建築計画学研究指導

佐野 友紀

建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決の方法を提案することを目的とする。
受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。
授業では受講者の発表・ディスカッションを通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

建築環境学研究指導

小島 隆矢

住居・建築・都市などの環境と、それら環境に関する広い意味での顧客(利用者、居住者、所有者、管理者等)の意識・行動・ニーズ・CS(顧客満足)に関わる諸問題をテーマとした研究指導を行う。各自、自主的に選んだテーマについて、1)社会的背景、既往研究などの調査、2)研究目的の設定、3)研究方法の検討・設定、4)調査・分析の実施、5)考察・結論の導出、というプロセスを遂行する。所要所で進捗状況の発表・検討会を開催し、内容のブラッシュアップをはかる。成果は論文としてまとめ、発表する。

社会文化心理学研究指導

山本 登志哉

共同主観的に成立する社会文化的なものとしての「心」という視点から、さまざまな心理現象を分析する指導を行います。

教科書:なし

参考文献:適宜紹介

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学研究指導

河西 宏祐

労使関係論について文献講読とともに実態調査を実施する。それを通して論文作成を指導する。

文化生態学研究指導

蔵持 不三也

この研究指導では、受講生の研究テーマの展開を促すための助言とともに、論文作成のための実践的な手法を教授する。そのため、受講生は研究発表を義務づけられる。

アジア社会論研究指導

店田 廣文

中東・北アフリカ、アジアおよび日本の都市社会を主たる対象に、各自の研究課題に即して、実証的な比較研究を実施する。研究課題は都市社会研究に限定せず、近代化以降の、日本および発展途上社会の多様な研究課題が指導の対象となる。現在のところ、イスラーム、少子高齢化、貧困と開発政策、近代家族の変容など、日本とアジア諸国を対象とする研究指導が中心である。また、諸外国を対象とする調査研究をおこなう学生については、学部の東南アジアにおける現地調査に協力参加させて現地調査の企画・実査と分析の能力養成をはかり、自ら現地調査研究をおこなうよう指導している。

移住論研究指導

森本 豊富

「移民研究特論」、「移住論演習」(1)及び(2)で学んだことを基に、修士論文を作成するための個別指導を行う。履修者は、自らの研究に関する先行研究を批判的に検証、整理し、オリジナリティのある調査を目指す。

家族社会学研究指導

池岡 義孝

家族をめぐるさまざまな社会現象や家族問題を研究テーマとする。研究のアプローチとしては、インタビューや会話データ、活字記録、画像・映像などの言説データやドキュメントデータにもとづく質的な研究法を重視する。そのため、質的な家族研究法および欧米と日本の家族研究史ないしは家族学説史の学習を、文献研究と実際の社会調査を併用したかたちで行うことにしたい。各人の研究については、これら基礎的な学習を前提にしたうえで取り組むよう指導する。

都市社会学研究指導

臼井 恒夫

都市は人間がつくった最大の創造物であるといわれる。しかし、人間のためにつくられたはずの都市は、しばしば人間の手を離れて一人歩きをしていく。現代の都市や都市社会を理解するためには、どのような視点が必要とされるのか。本研究指導では、都市社会学の研究を参照しながら、受講生の問題関心に沿った研究を進めていくための指導を行う。

科学史・科学論研究指導

加藤 茂生

授業内容: 受講生の関心に応じて、科学史、科学哲学、科学社会学など広い意味での科学論の研究の指導を行う。

授業方法: 一次資料および二次資料を読解し、討論を行うという演習形式で行う。

授業計画: 科学史、科学哲学、科学社会学など広い意味での科学論に関する研究方法の指導、研究テーマの設定の仕方、研究計画の立案、文献の検索方法、文書の探索方法、論文の書き方などを指導する。

物質文化論研究指導

谷川 章雄

考古学は、主として発掘調査の成果をもとに、モノと人間との関係を読み解く学問である。また、考古学は調査・研究のさまざまなレベルにおいて、歴史学・民俗学をはじめとする他の領域との接点をもっており、総合的、学際的方向性を本質的に内包している分野である。こうした視点にもとづいて、各自が論文を作成していく上での資料の特質と限界と観察・記載の方法、分析の方法、解釈の方向性などについて指導する。

表象文化論研究指導

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題: 表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

政治社会文化論研究指導

村上 公子

ドイツ連邦共和国の「過去」との取り組みの変遷を学び、それを通して一つの国家が国家として成立するとはどのようなことであるのかを考える。

技術文化論研究指導

余語 琢磨

技術文化論とは、モノ(資源、道具、身体)に働きかけるヒトの技術的営為を軸として、自然・社会・文化環境における両者の民俗的・歴史的な相互作用を追求する研究である。本研究指導では、技術史・技術文化論演習での理論的・実践的な蓄積をふまえたうえで、日本および東アジア・東南アジアをフィールドとする生活史・生活文化研究、生業史・生業研究、医療人類学・身体論研究について、調査研究計画の立案から修士論文の作成にいたるまでの指導を行う。可否は、修論計画の進捗状況により判断する。

地域文化論研究指導

竹中 宏子

できる限りローカルな地点、そしてより具体的な問題から研究を進めることにより(＝地域研究)、現代社会の本質が見えてくる。本研究指導では、主にヨーロッパを対象として、地域研究について当分野と大いに関連する文化・社会人類学、社会学、歴史学などの隣接科学の研究手法も含めて指導を行う。指導教員はこれまでス

ペインの小都市における祝祭と地域アイデンティティの関係、世界遺産の地域的な解釈・取り込みに関して調査・研究を行い、地域文化の形成過程における住民と地方行政や国家との関係を考察してきた。学生は指導教員の地域とテーマに限定されることなく、ヨーロッパにおけるものであれば広く研究テーマを選択することが可能であるが、対象地域の言語を習得していることが要求される。指導は具体的には地域研究に関する最近の文献の批判的な読み込みと、フィールドワーク実習で構成される。

[健康・生命医科学研究領域]

生体発達科学研究指導

木村 一郎

細胞の増殖、分化、形態形成を制御している様々な要因について研究する。細胞培養系を用いて骨格筋前駆細胞の分化過程の制御機構、とりわけ、成長因子などの液性因子の作用を中心に研究する。主な研究課題は、体節の筋原細胞や成体の筋衛星細胞の増殖、分化、細胞移動等の制御機構、筋細胞の死と再生の制御機構、筋前駆細胞における細胞融合の制御機構など。

生体構造学研究指導

小室 輝昌

末梢神経系終末部とその支配領域の構造について、主として電子顕微鏡的手法、免疫組織化学的手法等を使って明らかにし、各組織、器官における神経性調節機構について理解をすすめる。現在は、自律神経系末梢部の構造について、特に意を注いでいる。

生体機能学研究指導

今泉 和彦

骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節機構、微量元素(亜鉛・鉄)欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬(β_2 -アゴニスト)・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。

神経内分泌学研究指導

山内 兄人

生殖細胞の成熟、排卵、性行動、妊娠、授乳、母性行動にいたる子どもをつくる雌の生殖機能は、脳と生殖器官、それに、内分泌器官の相互作用により正常に保たれている。雄においても精子形成や性行動は神経とホルモンにより制御されている。雌雄の生殖機能には大きな違いがあるが、それは脳の性分化の結果によるものである。当研究指導では、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を、神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学、および、神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序を明らかにする。生殖機能に関しては特にセロトニン神経系に着目している。また、植物エストロゲンの動物の生殖への影響も調べている。

運動制御・バイオメカニクス研究指導

鈴木 秀次

身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。本研究指導の特徴は、姿勢維持やロコモーション中における身体運動を運動制御とバイオメカニクスの領域から総合的に研究し、動きの仕組みを解明するところにある。よって指導内容は、その動きが神経的にどのように制御されているかを研究する神経生理の領域と、動きについて研究するキネマティクス、そしてその動きの起こりとなる力について研究するキネティクスの領域が中心となる。そのため、上記の研究課題に関連の深い文献を読み、十分な討論を行

うと共に、特定の研究課題に対する問題点の所在を明らかにし、修士論文を纏める上での科学的なものの見方や考え方を養うことを目的とする。

統合生理学研究指導

永島 計

体温、体液の調節機構の理解と研究方法の習得を大きな柱とする。

具体的には、1)生理学的、2)組織科学的、3)分子生物学的、手法を用いて体温調節機構と体液調節機構の相互関係を明らかにしていくことであり、その既存の知識を深め、最新の情報を習得し、自らのテーマをもとに新しい知見を得ていくことにある。

現在、担当教員の所属研究室で進行しているテーマは1)体温の概日リズムと代謝の調節メカニズム、2)女性ホルモンの体温調節に及ぼす影響、3)脱水時の人の温度感覚の変化、4)女性の温度感覚、にもとづいて行われており、講義においてもこれらのテーマを中心に理解を深めていく予定である。

健康医学研究指導

河手 典彦

わが国が世界に冠たる長寿国の地位を築いていることの背景には、医学の進歩と普及、それを支えている特異的とさえ言える医療保険制度の存在など、貢献する多岐にわたる要素が関連している。真に人生を謳歌するためにも、単なる生命の延長に止まらずに健康寿命を延長することが極めて重要であり、健康医学研究もこの目標を実現するための方策を検討する一領域として捉えることができる。この健康医学研究指導の根幹は、“Medical Aspects of Health Maintenance”にある。即ち、臨床医学的要素に関連性の高い研究領域が特色である。演習(Ⅰ)、(Ⅱ)を履修することによって健康医学の多岐にわたる取り組みの現状を可能な限り正確に理解し、それらの領域の中から教員と協議の上で各自が選択した課題について、調査、研究を開始する。適時、応談による指針提示、修正指導などを交えながら研究を進捗させ、論文を完成させる。

応用健康科学研究指導

竹中 晃二

身体活動・運動、食生活およびストレスマネジメントなどの健康行動の採択、継続、および逆戻り予防に関する研究を行う。特に、ヘルスプロモーションや生活習慣病予防に果たす生活活動や運動の行動変容研究が中心となる。主な研究課題は、身体活動量増強を目的とした行動変容介入の効果、定期的な身体活動・運動習慣がメンタル・ヘルスに及ぼす影響、一過性の身体活動・運動が気分および感情の変容に及ぼす効果、身体活動とQOLおよびウェルネスの関係、身体的セルフエフィカシーと心理的安寧、心理的安寧強化のための運動療法、運動アドヒアランス強化の方法、運動アディクションの評価基準と予防、身体運動、瞑想、およびリラクセーションの関係、子どものストレス・マネジメント教育、勤労者のストレス対処、高齢者・障害者の健康関連QOLおよびウェルネス、女性のスポーツ参加に伴う諸問題(月経障害、摂食障害、抑うつなど)とその予防、スポーツ選手のストレス・マネジメント、スポーツ障害の予防と心理的ケアである。

医療人類学研究指導

辻内 琢也

健康や病い(health and illness)、そして医療や臨床の現実は、身体的・心理的・社会的・文化的(bio-psycho-socio-cultural)な複合産物として構築されている。医療人類学では、その複合産物に影響を与える生物生態学および社会文化的要因について、人類の歴史を背景に比較文化的に探求する。様々な世界各地における健康増進(health-promotion)運動、瞑想・気功などの宗教的・シャーマニック医療における“癒し”の精神生理学的メカニズム、近代の生物医学システムの抱える諸課題、災厄や苦悩の表象としての病いの語り(narrative)、などを研究対象とする。

<KeyWord>病いの語り、ナラティブ・ペイスト・メディシン(NBM)、保健医療行動、質的心理学研究、補完代

替医療、東洋医学、世界の伝統医学、医療の文化人類学、臨床人類学、スピリチュアリティ

[健康福祉科学研究領域]

福祉産業学研究指導

可部 明克

演習(1)・演習(2)をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業との共同研究を中心として、プロジェクトの企画・推進を通じた実践力を養成する。

さらに、MOT(Management of Technology)の基本となる技術・経営の知識と実践的なプロジェクト経験により、企業での研究開発力の養成を行う。

老年社会福祉学研究指導

加瀬 裕子

高齢化や少子化によって生じる個人的社会的問題について、老年社会福祉学における研究をレビューし、問題意識から仮説モデルの策定、研究方法の設定へと研究計画を展開する方法を指導する。

バイオエシックス研究指導

土田 友章

履修者の研究について討議し、バイオエシックスの基礎的文献や最近の話題を参照しながら指導する。

スポーツ健康マネジメント論研究指導

吉村 正

スポーツ健康マネジメントを専門的に学習する場合、その現場を知ることが極めて重要である。本研究指導では、スポーツや健康に関連する組織や企業に出向き、あるいはチームやグループに合流し、そこでマネジメントの方法を学習する。

日々の研究・教育活動では、指導者の在り方学習、コーチング技術の習得学習、関連文献の講読、レジュメや論文作成の指導等を行う。

社会保障政策論研究指導

植村 尚史

社会保障政策は、年金政策、医療政策、介護政策等幅広い範囲にわたっているため、その中から具体的なテーマを選定し研究を進める。研究方法についても、テーマによって異なるため、その内容に応じた研究方法を選定する。

予防医学研究指導

町田 和彦

ライフスタイルと免疫能を中心とした生体防御機能(動物実験)、高齢者の健康増進運動(血清疫学調査と面接調査により、ライフスタイルと生体防御機能との関係把握とともにレセプト分析による医療費に及ぼす影響も視点に入れている)および健康に関するフィールド調査を行っている。

幼少児福祉教育論研究指導

前橋 明

子どもたちが心身ともに健康で生き生きとした暮らしが送れるように、これまで数多くの福祉・幼少児教育研究がなされ、あわせて児童家庭福祉施策が講じられてきた。しかし、近年になって、子どもたちの抱える心身や生活上の問題は、非常に複雑、多岐にわたり、新たな展開が迫られている。

こうした社会や生活の背景を踏まえながら、近年のこの分野における研究動向について指導し、さらに各自の研究テーマに基づいて、研究計画の実践と論文の作成、成果の発表ができるよう、研究指導を展開する。

緩和医療学・臨床死生学研究指導

小野 充一

個人の“死”を、“生命の終わり”と捉える視点から、新しい世代への“生命の伝承”という視点に変換していくことで獲得する様々な“受容の概念”について、伝承されるものを受け止める側と伝える側の両極から検証し、支える技術、支えられる方法、関係性調整の方法などを具体的に研究する作業を指導する。

児童家庭福祉論研究指導

川名 はつ子

実親の下で暮らすことの出来ない被虐待児・障害児・非行少年等の社会的養護と自立支援をテーマに、子どもとその家族の支援について理論的・実践的に考究し、当事者のニーズに沿った援助のあり方を探っていく。修士論文は、原則として児童福祉施設や里親養育家庭等でフィールドワークをおこなって作成する。そのために学内外の研究会や里親大会、学会等に積極的に参加し、当事者との接触・フィールドの開拓・情報の収集・知識や援助技術の習得に努めることを推奨する。

精神保健福祉論研究指導

田中 英樹

精神保健福祉専門教育は、精神障害及び広く国民の精神的健康を対象に、社会福祉の視座から解決課題に接近する学問です。大学院では、将来の福祉現場での指導的立場やスペシャリストの養成もしくは、教育と研究における基礎能力を備え創造性豊かな自立した研究者を育成します。教育方法では、精神保健福祉研究で必要となる問題意識の涵養、思考の幅を広げ豊かな感性を培うこと、共同研究できる能力、教育指導の方法を含め必要な能力を身につけること、実践現場での力量形成などを主眼とします。具体的には、精神科リハビリテーションを中心とした根拠に基づく臨床実践（EBCP）、精神障害者のニーズオリエンテッドの立場、精神保健福祉の研究手法や研究論文の書き方、学会や学術誌での発表、より実践的な講義や演習を展開します。

健康福祉支援工学研究指導

畠山 卓朗

障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について、工学的な側面のみならず、人の心理面にも着目しながら実践的な研究を行う。

各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成、研究結果の発表まで指導を行う。

健康福祉管理論研究指導

扇原 淳

健康・福祉に関わる「情報」は、人々の様々な行動に影響し、個人レベルから集団レベルで、その健康に大きく影響する。健康・福祉に関連する問題の解決には、「情報」を量的に扱う多角的なアプローチに加えて、情報発信者側と情報利用者とのよりよいコミュニケーションが不可欠である。

これらの事柄について研究する際に求められる、「情報」を横断的、包括的に扱うための原理や方法論について、調査研究やフィールドでの研究活動を通して指導する。

ソーシャルワーク論研究指導

岩崎 香

社会福祉基礎構造改革における福祉サービス供給システムの転換により、福祉も契約の時代を迎えた。諸サービスを受ける際のクライアントの契約能力が問われ、判断能力が不十分な高齢者、障害者等の人権がクローズアップされている。契約における対等性の担保、つまり、パートナーシップの形成は共生社会を志向する現在の国際的な潮流の中でも強調されており、障害者の権利条約の採択といった動きに呼応するものでもある。そうしたシステムがクライアントのニーズ実現に向けて機能するために必要とされるソーシャルワーカーの実

践力とは何だろうか。フィールドワーク等を通して検討し、その根底を支えるソーシャルワークの価値や倫理に関して考察する。

また、そうした実践に寄与する研究とは何かということに関して、最近の研究動向を含めて検討する。

Keywords: ケースワーク、アドボカシー、障害者、契約、ソーシャルインクルージョン

[臨床心理科学研究領域]

心身医学研究指導

野村 忍

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健常者における心身相関の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、修士論文作成の指導（グループ指導ならびに個人指導）を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。

認知行動カウンセリング学研究指導

根建 金男

認知行動カウンセリングは、従来の行動カウンセリングと精神療法などの認知的アプローチが融合して形成された比較的新しい科学的なアプローチである。近年は、認知行動カウンセリングを支える認知行動理論の発展もめざましい。特に、不安障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、従来の典型的な合理的認知行動カウンセリングの限界を乗り越えるべく登場した構成主義的認知行動カウンセリングも活発になってきた。構成主義では、人の一生涯の発達を視野にいれたうえで、人が世界をどう構成（認識）しているかをその人の側から真剣に理解し、アプローチしようとする。この考え方はエビデンス重視の典型的な認知行動カウンセリングの難点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患のある人に限らず健常者をも広く対象とするものであることを念頭に置いたうえで、上記の研究動向を更に推し進めるような研究を行うことが必要である。そこで、この研究指導では、認知行動カウンセリング学あるいはそれと関連する領域の研究を実施し、修士論文をまとめることができるように指導する。

学校カウンセリング学研究指導

菅野 純

学校カウンセリングは、単に学校内でのカウンセリング活動というレベルにとどまらず、乳幼児期の発達心理学、発達障害心理学、そして児童期から青年期に至る臨床心理学、カウンセリング心理学、教育臨床心理学、教育社会心理学、教育心理学、家族心理学などを含む総合的領域である。ここでは学校カウンセリング学演習(1)(2)と教育心理臨床体験を踏まえ、各自が定めたテーマに沿って研究をすすめていく。

行動臨床心理学研究指導

嶋田 洋徳

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、(認知)行動論的アプローチを用いて研究と実践を行う。特に、不安、抑うつ、心理的ストレス、学校不適応、職場不適応、心身症などについて、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状の形成と維持、治療効果に及ぼす個人差変数の検討などが主なテーマとなる。

産業カウンセリング学研究指導

鈴木 伸一

うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関与する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱

えやすい生活上の問題や罹患しやすい身体疾患(生活習慣病や慢性疾患など)の予防およびケアにも焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した研究を行う。具体的には、研究室で行っている「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究班」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究班」、および「健康づくり・ストレスマネジメントに関する研究班」のプロジェクトに参画するとともに、各プロジェクトとリンクした個別の研究テーマを選定し、取り組んでいく。

研究の方法論としては、実験的手法を用いたアナログ研究、調査的手法を用いた諸要因の検討、臨床的手法を用いた介入研究などがある。

臨床心理アセスメント学研究指導

熊野 宏昭

人間はどうして変わることができるのか、その過程をどうすれば測定できるか、「治療の科学科」はいかにして実現できるか、に焦点を当てて行く。そのためには、心理的变化の基礎メカニズムを追及し、アセスメントの方法論を洗練化し、ケースフォーミュレーションの最適化と治療過程のデータベース化を進めることが必要になる。そこで、臨床行動分析(アクセプタンス&コミットメント・セラピー:ACT)やマインドフルネスに関わる基礎研究及び介入研究、注意訓練やマインドフルネスが前頭葉機能と心理行動的な介入効果に及ぼす影響の研究、そして「治療・援助プロセスの科学化」を目指す臨床心理アセスメントに関わる研究などを行う。

【感性認知情報システム研究領域】

感性認知科学研究指導

齋藤 美穂

情報化社会におけるバーチャルな空間は各国間の隔たりをますます小さくしている。このような環境において他の文化における感性の違いを知ることはグローバルなマーケティング戦略を展開する為に必要不可欠と考えられる。

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究方法も多岐にわたる。そこでこの研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、情報化社会においてこれからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ(具体的には「感性認知科学演習(1)」および「感性認知科学演習(2)」に記載)に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、修士論文に対する直接的な指導を行っていく。

安全人間工学研究指導

石田 敏郎

安全人間工学は、人間を取りまく機械や環境および他の人間との関わりを如何にしたら安全を保てるかを考える科学である。現在システムの巨大化や複雑化に伴い、人間が意図しない事故や不具合が発生している。人間の行動的側面を検討することで、事故を未然に防止するための方策を中心に研究している。そのため、ヒューマンエラーの認知心理学的検討、事故分析の方法論、人間工学的対策の策定手法等の研究指導を行う。主な研究テーマは、人間の情報処理・応答特性、視知覚特性の計測と評価、ストレス下での作業特性、ヒューマンエラーの分析と評価等である。現実のフィールドとしては、自動車交通、航空、各種産業現場などを対象としている。

福祉工学研究指導

藤本 浩志

福祉工学演習(1)、演習(2)と併せて、具体的に修士論文研究を遂行するうえで必要な方法論を指導する。研究には、問題設定、アプローチの取捨選択、結果のまとめの3段階があるが、個々に具体例に基づいて合理的な論理展開が身に付くようトレーニングする。

情報処理心理学研究指導

中島 義明

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題の切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。本研究指導の過程を経て、修士学位論文作成へと導く。

社会的実践認知科学研究指導

宮崎 清孝

認知科学の中でも社会的な実践における認知の様相とその発達を問題とする。このような立場は認知に対する「文化歴史的アプローチ」と呼ばれている。広い意味での教授・学習、つまり文化と関わることによる認知の展開の過程が研究対象である。ここではそれに関する修士論文作成を指導する。

心理行動学研究指導

鈴木 晶夫

人間を研究する際に、大きく認知的、行動的、生理的側面に分類できよう。それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。そこで、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用、健康と感情の関係、言語的・非言語的情報伝達手段の構造と機能、非言語行動と感情、食行動と人間関係、生活習慣と健康などを手がかりとした研究を中心的なテーマとする。また、東洋的思想からの「からだところの知恵」「東洋的行法からの健康法」にも興味がある。心理行動学、身体心理学は既存の領域ではないので、関連する領域の広範な文献研究から、過去の関連研究、現在の動向を探り、将来への実践的研究にまとめた。実験計画を踏まえた実験室的研究はもとより、調査研究、フィールド研究などの各種研究手法を駆使して新しい領域を開拓することも課題としたい。心理療法への応用のみならず、福祉・看護・医療場面への応用も考えたい。

言語情報科学研究指導

菊池 英明

情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

知識情報科学研究指導

松居 辰則

これからの時代は情報機器、特にコンピュータやインターネット技術と人間が高度に共生し、人間中心の豊かで安心な生活環境を構築して行かねばなりません。そのためには、コンピュータに高度な知性(Intelligence)をもたせるための人工知能研究、知識処理研究への期待は今まで以上に大きくなってきます。

そこで本研究室では、我々人間がもつ「感性」や、実生活空間の中での「暗黙知」について様々な観点から研究をしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究内容の一例です。

(1) 人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発(音楽情報処理)、(2) コンピュータ上のエージェント(疑似人間)やロボットと人間とのインタラクション、(3) コンピュータ上での何気ない操作(マウスやキーボード)からの人間の心理的な状態の推定方法、(4) 人間の感じる「調和感」の生成メカニズム、(5) 人間の心理的要因を考慮した経済予測モデル、(6) 医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システム、(7) (うまい)授業、スポーツ、芸術におけるスキルに関する研究(スキルサイエンス)、(8) 学習者の「やる気」や「モチベーション」を維持するための e-learning システムや教材開発、(9) 人間の「感性」の起源に関する研究、(10) 遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズム

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ(研究方法論)が必要で、人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

人間生体機能動態学研究指導

宮崎 正己

本指導では、人間の快適性は、何かという疑問点を人間工学という学問体系を踏まえた応用的な観点から、追及をすることを目的し、最終的には、人間の健康にいかにか寄与できるかについて考察を加えていく。人間の感性は何か、人間の感覚は何かなど基本的な知識から、人間は、身体的にも精神的にも如何にあるべきかという点を解明する手続きを実験的な手法を会得し、定量的な観点からの研究をおこなうことを目的とする。人間の理想的なパラメーターを変化させることにより、人間は、いかなる生体反応に従うか、また如何に健康になりうるかについて、具体的且つ実践的な追及を推し進めることにより研究指導をおこなう。

Keywords: 快適性、感性、環境と生体反応

感覚情報処理学研究指導

百瀬 桂子

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの視覚機能およびその情報処理機構に着目し、それらを客観的にとらえるための技術として脳活動計測を利用する。研究テーマとしては、視覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法の開発などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践、論文作成を指導する。

生態心理学研究指導

三嶋 博之

人間が環境から獲得する有意な情報単位を特定すること、その情報単位の特性とそれを知覚し利用する人間の振るまいとの間にある法則性を解明すること、行為の学習や発達という変化を支える環境資源について特にそこで利用されている情報の観点から明らかにすること、等について扱う。技術的には実験心理学的な手法を、理論的には J. J. Gibson の生態学的アプローチを、それぞれ研究遂行のための支えとする。関連分野の文献の検討、先行研究の追試、新しい解析手法の試用等を行って基礎固めをしながら、実証的でオリジナ

ルな研究の確立を目指す。

対話情報処理理論研究指導

市川 熹

例えば以下のような視点を参考にテーマを1ないし数項目選定し、研究を進めるよう指導する。

音声対話では何故連続している音韻の列の中から言葉と言葉の境目が直ちに判るのか、何故脳の中に記憶されているであろう何万語、何十万語もある単語から特定の言葉が直ちに引き出せるのか、何故引き出された単語と単語の関係(文の構造)が直ちに判るのか、何故円滑な話者交替が実現されるのかなど、いずれも非常に不思議である。余裕を持って予測できるような仕掛けと、効率的な心内辞書のアクセス法が存在することが予想される。

また、話し手の発声と平行してその音声は聞き手により聴取され、理解が進行し、反応が現れ、またその反応に応じて発声が影響されるという、ダイナミックな制御を行う情報が存在すると考えられる。話者交替の制御などの対話制御なども含む情報である。

A. 伝達内容情報 最終的に伝えられた内容

B. 伝達支援情報 実時間での理解を支援する情報

- ・伝達内容構造情報
- ・伝達内容構造予告情報
- ・話者交替予告(対話進行支援)情報

この伝達支援情報Bには様々なレベルの予告情報が含まれ、それを利用して予測することによって、聞き手の知覚や理解の負担を軽減する非常に大きな役割を果たしていると考えている。

このような視点から、音声や手話のような実時間対話言語には、仮説として、対話参加者が予測可能な階層的予告機能が存在するものと考えている。例えば

- a. 話者交替の予告情報とその活用(予測)機能
- b. 文及び文章構造の予告情報とその活用(予測)機能
- c. 語彙レベル分節位置予告情報とその活用(予測)機能
- d. 後続音韻の予告情報とその活用(予測)機能

などである。

a～cはプロソディが重要な役割を果たしていると考えられる。

そこで、音声の基本周波数のパターンに隣接する音声区間の間の無音声区間の時間長もパラメータに加え、連続する3つの音声区間の係り受け関係を推定する手法を検討する。

さらに、先行する音声区間の情報のみから、後続の音声区間の情報を使うことなく、後続の音声区間への係り受け関係を予測する可能性を検討する。

複数対話では、参加者に情報の授受の速度に差がある場合、遅い者が話題の展開に取り残されることが最大の問題である。話題の展開に追従できる(一種の実時間性)ように、対話の流れを制御する工夫が必要になる。

【教育コミュニケーション情報科学研究領域】

教育実践学研究指導

浅田 匡

学校教育を中心として、授業をはじめ教育実践の改善に資する実践研究を行う。教育実践における教師の役割は大きく、教師研究を中心とし、教師の実践に関する知識の獲得過程や教師間の相互作用による知識創造過程などを、具体的な授業実践に基づきながら研究を行う。そこでは、専門家としての教師の力量形成にと

どまらず、人間的成長を視野に入れている。方法としては、インタビュー法、観察、ビデオによる授業分析など、いわゆる質的研究法と調査法を組み合わせる用いるが、加えて教育実践の改善に資するプログラム開発やシステム開発も行う。さらに、教育センターや学校との共同研究を行う。

教育実践学のバックグラウンドとして、自己心理学、人間性心理学、教育方法学、教育工学、システム論、組織マネジメントなどの文献講読をあわせて行う。キーワードは、リフレクション、メンタリング、アクション・リサーチ、実践知、である。

情報意味論研究指導

岩坪 秀一

アンケート調査等によって被験者から調査目的にそった正確な情報を取得しようとするとき、その調査結果の信頼性・妥当性は、質問文が明確であるか、質問項目の順序は適正か、分量は多すぎないか等について調査票が事前に十分練られたものであるか否かに依存している。具体例を提示し、それらを批判・検討することによって良質な質問票を作成するにはどのようなことに注意すべきか伝えることを目標にしている。

情報コミュニケーション科学研究指導

金子 孝夫

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究の基礎手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための入門技術を調査研究の対象とする。これらの調査研究によって、修士論文を執筆できるようになる。

ネットワーク情報システム学研究指導

金 群

情報システムはますます多様化、大規模化、ネットワーク化の様相を呈している。実用に耐えるネットワーク化した情報システムや、何時でも何処でも誰もが簡単に利用できる安全・安心な情報環境の構築を実現するため、従来のソフトウェア工学的アプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した広い視野に立って、設計・開発・応用・評価法およびそれらの支援環境の構築法に関する研究を行う。また、ネットワーク情報システムで生じる諸問題と社会への影響や人間中心のネットワーク情報システムの未来像についても研究する。それによって、専門分野と関連分野への理解とそれらを柔軟に応用でき、さらに、新しい技術の動向にすばやく対応できるような、見識の豊かな研究者・技術者を育成する。

教科書: とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。参考文献: 随時紹介する。

インストラクショナルデザイン論研究指導

向後 千春

インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿までを指導します。これらを積み上げて、最終的には修士論文の作成を指導します。

情報コミュニケーション技術論研究指導

スコット ダグラス

Individualized research on a topic related to information and communication technologies to be negotiated with the professor. A wide variety of topics are possible and interested students should contact the professor to discuss their project. Course readings, discussions, and papers will be in English. Students should have TOEIC scores of 600 and above to function effectively in this class.

Sample topics include:

- The Exchange of Emotional Content in Business Communications: A Comparison of PC and Mobile Email Users.
 - Patterns of Emotional Transmission in Japanese Young People's Text-Based Communication in Four Basic Emotional Situations.
 - Relationships between Emotional States and Emoticons in Mobile Phone Email Communication in Japan.
 - Gender Differences in Japanese College Students' Participation in a Qualitative Study.
 - Analysis of Anger in Mobile Phone Email Communications in Japan.
 - Comparing Cultural and Gender Differences in the Informal Mobile Telephone Text Messages of Japanese and American College Students.
 - Use of iPods to Support Content Learning in a Japanese College Lecture Course.
- Textbook: To be announced at the beginning of the semester.

教育情報工学研究指導

永岡 慶三

教育工学のなかでも特に情報を扱う分野あるいは情報の観点から見た領域についての研究指導を行う。外国語を含む文献の探し方、読み方、引用のし方、解釈のし方、またデータの収集、整理、分析、吟味、論理展開の各方法を基本として学習し、課題の設定、発見、分析、仮説設定とその実証方法としての実験または観察についての計画、実施、整理にもとづき、論文形式で研究成果をまとめるまでを OJT 形式で指導する。

インターネット科学研究指導

西村 昭治

2008年現在、およそ6億台のコンピュータが接続され約7億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。私の意図する「インターネット科学」は100億ページにも及ぶ World Wide Web、P2P ネットワーク、ソーシャルネットワーキング (SNS) などを対象にその技術的な成り立ちを解析し、社会的な影響を数理的に評価するものである。本研究指導ではインターネット科学演習 (1) (2) での学習をふまえ、インターネットという研究対象を数理的に分析するとともに、創造性のあるソフトウェアの開発を目指す。

教育開発論研究指導

野嶋 栄一郎

教育環境と学習の様々なレベルの交互作用を明らかにする。これらの研究を行っていく上で、最も重要視する方法論は、開発研究及び実践研究であるが、このような研究には必ず、実験研究や調査研究にもとづく裏付けが必要となり、両面からの方法論が展開される。各人固有の問題意識を尊重し、理論的、方法論的検討に院生全員の討議を重ね、常にパイオニア的研究に焦点を当てる。インターネットを利用したインターカルチュラルコミュニケーションカリキュラムの開発、CSCW に関与するヒューマンファクターの研究、教育実践研究に対応した教育測定法の開発等、具体的研究事例をベースに研究領域の拡大を図る。

教育コミュニケーション学研究指導

保崎 則雄

基本的には、受講生が関心ある研究課題についての指導を中心に行います。授業研究、教材研究・開発、教員養成・研修に関する分野の国内外の文献を講読をしながら、研究指導を進める予定です。授業研究では、実際に教育現場で観察、録画、調査など triangulation の手法を用いて行い、分析します。必要に応じて、FIAC、OSIA などを用いて、授業内対話の分析をしつつ、教材開発については所沢市立教育センターとの連携をし、開発をしている「英語学びノート」(小学生版)の作業を参考に行います。最終的には、修論作成に向けた指導につなげられるような方向で進めます。毎回何か細かな課題に取り組むということを行い、それらを積

み重ねたものが修士論文につながるように計画します。

情報メディア教育論研究指導

森田 裕介

情報メディアを活用した教育について、教育現場の視点から「問題は何か」を議論する。また、具体的かつ実践的な問題解決を行う。具体的には、研究計画の立案、実施、データの収集、統計的な手法を用いた解析までのプロセスを遂行する支援を行う。そして、研究論文としての成果公表まで指導する。

【演習】

【地域・地球環境科学研究領域】

環境管理計画学演習（１）

天野 正博

地球環境問題の大部分は人為活動によって引き起こされている。また、顕著に環境問題が生じている地域では往々にして貧困、過疎、人口の急増など、社会的な歪みが存在していることが多い。演習では都市と農村、先進国と途上国の間にある格差が環境問題を与えている影響について、アマルティア・センの「不平等の再検討」をテキストにし公平性という視点から考える。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：輪読(8)ロールズの正義と政治的構想
第2回：輪読(1)なぜ平等か、何の平等か	第17回：輪読(8)についての分析結果の発表
第3回：輪読(1)についての分析結果の発表	第18回：輪読(9)多様性—目的と個人的特性
第4回：輪読(2)人間の多様性と基礎的平等	第19回：輪読(9)についての分析結果の発表
第5回：輪読(2)についての分析結果の発表	第20回：輪読(10)厚生経済学と不平等
第6回：輪読(3)手段と自由、福祉	第21回：輪読(10)についての分析結果の発表
第7回：輪読(3)についての分析結果の発表	第22回：輪読(11)不平等と貧困
第8回：輪読(4)自由、成果、資源	第23回：輪読(11)についての分析結果の発表
第9回：輪読(4)についての分析結果の発表	第24回：輪読(12)階級、ジェンダー
第10回：輪読(5)潜在能力の集合	第25回：輪読(12)についての分析結果の発表
第11回：輪読(5)についての分析結果の発表	第26回：輪読(13)平等の要件
第12回：輪読(6)潜在能力と機能	第27回：輪読(13)についての分析結果の発表
第13回：輪読(6)についての分析結果の発表	第28回：輪読(14)責任と公正
第14回：輪読(7)自由・福祉とエージェンシー	第29回：輪読(14)についての分析結果の発表
第15回：輪読(7)についての分析結果の発表	第30回：レポート課題と解説

環境管理計画学演習（２）

天野 正博

環境問題が生じている山村、途上国のフィールドにおいて実際に調査を行いながら、演習(1)で学んだ公平性の概念に基づいて、生じている環境問題が社会にどのような影響を与えているかを調査し、自然科学だけでなく社会科学の見地からも調査や情報の収集を行う。得られたデータから問題の構造を分析しモデル化をするとともに、解決策を提案する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 演習の概要と進め方	第16回: 調査結果の分析(5)
第2回: 環境問題の背景分析	第17回: 調査結果の分析(6)
第3回: 環境問題に現状調査(1)	第18回: 環境問題を引き起こす要因に関する調査(1)
第4回: 環境問題に現状調査(2)	第19回: 環境問題を引き起こす要因に関する調査(2)
第5回: 環境問題に現状調査(3)	第20回: 環境問題を引き起こす要因に関する調査(3)
第6回: 環境問題に現状調査(4)	第21回: 環境問題を引き起こす要因に関する調査(4)
第7回: 調査結果の分析(1)	第22回: 調査結果の分析(7)
第8回: 調査結果の分析(2)	第23回: 調査結果の分析(8)
第9回: 環境問題が生じた地域の社会経済調査(1)	第24回: 調査結果の分析(9)
第10回: 環境問題が生じた地域の社会経済調査(2)	第25回: 調査結果の分析(10)
第11回: 環境問題が生じた地域の社会経済調査(3)	第26回: 環境問題発生機構のモデル化(1)
第12回: 環境問題が生じた地域の社会経済調査(4)	第27回: 環境問題発生機構のモデル化(2)
第13回: 環境問題が生じた地域の社会経済調査(5)	第28回: 環境問題発生機構のモデル化(3)
第14回: 調査結果の分析(3)	第29回: 調査結果の分析についてのまとめ
第15回: 調査結果の分析(4)	第30回: レポート課題と解説

人口学演習(1)

阿藤 誠

社会現象のうち特に人口変動に関連した分野、すなわち出生力、家族計画、結婚、離婚、死亡、国内・国際人口移動、人口転換、少子化、高齢化、人口減少、家族政策などについて、国際比較的視野から学習する。和文・英文文献講読と人口統計分析の演習を通じて、各自の論文作成能力の向上を目指すとともに、修士論文のテーマの選択を進める。

成績評価は授業中の発表、レポート等により総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 演習の概要と進め方	第16回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)
第2回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第17回: 人口統計学演習(8)
第3回: 人口統計学演習(1)	第18回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)
第4回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第19回: 人口統計学演習(9)
第5回: 人口統計学演習(2)	第20回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)
第6回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第21回: 人口統計学演習(10)
第7回: 人口統計学演習(3)	第22回: 英文専門論文講読(人口学の専門誌)
第8回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第23回: 人口統計学演習(11)
第9回: 人口統計学演習(4)	第24回: 英文専門論文講読(人口学の専門誌)
第10回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第25回: 人口統計学演習(12)
第11回: 人口統計学演習(5)	第26回: 英文専門論文講読(人口学の専門誌)
第12回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第27回: 人口統計学演習(13)
第13回: 人口統計学演習(6)	第28回: 英文専門論文講読(人口学の専門誌)
第14回: 和文専門論文講読(人口学の専門誌)	第29回: 人口統計学演習(14)
第15回: 人口統計学演習(7)	第30回: レポート課題と解説

人口学演習（２）

阿藤 誠

社会現象のうち特に人口変動に関連した分野、すなわち出生力、家族計画、結婚、離婚、死亡、国内・国際人口移動、人口転換、少子化、高齢化、人口減少、家族政策などから修士論文のテーマを絞り込み、論文の構想（テーマ、論文の狙い、関連文献、データの所在、分析方法を含む）を作成する。英文文献講読とデータ分析を通じて、各自の構想の実現可能性を探り、構想の彫琢を図り、修士論文の作成をスタートさせることを目指す。

成績評価は授業中の発表、レポート等により総合的に評価する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第16回：英文専門論文の講読
第2回：英文専門論文の講読	第17回：修士論文のための人口データ分析(4)
第3回：修士論文の構想発表(1)	第18回：英文専門論文の講読
第4回：英文専門論文の講読	第19回：修士論文のための人口データ分析(5)
第5回：修士論文の構想発表(2)	第20回：英文専門論文の講読
第6回：英文専門論文の講読	第21回：修士論文のための人口データ分析(6)
第7回：修士論文の構想発表(3)	第22回：英文専門論文の講読
第8回：英文専門論文の講読	第23回：修士論文のための人口データ分析(7)
第9回：修士論文の構想発表(4)	第24回：英文専門論文の講読
第10回：英文専門論文の講読(人口学の専門誌)	第25回：修士論文のための人口データ分析(8)
第11回：修士論文のための人口データ分析(1)	第26回：英文専門論文の講読
第12回：英文専門論文の講読	第27回：修士論文の中間報告(1)
第13回：修士論文のための人口データ分析(2)	第28回：修士論文の中間報告(2)
第14回：英文専門論文の講読	第29回：修士論文の中間報告(3)
第15回：修士論文のための人口データ分析(3)	第30回：修士論文の中間報告(4)

生物圏生態学演習（１）

太田 俊二

地球環境システムの重要な構成要員である生物圏(人間圏を含む)に関わるさまざまな研究をとりあげ、気候学、生態学などの領域の最新の研究動向について理解していく。また、気候データ、地理情報、エネルギー利用などに関する膨大なデータの収集と整備を各自の修士研究にあわせて進めていく。

成績評価基準:授業中の取り組みを直接評価する。

授業計画:各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

第1回：ガイダンス	第16回：新しい気候データベースの作成(4)
第2回：生態学の考え方、基本用語の整理(1)	第17回：新しい気候データベースの作成(5)
第3回：生態学の考え方、基本用語の整理(2)	第18回：新しい気候データベースの作成(6)
第4回：生態学の考え方、基本用語の整理(3)	第19回：新しい気候データベースの作成(7)
第5回：生態学の考え方、基本用語の整理(4)	第20回：エネルギー利用のデータベースの作成(1)
第6回：生態学に関する新着論文の輪読(1)	第21回：エネルギー利用のデータベースの作成(2)
第7回：生態学に関する新着論文の輪読(2)	第22回：エネルギー利用のデータベースの作成(3)
第8回：生態学に関する新着論文の輪読(3)	第23回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認(1)

第9回：過去のデータベースの確認(1) 新着論文との関連	第24回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認(2)
第10回：過去のデータベースの確認(2) 新着論文との関連	第25回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認(3)
第11回：過去のデータベースの確認(3) 新着論文との関連	第26回：興味あるテーマに必要なデータ形式の確認(4)
第12回：新しい気候データベースの作成方針(作成するデータベースは毎年異なる)	第27回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(1)
第13回：新しい気候データベースの作成(1)	第28回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(2)
第14回：新しい気候データベースの作成(2)	第29回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(3)
第15回：新しい気候データベースの作成(3)	第30回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(4)

生物圏生態学演習(2)

太田 俊二

修士研究課題と関連する過去から現在までの原著論文、総説を多数収集して、各自の修士研究の位置づけを整理、再考する。同時に、収集した原著論文のデジタルなデータベース化をはかる。

成績評価基準:授業中の取り組みを直接評価する。

授業計画:各回の内容に関して、受講者各自が事前に準備を行い、授業時間中に作業過程や結果などについて報告する。

第1回：ガイダンス、過去のデータベースの確認、主要学術雑誌の検索	第16回：PDFの管理、データベースの作成(1)
第2回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査(1)	第17回：PDFの管理、データベースの作成(2)
第3回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査(2)	第18回：PDFの管理、データベースの作成(3)
第4回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査(3)	第19回：PDFの管理、データベースの作成(4)
第5回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査(4)	第20回：PDFの管理、データベースの作成(5)
第6回：過去2年分の主要学術雑誌の全タイトル調査(5)	第21回：PDFの管理、データベースの作成(6)
第7回：abstract、著者等の整理(1)	第22回：PDFの管理、データベースの作成(7)
第8回：abstract、著者等の整理(2)	第23回：PDFの管理、データベースの作成(8)
第9回：abstract、著者等の整理(3)	第24回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(4)
第10回：興味あるテーマ、手法等の整理(1)	第25回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(5)
第11回：興味あるテーマ、手法等の整理(2)	第26回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(6)
第12回：興味あるテーマ、手法等の整理(3)	第27回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(1)

第13回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(1)	第28回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(2)
第14回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(2)	第29回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(3)
第15回：過去5年分の主要雑誌から興味あるテーマ、手法等の文献抽出(3)	第30回：興味あるテーマ、手法等の整理、発表(4)

環境生態学演習（１）

森川 靖

人間を含めた生態系をとりまく自然環境及び人間活動による環境変化と生態系の関係について、生態系科学の視点から解析された原著、総説、論文などを分担講読し、相互討論を通じて、環境管理、環境アセスメントの意義及び今後の研究展開を把握する。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第 1 回：演習の進め方	第16回：環境に関する諸問題(輪読7)
第 2 回：生態学の基礎(輪読1)	第17回：環境に関する諸問題(輪読8)
第 3 回：生態学の基礎(輪読2)	第18回：個別テーマの発表(1)
第 4 回：生態学の基礎(輪読3)	第19回：個別テーマの発表(2)
第 5 回：生態学の基礎(輪読4)	第20回：個別テーマの発表(3)
第 6 回：生態学の基礎(輪読5)	第21回：個別テーマの発表(4)
第 7 回：生態学の基礎(輪読6)	第22回：個別テーマの発表(5)
第 8 回：生態学の基礎(輪読7)	第23回：個別テーマの発表(6)
第 9 回：生態学の基礎(輪読8)	第24回：私の研究の方法論(1)指導教員
第10回：環境に関する諸問題(輪読1)	第25回：私の研究の方法論(2)指導教員
第11回：環境に関する諸問題(輪読2)	第26回：個別修士論文課題の発表(1)
第12回：環境に関する諸問題(輪読3)	第27回：個別修士論文課題の発表(2)
第13回：環境に関する諸問題(輪読4)	第28回：個別修士論文課題の発表(3)
第14回：環境に関する諸問題(輪読5)	第29回：個別修士論文課題の発表(4)
第15回：環境に関する諸問題(輪読6)	第30回：演習に関する講評

環境生態学演習（２）

森川 靖

演習(1)における研究思想の理解、方法論の把握から具体的に研究を進めるにあたっての問題のありかと解決方法を検討する。そのため、修士研究課題と関連した最新の研究論文を検証し、総合科学としての環境生態学を担う若手研究者の育成を目指す。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第 1 回：演習の進め方	第16回：調査結果の発表(3)
第 2 回：森林調査法講義(1)	第17回：個別テーマの進捗状況発表(1)
第 3 回：森林調査法講義(2)	第18回：個別テーマの進捗状況発表(2)
第 4 回：森林調査法(1);野外	第19回：個別テーマの進捗状況発表(3)
第 5 回：森林調査法(2);野外	第20回：個別テーマの進捗状況発表(4)

第6回：森林調査法(3);野外	第21回：個別テーマの進捗状況発表(5)
第7回：森林調査法(4);野外	第22回：個別テーマの進捗状況発表(6)
第8回：野外調査データの計算(1)	第23回：個別テーマの進捗状況発表(7)
第9回：野外調査データの計算(2)	第24回：個別テーマの進捗状況発表(8)
第10回：野外調査データの計算(3)	第25回：個別テーマの進捗状況発表(9)
第11回：野外調査データの計算(4)	第26回：個別テーマの進捗状況発表(10)
第12回：調査結果の発表準備(1)	第27回：個別テーマの進捗状況発表(11)
第13回：調査結果の発表準備(2)	第28回：個別テーマの進捗状況発表(12)
第14回：調査結果の発表(1)	第29回：進路相談・検討
第15回：調査結果の発表(2)	第30回：演習に関する講評

環境社会学演習(1)

鳥越 皓之

環境社会学に関する理論研究と環境問題についての社会学的分析について講義をするとともに、討議の機会を設ける。学部レベルの環境社会学について、十分な理解があることを受講条件とする。また、この科目の性格上、教室に止まることなく、現地に出向き、調査をすることを授業の一環とするので、フィールドに出向ける時間的用意が必要である。

成績評価基準: 発言内容と出席

授業計画:

第1回：社会学基礎論	第16回：自然環境についての分析1
第2回：社会学における環境社会学の位置づけ	第17回：自然環境についての分析2
第3回：環境社会学の諸理論	第18回：自然環境についての分析3
第4回：基本文献の講読1、基礎理論に関わること	第19回：自然環境についての分析4
第5回：基本文献の講読2、基礎理論の特徴	第20回：日常環境についての分析1
第6回：基本文献の講読3、環境をどうとらえるのか	第21回：日常環境についての分析2
第7回：基本文献の講読4、環境社会学とは	第22回：日常環境についての分析3
第8回：基本文献の講読5、環境社会学の特徴	第23回：日常環境についての分析4
第9回：基本文献の講読6、環境社会学の潮流	第24回：歴史的環境についての分析1
第10回：基本文献の講読7、環境社会学の可能性	第25回：歴史的環境についての分析2
第11回：日本の環境社会学	第26回：歴史的環境についての分析3
第12回：日本の環境社会学史1	第27回：歴史的環境についての分析4
第13回：日本の環境社会学史2	第28回：環境社会学の応用1
第14回：欧米の環境社会学	第29回：環境社会学の応用2
第15回：アジアの環境社会学	第30回：環境社会学的分析の可能性と限界

環境社会学演習(2)

鳥越 皓之

環境社会学に関する専門的応用的な課題を対象とし、受講者の環境社会学分野の修士論文作成のための基本的な分析方法についての一助ととする。登録資格は2年生。1年生でも教員の許可を得て例外的に許可することがある。便宜的に授業曜日を設定しているが、環境社会学の科目の性格上、環境問題の現場近くで集中的に作業を行うことが多い。

成績評価基準: 発言内容と出席

授業計画:

第1回：環境社会学の基本的な考え方	第16回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析7
第2回：研究に対する基本姿勢	第17回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析8
第3回：環境社会学的分析の方法	第18回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析9
第4回：論文を書くときに陥りやすい問題点	第19回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析10
第5回：環境社会学的論文の書き方1	第20回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析11
第6回：環境社会学的論文の書き方1	第21回：環境社会学の論文の論理の洗練法1
第7回：環境社会学的論文の書き方2	第22回：環境社会学の論文の論理の洗練法2
第8回：環境社会学的論文の書き方3	第23回：環境社会学の論文の論理の洗練法3
第9回：環境社会学的論文の書き方4	第24回：環境社会学の論文の論理の洗練法4
第10回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析1	第25回：環境社会学の論文の論理の洗練法5
第11回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析2	第26回：環境社会学の論文の論理の洗練法6
第12回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析3	第27回：論文の研究史と分析
第13回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析4	第28回：論文の結論の位置づけ
第14回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析5	第29回：論文表現の意味と価値
第15回：受講生の修士論文のテーマの紹介と分析6	第30回：論文と現代社会との緊張関係

社会人類学演習（1）

矢野 敬生

地域研究としてのフィールドワークの手法を学ぶことを目的とする。そのために、①地域研究やフィールドワークの方法論の検討、②個別地域の民族誌の検討、③現代社会人類学の理論的動向と民族誌との関係について、文献の講読を行いつつ、受講者1人1人が自らフィールドワークを実践し、自前の理論を組み立てられる能力の養成をめざす。なお、今年度は、①については、近年数多く刊行されているフィールドワークに関する諸著書および、エスノグラフィーを、②については、著名な人類学者の諸著作（具体的には年度始めに相談のうえ決定）を素材とする予定である。実際のフィールドワークを希望するものは、私たちがこれまでフィールドワークを実施し、かつ継続中である東南アジア（フィリピン・ジャワ）、韓国、および日本の沿岸漁村等の調査への参加も可能である。

成績評価基準:出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する

授業計画:

第1回：演習のガイダンス	第16回：テーマ発表(その1) —テーマをめぐる、序論
第2回：履修者のテーマについて報告(1)	第17回：テーマ発表(その1) —テーマをめぐる、序論
第3回：履修者のテーマについて報告(2)	第18回：テーマ発表(その2) —調査手法、調査対象他、人々
第4回：研究動向・フィールドワークについて(1)	第19回：テーマ発表(その2) —調査手法、調査対象他、人々
第5回：研究動向・フィールドワークについて(2)	第20回：テーマ発表(その2) —調査手法、調査対象他、人々
第6回：研究動向・フィールドワークについて(3)	第21回：テーマ発表(その2) —調査手法、調査対象他、人々
第7回：研究テーマの発表(1)	第22回：テーマ発表(その3)—課題、命題

第8回：研究テーマの発表(2)	第23回：テーマ発表(その3)―課題、命題
第9回：研究テーマの発表(3)	第24回：テーマ発表(その3)―課題、命題
第10回：調査テーマ・調査他、手法に関して(1)	第25回：テーマ発表(その4)―内容の分析
第11回：調査テーマ・調査他、手法に関して(2)	第26回：テーマ発表(その4)―内容の分析
第12回：調査テーマ・調査他、手法に関して(3)	第27回：テーマ発表(その4)―内容の分析
第13回：調査テーマ・調査他、手法に関して(4)	第28回：テーマ発表(その5)―結論の分析
第14回：テーマ発表(その1) ―テーマをめぐって、序論	第29回：テーマ発表(その5)―結論の分析
第15回：テーマ発表(その1) ―テーマをめぐって、序論	第30回：テーマ発表(その5)―結論の分析

社会人類学演習(2)

矢野 敬生

履修学生の問題関心やフィールドに即して、院生諸君の研究発表および討論を中心に構成する。さらに、関連領域に関するモノグラフ研究および現代文化人類学の理論的研究について文献研究をあわせて行う。

成績評価基準：出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する

授業計画：

第1回：演習ガイダンス	第16回：テーマ発表(その1) ―研究テーマをめぐって＋文献を読む(1)
第2回：履修者の研究テーマについて報告(1)	第17回：テーマ発表(その1) ―研究テーマをめぐって＋文献を読む(2)
第3回：履修者の研究テーマについて報告(2)	第18回：テーマ発表(その2) ―調査手法・調査対象他＋文献を読む(3)
第4回：研究動向・フィールドワークに関して報告(1)	第19回：テーマ発表(その2) ―調査手法・調査対象他＋文献を読む(4)
第5回：研究動向・フィールドワークに関して報告(2)	第20回：テーマ発表(その2) ―調査手法・調査対象他＋文献を読む(5)
第6回：研究動向・フィールドワークに関して報告(3)	第21回：テーマ発表(その2) ―調査手法・調査対象他＋文献を読む(6)
第7回：研究テーマの概要(1)＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(1)	第22回：テーマ発表(その3) ―課題・論点＋文献を読む(7)
第8回：研究テーマの概要(2)＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(2)	第23回：テーマ発表(その3) ―課題・論点＋文献を読む(8)
第9回：研究テーマの概要(3)＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(3)	第24回：テーマ発表(その3)―課題・論点
第10回：調査地域・手法・調査テーマに関して(1) ＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(4)	第25回：テーマ発表(その4)―内容の分析
第11回：調査地域・手法・調査テーマに関して(2) ＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(5)	第26回：テーマ発表(その4)―内容の分析
第12回：調査地域・手法・調査テーマに関して(3) ＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(6)	第27回：テーマ発表(その4)―内容の分析

第13回：調査地域・手法・調査テーマに関して(4) ＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(7)	第28回：テーマ発表(その5)―結論
第14回：テーマ発表(その1)―研究テーマをめぐ って＋C.ギアツの「Bali 研究」を読む(8)	第29回：テーマ発表(その5)―結論
第15回：テーマ発表(その1)―研究テーマをめぐ って	第30回：テーマ発表(その5)―結論

水域環境学演習（１）

井内 美郎

地球環境変遷史解明に関する文献学習、基礎的調査法の学習、基礎的分析方法の学習などを行う。

成績評価基準:出席状況、討論への参加状況およびレポートの結果で評価する。

授業計画:

第 1 回：ガイダンス	第16回：炭素の地球規模循環
第 2 回：地球環境変動について―短期的変化と長 期的変化―	第17回：地球と生命
第 3 回：デイズワールド―システムの思考―	第18回：生態系、多様性とは
第 4 回：フィードバックシステムとは	第19回：地球の誕生と宇宙
第 5 回：地球規模のエネルギーバランス―黒体放 射の理論―	第20回：生命の起源について
第 6 回：温室効果の原理	第21回：生命活動と大気
第 7 回：大気循環系とは	第22回：酸素の発生とオゾンの発生
第 8 回：大気循環と気温・降水量分布	第23回：長期的気候変動―太陽活動に関するパラ ドックス―
第 9 回：海洋循環系とは	第24回：短期的気候変動―完新世の変動―
第10回：海洋循環および深層循環	第25回：地球の歴史と生命
第11回：大気―海洋系とは	第26回：生物多様性の歴史
第12回：大気―海洋系のモデリング GCM モデル	第27回：第四紀という時代
第13回：固体地球における物質循環	第28回：第四紀の氷河作用とミランコビッチサイクル
第14回：プレートテクトニクス的思考	第29回：地球温暖化―原因と影響―
第15回：元素循環のシステムの思考	第30回：まとめ

なお、実施順序は諸事情により変動することがある。

水域環境学演習（２）

井内 美郎

水域環境に関する基礎的事項に関して現地調査を織り交ぜながら学ぶ。

成績評価基準:レポートの結果で評価する。

授業計画:

第 1 回：ガイダンス	第16回：入間市博物館
第 2 回：三ヶ島周辺の水環境について	第17回：東京都水道歴史館
第 3 回：玉川上水と多摩川・まいまいず井戸	第18回：江戸時代の水道
第 4 回：玉川上水の歴史	第19回：金子台周辺的茶畑と段丘
第 5 回：玉川上水と水喰土	第20回：霞川と河川地形

第6回：玉川上水と段丘	第21回：武蔵野扇状地の地形
第7回：狭山が池	第22回：武蔵野扇状地の地質
第8回：立川断層と断層地形	第23回：三ヶ島周辺の地下水
第9回：白子川と湧水	第24回：三ヶ島周辺の地下地質
第10回：和光市周辺の地下地質	第25回：不老川の水質
第11回：飯能礫層	第26回：不老川周辺の地形
第12回：飯能周辺の段丘地形	第27回：地球惑星関連学会合同大会参加
第13回：仏子周辺の湧水環境	第28回：学会発表を学ぶ
第14回：入間川の足跡化石	第29回：野尻湖の環境
第15回：狭山市博物館	第30回：野尻湖の底質

なお、実施順序は諸事情により変動することがある。

地域資源論演習（１）

柏 雅之

農山村における地域資源の利用・管理システム再建問題について学ぶ。春学期は、おもにその方法論的基礎となる経済理論についてテキストの輪読形式で演習を進める。秋学期は、経済のグローバル化のなかで、いかに従来の農山村地域資源の利用・管理システムが危機に瀕してきたか、そしてその再建のあり方をどう考えるのかについて、理論的に学べるようにする。ここでも文献講読を中心に演習を進めていく。最後に、持続可能な社会の条件としての農山村地域資源管理の意義と課題を皆で考えていく。

テキストは別途指定するが、参考文献として以下のものをあげる。

(1) 神野直彦『地域再生の経済学』中公新書

(2) 宇沢弘文『社会的共通資本』岩波新書

(3) 室田武・多辺田政弘・槌田敦編『循環の経済学』学陽書房

成績評価基準: レポートおよび演習での報告

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：農産物価格の理論
第2回：市場経済の理論	第17回：農産物価格の理論
第3回：完全競争市場と不完全競争	第18回：農産物価格の理論
第4回：市場の失敗	第19回：農産物価格の理論
第5回：消費と生産の理論	第20回：農業の構造問題
第6回：生産要素価格と所得分配の理論	第21回：農業の構造問題
第7回：経済政策の理論	第22回：農業の構造問題
第8回：経済学の土台から考えなおしてみる	第23回：農業の構造問題
第9回：エントロピー学派の意義	第24回：農業の構造問題
第10回：世界の食料・農業・環境問題の構図	第25回：食料自給問題を考える
第11回：農業生産と環境負荷	第26回：食料自給問題を考える
第12回：農業生産とエネルギー収支	第27回：食料自給問題を考える
第13回：世界の農業危機の構図	第28回：都市と農山村
第14回：フードシステム	第29回：都市と農山村
第15回：アグリビジネス	第30回：都市と農山村

地域資源論演習（2）

柏 雅之

農業・農山村地域再生の方法や政策について学ぶ。そこでは持続性の概念がキーとなる。春学期はその基礎として、EU(欧州連合)の環境農業政策や共通地域政策の論理、構造と方法について学ぶ。秋学期は、EUの諸政策から我が国が学べるものを考えていく。行財政システムをはじめとする諸制度、農業・農村構造をはじめ両者の差異は大きい、ポスト重化学工業化産業社会を展望する上で両者が共通して追求していかなければならない本質的課題とは何かということを学んでいく。この演習(2)は2年生を対象とする。受講においては、同演習(1)を履修していることが望ましい。

成績評価基準:レポートおよび演習での報告

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：EU 農村地域政策の論理
第2回：地域再生の政策科学	第17回：EU 農村地域政策の論理
第3回：地域再生の政策科学	第18回：EU 農村地域政策の論理
第4回：地域再生の政策科学	第19回：EU の環境農業政策
第5回：地域再生の政策科学	第20回：EU の環境農業政策
第6回：経済政策と地域政策の原理	第21回：EU の環境農業政策
第7回：経済政策と地域政策の原理	第22回：イギリスの地域再生政策
第8回：経済政策と地域政策の原理	第23回：イギリスの地域再生政策
第9回：日本の過疎地域・農山村地域問題	第24回：イギリスの地域再生政策
第10回：日本の過疎地域・農山村地域問題	第25回：地域再生と戦略的パートナーシップ
第11回：EU(欧州連合)の共通地域政策	第26回：地域再生と戦略的パートナーシップ
第12回：EU(欧州連合)の共通地域政策	第27回：地域ガバナンス
第13回：EU(欧州連合)の共通地域政策	第28回：地域ガバナンス
第14回：EU(欧州連合)の共通地域政策	第29回：日本の地域再生問題を考える
第15回：EU共通農業政策改革と農村地域政策の登場	第30回：日本の地域再生問題を考える

動物行動生態学演習（1）

三浦 慎悟

野生動物の行動生態及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を紹介し、野生動物の社会構造、繁殖システム、性選択、適応戦略、また個体群動態論などに関する知見を各種論文の輪読によって集積する。同時に野生動物のフィールドに滞在し、行動生態に関するデータ収集法と分析法を習得する。与えられた課題の達成度と出席、及び課題の発表状況によって評価する。

授業計画:

第1回：イントロダクションと演習の進め方	第16回：フィールド調査法とデータ収集
第2回：演習に関する文献の紹介	第17回：フィールド調査法とデータ収集
第3回：研究論文の紹介と輪読	第18回：研究論文の輪読
第4回：研究論文の紹介と輪読	第19回：研究論文の輪読
第5回：研究論文の輪読	第20回：研究論文の輪読
第6回：研究論文の輪読	第21回：研究論文の輪読
第7回：研究論文の輪読	第22回：研究論文の輪読
第8回：研究論文の輪読	第23回：研究論文の輪読
第9回：研究論文の輪読	第24回：研究論文の輪読

第10回：研究論文の輪読	第25回：論文テーマの絞り込み
第11回：研究論文の輪読	第26回：論文テーマの絞り込み
第12回：研究論文の輪読	第27回：論文テーマの絞り込み
第13回：研究論文の輪読	第28回：論文テーマの絞り込み
第14回：研究論文の輪読	第29回：論文テーマの絞り込み
第15回：フィールド演習（調査法の紹介）	第30回：論文テーマの絞り込み

動物行動生態学演習（2）

三浦 慎悟

野生動物の行動生態学及び個体群生態学についての基本的な理論や知識を踏まえ、研究テーマを絞り込み、データの収集法と分析法について議論し、決定し、実践する。同時に既往成果や文献などの調査し、得られた知見の位置づけを行う。評価は課題の達成状況と論文のレベルを中心に行う。

授業計画：

第1回：演習の進め方と研究テーマの絞り込み	第16回：研究論文作成法
第2回：研究テーマの設定	第17回：研究論文作成法
第3回：研究関連データ収集法	第18回：研究論文作成法
第4回：研究に関するデータ収集法	第19回：研究論文作成法
第5回：研究に関する文献輪読	第20回：研究論文作成法
第6回：研究に関する文献輪読	第21回：研究論文作成法
第7回：研究に関する文献輪読	第22回：研究論文作成法
第8回：研究に関する文献輪読	第23回：研究データ解析法
第9回：研究に関する文献輪読	第24回：研究データ解析法
第10回：研究に関する文献輪読	第25回：研究データ解析法
第11回：研究に関する文献輪読	第26回：研究データ解析法
第12回：研究に関する文献輪読	第27回：研究データ解析法
第13回：研究に関する文献輪読	第28回：研究論文作成進捗状況の点検
第14回：研究に関する文献輪読	第29回：研究プレゼンテーション法
第15回：研究論文作成法	第30回：研究論文のプレゼンテーション

【人間行動・環境科学研究領域】

学習動機づけ論演習（1）

青柳 肇

旧来の動機づけ心理学では、学習活動に関係する要因を一つ一つ取り上げて、その操作によって動機づけの変動を見るというのが中心であった。しかし、近年では、教育の文脈を考慮した動機づけ研究の重要性が叫ばれ始めた(Wentzel, 1996)。本演習では、従来の研究法を概観したあと、学習動機づけのうち特に社会的文脈に関した国内外の文献を講読し、その内容に基づいて教員と院生がディスカッションを行う。例年、学習の変容や発達に関した外国文献の講読が中心である。

成績評価基準:発表の良否と出席状態による。

授業計画：

第1回：Motivation to Learn の文献講読（1）	第16回：Motivation to Learn の文献講読(16)
第2回：Motivation to Learn の文献講読（2）	第17回：Motivation to Learn の文献講読(17)

第3回：Motivation to Learn の文献講読(3)	第18回：Motivation to Learn の文献講読(18)
第4回：Motivation to Learn の文献講読(4)	第19回：Motivation to Learn の文献講読(19)
第5回：Motivation to Learn の文献講読(5)	第20回：Motivation to Learn の文献講読(20)
第6回：Motivation to Learn の文献講読(6)	第21回：Motivation to Learn の文献講読(21)
第7回：Motivation to Learn の文献講読(7)	第22回：Motivation to Learn の文献講読(22)
第8回：Motivation to Learn の文献講読(8)	第23回：Motivation to Learn の文献講読(23)
第9回：Motivation to Learn の文献講読(9)	第24回：Motivation to Learn の文献講読(24)
第10回：Motivation to Learn の文献講読(10)	第25回：Motivation to Learn の文献講読(25)
第11回：Motivation to Learn の文献講読(11)	第26回：Motivation to Learn の文献講読(26)
第12回：Motivation to Learn の文献講読(12)	第27回：Motivation to Learn の文献講読(27)
第13回：Motivation to Learn の文献講読(13)	第28回：Motivation to Learn の文献講読(28)
第14回：Motivation to Learn の文献講読(14)	第29回：Motivation to Learn の文献講読(29)
第15回：Motivation to Learn の文献講読(15)	第30回：Motivation to Learn の文献講読(30)

学習動機づけ論演習(2)

青柳 肇

学習動機づけ演習(1)を基礎にして、外国の学術雑誌に掲載された最新の論文を院生各人の研究と関連させて講読し発表させる。それに基づいてディスカッションを行う。

成績評価基準:発表の良否と出席状態による。

授業計画:

第1回：Motivational Interviewing の文献講読(1)	第16回：Motivational Interviewing の文献講読(16)
第2回：Motivational Interviewing の文献講読(2)	第17回：Motivational Interviewing の文献講読(17)
第3回：Motivational Interviewing の文献講読(3)	第18回：Motivational Interviewing の文献講読(18)
第4回：Motivational Interviewing の文献講読(4)	第19回：Motivational Interviewing の文献講読(19)
第5回：Motivational Interviewing の文献講読(5)	第20回：Motivational Interviewing の文献講読(20)
第6回：Motivational Interviewing の文献講読(6)	第21回：Motivational Interviewing の文献講読(21)
第7回：Motivational Interviewing の文献講読(7)	第22回：Motivational Interviewing の文献講読(22)
第8回：Motivational Interviewing の文献講読(8)	第23回：Motivational Interviewing の文献講読(23)
第9回：Motivational Interviewing の文献講読(9)	第24回：Motivational Interviewing の文献講読(24)
第10回：Motivational Interviewing の文献講読(10)	第25回：Motivational Interviewing の文献講読(25)
第11回：Motivational Interviewing の文献講読(11)	第26回：Motivational Interviewing の文献講読(26)
第12回：Motivational Interviewing の文献講読(12)	第27回：Motivational Interviewing の文献講読(27)
第13回：Motivational Interviewing の文献講読(13)	第28回：Motivational Interviewing の文献講読(28)
第14回：Motivational Interviewing の文献講読(14)	第29回：Motivational Interviewing の文献講読(29)
第15回：Motivational Interviewing の文献講読(15)	第30回：Motivational Interviewing の文献講読(30)

発達行動学演習(1)

根ヶ山 光一

行動発達に関する諸問題について、基本的文献を講読し、あわせて関連の問題を討論し、それによって人間存在への理解を深める。とくに身体と行動発達の関連性にかかわる諸問題、たとえば哺乳・離乳、身体接触、食、姿勢と位置移動、事故、モノの介在、性、排泄と世話、遊び、攻撃などについて、霊長類行動や進化などにも言及しながら議論を重ね、そのことを通じて行動発達研究の理論と方法論に関する理解を促進する。

成績評価基準:授業中の発表を中心に評価する。

授業計画:

第1回:授業の概要説明	第16回:文献講読(15)
第2回:文献講読(1)	第17回:文献講読(16)
第3回:文献講読(2)	第18回:文献講読(17)
第4回:文献講読(3)	第19回:文献講読(18)
第5回:文献講読(4)	第20回:文献講読(19)
第6回:文献講読(5)	第21回:文献講読(20)
第7回:文献講読(6)	第22回:文献講読(21)
第8回:文献講読(7)	第23回:文献講読(22)
第9回:文献講読(8)	第24回:文献講読(23)
第10回:文献講読(9)	第25回:文献講読(24)
第11回:文献講読(10)	第26回:文献講読(25)
第12回:文献講読(11)	第27回:文献講読(26)
第13回:文献講読(12)	第28回:文献講読(27)
第14回:文献講読(13)	第29回:文献講読(28)
第15回:文献講読(14)	第30回:総括

発達行動学演習(2)

【2010年度休講】

根ヶ山 光一

行動発達に関する諸問題について、各自関心のあるテーマを文献あるいはデータに基づいてまとめ、それを個人発表するとともに、その問題について全員で討論する。発表に際しては、テーマの選定、基本的文献の選択、データの分析・読み取り・考察、議論の展開の論理整合性、今後の展開、他の研究との関連性と独自性、などについてとくに考慮する。

成績評価基準:授業中の発表を中心に評価する。

授業計画:

第1回:授業の概要説明	第16回:各自の研究発表(15)
第2回:各自の研究発表(1)	第17回:各自の研究発表(16)
第3回:各自の研究発表(2)	第18回:各自の研究発表(17)
第4回:各自の研究発表(3)	第19回:各自の研究発表(18)
第5回:各自の研究発表(4)	第20回:各自の研究発表(19)
第6回:各自の研究発表(5)	第21回:各自の研究発表(20)
第7回:各自の研究発表(6)	第22回:各自の研究発表(21)
第8回:各自の研究発表(7)	第23回:各自の研究発表(22)
第9回:各自の研究発表(8)	第24回:各自の研究発表(23)
第10回:各自の研究発表(9)	第25回:各自の研究発表(24)
第11回:各自の研究発表(10)	第26回:各自の研究発表(25)
第12回:各自の研究発表(11)	第27回:各自の研究発表(26)
第13回:各自の研究発表(12)	第28回:各自の研究発表(27)
第14回:各自の研究発表(13)	第29回:各自の研究発表(28)
第15回:各自の研究発表(14)	第30回:総括

建築計画学演習（１）

佐野 友紀

建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図表的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する事が重要である。

ここでは、与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探る。

教科書：必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献：建築計画教科書、都市計画教科書、建築人間工学事典（いずれも彰国社）

成績評価基準：各課題の評価、取り組み等の、結果を総合的に評価する予定である。

備考：本授業は、建築計画学演習（２）と連携して行う。

授業計画：

第１回：ガイダンス(建築計画学演習とは?)その１(１)	第16回：質問紙調査分析 その４(１)
第２回：ガイダンス(建築計画学演習とは?)その２(１)	第17回：質問紙調査分析 その５(１)
第３回：人間工学分析 その１(１)	第18回：質問紙調査分析 その６(１)
第４回：人間工学分析 その２(１)	第19回：グループ調査分析 その１(１)
第５回：人間工学分析 その３(１)	第20回：グループ調査分析 その２(１)
第６回：人間工学分析 その４(１)	第21回：グループ調査分析 その３(１)
第７回：行動観察分析 その１(１)	第22回：グループ調査分析 その４(１)
第８回：行動観察分析 その２(１)	第23回：グループ調査分析 その５(１)
第９回：行動観察分析 その３(１)	第24回：グループ調査分析 その６(１)
第10回：行動観察分析 その４(１)	第25回：修士研究テーマに関わる調査分析 その１(１)
第11回：行動観察分析 その５(１)	第26回：修士研究テーマに関わる調査分析 その２(１)
第12回：行動観察分析 その６(１)	第27回：修士研究テーマに関わる調査分析 その３(１)
第13回：質問紙調査分析 その１(１)	第28回：修士研究テーマに関わる調査分析 その４(１)
第14回：質問紙調査分析 その２(１)	第29回：修士研究テーマに関わる調査分析 その５(１)
第15回：質問紙調査分析 その３(１)	第30回：修士研究テーマに関わる調査分析 その６(１)

建築計画学演習（２）

佐野 友紀

建築、都市の計画を主眼として、諸問題を解決するための実践的な調査、実験、分析手法を学ぶ。これらには、人間工学的分析、心理学的分析、生理学的分析などを含む。また、自分の考えを図表的表現によって、プレゼンテーションする能力の習得を目的とする。建築、都市のデザインは、単なる設計の技術にとどまらず、より良い計画を行うための調査、実験、分析が必要である。特に建築計画においては、安全性、機能性、持続性、価格妥当性、審美性など、さまざまなニーズを、あるときは複合的に、またあるときは取捨選択的に解決する事が重要である。

ここでは、与えられた建築、都市計画に関わるテーマに対して、実習的に調査分析を行う。受講者の発表、ディスカッションを通して問題解決の方法を探る。

教科書：必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献:建築計画教科書、都市計画教科書、建築人間工学事典(いずれも彰国社)

成績評価基準:各課題の評価、取り組み等の、結果を総合的に評価する予定である。

備考:本授業は、建築計画学演習(1)と連携して行う。

授業計画:

第1回: ガイダンス(建築計画学演習とは?)その1(2)	第16回: 質問紙調査分析 その4(2)
第2回: ガイダンス(建築計画学演習とは?)その2(2)	第17回: 質問紙調査分析 その5(2)
第3回: 人間工学分析 その1(2)	第18回: 質問紙調査分析 その6(2)
第4回: 人間工学分析 その2(2)	第19回: グループ調査分析 その1(2)
第5回: 人間工学分析 その3(2)	第20回: グループ調査分析 その2(2)
第6回: 人間工学分析 その4(2)	第21回: グループ調査分析 その3(2)
第7回: 行動観察分析 その1(2)	第22回: グループ調査分析 その4(2)
第8回: 行動観察分析 その2(2)	第23回: グループ調査分析 その5(2)
第9回: 行動観察分析 その3(2)	第24回: グループ調査分析 その6(2)
第10回: 行動観察分析 その4(2)	第25回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その1(2)
第11回: 行動観察分析 その5(2)	第26回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その2(2)
第12回: 行動観察分析 その6(2)	第27回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その3(2)
第13回: 質問紙調査分析 その1(2)	第28回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その4(2)
第14回: 質問紙調査分析 その2(2)	第29回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その5(2)
第15回: 質問紙調査分析 その3(2)	第30回: 修士研究テーマに関わる調査分析 その6(2)

建築環境学演習(1)

小島 隆矢

住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱うための主要な調査分析手法を習得することを目標として演習を行う。具体的には、1)感覚・知覚、2)印象・イメージ、3)着眼点と評価構造、4)満足度、5)環境に対する意識、6)価値、7)項目間の因果関係 に関する測定と分析について、講義・実習を行う。

成績評価基準:実習の結果に基づき、それぞれの手法の習得度を評価する。

授業計画:

第1回: 建築環境工学および建築環境心理学の成立	第16回: 環境に関する満足度調査の事例
第2回: 建築環境心理分野における調査分析手法概観	第17回: 環境に関する満足度調査法演習(実査)
第3回: 感覚・知覚に関する環境心理評価研究の方法	第18回: 環境に関する満足度調査法演習(分析)
第4回: 感覚・知覚に関する環境心理評価研究事例	第19回: 環境に関する意識調査の方法
第5回: 感覚・知覚に関する環境心理評価法演習(測定)	第20回: 環境に関する意識調査の事例
第6回: 感覚・知覚に関する環境心理評価法演習(分析)	第21回: 環境に関する意識調査法演習(実査)
第7回: 印象・イメージに関する環境心理評価研究の方法	第22回: 環境に関する意識調査法演習(分析)
第8回: 印象・イメージに関する環境心理評価研究事例	第23回: 環境の価値に関する環境心理評価研究の方法

第9回：印象・イメージに関する環境心理評価法 演習(測定)	第24回：環境の価値に関する環境心理評価研究 事例
第10回：印象・イメージに関する環境心理評価法 演習(分析)	第25回：環境の価値に関する環境心理評価法演 習(実査)
第11回：評価項目抽出のための定性調査の方法	第26回：環境の価値に関する環境心理評価法演 習(分析)
第12回：評価項目抽出のための定性調査の事例	第27回：環境心理評価項目間の因果関係の分析法
第13回：評価項目抽出のための定性調査法演習 (実査)	第28回：環境心理評価項目間の因果関係の分析 事例
第14回：評価項目抽出のための定性調査法演習 (結果の整理・分析)	第29回：環境心理評価項目間の因果分析法演習 (実査)
第15回：環境に関する満足度調査の方法	第30回：環境心理評価項目間の因果分析法演習 (分析)

建築環境学演習（２）

小島 隆矢

建築環境心理分野ほか、住居・建築・都市などの環境と人間の意識や行動に関する諸問題を扱う研究分野におけるこれまでの研究対象環境および研究テーマの動向について学習する。さらに今後研究すべき課題について検討することにより、各自の見識を深めるとともに、修士論文の研究につなげる。

成績評価基準：各自の取り組みを総合的に評価する。

授業計画：

第1回：建築環境心理分野における研究対象環 境・テーマ歴史	第16回：公共施設に関する研究課題検討(ディス カッション)
第2回：建築環境心理分野における昨今の研究 対象環境・テーマ	第17回：公共施設に関する研究計画立案(発表)
第3回：住居・室内に関する研究事例	第18回：公共施設に関する研究計画検討(ディス カッション)
第4回：住居・室内に関する研究課題検討(ディス カッション)	第19回：集客施設に関する研究事例
第5回：住居・室内に関する研究計画立案(発表)	第20回：集客施設に関する研究課題検討(ディス カッション)
第6回：住居・室内に関する研究計画検討(ディス カッション)	第21回：集客施設に関する研究計画立案(発表)
第7回：オフィスに関する研究事例	第22回：集客施設に関する研究計画検討(ディス カッション)
第8回：オフィスに関する研究課題検討(ディスカ ッション)	第23回：街路・公共空間に関する研究事例
第9回：オフィスに関する研究計画立案(発表)	第24回：街路・公共空間に関する研究課題検討 (ディスカッション)
第10回：オフィスに関する研究計画検討(ディスカ ッション)	第25回：街路・公共空間に関する研究計画立案 (発表)

第11回：都市・地域に関する研究事例	第26回：街路・公共空間に関する研究計画検討 (ディスカッション)
第12回：都市・地域に関する研究課題検討(ディス カッション)	第27回：医療・福祉施設に関する研究事例
第13回：都市・地域に関する研究計画立案(発表)	第28回：医療・福祉施設に関する研究課題検討 (ディスカッション)
第14回：都市・地域に関する研究計画検討(ディス カッション)	第29回：医療・福祉施設に関する研究計画立案 (発表)
第15回：公共施設に関する研究事例	第30回：医療・福祉施設に関する研究計画検討 (ディスカッション)

社会文化心理学演習（１）

山本 登志哉

共同主観的に成立する社会文化的なものとしての「心」という視点から、さまざまな心理現象を分析することに関し、関連論文の検討やディスカッションを行います。今年度は各自の研究についての発表と並行して「教科書」指定文献を読みます。

教科書：役割理論の再構築のために(廣松渉著作集 第5巻 所収)

参考文献：次の本は事前に読んでおくこと。

廣松渉 1988 哲学入門一步前 講談社現代新書916

成績評価基準：授業への参加の様子による

授業計画：

第 1 回：オリエンテーション	第16回：個人発表
第 2 回：個人発表	第17回：文献講読
第 3 回：文献講読	第18回：個人発表
第 4 回：個人発表	第19回：文献講読
第 5 回：文献講読	第20回：個人発表
第 6 回：個人発表	第21回：文献講読
第 7 回：文献講読	第22回：個人発表
第 8 回：個人発表	第23回：文献講読
第 9 回：文献講読	第24回：個人発表
第10回：個人発表	第25回：文献講読
第11回：文献講読	第26回：個人発表
第12回：個人発表	第27回：文献講読
第13回：文献講読	第28回：個人発表
第14回：個人発表	第29回：文献講読
第15回：文献講読	第30回：個人発表

社会文化心理学演習（２）

山本 登志哉

共同主観的に成立する社会文化的なものとしての「心」という視点から、さまざまな心理現象を分析することに関し、関連論文の検討やディスカッションを行います。(1)に続き、各自の研究についての発表と並行して指定文献を読みます。

教科書:役割理論の再構築のために(廣松渉著作集 第5巻 所収)

参考文献:適宜指示します

成績評価基準:授業への参加の様子による

授業計画:

第1回:オリエンテーション	第16回:個人発表
第2回:個人発表	第17回:文献講読
第3回:文献講読	第18回:個人発表
第4回:個人発表	第19回:文献講読
第5回:文献講読	第20回:個人発表
第6回:個人発表	第21回:文献講読
第7回:文献講読	第22回:個人発表
第8回:個人発表	第23回:文献講読
第9回:文献講読	第24回:個人発表
第10回:個人発表	第25回:文献講読
第11回:文献講読	第26回:個人発表
第12回:個人発表	第27回:文献講読
第13回:文献講読	第28回:個人発表
第14回:個人発表	第29回:文献講読
第15回:文献講読	第30回:個人発表

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学演習(1)

河西 宏祐

産業・職業の領域について、重要な文献を取り上げ講読するとともに、実態調査を行い、実証研究を通して社会学的分析を行う。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回:ガイダンス	第16回:研究結果発表(1)
第2回:文献講読(1)(労使関係論)	第17回:研究結果発表(2)
第3回:文献講読(2)(労使関係論)	第18回:研究結果発表(3)
第4回:文献講読(3)(労使関係論)	第19回:研究結果発表(4)
第5回:文献講読(4)(労使関係論)	第20回:研究結果発表(5)
第6回:文献講読(5)(労使関係論)	第21回:研究結果発表(6)
第7回:実態調査(1)(労使関係論)	第22回:レポート提出(1)
第8回:実態調査(1)(労使関係論)	第23回:レポート提出(2)
第9回:実態調査(2)(労使関係論)	第24回:レポート提出(3)
第10回:実態調査(3)(労使関係論)	第25回:レポート提出(4)
第11回:実態調査(4)(労使関係論)	第26回:レポート提出(5)
第12回:実態調査(5)(労使関係論)	第27回:レポート提出(6)
第13回:実態調査(6)(労使関係論)	第28回:レポート提出(7)

第14回：実態調査(7) (労使関係論)	第29回：レポート提出(8)
第15回：実態調査(8) (労使関係論)	第30回：レポートの講評

産業職業社会学演習（2）

河西 宏祐

基本的には演習(1)と同様の研究領域について、より焦点を絞って研究を深める。具体的には各自が研究課題を設定し、重要文献資料の研究を行うとともに、現状の諸問題についての実態調査を行い、収集した調査資料に基づいて社会学的な分析を加える。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：レポート返却、再提出(5)
第2回：実態調査(労使関係論)(1)	第17回：実態調査(労使関係論)(6)
第3回：研究発表・レポート提出(1)	第18回：研究発表・レポート提出(6)
第4回：レポート返却、再提出(1)	第19回：レポート返却、再提出(6)
第5回：実態調査(労使関係論)(2)	第20回：研究発表・レポート提出(7)
第6回：研究発表・レポート提出(2)	第21回：レポート返却、再提出(7)
第7回：レポート返却、再提出(2)	第22回：研究発表・レポート提出(8)
第8回：実態調査(労使関係論)(3)	第23回：レポート返却、再提出(8)
第9回：研究発表・レポート提出(3)	第24回：研究発表・レポート提出(9)
第10回：レポート返却、再提出(3)	第25回：レポート返却、再提出(9)
第11回：実態調査(労使関係論)(4)	第26回：研究発表・レポート提出(10)
第12回：研究発表・レポート提出(4)	第27回：レポート返却、再提出(10)
第13回：レポート返却、再提出(4)	第28回：研究発表・レポート提出(11)
第14回：実態調査(労使関係論)(5)	第29回：レポート返却、再提出(11)
第15回：研究発表・レポート提出(5)	第30回：年間を通しての集約・講評

文化生態学演習（1）

蔵持 不三也

今年度における本演習の目的は、受講生の研究テーマについて、その方法論や展開、問題点などを、文化人類学や歴史学、社会学、言語学、図像学など多岐にわたる角度から再検討し、学会誌や紀要などに向けて硬質な論文が作成できるよう指導するところにある。2007年に当ゼミ出身者たちを中心とする文化人類学論集『エコ・イマジネール』(言叢社、2007年)が刊行されているが、いずれも第2弾も刊行する予定なので、受講生にはぜひそのことを念頭において研鑽をつんで欲しい。

成績評価基準:研究発表やレポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：文化人類学の現在:諸理論(1)	第16回：文化人類学:文献解題(6)
第2回：文化人類学の現在:諸理論(2)	第17回：文化人類学:文献解題(7)
第3回：文化人類学の現在:諸理論(3)	第18回：文化人類学:文献解題(8)
第4回：文化人類学の現在:諸理論(4)	第19回：文化人類学:文献解題(9)
第5回：文化人類学の現在:諸理論(5)	第20回：文化人類学:文献解題(10)
第6回：文化人類学の現在:諸理論(6)	第21回：蔵持著作解題(1)
第7回：文化人類学の現在:諸理論(7)	第22回：蔵持著作解題(2)

第8回：文化人類学の現在:諸理論(8)	第23回：蔵持著作解題(3)
第9回：文化人類学の現在:諸理論(9)	第24回：蔵持著作解題(4)
第10回：文化人類学の現在:諸理論(10)	第25回：蔵持著作解題(5)
第11回：文化人類学:文献解題(1)	第26回：蔵持著作解題(6)
第12回：文化人類学:文献解題(2)	第27回：蔵持著作解題(7)
第13回：文化人類学:文献解題(3)	第28回：蔵持著作解題(8)
第14回：文化人類学:文献解題(4)	第29回：蔵持著作解題(9)
第15回：文化人類学:文献解題(5)	第30回：蔵持著作解題(10)

文化生態学演習(2)

蔵持 不三也

本演習(2)では、演習(1)でのさまざまな考察と受講生自身の調査データに基づいて、学会誌や紀要用の論文作成に向けての実践的トレーニングを行う。

成績評価基準:授業中の発表やレポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：研究発表(1)	第16回：現地調査実習(海外)
第2回：研究発表(2)	第17回：現地調査実習(海外)
第3回：研究発表(3)	第18回：現地調査実習(海外)
第4回：研究発表(4)	第19回：調査総括(1)
第5回：研究発表(5)	第20回：調査総括(2)
第6回：研究発表(6)	第21回：調査総括(3)
第7回：研究発表(7)	第22回：調査総括(4)
第8回：研究発表(8)	第23回：第1次論文構想検討会(この検討会后、受講生は速やかな論文提出を求められる)
第9回：研究発表(9)	第24回：第1次論文構想検討会(この検討会后、受講生は速やかな論文提出を求められる)
第10回：研究発表(10)	第25回：第2次論文構想検討会
第11回：研究発表(11)	第26回：第2次論文構想検討会
第12回：研究発表(12)	第27回：第3次論文構想検討会
第13回：研究発表(13)	第28回：第3次論文構想検討会
第14回：研究発表(14)	第29回：第4次論文構想検討会
第15回：現地調査実習(海外)	第30回：第4次論文構想検討会

アジア社会論演習(1)

店田 廣文

中東・北アフリカや東南アジアの発展途上国社会に関する人口、都市、文化、環境、移民、家族、地域集団などをテーマとする文献講読および検討をおこなう。その際、常に我が国の社会との比較考察を意図しながら実施する。これらの過程で、受講者個々人の研究上の論点や課題の整理をしながら、それぞれの研究テーマの絞り込みと展開をはかる。また、アンケート調査法やインタビュー調査などの現地調査の手法についても、研究補助などに参加させることで自ら調査を企画し実施する能力を修得させる。諸外国を対象とした調査研究に必要な言語修得については、受講者それぞれの責任においておこなう。また、通常の演習とは別に、アジア地域におけるフィールドワークに参加させて、現地調査を体験させるように指導する(1年生向けの演習である)。

成績評価基準:授業中の発表、レポート等により総合的に評価する。

授業計画:

第1回: アジア研究イントロダクション(1)	第16回: 中東・北アフリカ研究イントロダクション(1)
第2回: アジア研究イントロダクション(2)	第17回: 中東・北アフリカ研究イントロダクション(2)
第3回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(1)	第18回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(1)
第4回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(2)	第19回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(2)
第5回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(3)	第20回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(3)
第6回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(4)	第21回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(4)
第7回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(5)	第22回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(5)
第8回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(6)	第23回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(6)
第9回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(7)	第24回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(7)
第10回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(8)	第25回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(8)
第11回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(9)	第26回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(9)
第12回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(10)	第27回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(10)
第13回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(11)	第28回: 中東・北アフリカ関係 社会学基本文献講読・発表(11)
第14回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(12)	第29回: レポート提出と解説(1)
第15回: アジア関係 社会学基本文献講読・発表(13)	第30回: レポート提出と解説(2)

アジア社会論演習(2)

店田 廣文

演習(1)をふまえて、各自の研究課題に即した文献講読(調査関係の報告書と調査論文)と発表、討論をおこなう。受講者個々人にとっては、修士論文の作成年度にあたるため、論文作成を主たる目的において、広義の学術論文または調査報告書の作成技能も、その中で習得するように指導する。また研究発表の能力向上についても積極的に指導する(2年生向けの演習である)。

成績評価基準:授業中の発表、レポート等により総合的に評価する。

授業計画:

第1回: アジア研究・調査イントロダクション(1)	第16回: 中東・北アフリカ研究・調査イントロダクション(1)
第2回: アジア研究・調査イントロダクション(2)	第17回: 中東・北アフリカ研究・調査イントロダクション(2)

第3回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(1)	第18回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(1)
第4回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(2)	第19回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(2)
第5回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(3)	第20回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(3)
第6回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(4)	第21回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(4)
第7回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(5)	第22回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(5)
第8回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(6)	第23回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(6)
第9回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(7)	第24回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(7)
第10回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(8)	第25回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(8)
第11回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(9)	第26回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(9)
第12回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(10)	第27回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(10)
第13回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(11)	第28回：中東・北アフリカ関係 調査報告・論文講読と発表(11)
第14回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(12)	第29回：レポート提出と解説(1)
第15回：アジア関係 調査報告・論文講読と発表(13)	第30回：レポート提出と解説(2)

移住論演習(1)

森本 豊富

前期は移民研究(総論、出移民、入移民、トランスナショナル・マイグラント等)に関連する様々な文献を和文、英文で読み研究動向を探る。その上で、個別の関心に特化したテーマを選び先行研究に関するレビューを作成して発表する。また、書評(1)の執筆と修士論文計画書(1)の作成および報告を課題とする。前期の最終週に夏期休暇中のフィールドワークの計画書を提出し、そのことを実行する。後期の第1週に夏期休暇中のフィールドワークに関する報告を行い、継続的に進捗状況に関する経過を報告する。また、移民調査法の研究についても学び、書評と修士論文計画書(2)の提出も求める。

成績評価基準:出席状況、発表、提出物をもとに総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：オリエンテーション・夏期休暇中のフィールドワーク報告
第2回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第17回：移民調査法の研究(総論)
第3回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第18回：移民調査法の研究(文献調査)
第4回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第19回：移民調査法の研究(インタビュー調査)
第5回：修論計画書(1)の提出と発表	第20回：移民調査法の研究(ライフヒストリー調査)

第6回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第21回：フィールドワークの設定
第7回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第22回：フィールドワーク報告
第8回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第23回：フィールドワーク報告
第9回：書評(1)の提出と発表	第24回：フィールドワーク報告
第10回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第25回：書評(2)の提出と発表
第11回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第26回：フィールドワーク報告
第12回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第27回：フィールドワーク報告
第13回：移民関連論文(トランスナショナル・マイグラント)の輪読とディスカッション	第28回：フィールドワーク報告
第14回：移民関連論文(トランスナショナル・マイグラント)の輪読とディスカッション	第29回：フィールドワーク報告
第15回：フィールドワークの設定と夏期休暇中の計画提出と発表	第30回：修論計画書(2)の提出と発表

移住論演習(2)

森本 豊富

演習(1)と連続的に演習を行うため、内容も(1)に準ずる。

成績評価基準：出席状況、発表、提出物をもとに総合的に評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：オリエンテーション・夏期休暇中のフィールドワーク報告
第2回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第17回：移民調査法の研究(総論)
第3回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第18回：移民調査法の研究(文献調査)
第4回：移民関連論文(総論)の輪読とディスカッション	第19回：移民調査法の研究(インタビュー調査)
第5回：修論計画書(1)の提出と発表	第20回：移民調査法の研究(ライフヒストリー調査)
第6回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第21回：フィールドワークの設定
第7回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第22回：フィールドワーク報告
第8回：移民関連論文(出移民)の輪読とディスカッション	第23回：フィールドワーク報告
第9回：書評(1)の提出と発表	第24回：フィールドワーク報告
第10回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第25回：書評(2)の提出と発表

第11回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第26回：フィールドワーク報告
第12回：移民関連論文(入移民)の輪読とディスカッション	第27回：フィールドワーク報告
第13回：移民関連論文(トランスナショナル・マイグラント)の輪読とディスカッション	第28回：フィールドワーク報告
第14回：移民関連論文(トランスナショナル・マイグラント)の輪読とディスカッション	第29回：フィールドワーク報告
第15回：フィールドワークの設定と夏期休暇中の計画提出と発表	第30回：修論計画書(2)の提出と発表

家族社会学演習（１）

池岡 義孝

質的な家族研究の方法と研究成果を、主として文献講読によって検討する。文献は家族社会学のものが中心となるが、それ以外にも広く社会調査の質的研究法の文献を含むものとする。

教科書：とくに指定しない。

参考文献：必要に応じて、教場でそのつど指示する。

成績評価基準：文献講読と研究テーマの報告および学期末レポートによって評価する。

授業計画：

第１回：ガイダンス	第16回：文献2の講読(1)
第２回：家族社会学研究の研究史と現状	第17回：文献2の講読(2)
第３回：質的家族研究の歴史と現状	第18回：文献2の講読(3)
第４回：文献1の解説	第19回：文献2の講読(4)
第５回：文献1の講読(1)	第20回：文献2の講読(5)
第６回：文献1の講読(2)	第21回：文献2の講読(6)
第７回：文献1の講読(3)	第22回：文献2の講読(7)
第８回：文献1の講読(4)	第23回：文献2の講読(8)
第９回：文献1の講読(5)	第24回：文献2の講読(9)
第10回：文献1の講読(6)	第25回：文献2の総括
第11回：文献1の講読(7)	第26回：研究テーマの報告と検討(1)
第12回：文献1の講読(8)	第27回：研究テーマの報告と検討(2)
第13回：文献1の講読(9)	第28回：研究テーマの報告と検討(3)
第14回：文献1の総括	第29回：研究テーマの報告と検討(4)
第15回：文献2の解説	第30回：総括

家族社会学演習（２）

池岡 義孝

演習(1)を基礎にして、各人の研究テーマの報告とその検討を中心に進める。基本的な文献の講読は継続するが、新たに各人の研究テーマに関連した研究論文の報告と検討が加わることとなる。

教科書：とくに指定しない。

参考文献：必要に応じて、教場でそのつど指示する。

成績評価基準：文献講読・研究テーマ・関連文献の報告および学期末レポートによって評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 文献1の講読(7)
第2回: 研究テーマの報告と検討(1)	第17回: 文献1の講読(8)
第3回: 研究テーマの報告と検討(2)	第18回: 文献1の総括
第4回: 研究テーマの報告と検討(3)	第19回: 関連論文の報告と検討(5)
第5回: 関連論文の報告と検討(1)	第20回: 関連論文の報告と検討(6)
第6回: 関連論文の報告と検討(2)	第21回: 関連論文の報告と検討(7)
第7回: 関連論文の報告と検討(3)	第22回: 関連論文の報告と検討(8)
第8回: 関連論文の報告と検討(4)	第23回: 関連論文の報告と検討(9)
第9回: 文献1の解説	第24回: 関連論文の報告と検討(10)
第10回: 文献1の講読(1)	第25回: 研究テーマの報告と検討(5)
第11回: 文献1の講読(2)	第26回: 研究テーマの報告と検討(6)
第12回: 文献1の講読(3)	第27回: 研究テーマの報告と検討(7)
第13回: 文献1の講読(4)	第28回: 研究テーマの報告と検討(8)
第14回: 文献1の講読(5)	第29回: 研究テーマの報告と検討(9)
第15回: 文献1の講読(6)	第30回: 総括

都市社会学演習(1)

臼井 恒夫

現代都市の変容について理解を深めてもらうために、多様な視点から議論を進めていく。そのためのテキストとして今年度は D.Byrne, Understanding the Urban, Palgrave, 2001を使用する。受講生に毎回、本書の報告を分担してもらいながら、テキストの内容に沿って議論と考察を深めていく。したがって、受講生各自は報告と議論への積極的な参加が求められることになる。

成績の評価は出席点、授業への参加度、報告内容、レポートによって総合的に判断する。

授業計画:

第1回: 授業の概要と進め方	第16回: The suburbs
第2回: Introduction	第17回: Living, shopping and working ex-urban ; edge city
第3回: Cities as complex systems	第18回: What makes cities unequal ?
第4回: The industrial and postindustrial city	第19回: The meaning of culture
第5回: Culture in the 'post' world	第20回: The political economy of culture ; city and suburb in the urban world
第6回: The causes of deindustrialization	第21回: The cultural turn ; city as text
第7回: The built environment ; urban space as commodity	第22回: Ways of being ; the constitution and reconstruction of collective identities
第8回: Active underdevelopment in the network society	第23回: Land matters ; building in space
第9回: Community ; network and meaning in places	第24回: Shopping and trading ; the postmodern urban core
第10回: Locality ; space and structure	第25回: Edge city ; the creation of placeless place
第11回: World cities or cities in a world system ?	第26回: Necessity for the local state
第12回: World cities as unequal cities	第27回: Collective consumption

第13回：The global and the local under postindustrial capitalism	第28回：Entrepreneurial regimes
第14回：Urban ecologies ; Chicago and beyond	第29回：Civil society, social movements and urban politics
第15回：Divided cities	第30回：レポート課題と解説

都市社会学演習（２）

臼井 恒夫

今日の第三世界において、都市化とグローバリゼーションの進展は各国の都市にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本演習では、上海、ソウル、バンコク、マニラ、シンガポール、ホーチミン・シティなどのアジアの都市を事例として取り上げながら、都市化とグローバリゼーションがもたらす影響について考察していく。

受講生は、研究対象となるアジアの都市を分担しながら、各国の都市について報告を行いつつ議論を進めていく。

成績の評価は出席点、授業への参加度、報告内容、レポートによって総合的に判断する。

授業計画：

第 1 回：授業の概要と進め方	第16回：The suburbs
第 2 回：アジアにおける都市化の進展(1)	第17回：Living, shopping and working ex-urban ; edge city
第 3 回：アジアにおける都市化の進展(2)	第18回：What makes cities unequal ?
第 4 回：都市化の現状と問題(1)	第19回：The meaning of culture
第 5 回：都市化の現状と問題(2)	第20回：The political economy of culture ; city and suburb in the urban world
第 6 回：中国における都市化の現状(1)	第21回：The cultural turn ; city as text
第 7 回：中国における都市化の現状(2)	第22回：Ways of being ; the constitution and reconstruction of collective identities
第 8 回：上海の都市化とその問題点(1)	第23回：Land matters ; building in space
第 9 回：上海の都市化とその問題点(2)	第24回：Shopping and trading ; the postmodern urban core
第10回：Locality ; space and structure	第25回：Edge city ; the creation of placeless place
第11回：World cities or cities in a world system ?	第26回：Necessity for the local state
第12回：World cities as unequal cities	第27回：Collective consumption
第13回：The global and the local under postindustrial capitalism	第28回：Entrepreneurial regimes
第14回：Urban ecologies ; Chicago and beyond	第29回：Civil society, social movements and urban politics
第15回：Divided cities	第30回：レポート課題と解説

科学史科学哲学演習（１）

加藤 茂生

授業内容：近代東アジアの科学史について、一次資料と二次資料のリーディングセミナーを行なう。

授業方法：一次資料および二次資料を読解し、討論を行うという演習形式で行う。

成績評価基準：平常点と学期末レポートによって評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 第一次大戦と科学・技術 (1)
第2回: 西欧科学史の概観 古代ギリシャ～18世紀	第17回: 第一次大戦と科学・技術 (2)
第3回: 近代科学史の概観 19～20世紀	第18回: 科学・技術研究機関の高等化(1)
第4回: 中国における儒教思想の展開	第19回: 科学・技術研究機関の高等化(2)
第5回: 近代中国における儒教知識人	第20回: 植民地科学の展開(1) 台湾、朝鮮
第6回: 徳川時代の合理主義思想(1) 萩生祖来	第21回: 植民地科学の展開(2) 中国、「満州」
第7回: 徳川時代の合理主義思想(2) 伊藤仁斎	第22回: 近代中国における科学の社会史
第8回: 徳川時代における西欧近代科学の受容(1) 天文学、数学	第23回: 近代中国における科学の思想史
第9回: 徳川時代における西欧近代科学の受容(2) 博物学、医学	第24回: 第二次大戦と科学・技術
第10回: 留学生とお雇い外国人(1)	第25回: 七三一部隊と原爆開発
第11回: 留学生とお雇い外国人(2)	第26回: GHQ と科学・技術(1)
第12回: 帝国大学における科学の研究と教育	第27回: GHQ と科学・技術(2)
第13回: 帝国大学における技術の研究と教育	第28回: 高度成長と科学・技術、公害と科学・技術(1)
第14回: 伝統的産業の近代化	第29回: 高度成長と科学・技術、公害と科学・技術(2)
第15回: 西洋の近代技術・工業の導入	第30回: 総括討論

科学史科学哲学演習 (2)

加藤 茂生

授業内容: 日本の科学・技術・医学と植民地、帝国主義の関係の歴史について、一次資料と二次資料のリーディングセミナーを行なう。

授業方法: 一次資料および二次資料を読解し、討論を行うという演習形式で行う。

成績評価基準: 平常点と学期末レポートによって評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 植民地期台湾における医学・医療(1)
第2回: 科学と帝国のヒストリオグラフィー(1)	第17回: 植民地期台湾における医学・医療(2)
第3回: 科学と帝国のヒストリオグラフィー(2)	第18回: 植民地期台湾における医学・医療(3)
第4回: 日本の植民地科学の展開	第19回: 植民地期朝鮮における医学・医療(1)
第5回: 植民地期台湾における科学・技術(1)	第20回: 植民地期朝鮮における医学・医療(2)
第6回: 植民地期台湾における科学・技術(2)	第21回: 植民地期朝鮮における医学・医療(3)
第7回: 植民地期台湾における科学・技術(3)	第22回: 戦時下中国における医学・医療(1)
第8回: 植民地期台湾における科学・技術(4)	第23回: 戦時下中国における医学・医療(2)
第9回: 植民地期朝鮮における科学・技術(1)	第24回: 戦時下中国における医学・医療(3)
第10回: 植民地期朝鮮における科学・技術(2)	第25回: 国際機関と植民地科学(1)
第11回: 植民地期朝鮮における科学・技術(3)	第26回: 国際機関と植民地科学(2)
第12回: 植民地期朝鮮における科学・技術(4)	第27回: 植民地の科学・技術・医学の歴史記述の 新しい理論(1)
第13回: 戦時下中国における科学・技術(1)	第28回: 植民地の科学・技術・医学の歴史記述の 新しい理論(2)

第14回：戦時下中国における科学・技術(2)	第29回：植民地の科学・技術・医学の歴史記述の新しい理論(3)
第15回：戦時下中国における科学・技術(3)	第30回：総括討論

日本物質文化論演習（１）

谷川 章雄

日本考古学、とりわけ近世考古学および関連する領域の文献講読を行う。具体的には、①都市遺跡・村落遺跡・生産遺跡などの考古学的研究、②近世考古学に関連する歴史学・民俗学・自然科学などの諸分野の研究、③外国の近代遺跡の考古学研究に関する文献をとりあげる。近世考古学の現状と課題と研究の視点や方法を学ぶことが本演習の目的である。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方(1)	第16回：演習の概要と進め方(2)
第2回：輪読(1)(近世考古学)	第17回：輪読(14)(関連分野)
第3回：輪読(2)(近世考古学)	第18回：輪読(15)(関連分野)
第4回：輪読(3)(近世考古学)	第19回：輪読(16)(関連分野)
第5回：輪読(4)(近世考古学)	第20回：輪読(17)(関連分野)
第6回：輪読(5)(近世考古学)	第21回：輪読(18)(関連分野)
第7回：輪読(6)(近世考古学)	第22回：輪読(19)(関連分野)
第8回：輪読(7)(近世考古学)	第23回：輪読(20)(外国文献)
第9回：輪読(8)(近世考古学)	第24回：輪読(21)(外国文献)
第10回：輪読(9)(近世考古学)	第25回：輪読(22)(外国文献)
第11回：輪読(10)(近世考古学)	第26回：輪読(23)(外国文献)
第12回：輪読(11)(近世考古学)	第27回：輪読(24)(外国文献)
第13回：輪読(12)(近世考古学)	第28回：輪読(25)(外国文献)
第14回：輪読(13)(近世考古学)	第29回：輪読(26)(外国文献)
第15回：レポート課題と解説(1)	第30回：レポート課題と解説(2)

日本物質文化論演習（２）

谷川 章雄

考古学演習(1)を基礎として、受講者各自の研究テーマに関する文献講読、研究計画・成果の発表、およびディスカッションを行う。また、学術論文の作成を目標として、そのための資料の分析・解釈の方法について習得する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方(1)	第16回：演習の概要と進め方(2)
第2回：各自の研究テーマの発表(1)	第17回：各自の研究テーマの発表(7)
第3回：各自の研究テーマの発表(2)	第18回：各自の研究テーマの発表(8)
第4回：各自の研究テーマの発表(3)	第19回：各自の研究テーマの発表(9)
第5回：各自の研究テーマの発表(4)	第20回：各自の研究テーマの発表(10)
第6回：各自の研究テーマの発表(5)	第21回：各自の研究テーマの発表(11)
第7回：各自の研究テーマの発表(6)	第22回：各自の研究テーマの発表(12)

第8回：輪読(1)	第23回：輪読(8)
第9回：輪読(2)	第24回：輪読(9)
第10回：輪読(3)	第25回：輪読(10)
第11回：輪読(4)	第26回：輪読(11)
第12回：輪読(5)	第27回：輪読(12)
第13回：輪読(6)	第28回：輪読(13)
第14回：輪読(7)	第29回：輪読(14)
第15回：レポート課題と解説(1)	第30回：レポート課題と解説(2)

フランス表象文化論演習(1)

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：授業のオリエンテーション	第16回：後期授業のオリエンテーション
第2回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第17回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第3回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第18回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第4回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第19回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第5回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第20回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第6回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第21回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第7回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第22回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第8回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第23回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第9回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第24回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第25回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第26回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第27回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション

第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第28回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第29回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第15回：前期のまとめ	第30回：まとめ

フランス表象文化論演習（２）

中村 要

人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。研究対象としては、主にフランスと日本の表象文化を研究する。さらに、フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題：表象行為、表象装置、表象とメディア、表象の臨界、表象の受容、表象と共同体、ヨーロッパの現在。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第１回：授業のオリエンテーション	第16回：後期授業のオリエンテーション
第２回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第17回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第３回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第18回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第４回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第19回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第５回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第20回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第６回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第21回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第７回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第22回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第８回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第23回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第９回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第24回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第10回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第25回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第11回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第26回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第12回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第27回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第13回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第28回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション

第14回：表象文化論に関するテキスト輪読。ディスカッション	第29回：表象文化論に関する学生の発表。ディスカッション
第15回：前期のまとめ	第30回：まとめ

ドイツ政治社会文化論演習（１）

村上 公子

Peter Steinbach: Widerstand im Widerstreit 中の重要な論考を読み、場合によってはその論考を巡る議論を調べる。

様々な立場からの「抵抗」概念理解を知ること、ドイツ社会の背景を知る。

成績評価基準: 演習報告、学期末提出論考によって行う。

※テキストはコピーで用意する。

授業計画:

第 1 回：講読テキストの紹介、ガイダンス	第16回：テキスト3のテーマに関する議論
第 2 回：テキスト1輪読	第17回：テキスト4輪読
第 3 回：テキスト1輪読	第18回：テキスト4輪読
第 4 回：テキスト1輪読	第19回：テキスト4輪読
第 5 回：テキスト1輪読	第20回：テキスト4輪読
第 6 回：テキスト1のテーマに関する議論	第21回：テキスト4のテーマに関する議論
第 7 回：テキスト2輪読	第22回：テキスト5輪読
第 8 回：テキスト2輪読	第23回：テキスト5輪読
第 9 回：テキスト2輪読	第24回：テキスト5輪読
第10回：テキスト2輪読	第25回：テキスト5輪読
第11回：テキスト2のテーマに関する議論	第26回：テキスト5のテーマに関する議論
第12回：テキスト3輪読	第27回：テキスト6輪読
第13回：テキスト3輪読	第28回：テキスト6輪読
第14回：テキスト3輪読	第29回：テキスト6輪読
第15回：テキスト3輪読	第30回：テキスト6及び全体のテーマに関する議論

ドイツ政治社会文化論演習（２）

村上 公子

Peter Steinbach/Johannes Tuchel (hrsg.): Widerstand gegen die nationalsozialistische Diktatur 1933-1945 から、重要な論考を読む。それにより、ヒトラー時代に反体制運動を行った人々の事蹟を学ぶ。

様々な立場からの「抵抗」の実態を知ること、ドイツ社会の理解を深める。

成績評価基準: 演習報告、学期末提出論考によって行う。

授業計画:

第 1 回：テキスト紹介、ガイダンス	第16回：テキスト13輪読
第 2 回：テキスト 1 輪読	第17回：テキスト10～13内容概括、確認
第 3 回：テキスト 2 輪読	第18回：テキスト14輪読
第 4 回：テキスト 3 輪読	第19回：テキスト15輪読
第 5 回：テキスト 4 輪読	第20回：テキスト16輪読
第 6 回：テキスト 1 ～ 4 内容概括、確認	第21回：テキスト14～16内容概括、確認
第 7 回：テキスト 5 輪読	第22回：テキスト17輪読

第8回：テキスト6輪読	第23回：テキスト18輪読
第9回：テキスト7輪読	第24回：テキスト19輪読
第10回：テキスト8輪読	第25回：テキスト20輪読
第11回：テキスト9輪読	第26回：テキスト21輪読
第12回：テキスト5～9内容概括、確認	第27回：テキスト22輪読
第13回：テキスト10輪読	第28回：テキスト17～22内容概括、確認
第14回：テキスト11輪読	第29回：テキスト1～22の内容に関する議論
第15回：テキスト12輪読	第30回：テキスト1～22の内容に関する議論総括

技術史・技術文化論演習（1）

余語 琢磨

人間が物質的存在(道具・生産物、身体、環境資源など)に何かを働きかけるにあたって、そこに必ずある種のプラン(技術)やルール(文化)が介在し、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本演習では、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などのなかに潜在する技術と文化の問題をテーマとして、関連する文化人類学・民俗学・歴史学・考古学の著作・研究論文を精緻かつ批判的に分担講読しながら(文献は受講生の関心に合わせて柔軟に変更可)、技術／テクノロジーおよび生活文化研究の意義と方法について理解することを目的とする。

また、授業の後半では、修士論文に関するテーマ探索を進め、関連研究の批判的検討や調査方法論に関する文献講読を通じて、2年次に移行する春からのフィールドエントリーが実現するよう指導する。

成績評価基準:演習への参加度および発表内容により評価する。

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第16回：修士論文テーマ探索と関連文献批判(1)
第2回：研究領域と研究方法	第17回：修士論文テーマ探索と関連文献批判(2)
第3回：文献講読:『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』(1)	第18回：文献講読:ものづくり／わざ研究の論文を読み解く
第4回：文献講読:『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』(2)	第19回：文献講読:生業／生活文化研究の論文を読み解く
第5回：文献講読:『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』(3)	第20回：文献講読:医療人類学の論文を読み解く
第6回：文献講読:『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』(4)	第21回：修士論文計画発表(1)
第7回：文献講読:“Ethnoarchaeology in action”(1)	第22回：修士論文計画発表(2)
第8回：文献講読:“Ethnoarchaeology in action”(2)	第23回：文献講読:『フィールドワークへの挑戦』(1)
第9回：文献講読:“Ethnoarchaeology in action”(3)	第24回：文献講読:『フィールドワークへの挑戦』(2)
第10回：文献講読:“Ethnoarchaeology in action”(4)	第25回：文献講読:『フィールドワークへの挑戦』(3)
第11回：文献講読:『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』(1)	第26回：文献講読:『質的研究法入門』(1)
第12回：文献講読:『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』(2)	第27回：文献講読:『質的研究法入門』(2)
第13回：文献講読:『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』(3)	第28回：文献講読:『質的研究法入門』(3)

第14回：文献講読:『アザンデ人の世界－妖術・託宣・呪術』(4)	第29回：フィールドエントリー方法と調査項目(1)
第15回：先行研究と二次資料の検索・入手法	第30回：フィールドエントリー方法と調査項目(2)

技術史・技術文化論演習(2)

余語 琢磨

同演習(1)での理解をもとに、修士論文への実践的な研究展開を検討するので、おもに2年次での履修が望ましい。具体的には、受講生が各自の研究テーマ・対象・目的、仮説、調査方法・計画、予想される結論、および関連先行研究の学史的な整理と読み込みについて発表し、受講生による相互討議のなかで着想を鍛える。同時に、フィールドワークに関する諸問題についての理論書および調査例を批判的に輪読発表し(文献は受講生の関心に合わせて柔軟に変更可)、机上の演繹的研究とフィールドでの帰納的研究をつなぐ方法を身につけた若手研究者の育成をめざす。

成績評価基準:演習への参加度および発表内容により評価する。

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第16回：フィールド報告発表(2)
第2回：フィールド報告発表(1)	第17回：2次調査データの整理とイーミックな分析(1)
第3回：1次調査データの整理とイーミックな分析(1)	第18回：2次調査データの整理とイーミックな分析(2)
第4回：1次調査データの整理とイーミックな分析(2)	第19回：2次調査データの整理とイーミックな分析(3)
第5回：1次調査データの整理とイーミックな分析(3)	第20回：全体構成と目次の立案
第6回：フィールド関連文献の批判(1)	第21回：修士論文中間報告発表
第7回：フィールド関連文献の批判(2)	第22回：先行研究批判:一般化への探索(1)
第8回：フィールド関連文献の批判(3)	第23回：先行研究批判:一般化への探索(2)
第9回：文献講読:『創造的論文の書き方』(1)	第24回：データ分析からエティックな考察へ(1)
第10回：文献講読:『創造的論文の書き方』(2)	第25回：データ分析からエティックな考察へ(2)
第11回：文献講読:『創造的論文の書き方』(3)	第26回：データ分析からエティックな考察へ(3)
第12回：調査方法関連文献の批判(1)	第27回：論理的整合性・信憑性・説得力の検証(1)
第13回：調査方法関連文献の批判(2)	第28回：論理的整合性・信憑性・説得力の検証(2)
第14回：2次調査の目的と方法(1)	第29回：論理的整合性・信憑性・説得力の検証(3)
第15回：2次調査の目的と方法(2)	第30回：修士論文考察報告発表

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)

竹中 宏子

スペインおよびラテン・アメリカについての入門書や研究書を通して、当地域に関して大枠をつかみ／確認し、最終的に学生自身が行う研究のスペイン語圏における位置づけを考えることを目標とする。授業は基本的に輪読で進められる。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：ラテン・アメリカ地域の概略(1)－歴史と文化－
第2回：国家「スペイン」と地域主義	第17回：ラテン・アメリカ地域の概略(2)－社会と政治－
第3回：自治州国家体制の歴史	第18回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション(1) －ラテン・アメリカと新自由主義－

第4回：多言語国家としてのスペイン	第19回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション(2) —労働者の視点から—
第5回：カタルーニャの地域主義	第20回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション(3) —ラテン・アメリカの「社会自由主義」—
第6回：バスクの地域主義	第21回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション(4) —人間中心主義社会の思想—
第7回：ガリシアの地域主義	第22回：ラテン・アメリカとグローバリゼーション(5) —地域再生と共同体—
第8回：アンダルシアの地域主義	第23回：カリブ海に関する地域研究(1)—先住民・ 奴隷・農民—
第9回：『シエラの人びと』再考(1)—共同体の問題—	第24回：カリブ海に関する地域研究(2)—カリブ海 世界のゆくえ—
第10回：『シエラの人びと』再考(2)—職業と身分—	第25回：カリブ海におけるエスニシティ
第11回：『シエラの人びと』再考(3)—性について—	第26回：カリブ海における「奴隷」形成の歴史
第12回：『シエラの人びと』再考(4)—政治について—	第27回：カリブ海地域における社会制度
第13回：『シエラの人びと』再考(5)—法と道徳について—	第28回：カリブのダンスを通して見る奴隷
第14回：ピット＝リバーズとそれ以後のスペイン研究	第29回：カリブ、ラテン・アメリカに関する人類学的 研究について
第15回：前半のまとめ	第30回：後半のまとめ

スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習（2）

竹中 宏子

演習(1)でのスペインおよびラテン・アメリカに関する基礎的な知識を基に、演習(2)では主にスペインを対象に、i) スペイン文化人類学の発展とスペイン社会との関係、ii) ヨーロッパ民俗学または人類学におけるスペイン研究の位置づけ、iii) 新・旧大陸を結ぶ移民を通して見た地域主義、をテーマとして設定している。扱う文献はスペイン語または英語で書かれたものも使用し、それらを読み進めながら地域文化研究に関する理論的な枠組みについても議論する。

成績評価基準: 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：ヨーロッパにおける「復活する祭り」の現象
第2回：スペインの文化人類学—その特徴—	第17回：渓谷地域における祭りの復活
第3回：スペインの文化人類学(1) —民俗学の時代とそれ以前—	第18回：南スペインの聖人祭について
第4回：スペインの文化人類学(2) —民族誌学から民族学へ—	第19回：ロシオ巡礼の変遷
第5回：スペインの文化人類学(3) —文化人類学の導入—	第20回：フォークロリズムについて
第6回：スペインの文化人類学(4) —C. バロツハー—	第21回：口承伝承とフォークロリズム—カタルーニャの場合—
第7回：スペインの文化人類学(5) —E. ファブレガット—	第22回：フォークロリズムの使用、動機、そして意義

第8回：スペインの文化人類学史(6)―C. リン―	第23回：フォークロリズムの学術的実践と民俗的実践
第9回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(1)―導入―	第24回：地域文化の復活、または遺産化に関する議論
第10回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(2)―南部スペインの場合―	第25回：スペインとラテン・アメリカ文化(1)―南スペインとラテン・アメリカ―
第11回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(3)―中央スペインの場合―	第26回：スペインとラテン・アメリカ文化(2)―ガリシアとラテン・アメリカ―
第12回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(4)―地中海側の場合―	第27回：ガリシア主義と移民の歴史
第13回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(5)―北部スペインの場合―	第28回：カステラオとガリシア主義―キューバ、アルゼンチン―
第14回：スペイン社会の多様性と地域文化研究の多様性(6)―島嶼部の場合―	第29回：カステラオとガリシア主義― <i>Cousas da vida</i> の分析―
第15回：第2～14回のまとめ	第30回：まとめ

[健康・生命医科学研究領域]

生体発達科学演習（1）

木村 一郎

近年目覚ましく発展しつつある、生物体の構造と機能の単位である細胞に関する研究について、発生生物学、生理学、遺伝学、形態学、免疫学、進化学等々と関連づけながら参考図書（例えば、細胞の分子生物学（第4版・ニュートンプレス社）、原著論文等で広く学び、修士論文研究、さらには将来の研究活動の土台作りを図る。

成績の評価は出席、発表・質疑応答等をもとに総合的に行う。

授業計画：

原則として下記の通りであるが、修士論文研究の進捗状況等を考慮しながら内容を適宜設定・変更しながら行う。また、随時招聘外部研究者による研究紹介と質疑応答や外部研究施設の見学とセミナー等の受講を行う。状況に応じて助手および博士課程院生等も参加して行う。

第1回：ガイダンス	第16回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第2回：修士論文研究についての方針等について	第17回：参考図書等の輪読と講義
第3回：参考図書等の輪読と講義	第18回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導
第4回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第19回：参考図書等の輪読と講義
第5回：参考図書等の輪読と講義	第20回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第6回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第21回：参考図書等の輪読と講義
第7回：参考図書等の輪読と講義	第22回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導
第8回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第23回：参考図書等の輪読と講義

第9回：参考図書等の輪読と講義	第24回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第10回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導	第25回：参考図書等の輪読と講義
第11回：参考図書等の輪読と講義	第26回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導
第12回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第27回：参考図書等の輪読と講義
第13回：参考図書等の輪読と講義	第28回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第14回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導	第29回：参考図書等の輪読と講義
第15回：参考図書等の輪読と講義	第30回：修士論文研究の成果の報告・討論と指導

生体発達科学演習（2）

木村 一郎

演習(1)を踏まえた、各院生に特化したより高度のものを目指すが、内容・形式は基本的には演習(1)と同様のものとする。併せて修士論文作成の指導を行う。

成績の評価は出席、発表・質疑応答等をもとに総合的に行う。

授業計画：

第1回：修士論文研究の成果の報告・討論	第16回：修士論文研究の成果の報告・討論
第2回：修士論文研究の成果の報告・討論	第17回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第3回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第18回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第4回：修士論文研究の成果の報告・討論	第19回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第5回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第20回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第6回：修士論文研究の成果の報告・討論	第21回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第7回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第22回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第8回：修士論文研究の成果の報告・討論	第23回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答
第9回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第24回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第10回：修士論文研究の成果の報告・討論	第25回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第11回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第26回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第12回：修士論文研究の成果の報告・討論	第27回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導

第13回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第28回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第14回：修士論文研究の成果の報告・討論	第29回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導
第15回：修士論文研究に関連する原著論文等の紹介と質疑応答	第30回：修士論文研究の成果の報告・討論と修士論文作成指導

生体構造学演習（１）

小室 輝昌

生体における神経系の役割を理解するためには、その形態学的構成に関する正確な知識が必要である。神経系の解剖学的な形、細胞組織学的構築について学習し、神経系の構造の基本的な知識を修得することを目的とする。取り上げる対象としては、1)中枢および末梢神経系、2)神経系の発生、3)ニューロンとグリアの細胞生物学、4)シナプスの微細構造と機能、5)感覚受容器の微細構造と機能など。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習(1)概説	第16回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(1)
第2回：神経科学教科書論読(1)	第17回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(2)
第3回：神経科学教科書論読(2)	第18回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(3)
第4回：神経科学教科書論読(3)	第19回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(4)
第5回：神経科学教科書論読(4)	第20回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(5)
第6回：神経科学教科書論読(5)	第21回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(6)
第7回：神経科学教科書論読(6)	第22回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(7)
第8回：神経科学教科書論読(7)	第23回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(8)
第9回：神経科学教科書論読(8)	第24回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(9)
第10回：神経科学教科書論読(9)	第25回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(10)
第11回：神経科学教科書論読(10)	第26回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(11)
第12回：論文抄読、討議(1)	第27回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(12)
第13回：論文抄読、討議(2)	第28回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(13)
第14回：論文抄読、討議(3)	第29回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(14)
第15回：演習(1)前半のまとめと討論	第30回：演習(1)後半のまとめと討論

生体構造学演習（２）

小室 輝昌

新着の学術雑誌の論文から、神経系の構成要素であるニューロンおよびグリアの細胞生物学に関係ある論文を選び、輪読の形式で勉強していく。この演習の目的は神経科学の分野での今日的な問題に広く接して理解を進める事にある。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習(2)概説	第16回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(15)
第2回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(1)	第17回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(16)
第3回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(2)	第18回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(17)
第4回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(3)	第19回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(18)

第5回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(4)	第20回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(19)
第6回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(5)	第21回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(20)
第7回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(6)	第22回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(21)
第8回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(7)	第23回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(22)
第9回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(8)	第24回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(23)
第10回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(9)	第25回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(24)
第11回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(10)	第26回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(25)
第12回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(11)	第27回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(26)
第13回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(12)	第28回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(27)
第14回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(13)	第29回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(28)
第15回：研究テーマ関連論文抄読、発表、討論(14)	第30回：総括討議およびまとめ

生体機能学演習(1)

今泉 和彦

健康と生体機能との関連について総合的に理解するため、健康を支える運動、栄養および休養についてそれぞれ独立して講義すると共に、運動と栄養が健康にどのように関わっているかを述べる。併せて、このような運動と栄養が関連している諸問題を示し、これらの問題を明らかにするための方法論、必要な理論や考え方などを演習形式と実習形式で具体的に述べる。このような内容を中心にして専門分野の素養を身に付け、必要に応じて他者の見解や理論などに適切な批判を加え、柔軟に取り入れることができる能力を涵養する。

成績評価基準:出席数とレポートの内容で評価する。

授業計画:

第1回：はじめに(1)	第16回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(4)
第2回：はじめに(2)	第17回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(5)
第3回：運動による生体分子の応答のレビュー(1)	第18回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(6)
第4回：運動による生体分子の応答のレビュー(2)	第19回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(7)
第5回：運動による生体分子の応答のレビュー(3)	第20回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(8)
第6回：運動による生体分子の応答のレビュー(4)	第21回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(9)
第7回：運動による生体分子の応答のレビュー(5)	第22回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(10)
第8回：運動による生体分子の応答のレビュー(6)	第23回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(1)
第9回：運動による生体分子の応答のレビュー(7)	第24回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(2)
第10回：運動による生体分子の応答のレビュー(8)	第25回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(3)

第11回：運動による生体分子の応答のレビュー(9)	第26回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(4)
第12回：運動による生体分子の応答のレビュー(10)	第27回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(5)
第13回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(1)	第28回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(6)
第14回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(2)	第29回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(7)
第15回：栄養素摂取による生体分子の応答のレビュー(3)	第30回：ドーピング薬物摂取による生体分子の遺伝子発現応答(8)

生体機能学演習(2)

今泉 和彦

ドーピング薬物・アルコール・香辛料を摂取したときの生体応答とその機構を健康科学および生理科学的立場より理解するため、文献学的に検討すると共に、研究レベルの知識や考え方を具体的に指導・助言する。併せて、骨格筋や腱の可塑性とその機構に関する研究についても指導・助言する。また、これらの分野の方法論を駆使して研究が展開できるように、測定法や解析法などについて具体的に指導する。さらに、論文の書き方についても詳細に指導・助言する。このような研究活動を通し、当該学問分野の学際性・国際性・総合力を兼ね備えた人材の育成を目指す。

成績評価基準:出席数とレポートの内容で評価する。

授業計画:

第1回：研究課題の準備・決定(1)	第16回：研究課題の決定・発表(6)
第2回：研究課題の準備・決定(2)	第17回：研究法・実験法の習得(1)
第3回：研究課題の準備・決定(3)	第18回：研究法・実験法の習得(2)
第4回：研究課題の準備・決定(4)	第19回：研究法・実験法の習得(3)
第5回：研究課題の準備・決定(5)	第20回：研究法・実験法の習得(4)
第6回：研究課題の準備・決定(6)	第21回：研究法・実験法の習得(5)
第7回：研究課題の準備・決定(7)	第22回：研究法・実験法の習得(6)
第8回：研究課題の準備・決定(8)	第23回：研究法・実験法の習得(7)
第9回：研究課題の準備・決定(9)	第24回：研究法・実験法の習得(8)
第10回：研究課題の準備・決定(10)	第25回：研究法・実験法の習得(9)
第11回：研究課題の決定・発表(1)	第26回：研究法・実験法の習得(10)
第12回：研究課題の決定・発表(2)	第27回：研究法・実験法の習得(11)
第13回：研究課題の決定・発表(3)	第28回：研究法・実験法の習得(12)
第14回：研究課題の決定・発表(4)	第29回：研究課題の最終報告(1)
第15回：研究課題の決定・発表(5)	第30回：研究課題の最終報告(2)

神経内分泌学演習(1)

山内 兄人

最近発表された本人の研究領域の先端的な論文を紹介、輪読します。

参考書:The Rat Nervous System, edited by Paxinos, G. Elsevier, 2004

成績評価基準:平常点、レポート、出席

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 分娩論文輪読
第2回: 排卵論文輪読	第17回: 授乳論文輪読
第3回: 排卵論文輪読	第18回: 授乳論文輪読
第4回: 排卵論文輪読	第19回: 授乳論文輪読
第5回: 雌性行動論文輪読	第20回: エレクション論文輪読
第6回: 雌性行動論文輪読	第21回: エレクション論文輪読
第7回: 雌性行動論文輪読	第22回: エレクション論文輪読
第8回: 雄性行動論文輪読	第23回: セロトニン神経論文輪読
第9回: 雄性行動論文輪読	第24回: セロトニン神経論文輪読
第10回: 雄性行動論文輪読	第25回: セロトニン神経論文輪読
第11回: 妊娠論文輪読	第26回: GABA 神経論文輪読
第12回: 妊娠論文輪読	第27回: GABA 神経論文輪読
第13回: 妊娠論文輪読	第28回: GABA 神経論文輪読
第14回: 分娩論文輪読	第29回: 総合討論
第15回: 分娩論文輪読	第30回: 総合討論

神経内分泌学演習 (2)

山内 兄人

本人の研究領域の先端的な論文内容をまとめて紹介、発表し、それについて討論します。

参考書: The Physiology of Reproduction, edited by Knobil, E. and Neill, D. Raven Press, 1994

成績評価基準: 発表、討論、レポート、出席をもとに評価します。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 分娩論文発表討論
第2回: 排卵論文発表討論	第17回: 授乳論文発表討論
第3回: 排卵論文発表討論	第18回: 授乳論文発表討論
第4回: 排卵論文発表討論	第19回: 授乳論文発表討論
第5回: 雌性行動論文発表討論	第20回: エレクション論文発表討論
第6回: 雌性行動論文発表討論	第21回: エレクション論文発表討論
第7回: 雌性行動論文発表討論	第22回: エレクション論文発表討論
第8回: 雄性行動論文発表討論	第23回: セロトニン神経論文発表討論
第9回: 雄性行動論文発表討論	第24回: セロトニン神経論文発表討論
第10回: 雄性行動論文発表討論	第25回: セロトニン神経論文発表討論
第11回: 妊娠論文発表討論	第26回: GABA 神経論文発表討論
第12回: 妊娠論文発表討論	第27回: GABA 神経論文発表討論
第13回: 妊娠論文発表討論	第28回: GABA 神経論文発表討論
第14回: 分娩論文発表討論	第29回: 総合討論
第15回: 分娩論文発表討論	第30回: 総合討論

運動制御・バイオメカニクス演習 (1)

鈴木 秀次

人間の身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互

作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Nuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を精読しながら演習を進める。

教科書: Roger M. Enoka 著: Nuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

成績評価基準: 出席、発表・討論内容等に平常点を加味して総合的に評価する。

その他: 本演習の(1)と(2)は続けて(金3・4時限目)行うので、同年度に登録すること。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 5)
第2回：The Motor System (Excitable Membranes 1)	第17回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 7)
第3回：The Motor System (Excitable Membranes 3)	第18回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 1)
第4回：The Motor System (Excitable Membranes 5)	第19回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 3)
第5回：The Motor System (Excitable Membranes 7)	第20回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 5)
第6回：The Motor System (Muscle and Motor Units 1)	第21回：Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 7)
第7回：The Motor System (Muscle and Motor Units 3)	第22回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 1)
第8回：The Motor System (Muscle and Motor Units 5)	第23回：The Force-Motion Relation (Describing Motion 3)
第9回：The Motor System (Muscle and Motor Units 7)	第24回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 1)
第10回：The Motor System (Voluntary Movement 1)	第25回：The Force-Motion Relation (Movement Forces 3)
第11回：The Motor System (Voluntary Movement 3)	第26回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 1)
第12回：The Motor System (Voluntary Movement 5)	第27回：The Force-Motion Relation (Force Within the Body 3)
第13回：The Motor System (Voluntary Movement 7)	第28回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 1)
第14回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 1)	第29回：The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 3)
第15回：Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 3)	第30回：まとめ

運動制御・バイオメカニクス演習（2）

鈴木 秀次

人間の身体運動は、神経筋系の活動とそれを取り巻く外部環境との相互作用で決まる。ここでは、その相互作用に影響を与える要素に焦点を絞り考察を進め身体運動の解明を目指す。具体的には、運動制御とバイオメカニクスに関する生命系と外部環境との相互作用で起こる運動系の適応性について、Roger M. Enoka 著「Nuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008」を精読しながら演習を進める。

教科書: Roger M. Enoka 著: Nuromechanics of Human Movement (4th Ed.) Human Kinetics, 2008

成績評価基準:出席、発表・討論内容等に平常点を加味して総合的に評価する。

その他:本演習の(1)と(2)は続けて(金3・4時限目)行うので、同年度に登録すること。

授業計画:

第1回: 演習の概要と進め方	第16回: Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 6)
第2回: The Motor System (Excitable Membranes 2)	第17回: Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 8)
第3回: The Motor System (Excitable Membranes 4)	第18回: Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 2)
第4回: The Motor System (Excitable Membranes 6)	第19回: Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 4)
第5回: The Motor System (Excitable Membranes 8)	第20回: Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 6)
第6回: The Motor System (Muscle and Motor Units 2)	第21回: Adaptability of the Motor System (Chronic Adaptations 8)
第7回: The Motor System (Muscle and Motor Units 4)	第22回: The Force-Motion Relation (Describing Motion 2)
第8回: The Motor System (Muscle and Motor Units 6)	第23回: The Force-Motion Relation (Describing Motion 4)
第9回: The Motor System (Muscle and Motor Units 8)	第24回: The Force-Motion Relation (Movement Forces 2)
第10回: The Motor System (Voluntary Movement 2)	第25回: The Force-Motion Relation (Movement Forces 4)
第11回: The Motor System (Voluntary Movement 4)	第26回: The Force-Motion Relation (Force Within the Body 2)
第12回: The Motor System (Voluntary Movement 6)	第27回: The Force-Motion Relation (Force Within the Body 4)
第13回: The Motor System (Voluntary Movement 8)	第28回: The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 2)
第14回: Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 2)	第29回: The Force-Motion Relation (Running, Jumping, Throwing 4)
第15回: Adaptability of the Motor System (Acute Adjustments 4)	第30回: まとめ

統合生理学演習 (1)

永島 計

体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説し、また実験技術の理論の理解、習得を目標にする。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature、Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

成績評価基準:平常点 提出物

授業計画:

第1回: オリエンテーション	第16回: 卒業研究に関する論文検索と抄読3
第2回: オリエンテーション	第17回: 卒業研究に関する論文検索と抄読4
第3回: 卒業研究に向けた実験方法論1	第18回: 卒業研究に関する論文検索と抄読4

第4回：卒業研究に向けた実験方法論1	第19回：実験1
第5回：卒業研究に向けた実験方法論2	第20回：実験1
第6回：卒業研究に向けた実験方法論2	第21回：実験2
第7回：卒業研究に向けた実験方法論3	第22回：実験2
第8回：卒業研究に向けた実験方法論3	第23回：実験3
第9回：卒業研究に向けた実験方法論4	第24回：実験3
第10回：卒業研究に向けた実験方法論4	第25回：実験4
第11回：卒業研究に関する論文検索と抄読1	第26回：実験4
第12回：卒業研究に関する論文検索と抄読1	第27回：実験5
第13回：卒業研究に関する論文検索と抄読2	第28回：実験5
第14回：卒業研究に関する論文検索と抄読2	第29回：実験6
第15回：卒業研究に関する論文検索と抄読3	第30回：実験6

統合生理学演習（2）

永島 計

体温、体液の調節をキーワードにアップデートな研究を解説し、また実験技術の理論の理解、習得を目標にする。また教官の研究領域に収束してしまわないよう Nature、Science などの科学雑誌から生物系の話題をピックアップし、広く科学のトピックが理解でき、ひいては自分の実験、研究に導入していける能力を身につけられるようトレーニングしていく。

成績評価基準:平常点 提出物

授業計画:

第1回：実験7	第16回：実験14
第2回：実験7	第17回：実験15
第3回：実験8	第18回：実験15
第4回：実験8	第19回：卒業論文作製1
第5回：実験9	第20回：卒業論文作製1
第6回：実験9	第21回：卒業論文作製2
第7回：実験10	第22回：卒業論文作製2
第8回：実験10	第23回：卒業論文作製3
第9回：実験11	第24回：卒業論文作製3
第10回：実験11	第25回：卒業論文作製4
第11回：実験12	第26回：卒業論文作製4
第12回：実験12	第27回：研究発表準備
第13回：実験13	第28回：研究発表準備
第14回：実験13	第29回：研究発表準備
第15回：実験14	第30回：研究発表準備

健康医学演習（1）

河手 典彦

健康寿命の延長を図るためには、日常の生活における様々な対策が先ず重要と考える。そして、これらの対策を有効に実践していくためには、単に実際の方法を知るだけではなく、その根拠となる一次予防に関する幅広い知識を正しく理解することが重要であろう。しかし現実として、疾病の罹患が100%防止できない以上、そ

の二次予防、さらには三次予防についても可能な限り正しい医学知識を習得し、それらの実態を正確に知っておくことが重要な意味を持つと考える。そこで、健康医学演習(1)では、健康寿命の延長を阻害する各種の関連因子の中から「疾病」を念頭に置き、それらの予防、健診、診断、治療などについて演習を進める。演習(1)の対象は、非癌である生活習慣病を主とする。それらの中の重要疾患に関連して、それぞれの文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら、正確な臨床医学領域の知識習得に努める。参考となる書籍を紹介し、演習に使用する。

健康医学演習(2)に先行して、必ず健康医学演習(1)を履修すること。また、履修に際しては、基本的な医学知識を備えていることが望まれる。

成績評価基準:演習への参加状況(発表、質疑応答、レポート内容など)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回:健康とは	第16回:生活習慣病各論(6):糖尿病-2
第2回:健康寿命とQOL	第17回:生活習慣病各論(7):高脂血症
第3回:疾病の一次予防:食事療法、運動療法など	第18回:生活習慣病各論(8):高尿酸血症
第4回:疾病の二次予防、三次予防	第19回:生活習慣病各論(9):脳卒中-1
第5回:臨床検査(1)	第20回:生活習慣病各論(10):脳卒中-2
第6回:臨床検査(2)	第21回:生活習慣病各論(11):肝臓疾患-1
第7回:生活習慣病総論(1)	第22回:生活習慣病各論(12):肝臓疾患-2
第8回:生活習慣病総論(2)	第23回:生活習慣病各論(13):消化器疾患-1
第9回:健診・検診の意義とその実態	第24回:生活習慣病各論(14):消化器疾患-2
第10回:メタボリックシンドローム	第25回:生活習慣病各論(15):呼吸器疾患-1
第11回:生活習慣病各論(1):肥満	第26回:生活習慣病各論(16):呼吸器疾患-2
第12回:生活習慣病各論(2):高血圧症	第27回:生活習慣病各論(17):動脈硬化
第13回:生活習慣病各論(3):心臓疾患-1	第28回:生活習慣病各論(18):骨粗鬆症
第14回:生活習慣病各論(4):心臓疾患-2	第29回:生活習慣病各論(19):貧血、歯周病
第15回:生活習慣病各論(5):糖尿病-1	第30回:試験とその解説

健康医学演習(2)

河手 典彦

健康医学演習(2)は、健康医学演習(1)を修了した後に履修すること。

健康医学演習(2)の基盤も、医療の現場に主軸を置いた臨床医学である。

演習(2)では、健康寿命の延長を阻害する各種の関連因子の中から「疾病」を念頭に置き、それらの予防、健診、診断、治療などについて演習を進める。演習(2)の対象は、我が国の死亡原因の第一位を占める癌(悪性新生物)である。それらの中の主要な疾患に関して、それぞれの文献調査、講読、さらに実践例の提示などを行いながら、正確な臨床医学領域の幅広い知識習得に努めるとともに、各自の健康医学のあり方に関する考えを探究していく。健康医学に関連する実践の医療現場の状況を可能な限り正確に広く把握すること、そして健康保持に関する自主的な提言ができるようになることもこの演習の重要な学習目標である。また、医療の社会的、経済的な視点から、各種の医療制度などの現状とその問題点についても関心を持って取り組んでいく。参考となる書籍紹介し、演習に使用する。

成績評価基準:演習への参加状況(発表、質疑応答、レポート内容など)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回:癌の疫学	第16回:腫瘍学各論:胆道系
第2回:癌とは何か	第17回:腫瘍学各論:呼吸器(1):肺・気管支

第3回：癌と生活習慣	第18回：腫瘍学各論:呼吸器(2):胸膜、中皮腫
第4回：腫瘍学総論(1)	第19回：腫瘍学各論:乳腺(1)
第5回：腫瘍学総論(2)	第20回：腫瘍学各論:乳腺(2)
第6回：腫瘍学総論(3)	第21回：腫瘍学各論:甲状腺
第7回：腫瘍学各論:脳	第22回：腫瘍学各論:子宮(1)
第8回：腫瘍学各論:頭頸部	第23回：腫瘍学各論:子宮(2)
第9回：腫瘍学各論:上部消化管(1)	第24回：腫瘍学各論:卵巣
第10回：腫瘍学各論:上部消化管(2)	第25回：腫瘍学各論:前立腺
第11回：腫瘍学各論:下部消化管(1)	第26回：腫瘍学各論:その他の泌尿器系
第12回：腫瘍学各論:下部消化管(2)	第27回：腫瘍学各論:骨・軟部
第13回：腫瘍学各論:肝臓(1)	第28回：腫瘍学各論:皮膚
第14回：腫瘍学各論:肝臓(2)	第29回：腫瘍学各論:血液
第15回：腫瘍学各論:膵臓	第30回：試験と解説

応用健康科学演習（１）

竹中 晃二

健康行動に関わる行動変容・健康心理学の研究について、欧米の関連文献を数多く読み、行動医学および健康心理学研究の方法論を学び、ポピュレーションアプローチや個別アプローチを用いたプログラム開発とその評価法を習得する。

成績評価基準:授業における発表、レポートなどを総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション、論文探索指導	第16回：発表のまとめ1
第2回：欧米関連文献の発表1	第17回：発表のまとめ2
第3回：欧米関連文献の発表2	第18回：欧米研究論文の発表1
第4回：欧米関連文献の発表3	第19回：欧米研究論文の発表2
第5回：欧米関連文献の発表4	第20回：欧米研究論文の発表3
第6回：欧米関連文献の発表5	第21回：欧米研究論文の発表4
第7回：欧米関連文献の発表6	第22回：欧米研究論文の発表5
第8回：欧米関連文献の発表7	第23回：欧米研究論文の発表6
第9回：欧米関連文献の発表8	第24回：欧米研究論文の発表7
第10回：欧米関連文献の発表9	第25回：欧米研究論文の発表8
第11回：欧米関連文献の発表10	第26回：欧米研究論文の発表9
第12回：欧米関連文献の発表11	第27回：欧米研究論文の発表10
第13回：欧米関連文献の発表12	第28回：欧米研究論文の発表11
第14回：欧米関連文献の発表13	第29回：欧米研究論文の発表12
第15回：欧米関連文献の発表14	第30回：研究発表

応用健康科学演習（２）

竹中 晃二

演習(1)で学んだ方法論に関する知識を基にして、主に対象(子ども、成人、中高年者、高齢者、生活習慣病患者など)および目的(健康行動の開始、継続、逆戻り予防)を絞った研究のレビューとそれらの研究の今後の方向性について発表する。

成績評価基準:授業における発表、レポートなどを総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション、修士論文テーマ、内容の指導	第16回：発表のまとめ1
第2回：欧米論文の発表1	第17回：発表のまとめ2
第3回：欧米論文の発表2	第18回：修士論文関連の発表1
第4回：欧米論文の発表3	第19回：修士論文関連の発表2
第5回：欧米論文の発表4	第20回：修士論文関連の発表3
第6回：欧米論文の発表5	第21回：修士論文関連の発表4
第7回：欧米論文の発表6	第22回：修士論文関連の発表5
第8回：欧米論文の発表7	第23回：修士論文関連の発表6
第9回：欧米論文の発表8	第24回：修士論文関連の発表7
第10回：欧米論文の発表9	第25回：修士論文関連の発表8
第11回：欧米論文の発表10	第26回：修士論文関連の発表9
第12回：欧米論文の発表11	第27回：修士論文関連の発表10
第13回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第28回：修士論文関連の発表11
第14回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第29回：修士論文関連の発表12
第15回：欧米関連欧米論文レビューの発表	第30回：研究発表

医療人類学演習（1）

辻内 琢也

医療人類学とは、医療システムの通文化的研究を通して、健康と病気の発生に影響を与える生物生態学的; bio-ecological および社会文化的; socio-cultural 要因について、現状と人間の全歴史を比較文化的に注目しようとするものと定義される。演習(1)では、この基礎となる文化人類学・社会人類学・自然人類学の素養を身につけることを目標とする。本演習は大学院修士課程1年次に履修するものとする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：輪読とディスカッション8
第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定	第17回：DVD鑑賞とディスカッション1
第3回：文化人類学とは何か(1)	第18回：DVD鑑賞とディスカッション2
第4回：文化人類学とは何か(2)	第19回：輪読とディスカッション9
第5回：医療人類学とは何か(1)	第20回：輪読とディスカッション10
第6回：医療人類学とは何か(2)	第21回：輪読とディスカッション11
第7回：多元的医療システム(1)	第22回：輪読とディスカッション12
第8回：多元的医療システム(2)	第23回：輪読とディスカッション13
第9回：輪読とディスカッション1	第24回：輪読とディスカッション14
第10回：輪読とディスカッション2	第25回：輪読とディスカッション15
第11回：輪読とディスカッション3	第26回：輪読とディスカッション16
第12回：輪読とディスカッション4	第27回：DVD鑑賞とディスカッション3
第13回：輪読とディスカッション5	第28回：DVD鑑賞とディスカッション4

第14回：輪読とディスカッション6	第29回：レポート課題と解説(1)
第15回：輪読とディスカッション7	第30回：レポート課題と解説(2)

医療人類学演習（2）

辻内 琢也

演習(1)を基礎とし、より実践的・応用的な研究アプローチ法を用いて、現代における医学・医療の特徴・課題について考察してゆく。ここでは、医療の歴史の変遷という時間軸を縦軸、世界各地の文化に応じた様々な医療という空間軸を横軸とし、健康(health)や病い(illness)を bio-psycho-socio-ecological-spiritual なレベルで多元的・多層的に捉えることを目標とする。本演習は大学院修士課程2年次に履修するものとする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：輪読とディスカッション 8
第2回：輪読教材の選定、分担配分の決定	第17回：DVD 鑑賞とディスカッション1
第3回：心身医学研究における医療人類学の貢献(1)	第18回：DVD 鑑賞とディスカッション2
第4回：心身医学研究における医療人類学の貢献(2)	第19回：輪読とディスカッション 9
第5回：ポストモダン医療におけるモダン―補完代替医療の実践と専門職化(1)	第20回：輪読とディスカッション10
第6回：ポストモダン医療におけるモダン―補完代替医療の実践と専門職化(2)	第21回：輪読とディスカッション11
第7回：民俗セクター医療をめぐる語り―その社会・文化・歴史的構築(1)	第22回：輪読とディスカッション12
第8回：民俗セクター医療をめぐる語り―その社会・文化・歴史的構築(2)	第23回：輪読とディスカッション13
第9回：輪読とディスカッション1	第24回：輪読とディスカッション14
第10回：輪読とディスカッション2	第25回：輪読とディスカッション15
第11回：輪読とディスカッション3	第26回：輪読とディスカッション16
第12回：輪読とディスカッション4	第27回：DVD 鑑賞とディスカッション3
第13回：輪読とディスカッション5	第28回：DVD 鑑賞とディスカッション4
第14回：輪読とディスカッション6	第29回：レポート課題と解説(1)
第15回：輪読とディスカッション7	第30回：レポート課題と解説(2)

[健康福祉科学研究領域]

福祉産業学演習（1）

可部 明克

健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、事業戦略および技術戦略を調査・分析する。

その上で、新たな製品を研究開発するための「ユーザーズ調査・技術開発」を行い、基本的な要素技術をベースに基本設計・構築を進める。このプロセスを通じて、企業での研究開発に必要な基礎技術力を養成する。なお、主に修士課程1年目を対象とする。

成績評価基準:演習での発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出などにより、評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 試作品のコンセプト検討(構造)
第2回: 先行企業の調査・企業の選定	第17回: 試作品のコンセプト検討(制御)
第3回: 事業戦略の調査(企業1)	第18回: 試作品のコンセプト検討詳細(構造)
第4回: 事業戦略の分析(企業1)	第19回: 試作品のコンセプト検討詳細(制御)
第5回: 技術戦略の調査(企業1)	第20回: 試作品のコンセプトレビュー(構造)
第6回: 技術戦略の分析(企業1)	第21回: 試作品のコンセプトレビュー(制御)
第7回: 事業戦略の調査(企業2)	第22回: 試作品のコンセプトレビュー(まとめ)
第8回: 事業戦略の分析(企業2)	第23回: 基本設計(構造コア部)
第9回: 技術戦略の調査(企業2)	第24回: 基本設計(構造周辺部)
第10回: 技術戦略の分析(企業2)	第25回: 基本設計(制御部ハード)
第11回: ユーザニーズ調査(ヒアリング1)	第26回: 基本設計(制御部ソフト)
第12回: ユーザニーズ調査(ヒアリング2)	第27回: 基本設計(センサー)
第13回: ユーザニーズ調査(まとめ)	第28回: 基本設計(センサー処理部)
第14回: 要素技術の検討	第29回: ドキュメントまとめ(全体)
第15回: 要素技術の詳細	第30回: ドキュメントまとめ(詳細)

福祉産業学演習(2)

可部 明克

演習(1)をベースに、健康福祉分野で事業を行っている、又は新たにこの分野での事業展開を目指している企業を選定し、新たな事業戦略および技術戦略を立案する。

それに対応した、新たな製品の立案・試作を進め、ユーザ評価も行う。このプロセスを通じて、企業での研究開発および事業化に必要な実践的な技術センスを養成する。なお、主に修士課程2年目を対象とする。

成績評価基準:演習での発言頻度・内容、プロジェクトの実施状況、課題提出などにより、評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 実装設計(センサー処理部)
第2回: 先行企業との比較検討	第17回: テスト(基本部)
第3回: 事業戦略の比較検討	第18回: テスト(個別機能1)
第4回: 技術戦略の比較検討	第19回: テスト(個別機能2)
第5回: 試作候補の比較検討	第20回: 評価(基本部)
第6回: 試作品の実装検討(基本機能の概要)	第21回: 評価(個別機能1、2)
第7回: 試作品の実装検討(基本機能の課題)	第22回: ドキュメントまとめ(全体)
第8回: 試作品の実装検討(個別機能の概要)	第23回: ドキュメントまとめ(システム構成)
第9回: 試作品の実装検討(個別機能の課題)	第24回: ドキュメントまとめ(構造)
第10回: 実装設計(構造コア部)	第25回: ドキュメントまとめ(制御)
第11回: 実装設計(構造周辺部)	第26回: ドキュメントまとめ(ソフト)
第12回: 実装設計(制御部ハード)	第27回: ドキュメントまとめ(評価1)
第13回: 実装設計(制御ソフト、基本部)	第28回: ドキュメントまとめ(評価2)
第14回: 実装設計(制御部ソフト、個別機能部)	第29回: ドキュメントまとめ(分析)
第15回: 実装設計(センサー)	第30回: ドキュメントまとめ(レビュー)

老年社会福祉学演習（１）

加瀬 裕子

Gerontological Social Work や Social Gerontology の基本的文献を講読し、高齢者の強さに依拠したストレス・モデルによるサービスや社会制度のあり方について考察する。受講生各自が、関心のある領域での先行研究の収集を行い、研究論文の評価検討をおこなうなかで、実証研究の方法を体得することをめざす。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第１回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 １	第16回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” １
第２回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ２	第17回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” ２
第３回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ３	第18回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” ３
第４回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ４	第19回：文献講読 Nathanson & Tirrito “Gerontological Social Work” ４
第５回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ５	第20回：Strength Model Soeial Work について
第６回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ６	第21回：Strength Model の理論
第７回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ７	第22回：Strength Model の実際
第８回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ８	第23回：チームアプローチとソーシャルワーク １
第９回：文献講読 リフィア・プトウリム著「ソーシャルワークとは何か」 ９	第24回：チームアプローチとソーシャルワーク ２
第10回：ソーシャルワークの歴史について	第25回：地域福祉計画と高齢者 １
第11回：ソーシャルワークのモデルについて	第26回：地域福祉計画と高齢者 ２
第12回：高齢者福祉の実際について １ —介護とソーシャルワーカー—	第27回：高齢者のグループをいかに支援するか １
第13回：高齢者福祉の実際について ２ —地域づくりとソーシャルワーカー—	第28回：高齢者のグループをいかに支援するか ２
第14回：高齢者福祉の実際について ３ —医療モデルと生活モデル—	第29回：高齢者ケアマネジメント １
第15回：授業のまとめ	第30回：高齢者ケアマネジメント ２

老年社会福祉学演習（２）

加瀬 裕子

先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第１回：授業の進め方について	第16回：量的研究方法について ５ 各自が先行研究論文を題材にレポートする

第2回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 1	第17回：質的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第3回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 2	第18回：質的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第4回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 3	第19回：質的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第5回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 4	第20回：質的研究方法について 4 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第6回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 5	第21回：質的研究方法について 5 各自が先行研究論文を題材にレポートする
第7回：老年学における研究の動向についての討論	第22回：Evidence-based research の方法について 1
第8回：社会福祉学における研究の動向についての討論	第23回：Evidence-based research の方法について 2
第9回：論文の書き方について 1 先行研究のレビュー	第24回：各自で研究をデザインする 1 調査計画作成
第10回：論文の書き方について 2 題目と方法の選定	第25回：各自で研究をデザインする 2 調査依頼の方法・倫理
第11回：論文の書き方について 3 書式	第26回：各自で研究をデザインする 3 調査票作成
第12回：量的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第27回：各自で研究をデザインする 4 調査票作成
第13回：量的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第28回：各自で研究をデザインする 5 調査票作成
第14回：量的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第29回：各自で研究をデザインする 6 調査票作成
第15回：量的研究方法について 4 各自が先行研究論文を題材にレポートする	第30回：授業のまとめ

バイオエシックス演習（1）

土田 友章

バイオエシックスは、主題も多様であり、アプローチも多様である。ここでは、その原点を振り返りながら最新の課題とそれに関する研究を参照し、できるかぎり多くの視点主題や方法を批判的に考察するが、主として、履修者各人の研究課題について支援・指導する。

成績評価基準:クラスへの参加、積極的発言・発表などを総合して評価する。

授業計画:

第1回：文献講読	第16回：文献講読
第2回：文献講読	第17回：文献講読
第3回：文献講読	第18回：文献講読
第4回：文献講読	第19回：文献講読
第5回：文献講読	第20回：文献講読
第6回：文献講読	第21回：文献講読
第7回：文献講読	第22回：文献講読
第8回：文献講読	第23回：文献講読

第9回：文献講読	第24回：文献講読
第10回：文献講読	第25回：研究発表と批評
第11回：文献講読	第26回：研究発表と批評
第12回：文献講読	第27回：文献講読
第13回：文献講読	第28回：文献講読
第14回：文献講読	第29回：文献講読
第15回：文献講読	第30回：文献講読

バイオエシックス演習（2）

土田 友章

バイオエシックスは、主題も多様であり、アプローチも多様である。ここでは、その原点を振り返りながら最近の課題とそれに関する研究を参照し、できるかぎり多くの視点主題や方法を批判的に考察するが、主として、履修者各人の研究課題について支援・指導する。

成績評価基準:クラスへの参加、積極的発言・発表などを総合して評価する。

授業計画:

第1回：文献講読	第16回：文献講読
第2回：文献講読	第17回：文献講読
第3回：文献講読	第18回：文献講読
第4回：文献講読	第19回：文献講読
第5回：文献講読	第20回：文献講読
第6回：文献講読	第21回：文献講読
第7回：文献講読	第22回：文献講読
第8回：文献講読	第23回：研究発表と批評
第9回：文献講読	第24回：研究発表と批評
第10回：文献講読	第25回：文献講読
第11回：文献講読	第26回：文献講読
第12回：文献講読	第27回：文献講読
第13回：文献講読	第28回：文献講読
第14回：文献講読	第29回：文献講読
第15回：文献講読	第30回：文献講読

スポーツ健康マネジメント論演習（1）

吉村 正

スポーツや健康に関する組織や職場、あるいはチームやグループ等がその目的を達成するために行うべき管理や運営についての理解と実践を学習する。

特に、仕事を円滑にする、人を活かす、元気のあるチームや魅力ある職場を作り出す、組織やグループを改善する、失敗や敗戦から学ぶこと等のマネジメントを学習する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション(スポーツ健康マネジメントについて)	第16回：フィールドワーク②
第2回：スポーツに関するマネジメント①	第17回：フィールドワーク③

第3回：スポーツに関するマネジメント②	第18回：フィールドワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第4回：健康に関するマネジメント① レポート提出	第19回：グループワーク①
第5回：健康に関するマネジメント②	第20回：グループワーク②
第6回：レクリエーションに関するマネジメント① レポート提出	第21回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第7回：レクリエーションに関するマネジメント②	第22回：NPO 法人日本ティーボール協会・設立・展開・発展
第8回：リーダーシップ論 レポート提出	第23回：NPO 法人日本ティーボール今後の課題 レポート提出
第9回：リーダーとは、監督とは、その在り方について	第24回：レジュメの書き方、研究発表の仕方
第10回：ヘッドコーチとはとは、アシスタントコーチとは、その在り方について	第25回：レジュメの提出 そのQ&A①
第11回：スポーツ健康における組織論	第26回：レジュメの提出 そのQ&A②
第12回：スポーツ健康における管理運営論	第27回：研究発表①
第13回：NPO 法人、学校法人について	第28回：研究発表②
第14回：社会福祉法人、財団法人について	第29回：研究発表③
第15回：フィールドワーク① レポート提出	第30回：まとめ

スポーツ健康マネジメント論演習（2）

吉村 正

演習(1)で学習した基本的な内容を深める。

演習(2)では、より多くの関連文献を講読し、現場実習とグループワークを行い、各自が研究発表を行う。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、現場実習とグループワークの態度・姿勢、レポートや報告書等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション スポーツ健康マネジメント(2)について	第16回：現場実習(フィールドワーク)③
第2回：文献講読① 早稲田大学の健康とスポーツについて	第17回：現場実習(フィールドワーク)④
第3回：文献講読② 早稲田大学の健康とスポーツについて レポート提出	第18回：現場実習(フィールドワーク)⑤
第4回：文献講読③ 健康教育マネジメント レポート提出	第19回：現場実習(フィールドワーク)のまとめと報告書作り 報告書提出
第5回：文献講読④ 健康教育マネジメント レポート提出	第20回：グループワーク①
第6回：文献講読⑤ ベース・ボールの創造・考案・マネジメント レポート提出	第21回：グループワーク②
第7回：文献講読⑥ NPO 法人日本ティーボール協会「世界への普及戦略」 レポート提出	第22回：グループワーク③

第8回：文献講読⑦ NPO 法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」① レポート提出	第23回：グループワーク④
第9回：文献講読⑦ NPO 法人日本ティーボール協会「創造・展開・マネジメント」② レポート提出	第24回：グループワーク⑤
第10回：国民皆スポーツに向けて レポート提出	第25回：グループワークのまとめと報告書作り 報告書提出
第11回：スポーツ健康マネジメントについてのQ&A①	第26回：研究発表 Q&A
第12回：スポーツ健康マネジメントについてのQ&A②	第27回：研究発表 Q&A
第13回：スポーツ健康マネジメントについてのQ&A③	第28回：研究発表 Q&A
第14回：現場実習（フィールドワーク）①	第29回：研究発表 Q&A
第15回：現場実習（フィールドワーク）②	第30回：まとめ

社会保障政策論演習（１）

植村 尚史

社会保障政策に関する具体的テーマを選定し、研究内容の報告、質疑応答、ディスカッション等を行う。
成績評価基準：適宜課題を出し、その内容によって評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：報告とディスカッション
第2回：報告とディスカッション	第17回：報告とディスカッション
第3回：報告とディスカッション	第18回：報告とディスカッション
第4回：報告とディスカッション	第19回：報告とディスカッション
第5回：報告とディスカッション	第20回：報告とディスカッション
第6回：報告とディスカッション	第21回：報告とディスカッション
第7回：報告とディスカッション	第22回：報告とディスカッション
第8回：報告とディスカッション	第23回：報告とディスカッション
第9回：報告とディスカッション	第24回：報告とディスカッション
第10回：報告とディスカッション	第25回：報告とディスカッション
第11回：報告とディスカッション	第26回：報告とディスカッション
第12回：報告とディスカッション	第27回：報告とディスカッション
第13回：報告とディスカッション	第28回：報告とディスカッション
第14回：報告とディスカッション	第29回：報告とディスカッション
第15回：報告とディスカッション	第30回：報告とディスカッション

社会保障政策論演習（２）

植村 尚史

社会保障政策に関する具体的テーマを選定し、研究内容の報告、質疑応答、ディスカッション等を行う。
成績評価基準：適宜課題を出し、その内容によって評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：報告とディスカッション
第2回：報告とディスカッション	第17回：報告とディスカッション

第3回：報告とディスカッション	第18回：報告とディスカッション
第4回：報告とディスカッション	第19回：報告とディスカッション
第5回：報告とディスカッション	第20回：報告とディスカッション
第6回：報告とディスカッション	第21回：報告とディスカッション
第7回：報告とディスカッション	第22回：報告とディスカッション
第8回：報告とディスカッション	第23回：報告とディスカッション
第9回：報告とディスカッション	第24回：報告とディスカッション
第10回：報告とディスカッション	第25回：報告とディスカッション
第11回：報告とディスカッション	第26回：報告とディスカッション
第12回：報告とディスカッション	第27回：報告とディスカッション
第13回：報告とディスカッション	第28回：報告とディスカッション
第14回：報告とディスカッション	第29回：報告とディスカッション
第15回：報告とディスカッション	第30回：報告とディスカッション

予防医学演習（1）

町田 和彦

人間をとりまく広範囲の環境がヒトの疾病の予防と健康の維持・増進に及ぼす影響を調査・実験・データ解析等多面的視点から研究していくための基本的理解と実際的方法の修得を目的とする。そのためには病原因子および環境側因子としての環境科学、生気象学、微生物学、人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病、生体の防御機構（免疫学）、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して理解を深める。

成績評価基準：出席と研究発表および毎回のディスカッションの総合評価

授業計画：

第1回：研究室の研究の方向性について	第16回：秋学期オリエンテーション
第2回：卒論紹介1（修士1年）	第17回：抄読会1（修士1年）
第3回：修論紹介2（博士1年）	第18回：抄読会2（修士2年）
第4回：研究紹介3（修士2年）	第19回：抄読会3（博士1年）
第5回：研究紹介4（博士2年1）	第20回：抄読会4（博士2年）
第6回：研究紹介5（博士2年2）	第21回：抄読会5（博士2年）
第7回：研究紹介6（博士2年3）	第22回：抄読会6（博士2年）
第8回：研究紹介7（博士3年）	第23回：抄読会7（博士3年）
第9回：研究紹介8（博士5年）	第24回：抄読会8（博士5年）
第10回：招へい講師 講義	第25回：招へい講師 講義
第11回：日・中・韓およびヨーロッパ諸国の高齢者施設の紹介（I）	第26回：抄読会9（博士論文提出準備者）
第12回：研究紹介9（博士論文提出準備者）	第27回：修論発表予行
第13回：研究紹介10（博士論文提出準備者）	第28回：抄読会10（修士1年）
第14回：研究紹介11（博士論文提出準備者）	第29回：抄読会11（博士1年）
第15回：春学期総括	第30回：秋学期総括

予防医学演習（２）

町田 和彦

演習(1)を基礎として、病原因子および環境側因子としての人類生態学、医療・福祉問題等、又宿主側要因としてのヒトの機能と疾病、生体の防御機構(免疫学)、加齢に伴う生体の変化、健康の保持・増進、栄養学・体力医学等の各要因に対して学習していくことを目的とし、これら要因に関する研究論文の紹介とそれに対するディスカッションを中心に行なっていく。

成績評価基準:出席と研究発表および毎回のディスカッション等の総合評価

(注)修士一年生は予防医学演習(2)を選択することはできません。

授業計画:

第1回: 研究室の過去の研究の説明	第16回: 秋学期オリエンテーション
第2回: 卒論に関する論文紹介(修士1年)	第17回: 抄読会1(修士1年)
第3回: 修士論文に関する論文紹介(博士1年)	第18回: 抄読会2(修士2年)
第4回: 修士論文に関する論文紹介(修士2年)	第19回: 抄読会3(博士1年)
第5回: 博士論文に関する論文紹介(博士2年1)	第20回: 抄読会4(博士2年)
第6回: 博士論文に関する論文紹介(博士2年2)	第21回: 博士論文発表予定1(博士4年)
第7回: 博士論文に関する論文紹介(博士2年3)	第22回: 博士論文発表予定2(博士論文提出希望者1)
第8回: 博士論文に関する論文紹介(博士3年)	第23回: 博士論文発表予定3(博士論文提出希望者2)
第9回: 博士論文に関する論文紹介(博士5年)	第24回: 博士論文発表予定4(博士論文提出希望者3)
第10回: 招へい講師 講義	第25回: 招へい講師 講義
第11回: 日・中・韓およびヨーロッパ諸国の高齢者施設の比較、紹介(Ⅱ)	第26回: 抄読会5(博士2年)
第12回: 博士論文に関する論文紹介1(博士論文提出希望者1)	第27回: 抄読会6(博士2年)
第13回: 博士論文に関する論文紹介2(博士論文提出希望者2)	第28回: 抄読会7(博士3年)
第14回: 博士論文に関する論文紹介3(博士論文提出希望者3)	第29回: 抄読会8(博士5年)
第15回: 春学期総括	第30回: 秋学期総括

福祉教育論演習（１）

前橋 明

本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とする。とくに、「子どもたちの健全育成」や「生き生きとした、みんなの暮らしづくり」に主眼を置いて進めていく。具体的には、文献・資料講読、調査・実践(フィールドワークへの参加)、発表、討論などを行って、誰もがいきいきと健康的に生きていくための知見を、本講義と課題遂行を通して整理できるようになる。

成績評価基準:出席、発表やディスカッションへの参加(50%)、課題レポートの提出(50%)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回: オリエンテーション:「福祉教育・健康福祉教育とは」	第16回: 調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)⑥
第2回: 先行研究を調べてのテーマの具体化 福祉教育や健康福祉に関する文献・資料講読①(日本)	第17回: 学会論文(日本保育園保健学会研究論文)の講読と解説①

第3回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料 講読②(日本)	第18回：学会論文(日本保育園保健学会研究論文)の講読と解説②
第4回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料 講読③(日本)	第19回：学会論文(日本保育園保健学会研究論文)の講読と解説③
第5回：調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)①	第20回：OCR研修①:アンケート調査表の作成
第6回：調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)②	第21回：OCR研修②:帳票設定
第7回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料 講読①(外国)	第22回：OCR研修③:OCRを用いた調査情報の画像処理 とエクセルへの取り込み
第8回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料 講読②(外国)	第23回：OCR研修④:エクセルデータからの作図
第9回：福祉教育や健康福祉に関する文献・資料 講読③(外国)	第24回：OCR研修⑤:生活調査結果の分析と考察(討議)
第10回：調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)③	第25回：自己課題への取り組み
第11回：調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)④	第26回：自己課題の文章化
第12回：学会論文(日本子ども家庭福祉学会研究論文)の講読と解説①	第27回：自己課題の文章化 中間報告と討論①
第13回：学会論文(日本子ども家庭福祉学会研究論文)の講読と解説②	第28回：自己課題の文章化 中間報告と討論②
第14回：学会論文(日本子ども家庭福祉学会研究論文)の講読と解説③	第29回：自己課題の文章化 中間報告と討論③
第15回：調査・測定・実践(フィールドワークへの参加)⑤	第30回：課題レポートの提出と評価・解説

福祉教育論演習(2)

前橋 明

本演習では、「福祉教育」に関する研究を進めていくための知識と技能、実践力をつけることを目的とし、だれもが穏やかに、自分らしく、いきいきと生きられるための知見を、調査・測定やフィールドワークを通して見いだし、世の中に役立てていくように取り組む。調査・測定では、日常生活の身近なところで抱いた「ささやかな疑問」を大切に、その疑問を解決すべく、取り組む。そして、収集した結果(情報)をもとにして、自分の述べたいことを論理的に展開し、レポート作成ができるようになる。

成績評価基準:出席、発表やディスカッションへの参加(50%)、課題レポートの提出(50%)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習(2)の概要と進め方・課題レポートの提示	第16回：自己課題への取り組み③(文章化)
第2回：自己課題への取り組み(研究計画の発表と討論)①	第17回：自己課題の中間報告と討論①
第3回：自己課題への取り組み(研究計画の発表と討論)②	第18回：自己課題の中間報告と討論②
第4回：自己課題への取り組み(研究計画の発表と討論)③	第19回：自己課題の中間報告と討論③
第5回：自己課題への取り組み(研究計画の発表と討論)④	第20回：学術集会への参加と研修①

第6回：研究会への参加と研修①	第21回：学術集会への参加と研修②
第7回：研究会への参加と研修②	第22回：学術集会への参加と研修③
第8回：研究会への参加と研修③	第23回：学術集会への参加と研修④
第9回：研究会への参加と研修④	第24回：自己課題への取り組み④ (文章ならびに考察の再検討)
第10回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加①	第25回：自己課題への取り組み⑤ (抄録作成)
第11回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加②	第26回：自己課題への取り組み⑥ (パワーポイント作成)
第12回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加③	第27回：自己課題の学期末報告と討論①
第13回：福祉教育・健康福祉の実践の場での研修、フィールドワークへの参加④	第28回：自己課題の学期末報告と討論②
第14回：自己課題への取り組み① (収集データの作図・作表)	第29回：自己課題の学期末報告と討論③
第15回：自己課題への取り組み② (測定・調査結果をもとにした考察・討議)	第30回：課題レポートの提出と評価・解説

緩和医療学・臨床死生学演習（1）

小野 充一

個人の“死”とその過程で生ずるつらさを具体的に和らげていくための知識や技術として、疼痛緩和、身体的症状緩和、精神的苦痛への対処、社会的苦痛の緩和、家族へのケアといった領域を学習し、同時にこれらの分野における研究手法として、質的および量的研究の概要を理解することを目的とする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：グループ共同研究(1)「がんにおける関係性調整」
第2回：輪読(1)、(2)(最新緩和医療学)	第17回：グループ共同研究(2)「がんにおける関係性調整」
第3回：輪読(3)、(4)(最新緩和医療学)	第18回：グループ共同研究(3)「がんにおける関係性調整」
第4回：輪読(5)、(6)(最新緩和医療学)	第19回：グループ共同研究(4)「がんにおける関係性調整」
第5回：輪読(7)、(8)(最新緩和医療学)	第20回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」
第6回：輪読(9)、(10)(最新緩和医療学)	第21回：卒業研究テーマに関する調査(1)
第7回：緩和医療現場フィールド調査(1)	第22回：卒業研究テーマに関する調査(2)
第8回：緩和医療現場フィールド調査(2)	第23回：卒業研究テーマに関する調査(3)
第9回：グループ共同研究(1)「治療停止を巡る問題」	第24回：卒業研究テーマに関する調査(4)
第10回：グループ共同研究(2)「治療停止を巡る問題」	第25回：卒業研究テーマに関する調査結果(中間発表)
第11回：グループ共同研究(3)「治療停止を巡る問題」	第26回：卒業研究テーマに関する調査(5)
第12回：グループ共同研究(4)「治療停止を巡る問題」	第27回：卒業研究テーマに関する調査(6)

第13回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」	第28回：卒業研究テーマに関する調査結果(中間発表)
第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会	第29回：学会発表準備
第15回：前期まとめ・講評	第30回：レポート課題と解説

緩和医療学・臨床死生学演習（２）

小野 充一

演習(1)を基盤として、受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の分析などについて、関連する先行研究との比較を行いながら、討議を行う。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：グループ共同研究(1)「がんにおける関係性調整」
第2回：輪読(1)、(2)(最新緩和医療学)	第17回：グループ共同研究(2)「がんにおける関係性調整」
第3回：輪読(3)、(4)(最新緩和医療学)	第18回：グループ共同研究(3)「がんにおける関係性調整」
第4回：輪読(5)、(6)(最新緩和医療学)	第19回：グループ共同研究(4)「がんにおける関係性調整」
第5回：輪読(7)、(8)(最新緩和医療学)	第20回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」
第6回：輪読(9)、(10)(最新緩和医療学)	第21回：卒業研究テーマに関する調査(1)
第7回：緩和医療現場フィールド調査(1)	第22回：卒業研究テーマに関する調査(2)
第8回：緩和医療現場フィールド調査(2)	第23回：卒業研究テーマに関する調査(3)
第9回：グループ共同研究(1)「治療停止を巡る問題」	第24回：卒業研究テーマに関する調査(4)
第10回：グループ共同研究(2)「治療停止を巡る問題」	第25回：卒業研究テーマに関する調査結果(中間発表)
第11回：グループ共同研究(3)「治療停止を巡る問題」	第26回：卒業研究テーマに関する調査(5)
第12回：グループ共同研究(4)「治療停止を巡る問題」	第27回：卒業研究テーマに関する調査(6)
第13回：グループ共同研究発表「治療停止を巡る問題」	第28回：卒業研究テーマに関する調査結果(中間発表)
第14回：卒業研究テーマ・研究計画発表会	第29回：学会発表準備
第15回：前期まとめ・講評	第30回：レポート課題と解説

児童家庭福祉論演習（１）

川名 はつ子

当事者のニーズに沿った援助のあり方を、現場での取材にもとづき研究設問として立案できることを目標とする。そのために狭義の社会的養護の体系を学び、施設養護と家庭的養護を比較考察する。テキストを輪読し「養護」や「自立支援」に関する基礎知識と調査手法を学ぶと共に、児童福祉施設の見学を行う。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション(含:教科書選定のためのニーズ調査)	第16回：見学レポートの発表(その2)
第2回：要保護児童(その1:児童虐待、養育拒否)	第17回：中間のまとめ
第3回：要保護児童(その2:障害児)	第18回：児童自立支援施設の見学

第4回：要保護児童(その3:非行少年)	第19回：児童自立援助ホームの見学または少年院のビデオ視聴
第5回：社会的養護の現状と近未来(その1)	第20回：見学レポートの発表(その3)
第6回：社会的養護の現状と近未来(その2)	第21回：障害児早期療育教室の見学
第7回：日本の児童養護(その1)	第22回：知的障害児通所施設の見学
第8回：日本の児童養護(その2)	第23回：肢体不自由児施設の見学
第9回：これからの児童養護(その1)	第24回：重度心身障害児施設の見学
第10回：これからの児童養護(その2)	第25回：見学レポートの発表(その4)
第11回：乳児院の見学	第26回：ビデオ「赤ちゃんポスト」の視聴
第12回：児童養護施設の見学	第27回：ホームビジティングの理論と実際
第13回：見学レポートの発表(その1)	第28回：ディスカッション(1)
第14回：養育家庭の見学またはビデオ視聴	第29回：ディスカッション(2)
第15回：養子縁組家庭のビデオ視聴	第30回：まとめ

児童家庭福祉論演習（2）

川名 はつ子

狭義の社会的養護（施設養護と家庭の養護）の現状や各々のメリットとデメリットについて事例に即して考えながら、広義の社会的養護すなわち地域における包括的な子育てを構想できるようになるため、事例検討を主として、実践的な知識・援助技術を身に付けていく。一方、演習(1)を経て各自が立案した研究計画に基づき、先行研究を収集し、必要な分析法を修得する。定期的に発表会を開いてこれらの情報を全員が共有するとともに、逐次討論し、より適切な研究法について具体的に助言し合いながら論文の作成につなげていく。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考:原則として児童家庭福祉論演習(1)を履修した後に受講すること。

授業計画:

第1回：オリエンテーション(含:教科書選定のためのニーズ調査)	第16回：中間まとめ
第2回：事例検討(その1:養育家庭A)	第17回：エスノグラフィーの作成要領(その1:テキストの輪読)
第3回：事例検討(その2:養育家庭B)	第18回：エスノグラフィーの作成要領(その2:テキストの輪読)
第4回：事例検討(その3:養育家庭C)	第19回：エスノグラフィーの作成要領(その3:テキストの輪読)
第5回：事例検討(その4:養子縁組家庭D)	第20回：中間まとめ
第6回：事例検討(その5:養子縁組家庭E)	第21回：見学実習(その1:各自がフィールドで見学実習)
第7回：事例検討(その6:養子縁組家庭F)	第22回：見学実習(その2:各自がフィールドで見学実習)
第8回：中間まとめ	第23回：中間まとめ
第9回：参与観察の技法(その1:テキストの輪読)	第24回：作成したエスノグラフィーの発表(その1)
第10回：参与観察の技法(その2:テキストの輪読)	第25回：作成したエスノグラフィーの発表(その2)
第11回：参与観察の技法(その3:テキストの輪読)	第26回：作成したエスノグラフィーの発表(その3)

第12回：中間まとめ	第27回：中間まとめ
第13回：インタビューの技法(その1:テキストの輪読)	第28回：卒論の構想発表(その1)
第14回：インタビューの技法(その2:テキストの輪読)	第29回：卒論の構想発表(その2)
第15回：インタビューの技法(その3:テキストの輪読)	第30回：卒論の構想発表(その3)

精神保健福祉論演習（１）

田中 英樹

授業の到達目標及びテーマ: 1. 障害者福祉の理念と意義及びすべての障害者に共通の福祉施策の概要について理解させる。2. 国民のメンタルヘルス課題について、社会福祉の視座から理解させる。3. 精神障害者及びメンタルヘルスに関連した主要な法制度、例えば、精神保健福祉法、精神保健福祉士法、障害者基本法、障害者自立支援法、自殺対策基本法等の概要について理解させる。4. わが国及び諸外国の精神保健福祉の歴史と動向を理解させる。この講義は、精神保健福祉論演習(1)に受講した学生に開講する。まず、精神医学・精神保健福祉学・精神科リハビリテーション学の基礎知識を概説する。次に、実践上必要な技法や技術を解題する。また、各地で取り組まれている精神保健福祉援助実践を紹介する。

授業の概要: 障害者福祉とリハビリテーションの歴史と理念を解題した上で、精神障害者及び国民の精神保健上の課題を解題していく。また、わが国の精神保健福祉施策及びその今日的課題を概観し、関連法制度の理解も求めていく。

テキスト: なし

参考書・参考資料等: その都度、紹介します。

成績評価基準: 基本的には講義出席を重視する。講義出席率60%、レポート提出40%の配分で評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション;本演習の内容と進め方	第16回：韓国における精神保健福祉の歴史と動向
第2回：各自の研究関心と問題意識(口頭発表)	第17回：NZにおける精神保健福祉の歴史と動向
第3回：障害者福祉の歴史—わが国の歴史	第18回：カナダにおける精神保健福祉の歴史と動向
第4回：障害者福祉の歴史—諸外国の歴史から	第19回：イタリアにおける精神保健福祉の歴史と動向
第5回：障害者福祉の理念(1970年代を中心に)	第20回：精神障害者のわが国の現状
第6回：障害者福祉の理念(限代を中心に)精神保健福祉法の概要	第21回：精神障害者家族のわが国の現状
第7回：ICID(国際障害分類)とICF(国際生活機能分類)	第22回：精神保健福祉ボランティア活動
第8回：精神障害の特性	第23回：セルフヘルプグループ論
第9回：障害者基本法及び障害者自立支援法の概要	第24回：退院促進・地域生活移行支援
第10回：医療観察法の概要	第25回：職業支援制度
第11回：自殺対策基本法の概要と各地の取り組み	第26回：就労支援活動
第12回：精神保健福祉士法の概要	第27回：権利擁護精度
第13回：わが国における精神保健福祉の歴史	第28回：権利擁護活動
第14回：アメリカにおける精神保健福祉の歴史と動向	第29回：まとめ(1);精神保健福祉の今日的課題
第15回：イギリスにおける精神保健福祉の歴史と動向	第30回：まとめ(2);レポート解説

精神保健福祉論演習（２）

田中 英樹

授業の到達目標及びテーマ: 1. 精神医学・精神保健及び精神科リハビリテーションの基本知識について理解

させる。2. 代表的な精神障害について理解させる。3. 精神保健における個別課題について理解させる。4. 精神科リハビリテーションの技術について理解させる。5. 各地の精神保健福祉活動の実際について理解させる。

授業の概要:この講義は、精神保健福祉論演習(1)に受講した学生に開講する。まず、精神医学・精神保健福祉学・精神科リハビリテーション学の基礎知識を概説する。次に、実践上必要な技法や技術を解題する。また、各地で取り組まれている精神保健福祉援助実践を紹介する。

テキスト:なし

参考書・参考資料等:ラップ、ゴスチャ著・田中英樹監訳『ストレングスモデル』金剛出版、2008年、4,620円

成績評価基準:基本的には講義出席を重視する。満点を100として、講義出席率60%、レポート提出40%の配分で評価する。

授業計画:

第1回:オリエンテーション;本演習の進め方	第16回:精神科リハビリテーションの技術(6) 心理教育のロールプレイ演習
第2回:各自の関心事について話し合い	第17回:ストレングスモデルの考え方
第3回:代表的な精神疾患(1)統合失調症の理解	第18回:ストレングスモデルのアセスメント演習
第4回:代表的な精神疾患(2)気分障害の理解	第19回:ストレングスモデルのケアプラン
第5回:代表的な精神疾患(3)パーソナリティディス オーダーの理解	第20回:ストレングスモデルからの社会資源の活用 と開拓
第6回:精神保健の課題(1)依存症の理解と対応	第21回:障害者基本計画及び障害福祉計画の策 定方法
第7回:精神保健の課題(2)自殺の理解と対応	第22回:地域自立支援協議会の機能と役割
第8回:精神保健の課題(3)危機対応	第23回:地域自立支援協議会への参加
第9回:レポート課題の討論(1)討論を中心に	第24回:進行管理について
第10回:レポート課題の討論(2)解説を中心に	第25回:進行管理の手法
第11回:精神科リハビリテーションの技術(1) デイケアとナイトケア	第26回:レポート課題の討論
第12回:精神科リハビリテーションの技術(2) デイケアプログラムの作成のロールプレイ演習	第27回:レポート課題の解説
第13回:精神科リハビリテーションの技術(3) 認知行動療法と SST	第28回:ACT の活動
第14回:精神科リハビリテーションの技術(4) SST のロールプレイ演習	第29回:クラブハウス実践
第15回:精神科リハビリテーションの技術(5) 心理教育	第30回:まとめ(レポート解説)

健康福祉支援工学演習(1)

畠山 卓朗

障がいがある人や高齢者が安全・安心・快適に、可能な限り自立した生活を過ごすために有用な工学技術について学びます。演習(1)では研究を進めるための基礎を身につけます。前期には、興味あるテーマを複数あげ、ディスカッションを通してテーマを徐々に絞り込みます。次に先行研究の調査、研究計画の立案に取り組みます。後期には、研究計画に基づき研究を実施し、研究レポートを作成します。

「健康福祉支援工学演習(2)」との同時受講はできません。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス(前半部分)	第16回: フリーディスカッション(1)
第2回: 概念地図の描き方	第17回: ガイダンス(後半部分)
第3回: 支援工学(アシスティブ・テクノロジー)(1)	第18回: プレゼンテーション技法について
第4回: 支援工学(アシスティブ・テクノロジー)(2)	第19回: 思考のためのツール(1)
第5回: 支援機器の実際(1)	第20回: 演習(1)
第6回: 支援機器の実際(2)	第21回: 思考のためのツール(2)
第7回: 支援機器の実際(3)	第22回: 演習(2)
第8回: 支援機器の実際(4)	第23回: プレゼンテーションとディスカッション(1)
第9回: 支援機器の実際(5)	第24回: プレゼンテーションとディスカッション(2)
第10回: 支援機器の実際(6)	第25回: プレゼンテーションとディスカッション(3)
第11回: 支援機器の実際(7)	第26回: プレゼンテーションとディスカッション(4)
第12回: 支援機器の実際(8)	第27回: プレゼンテーションとディスカッション(5)
第13回: 支援機器の実際(9)	第28回: プレゼンテーションとディスカッション(6)
第14回: 支援機器の実際(10)	第29回: まとめ、レポート課題提示
第15回: 中間まとめ	第30回: フリーディスカッション(2)

健康福祉支援工学演習(2)

畠山 卓朗

「健康福祉支援工学演習(1)」に引き続き、さらに研究を深めます。そして、修士論文を書き上げます。

演習は、学生によるプレゼンテーションと教員・学生によるディスカッションを中心に行います。

「健康福祉支援工学演習(1)」の履修を条件とします。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス(前半部分)	第16回: フリーディスカッション(1)
第2回: 先行研究に関する調査法について	第17回: ガイダンス(後半部分)
第3回: 研究計画立案方法について(1)	第18回: レポートの書き方について
第4回: 研究計画立案方法について(2)	第19回: プレゼンテーションとディスカッション(11)
第5回: プレゼンテーションとディスカッション(1)	第20回: プレゼンテーションとディスカッション(12)
第6回: プレゼンテーションとディスカッション(2)	第21回: プレゼンテーションとディスカッション(13)
第7回: プレゼンテーションとディスカッション(3)	第22回: プレゼンテーションとディスカッション(14)
第8回: プレゼンテーションとディスカッション(4)	第23回: プレゼンテーションとディスカッション(15)
第9回: プレゼンテーションとディスカッション(5)	第24回: プレゼンテーションとディスカッション(16)
第10回: プレゼンテーションとディスカッション(6)	第25回: プレゼンテーションとディスカッション(17)
第11回: プレゼンテーションとディスカッション(7)	第26回: プレゼンテーションとディスカッション(18)
第12回: プレゼンテーションとディスカッション(8)	第27回: プレゼンテーションとディスカッション(19)
第13回: プレゼンテーションとディスカッション(9)	第28回: プレゼンテーションとディスカッション(20)
第14回: プレゼンテーションとディスカッション(10)	第29回: まとめ、レポート課題提示
第15回: 中間まとめ	第30回: フリーディスカッション(2)

健康福祉管理論演習（１）

扇原 淳

授業の到達目標及びテーマ:健康福祉管理分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

授業の概要:それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

テキスト:なし

参考書・参考資料等:適宜紹介する

成績評価基準:課題に対する積極的な取り組み状況 50%、発表内容・質疑応答 50%

授業計画:

第1回:授業の概要と進め方	第16回:データマイニング(1) データマイニング法の概要
第2回:データベースの種類とその利活用	第17回:データマイニング(2) データウェアハウスとOLAP
第3回:サンプリングの方法	第18回:フィールドワーク(1) 医療機関
第4回:研究デザイン(1) 生態学的研究	第19回:フィールドワーク(2) 教育機関
第5回:研究デザイン(2) コホート、ケースコントロール	第20回:フィールドワーク(3) 行政機関
第6回:研究デザイン(3) RCT	第21回:フィールドワーク(4) 福祉機関
第7回:研究デザイン(4) 質的調査	第22回:研究計画(1) アウトラインの作成
第8回:統計的推測(1) 標本抽出	第23回:研究計画(2) ディスカッション
第9回:統計的推測(2) 推定	第24回:プレスタディ(1) 調査・研究の実施
第10回:統計的推測(3) 仮説の検定	第25回:プレスタディ(2) データの回収・入力
第11回:研究デザインで生じるバイアス	第26回:プレスタディ(3) データの分析
第12回:信頼性と妥当性	第27回:プレスタディ(4) 結果の解釈、考察
第13回:相関と回帰	第28回:研究結果発表(1) プレゼンテーション技法
第14回:多変量解析(1) 重回帰	第29回:研究結果発表(2) 論文作成法
第15回:多変量解析(2) 共分散構造分析	第30回:まとめ

健康福祉管理論演習（２）

扇原 淳

授業の到達目標及びテーマ:健康福祉管理分野において、現場で実際に分析・研究能力を適用し、プロジェクトや組織運営等に携わるための実践的な問題解決能力およびリサーチャーとしての学術研究遂行能力を身につける。

授業の概要:それぞれの研究テーマに関連した分野の文献収集・研究デザインの指導、研究の進捗状況・成果に対する質疑応答及び研究論文の作成指導を行う。研究遂行のための情報・データ集を兼ねたフィールドワークも行う。

テキスト:なし

参考書・参考資料等:適宜紹介する

成績評価基準:課題に対する積極的な取り組み状況 50%、発表内容・質疑応答 50%

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：研究テーマに関する調査(7) 研究・調査の実施
第2回：データベースの種類とその利活用	第17回：研究テーマに関する調査(8) データの回収
第3回：先行研究の紹介・検討(1) Health Care Management Rev 等	第18回：研究テーマに関する調査(9) データベースの作成
第4回：先行研究の紹介・検討(2) Am J Public Health 等	第19回：研究テーマに関する調査(10) データのクリーニング
第5回：先行研究の紹介・検討(3) Am J Epidemiology 等	第20回：研究テーマに関する調査(11) 基本統計量
第6回：先行研究の紹介・検討(4) Environmental Health Perspectives 等	第21回：研究テーマに関する調査(12) 重回帰
第7回：研究計画の発表・検討(1) 研究計画の立案	第22回：研究テーマに関する調査(13) 因子分析
第8回：研究計画の発表・検討(2) 研究計画の吟味	第23回：研究テーマに関する調査(14) 主成分分析
第9回：研究テーマに関する調査(1) 研究・調査の実施	第24回：研究テーマに関する調査(15) 数量化Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類
第10回：研究テーマに関する調査(2) データの回収	第25回：研究テーマに関する調査(16) 共分散構造分析
第11回：研究テーマに関する調査(3) データの入力	第26回：研究テーマに関する調査(17) ロジスティックモデル
第12回：研究テーマに関する調査(4) データの分析	第27回：研究テーマに関する調査(18) テキストマイニング
第13回：研究テーマに関する調査(5) データの考察	第28回：研究結果発表(1) プレゼンテーション技法
第14回：研究テーマに関する調査(6) 発表資料作成	第29回：研究結果発表(2) 論文作成法
第15回：研究結果の発表	第30回：まとめ

ソーシャルワーク論演習(1)

岩崎 香

演習では、主要なソーシャルワーク理論に関する文献を講読し、ソーシャルワークの歴史的な理解を深める。また、フィールドワークを並行して実施し、ソーシャルワークの理論と日本での実践の融合に関する検討を行い、実践の質の向上に貢献する研究の視点を定める。

評価方法は、授業における発表及び学期末レポートとする。

文献はその都度、指示する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：ケースワークの日本での展開
第2回：各人のこれまでの研究経過と研究関心に関するプレゼンテーション	第17回：フィールドワーク①

第3回：ソーシャルワークの歴史に関する概説	第18回：フィールドワーク②
第4回：ソーシャルワークの胎生期	第19回：日本におけるケースワークの現状と課題
第5回：ソーシャルワークの基盤の確立期	第20回：グループワークの日本での展開
第6回：診断主義と機能主義	第21回：フィールドワーク③
第7回：ソーシャルワークの発展と統合	第22回：フィールドワーク④
第8回：ソーシャルワーク理論の多様化	第23回：日本におけるグループワークの現状と課題
第9回：ソーシャルワーク理論の現状と課題	第24回：コミュニティ・ワークの日本での展開
第10回：文献講読①	第25回：フィールドワーク⑤
第11回：文献講読②	第26回：フィールドワーク⑥
第12回：文献講読③	第27回：日本におけるコミュニティ・ワークの現状と課題
第13回：文献講読④	第28回：ソーシャルワーク理論と社会福祉実践の統合
第14回：文献講読⑤	第29回：まとめ①近年のソーシャルワークに関する動向
第15回：ソーシャルワーク理論に関するまとめ	第30回：まとめ②(レポート解説)

ソーシャルワーク論演習（２）

岩崎 香

演習では、ソーシャルワーク実践に関する過去の研究に関する検討を行う。その上で、最近の論文を講読し、その研究動向を探る。

特に自分の研究テーマに関する先行研究をレビューし、様々な研究法を検討する。

最終的に、自分の研究テーマの意義を明らかにし、目的に添った研究法を選択する力を養う。

評価方法は、授業における発表及び学期末レポートとする。

文献はその都度、指示する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：ソーシャルワーク・リサーチの現状と意義
第2回：ソーシャルワークに関する研究動向①	第17回：リサーチの目的とその効果
第3回：ソーシャルワークに関する研究動向②	第18回：「社会福祉学」に見られる理論研究
第4回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究①	第19回：「社会福祉学」に見られる量的調査①
第5回：ソーシャルワークの機能、モデルに関する研究②	第20回：「社会福祉学」に見られる量的調査②
第6回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究①	第21回：「社会福祉学」に見られる質的調査①
第7回：ソーシャルワークの価値、倫理に関する研究②	第22回：「社会福祉学」に見られる質的調査②
第8回：ソーシャルワークの評価に関する研究①	第23回：「社会福祉学」に見られる質的調査③
第9回：ソーシャルワークの評価に関する研究②	第24回：量的調査と質的調査の特徴
第10回：事例研究①	第25回：各自の研究テーマと調査法の検討①
第11回：事例研究②	第26回：各自の研究テーマと調査法の検討②
第12回：その他の研究①	第27回：各自の研究テーマと調査法の検討③
第13回：その他の研究②	第28回：研究デザインに関するプレゼンテーション
第14回：その他の研究③	第29回：研究法に関する最近の動向のまとめ
第15回：最近のソーシャルワークに関する研究に関するまとめ	第30回：まとめ(レポート解説)

[臨床心理学研究指導]

心身医学演習（１）

野村 忍

心身医学に関する最近の研究をとりあげ、ストレスと心身相関、ストレス評価、薬物療法、心理療法、疫学研究など幅広い領域について学習する。また、症例研究をとりあげ、その診断・治療法についてディスカッションする。これらを通して、心身医学的研究計画・治療法を理解することを目的とする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：抄読(14) (最新の国内研究(1))
第2回：抄読(1) (心身症の診断)	第17回：抄読(15) (最新の国内研究(2))
第3回：抄読(2) (心身症の治療)	第18回：抄読(16) (最新の国内研究(3))
第4回：抄読(3) (神経症の診断)	第19回：抄読(17) (最新の国内研究(4))
第5回：抄読(4) (神経症の治療)	第20回：抄読(18) (最新の国内研究(5))
第6回：抄読(5) (うつ病の診断)	第21回：抄読(19) (最新の海外研究(1))
第7回：抄読(6) (うつ病の治療)	第22回：抄読(20) (最新の海外研究(2))
第8回：抄読(7) (ストレスの評価)	第23回：抄読(21) (最新の海外研究(3))
第9回：抄読(8) (心身相関)	第24回：抄読(22) (最新の海外研究(4))
第10回：抄読(9) (精神生理学)	第25回：抄読(23) (最新の海外研究(5))
第11回：抄読(10) (薬物療法)	第26回：修士論文研究計画発表(1)
第12回：抄読(11) (心理療法)	第27回：修士論文研究計画発表(2)
第13回：抄読(12) (疫学研究)	第28回：修士論文研究計画発表(3)
第14回：抄読(13) (ヘルスプロモーション)	第29回：修士論文研究計画発表(4)
第15回：レポート課題と解説(1)	第30回：レポート課題と解説(2)

心身医学演習（２）

野村 忍

演習(1)を基礎にして、受講者の研究テーマを中心に、研究目的、研究計画、結果の解釈について発表し、ディスカッションする。また、関連する先行研究の文献を抄読する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第16回：統計解析実習(1)
第2回：修士論文研究計画発表(1)	第17回：統計解析実習(2)
第3回：修士論文研究計画発表(2)	第18回：統計解析実習(3)
第4回：修士論文研究計画発表(3)	第19回：統計解析実習(4)
第5回：修士論文研究計画発表(4)	第20回：修士論文中間発表(1)
第6回：調査用紙の製作実習(1)	第21回：修士論文中間発表(2)
第7回：調査用紙の製作実習(2)	第22回：修士論文中間発表(3)
第8回：調査用紙の製作実習(3)	第23回：修士論文中間発表(4)
第9回：調査用紙の製作実習(4)	第24回：最新の研究トピックスについての解説(1)
第10回：調査用紙の製作実習(5)	第25回：最新の研究トピックスについての解説(2)
第11回：研究テーマに関する調査(1)	第26回：修士論文発表(1)

第12回：研究テーマに関する調査(2)	第27回：修士論文発表(2)
第13回：研究テーマに関する調査(3)	第28回：修士論文発表(3)
第14回：研究テーマに関する調査(4)	第29回：修士論文発表(4)
第15回：レポート課題と解説(1)	第30回：レポート課題と解説(2)

認知行動カウンセリング学演習（1）

根建 金男

認知行動カウンセリング学について理解を深めるために、論理情動行動療法、認知療法、ストレス免疫訓練などの、代表的な認知行動カウンセリングのアプローチについて学ぶ。また、認知行動理論や構成主義的認知行動カウンセリングの新しい知見を学ぶ。さらに、認知行動カウンセリングの源流となった後期ストア派の哲学や一般意味論などについても学習したい。これらのねらいを実現するために、文献を講読し、議論する。なお、1年生は演習(1)のみ登録すること。演習(2)を同時に登録することは認めない。

成績評価基準:出席状況、平常点を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第16回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第3章(2)
第2回：認知行動療法(特に認知療法)の概説	第17回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第3章(3)
第3回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(1)	第18回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第3章(4)
第4回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(2)	第19回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第3章(5)
第5回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(3)	第20回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(1)
第6回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(4)	第21回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(2)
第7回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(5)	第22回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(3)
第8回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—監訳者による序、謝辞、第1章(6)	第23回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(4)
第9回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(1)	第24回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(5)
第10回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(2)	第25回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第4章(6)
第11回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(3)	第26回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第5章(1)
第12回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(4)	第27回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第5章(2)
第13回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(5)	第28回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第5章(3)

第14回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第2章(6)	第29回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第5章(4)
第15回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第3章(1)	第30回：「アーロン・T・ベッカー認知療法の成立と展開」の輪読—第5章(5)

認知行動カウンセリング学演習（２）

根建 金男

受講者が、各自の研究テーマについての研究計画・進捗状況、関連の研究動向などを発表し、教員を含めて全員で議論する。なお、この講義の登録が認められるのは2年生のみである。

成績評価基準:出席状況、平常点を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第16回：各自の研究テーマに関する発表と討論(13)
第2回：各自の研究の進捗状況の確認	第17回：各自の研究テーマに関する発表と討論(14)
第3回：各自の研究テーマに関する発表と討論(1)	第18回：各自の研究テーマに関する発表と討論(15)
第4回：各自の研究テーマに関する発表と討論(2)	第19回：各自の研究テーマに関する発表と討論(16)
第5回：各自の研究テーマに関する発表と討論(3)	第20回：各自の研究テーマに関する発表と討論(17)
第6回：各自の研究テーマに関する発表と討論(4)	第21回：各自の研究テーマに関する発表と討論(18)
第7回：各自の研究テーマに関する発表と討論(5)	第22回：各自の研究テーマに関する発表と討論(19)
第8回：各自の研究テーマに関する発表と討論(6)	第23回：各自の研究テーマに関する発表と討論(20)
第9回：各自の研究テーマに関する発表と討論(7)	第24回：各自の研究テーマに関する発表と討論(21)
第10回：各自の研究テーマに関する発表と討論(8)	第25回：各自の研究テーマに関する発表と討論(22)
第11回：各自の研究テーマに関する発表と討論(9)	第26回：各自の研究テーマに関する発表と討論(23)
第12回：各自の研究テーマに関する発表と討論(10)	第27回：各自の研究テーマに関する発表と討論(24)
第13回：各自の研究テーマに関する発表と討論(11)	第28回：各自の研究テーマに関する発表と討論(25)
第14回：各自の研究テーマに関する発表と討論(12)	第29回：各自の研究テーマに関する発表と討論(26)
第15回：前期のまとめ	第30回：後期のまとめ

学校カウンセリング学演習（１）

菅野 純

学校期(幼児期—青年期)の子どもたちが抱える教育心理臨床的諸テーマ(例えば、不登校、家庭内暴力など)を対象に、実践的研究の方法を模索しながら、各自のテーマを研究することを目的とする。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、発表および討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：学校カウンセリング学序論(1)	第16回：個人研究テーマ発表(8)
第2回：学校カウンセリング学序論(2)	第17回：個人研究テーマ発表(9)
第3回：学校カウンセリング学文献講読(1)	第18回：個人研究テーマ発表(10)
第4回：学校カウンセリング学文献講読(2)	第19回：個人研究テーマ発表(11)
第5回：学校カウンセリング学文献講読(3)	第20回：個人研究テーマ発表(12)
第6回：学校カウンセリング学文献講読(4)	第21回：学校カウンセリング学文献輪読(1)
第7回：学校カウンセリング学文献講読(5)	第22回：学校カウンセリング学文献輪読(2)
第8回：学校カウンセリング学文献講読(6)	第23回：学校カウンセリング学文献輪読(3)
第9回：個人研究テーマ発表(1)	第24回：学校カウンセリング学文献輪読(4)

第10回：個人研究テーマ発表(2)	第25回：修士論文計画発表(1)
第11回：個人研究テーマ発表(3)	第26回：修士論文計画発表(2)
第12回：個人研究テーマ発表(4)	第27回：修士論文計画発表(3)
第13回：個人研究テーマ発表(5)	第28回：修士論文計画発表(4)
第14回：個人研究テーマ発表(6)	第29回：修士論文計画発表(5)
第15回：個人研究テーマ発表(7)	第30回：修士論文計画発表(6)

学校カウンセリング学演習（2）

菅野 純

演習(1)で取り上げたテーマを更に深めるとともに、学校期の諸テーマのみではなく、社会文化的背景、発達との関連、家族問題、諸外国との比較など、幅広く研究することを目的とする。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、発表および討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：学校カウンセリング学研究概論(1)	第16回：修士論文経過報告(8)
第2回：学校カウンセリング学研究概論(2)	第17回：修士論文経過報告(9)
第3回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(1)	第18回：修士論文経過報告(10)
第4回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(2)	第19回：修士論文経過報告(11)
第5回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(3)	第20回：修士論文経過報告(12)
第6回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(4)	第21回：修士論文経過報告(13)
第7回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(5)	第22回：修士論文経過報告(14)
第8回：学校カウンセリング学研究文献の報告と討議(6)	第23回：修士論文経過報告(15)
第9回：修士論文経過報告(1)	第24回：修士論文経過報告(16)
第10回：修士論文経過報告(2)	第25回：修士論文経過報告(17)
第11回：修士論文経過報告(3)	第26回：修士論文経過報告(18)
第12回：修士論文経過報告(4)	第27回：学校カウンセリング学私論(1)
第13回：修士論文経過報告(5)	第28回：学校カウンセリング学私論(2)
第14回：修士論文経過報告(6)	第29回：学校カウンセリング学私論(3)
第15回：修士論文経過報告(7)	第30回：学校カウンセリング学私論(4)

行動臨床心理学演習（1）

嶋田 洋徳

行動療法、認知行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的発展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との整合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、講義中の発表、および、討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(4)
第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(1)	第17回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(5)
第3回：症例研究と実践報告検討(1)	第18回：症例研究と実践報告検討(5)
第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(1)	第19回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(5)
第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(2)	第20回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(6)
第6回：症例研究と実践報告検討(2)	第21回：症例研究と実践報告検討(6)
第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(2)	第22回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(6)
第8回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(3)	第23回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(3)
第9回：症例研究と実践報告検討(3)	第24回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(4)
第10回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(3)	第25回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(5)
第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(1)	第26回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(7)
第12回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(2)	第27回：症例研究と実践報告検討(7)
第13回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(4)	第28回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(7)
第14回：症例研究と実践報告検討(4)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

行動臨床心理学演習（2）

嶋田 洋徳

演習(1)を基礎として、そのエビデンスを重視しながら、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。主な研究課題は、さまざまな不適応行動や症状の改善、適応行動や健康行動の形成に関する行動療法、認知行動療法などに代表される認知行動的アプローチである。また、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、講義中の発表、および、討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(7)
第2回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(1)	第17回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(8)

第3回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(1)	第18回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(9)
第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(2)	第19回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(10)
第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(2)	第20回：症例研究と実践報告検討(2)
第6回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(3)	第21回：症例研究と実践報告検討(3)
第7回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(3)	第22回：症例研究と実践報告検討(4)
第8回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(4)	第23回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(3)
第9回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討(4)	第24回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(4)
第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(1)	第25回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(5)
第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ(2)	第26回：研究テーマに関するまとめ(1)
第12回：症例研究と実践報告検討(1)	第27回：研究テーマに関するまとめ(2)
第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(5)	第28回：研究テーマに関するまとめ(3)
第14回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討(6)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

産業カウンセリング学演習（1）

鈴木 伸一

うつ病、不安障害をはじめとするさまざまなストレス関連疾患への臨床心理学的研究に関する最新の文献を展望するとともに、地域・職場・医療機関等で行われる予防的支援および治療的支援をねらいとした認知行動療法の実践について学ぶ。また、国際学会や国内学会にて行われるワークショップへの参加を通して、臨床ストレス科学、認知行動療法、および行動医学等の最新の知見や臨床テクニックの習得を目指す。

成績評価基準：授業中の発表・発言、レポート等を総合して評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第16回：文献講読と議論(15)
第2回：文献講読と議論(1)	第17回：文献講読と議論(16)
第3回：文献講読と議論(2)	第18回：文献講読と議論(17)
第4回：文献講読と議論(3)	第19回：文献講読と議論(18)
第5回：文献講読と議論(4)	第20回：文献講読と議論(19)
第6回：文献講読と議論(5)	第21回：文献講読と議論(20)
第7回：文献講読と議論(6)	第22回：文献講読と議論(21)
第8回：文献講読と議論(7)	第23回：文献講読と議論(22)

第9回：文献講読と議論(8)	第24回：文献講読と議論(23)
第10回：文献講読と議論(9)	第25回：文献講読と議論(24)
第11回：文献講読と議論(10)	第26回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(1)
第12回：文献講読と議論(11)	第27回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(2)
第13回：文献講読と議論(12)	第28回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(3)
第14回：文献講読と議論(13)	第29回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(4)
第15回：文献講読と議論(14)	第30回：まとめ

産業カウンセリング学演習(2)

鈴木 伸一

ストレス関連疾患の発症・維持・増悪のメカニズムの解明に向けた臨床ストレス科学研究の課題や、ストレス関連疾患への認知行動療法の実践について展望した演習(1)を基礎として、各参加者の研究テーマにそくした理論的、方法的問題点を議論するとともに、各研究の臨床的意義や実践応用可能性を探る。

成績評価基準:授業中の発表・発言、レポート等を総合して評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：研究構想発表と議論(15)
第2回：研究構想発表と議論(1)	第17回：研究構想発表と議論(16)
第3回：研究構想発表と議論(2)	第18回：研究構想発表と議論(17)
第4回：研究構想発表と議論(3)	第19回：研究構想発表と議論(18)
第5回：研究構想発表と議論(4)	第20回：研究構想発表と議論(19)
第6回：研究構想発表と議論(5)	第21回：研究構想発表と議論(20)
第7回：研究構想発表と議論(6)	第22回：研究構想発表と議論(21)
第8回：研究構想発表と議論(7)	第23回：研究構想発表と議論(22)
第9回：研究構想発表と議論(8)	第24回：研究構想発表と議論(23)
第10回：研究構想発表と議論(9)	第25回：研究構想発表と議論(24)
第11回：研究構想発表と議論(10)	第26回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(1)
第12回：研究構想発表と議論(11)	第27回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(2)
第13回：研究構想発表と議論(12)	第28回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(3)
第14回：研究構想発表と議論(13)	第29回：最新の臨床理論・技術の習得と国内外研究者との交流(4)
第15回：研究構想発表と議論(14)	第30回：まとめ

臨床心理アセスメント学演習(1)

熊野 宏昭

人間はどうして変わることができるのか、その過程をどうすれば測定できるか、「治療の科学科」はいかにして

実現できるか、に焦点を当てて行く。具体的には、臨床行動分析(アクセプタンス&コミットメント・セラピー：ACT)やマインドフルネスに関わる基礎研究及び介入研究、注意訓練やマインドフルネスが前頭葉機能と心理行動的な介入効果に及ぼす影響の研究、そして「治療・援助プロセスの科学化」を目指す臨床心理アセスメントに関わる研究などの文献講読と議論を行う。また、症例研究を題材にして、機能的なケースフォーミュレーションとそれに基づく介入の進め方の習得を目指す。さらに、国内外で実施されるワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の理解を深める。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：文献講読と議論(15)
第2回：文献講読と議論(1)	第17回：文献講読と議論(16)
第3回：文献講読と議論(2)	第18回：文献講読と議論(17)
第4回：文献講読と議論(3)	第19回：文献講読と議論(18)
第5回：文献講読と議論(4)	第20回：文献講読と議論(19)
第6回：文献講読と議論(5)	第21回：学会・研修会への参加とレポート(1)
第7回：文献講読と議論(6)	第22回：学会・研修会への参加とレポート(2)
第8回：文献講読と議論(7)	第23回：学会・研修会への参加とレポート(3)
第9回：文献講読と議論(8)	第24回：学会・研修会への参加とレポート(4)
第10回：文献講読と議論(9)	第25回：文献講読と議論(20)
第11回：文献講読と議論(10)	第26回：文献講読と議論(21)
第12回：文献講読と議論(11)	第27回：文献講読と議論(22)
第13回：文献講読と議論(12)	第28回：文献講読と議論(23)
第14回：文献講読と議論(13)	第29回：文献講読と議論(24)
第15回：文献講読と議論(14)	第30回：まとめ

臨床心理アセスメント学演習(2)

熊野 宏昭

演習(1)を基礎として、各受講者の研究テーマについて、関連する先行研究の理解、問題の設定、研究計画の立案を行い、それを互いに検討しながら討論を行う。具体的には、不安障害(パニック障害、社会不安障害など)、気分障害(うつ病など)、摂食障害、糖尿病、メタボリック症候群など、青年期以降に多く認められ、改善のために生活のセルフコントロールの必要性が大きい精神疾患や生活習慣病などを研究の対象にする。そして、大学生などを対象にしたアナログ研究(調査研究、実験研究、介入研究)か、臨床群を対象にした同様の研究によって、マインドフルネスや ACT など「自分の思考と距離を取りつつ、必要な行動を実行できるようにする方法」が持つ効果を明らかにすること、及びセルフコントロールと深く関わる前頭葉機能を注意訓練やマインドフルネスなどによって高めることが持つ効果を明らかにすることを、主要な研究テーマとする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：研究構想発表と議論(15)
第2回：研究構想発表と議論(1)	第17回：研究構想発表と議論(16)
第3回：研究構想発表と議論(2)	第18回：研究構想発表と議論(17)
第4回：研究構想発表と議論(3)	第19回：研究構想発表と議論(18)
第5回：研究構想発表と議論(4)	第20回：研究構想発表と議論(19)

第6回：研究構想発表と議論(5)	第21回：研究構想発表と議論(20)
第7回：研究構想発表と議論(6)	第22回：研究構想発表と議論(21)
第8回：研究構想発表と議論(7)	第23回：研究構想発表と議論(22)
第9回：研究構想発表と議論(8)	第24回：研究構想発表と議論(23)
第10回：研究構想発表と議論(9)	第25回：研究構想発表と議論(24)
第11回：研究構想発表と議論(10)	第26回：研究構想発表と議論(25)
第12回：研究構想発表と議論(11)	第27回：研究構想発表と議論(26)
第13回：研究構想発表と議論(12)	第28回：研究構想発表と議論(27)
第14回：研究構想発表と議論(13)	第29回：研究構想発表と議論(28)
第15回：研究構想発表と議論(14)	第30回：まとめ

[感性認知情報システム研究領域]

感性認知科学演習(1)

齋藤 美穂

感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたるが、本演習では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、特に色彩やデザインの認知およびその利用方法、対人認知、感覚協調などを中心としたテーマにより嗜好との関わり含めて検討する。また心理的のみならず生理的なアプローチにより感性研究に対する指導を行うことにより、この研究領域のみならず人間科学への理解を深めて行く。具体的には1)色彩やデザインに関する嗜好と認知、2)色彩やデザインが及ぼす心理的効果や生理的効果、3)香りと色、音と色などの感覚協調、4)表情や化粧などの対人認知、5)これらに関連した文化的差異などの研究テーマを主とし、各人の研究テーマに対して文献講読とディスカッションを中心に演習をすすめる。演習では研究領域に関連した機器の実習等、データ処理や分析方法のレクチャーも行う。また上記の研究テーマを中心としたグループワークも想定される。これらの課題を通して各人が人間科学研究への学際的なアプローチに対する理解をも深めて行くことを期待する。

成績評価基準:授業出席状況、課題レポート、授業中の発表等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：感性認知科学演習のオリエンテーション	第16回：機器レクチャー③(感性研究における生理測定機器の実習)
第2回：感性認知科学に関する研究の紹介	第17回：グループ別研究計画および関連論文の検索(計画の検討)
第3回：プレ修論発表(修士2年生の一年次に作成した論文発表)	第18回：グループ別研究計画および関連論文の検索(関連論文検索)
第4回：質疑応答と講評	第19回：グループ別研究計画および関連論文の発表(検索結果発表)
第5回：博士課程を含む学生による昨年度の研究発表(修士2年以外)	第20回：グループ別研究計画および関連論文の発表(ディスカッション)
第6回：質疑応答、ディスカッションと講評	第21回：個別研究指導(研究計画の問題点の抽出)
第7回：学会発表予行	第22回：個別研究指導(研究計画の吟味)
第8回：質疑応答、ディスカッションと講評	第23回：グループ別研究計画の吟味と検討(研究史との関連性の検討)

第9回：色彩計測機器レクチャー（色彩色差計・光源）解説	第24回：グループ別研究計画の吟味と検討（ディスカッション）
第10回：色彩計測機器の実習	第25回：グループ別研究計画の実験・調査に関する指導（実験・調査計画の報告）
第11回：機器レクチャー①（感性研究における視知覚機器の解説）	第26回：グループ別研究計画の実験・調査に関する指導（ディスカッション）
第12回：機器レクチャー①（感性研究における視知覚機器の実習）	第27回：個別研究指導（分析方法の報告）
第13回：機器レクチャー②（感性研究における表情研究機器の解説）	第28回：個別研究指導（分析方法の吟味）
第14回：機器レクチャー②（感性研究における表情研究機器の実習）	第29回：研究進捗報告と発表
第15回：機器レクチャー③（感性研究における生理測定機器の解説）	第30回：質疑応答、ディスカッションおよび講評

感性認知科学演習（2）

齋藤 美穂

この演習では感性認知科学演習（1）での学習を踏まえ、各人の研究テーマに対する研究計画、展望、分析に関してディスカッションし、具体的事例の検討を行う。各人は演習（1）で行った実習、データ処理や分析方法を実際の研究テーマに活用し、本演習の終了時に論文（プレ修論）を完成させ提出することが求められる。さらに学会発表や学術論文作成の指導を行い、修士論文に向かって助言と指導を進めて行く。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、論文等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：研究進捗報告	第16回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第2回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第17回：個別論文指導（研究計画の最終報告）
第3回：グループ別研究計画と論文作成計画	第18回：個別論文指導（研究計画の最終チェック）
第4回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第19回：グループ別論文作成進捗状況の発表
第5回：論文作成レクチャー（データ処理の解説）	第20回：質疑応答、ディスカッションおよび講評
第6回：論文作成レクチャー（データ処理の実習）	第21回：グループ別論文進捗状況の報告
第7回：論文作成レクチャー （分析①：SPSS の解説）	第22回：グループ別論文進捗状況の検討
第8回：論文作成レクチャー （分析①：SPSS の実習）	第23回：個別論文指導（論文骨子の報告）
第9回：論文作成レクチャー （分析②：各種検定等の解説）	第24回：個別論文指導（論文の書き方の指導）
第10回：論文作成レクチャー （分析②：各種検定等の実習）	第25回：個別論文指導（分析内容の報告）
第11回：論文作成レクチャー （分析③：多変量解析等の解説）	第26回：個別論文指導（分析内容の確認）
第12回：論文作成レクチャー （分析③：多変量解析等の実習）	第27回：個別論文指導 （投稿論文のアウトラインの報告）

第13回：グループ別論文作成計画の発表	第28回：個別論文指導（論文投稿の助言と指導）
第14回：質疑応答、ディスカッションおよび講評	第29回：修士・博士合同による修論論文口頭試問予行
第15回：グループ別論文作成計画の確認	第30回：質疑応答、講評

安全人間工学演習（１）

石田 敏郎

安全に関係する学問分野は、人間工学、心理学、人間信頼性工学、安全工学などがある。近年、システムの巨大化とともにエラーの内容も複雑になってきており、個々の人間のエラーのみでなく、組織的なエラーに対する対応も求められている。ヒューマンエラーの心理学および人間工学的研究に関する文献を中心に、人間行動モデルの理解、ヒューマンエラーの実験的検討の方法、事故分析の実際、および事故防止対策立案の方法とその評価について学ぶ。対象となる分野は、道路交通、航空をはじめ、各産業現場である。

成績評価基準:授業中の発表

授業計画:

第 1 回：人間工学と安全に関する講義	第16回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第 2 回：人間工学と安全に関する講義	第17回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第 3 回：人間工学と安全に関する講義	第18回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第 4 回：人間工学と安全に関する講義	第19回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第 5 回：人間工学と安全に関する講義	第20回：安全人間工学の基本的な文献の輪読
第 6 回：人間工学と安全に関する講義	第21回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第 7 回：人間工学と安全に関する講義	第22回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第 8 回：人間工学と安全に関する講義	第23回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第 9 回：人間工学と安全に関する講義	第24回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第10回：人間工学と安全に関する講義	第25回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第11回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第26回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第12回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第27回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第13回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第28回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第14回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第29回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表
第15回：安全人間工学の基本的な文献の輪読	第30回：各自の研究テーマに関連した文献調査内容の発表

安全人間工学演習（２）

石田 敏郎

演習(1)を基礎とし、各分野の事故統計資料および事故・不具合報告書をもとに、統計的分析と事例分析を

行い、ヒューマンエラー防止のための具体的方策を探る。その際、人間行動からの観点および事故分析的な観点からのアプローチが必要となる。演習(2)では、これらの観点から、如何に事故防止対策を導き出すかについて、実際のデータをもとに検討する。さらに、安全に関する人間行動の理解には、観察、実験、調査といった手法が不可欠であるが、それらの手法について文献調査と過去に当研究室で実施してきた研究を基に検討を加え、修士論文を作成するための基礎的な研究知識の習得を目指す。

成績評価基準:授業中の発表

授業計画:

第1回：事故統計資料の分析	第16回：事故事例分析
第2回：事故統計資料の分析	第17回：事故事例分析
第3回：事故統計資料の分析	第18回：事故事例分析
第4回：事故統計資料の分析	第19回：事故事例分析
第5回：事故統計資料の分析	第20回：事故事例分析
第6回：事故統計資料の分析	第21回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第7回：事故統計資料の分析	第22回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第8回：事故統計資料の分析	第23回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第9回：事故統計資料の分析	第24回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第10回：事故統計資料の分析	第25回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第11回：事故事例分析	第26回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第12回：事故事例分析	第27回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第13回：事故事例分析	第28回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第14回：事故事例分析	第29回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表
第15回：事故事例分析	第30回：各自の研究テーマに関連した分野の事故、不具合データの分析の発表

福祉工学演習（1）

藤本 浩志

福祉工学では、単にモノづくりのためのツールとしての工学的な知識のみならず、支援する対象であるヒトの諸機能の理解も重要である。福祉工学演習(1)では、このような福祉工学の各論を構成する以下の事柄について、関連資料や現場での体験を通じて学ぶ。

- ・移動支援機器、コミュニケーション支援機器、介助支援機器等、狭義の福祉機器である機能代行機器の現状および研究開発動向。
- ・健常者のみならず障害者や高齢者の身体の諸機能(運動機能特性、感覚知覚特性)の定量的な評価手法。

成績評価基準:授業中の発表およびディスカッション、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：現状の問題の紹介と課題の提示(運動機能特性)
第2回：現状の問題の紹介と課題の提示(移動機能代行機器)	第17回：輪読およびディスカッション(1)
第3回：輪読およびディスカッション(1)	第18回：輪読およびディスカッション(2)
第4回：輪読およびディスカッション(2)	第19回：輪読およびディスカッション(3)
第5回：輪読およびディスカッション(3)	第20回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)	第21回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)	第22回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)	第23回：現状の問題の紹介と課題の提示(感覚機能特性)
第9回：現状の問題の紹介と課題の提示(コミュニケーション機器)	第24回：輪読およびディスカッション(1)
第10回：輪読およびディスカッション(1)	第25回：輪読およびディスカッション(2)
第11回：輪読およびディスカッション(2)	第26回：輪読およびディスカッション(3)
第12回：輪読およびディスカッション(3)	第27回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)	第28回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)	第29回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)	第30回：総括と講評

福祉工学演習（2）

藤本 浩志

福祉工学演習(1)を踏まえて、ヒトの機能を補完し環境との円滑なインタラクションの実現を目指した適切なインターフェースに関する具体的な課題に取り組む。その際には、身体諸機能の機序の解明に関する基礎研究と、同時にそれらの知見に基づいて実用化を目指した機器に関する応用研究の両方の視点に留意したい。また特に応用研究については、広義の福祉機器として、ユーザを障害者や高齢者に限定しないユニバーサルデザインのコンセプトも併せて検討する。

成績評価基準:授業中の発表およびディスカッション、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：課題の提示(床面材料環境と下肢運動との関連)
第2回：課題の提示(ヒューマンインターフェース)	第17回：輪読およびディスカッション(1)

第3回：輪読およびディスカッション(1)	第18回：輪読およびディスカッション(2)
第4回：輪読およびディスカッション(2)	第19回：輪読およびディスカッション(3)
第5回：輪読およびディスカッション(3)	第20回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
第6回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)	第21回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
第7回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)	第22回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
第8回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)	第23回：課題の提示(床面形状環境と下肢運動との関連)
第9回：課題の提示(バーチャルリアリティー皮膚感覚ディスプレイ)	第24回：輪読およびディスカッション(1)
第10回：輪読およびディスカッション(1)	第25回：輪読およびディスカッション(2)
第11回：輪読およびディスカッション(2)	第26回：輪読およびディスカッション(3)
第12回：輪読およびディスカッション(3)	第27回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)
第13回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(1)	第28回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)
第14回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(2)	第29回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)
第15回：課題のプレゼンテーションおよびディスカッション(3)	第30回：総括と講評

情報処理心理学演習（1）

中島 義明

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「理論的問題」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。これらの過程の中で、研究遂行上必要な理論的背景、方法論等の「基礎的知識」の習得を目指す。

成績評価基準:①出席の程度及び②与えられた課題に対する発表内容に基づいて行なう。

授業計画:

第1回：前期の授業の概要と進め方	第16回：後期の授業の概要と進め方
第2回：各自の研究テーマの発表(1)	第17回：各自の修士論文の研究計画(途中経過)の発表(1)
第3回：各自の研究テーマの発表(2)	第18回：各自の修士論文の研究計画(途中経過)の発表(2)
第4回：各自の研究テーマの発表(3)	第19回：各自の修士論文の研究計画(途中経過)の発表(3)
第5回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論(1)	第20回：上記発表について討論(1)
第6回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論(2)	第21回：上記発表について討論(2)

第7回：各自の研究テーマと「情報処理心理学の理論」との関係について討論(3)	第22回：上記発表について討論(3)
第8回：輪読(1)、輪読(2)（「情報処理心理学の理論」）	第23回：輪読(11)、輪読(12)（「情報処理心理学の理論」）
第9回：輪読(3)、輪読(4)（「情報処理心理学の理論」）	第24回：輪読(13)、輪読(14)（「情報処理心理学の理論」）
第10回：輪読(5)、輪読(6)（「情報処理心理学の理論」）	第25回：輪読(15)、輪読(16)（「情報処理心理学の理論」）
第11回：輪読(7)、輪読(8)（「情報処理心理学の理論」）	第26回：輪読(17)、輪読(18)（「情報処理心理学の理論」）
第12回：輪読(9)、輪読(10)（「情報処理心理学の理論」）	第27回：輪読(19)、輪読(20)（「情報処理心理学の理論」）
第13回：輪読内容に関する討論(1)	第28回：輪読内容に関する討論(1)
第14回：輪読内容に関する討論(2)	第29回：輪読内容に関する討論(2)
第15回：レポート課題と解説	第30回：レポート課題と解説

【必要に応じた変更があり得る】

情報処理心理学演習（2）

中島 義明

参加者各人の研究テーマに即した、情報処理に関連する「実際的问题」を取り上げ、これらの諸問題につき、専門誌等の知見を参考にしつつ、全員で討論する。これらの過程の中で、現実生活場面と密着した研究の遂行上必要なこれまでの知見や方法論等の「応用的知識」の習得を目指す。

成績評価基準:①出席の程度及び②与えられた課題に対する発表内容に基づいて行う。

授業計画:

第1回：前期の授業の概要と進め方	第16回：後期の授業の概要と進め方
第2回：各自が関心を有する「実際的问题」についての発表(1)	第17回：各自の修士論文のテーマに即した「実際的问题」について発表(1)
第3回：各自が関心を有する「実際的问题」についての発表(2)	第18回：各自の修士論文のテーマに即した「実際的问题」について発表(2)
第4回：各自が関心を有する「実際的问题」についての発表(3)	第19回：各自の修士論文のテーマに即した「実際的问题」について発表(3)
第5回：各自が関心を有する「実際的问题」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論(1)	第20回：上記発表について討論(1)
第6回：各自が関心を有する「実際的问题」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論(2)	第21回：上記発表について討論(2)
第7回：各自が関心を有する「実際的问题」と「情報処理心理学の理論」との関連について討論(3)	第22回：上記発表について討論(3)

第8回：輪読(1)、輪読(2) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)	第23回：輪読(11)、輪読(12) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)
第9回：輪読(3)、輪読(4) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)	第24回：輪読(13)、輪読(14) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)
第10回：輪読(5)、輪読(6) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)	第25回：輪読(15)、輪読(16) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)
第11回：輪読(7)、輪読(8) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)	第26回：輪読(17)、輪読(18) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)
第12回：輪読(9)、輪読(10) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)	第27回：輪読(19)、輪読(20) (「情報処理心理学」に関連した「実際の問題」)
第13回：輪読内容に関する討論(1)	第28回：輪読内容に関する討論(1)
第14回：輪読内容に関する討論(2)	第29回：輪読内容に関する討論(2)
第15回：レポート課題と解説	第30回：レポート課題と解説

【必要に応じた変更があり得る】

社会的実践認知科学演習（1）

宮崎 清孝

認知に対する文化歴史的アプローチという考え方を対象とする。認知が個人だけではなく、それを取り巻く文化との相互作用の中で発展していくという考え方である。ここではその研究史、研究の方法などについて、基本的な文献を講読していく。

成績評価基準:授業への出席と発言などの貢献、割り当てた文献の発表内容に基づいておこなう。

授業計画:

第1回：イントロダクション	第16回：論文輪読
第2回：イントロダクション	第17回：論文輪読
第3回：講義:認知科学の最近の話題について	第18回：論文輪読
第4回：講義:認知科学の最近の話題について	第19回：論文輪読
第5回：講義:認知科学の最近の話題について	第20回：論文輪読
第6回：講義:認知科学の最近の話題について	第21回：論文輪読
第7回：論文輪読	第22回：論文輪読
第8回：論文輪読	第23回：論文輪読
第9回：論文輪読	第24回：論文輪読
第10回：論文輪読	第25回：論文輪読
第11回：論文輪読	第26回：論文輪読
第12回：論文輪読	第27回：論文輪読
第13回：論文輪読	第28回：論文輪読
第14回：論文輪読	第29回：論文輪読
第15回：論文輪読	第30回：論文輪読

社会的実践認知科学演習（2）

宮崎 清孝

演習(1)を基礎として、特に教授学習過程、またそれ以外でも各受講者の問題関心のある領域を題材として、より具体的な研究の動向を最新の論文を講読することにより検討する。

成績評価基準:授業への出席と発言などの貢献、割り当てた文献の発表内容に基づいておこなう。

授業計画:

第1回：イントロダクション	第16回：論文輪読
第2回：イントロダクション	第17回：論文輪読
第3回：講義:認知科学の最近の話題について	第18回：論文輪読
第4回：講義:認知科学の最近の話題について	第19回：論文輪読
第5回：講義:認知科学の最近の話題について	第20回：論文輪読
第6回：講義:認知科学の最近の話題について	第21回：論文輪読
第7回：論文輪読	第22回：論文輪読
第8回：論文輪読	第23回：論文輪読
第9回：論文輪読	第24回：論文輪読
第10回：論文輪読	第25回：論文輪読
第11回：論文輪読	第26回：論文輪読
第12回：論文輪読	第27回：論文輪読
第13回：論文輪読	第28回：論文輪読
第14回：論文輪読	第29回：論文輪読
第15回：論文輪読	第30回：論文輪読

心理行動学演習（1）

鈴木 晶夫

実験計画は、調査・実験的研究の基本であると考えられるので、整理しておきたい。

さらにこの演習では、ノンバーバル行動、コミュニケーション、感情、健康、からだ、行動をキーワードとして、身体と精神の相互作用を中心に考えたい。これらに関連する先行研究の文献を取り上げ講読する。人間科学という視点から心理行動学を幅広く追究したい。研究発表、討論の内容を中心に評価する。

授業計画:

第1回：演習の進め方オリエンテーション	第16回：前半のまとめと後半のオリエンテーション
第2回：実験計画研究1	第17回：文献講読B-1（コミュニケーション）
第3回：実験計画研究2	第18回：文献講読B-2
第4回：実験計画研究3	第19回：文献講読B-3
第5回：実験計画研究4	第20回：文献講読B-4
第6回：実験計画研究5	第21回：文献講読B-5
第7回：実験計画研究6	第22回：文献講読C-1（感情・健康）
第8回：文献講読A-1（ノンバーバル行動）	第23回：文献講読C-2
第9回：文献講読A-2	第24回：文献講読C-3
第10回：文献講読A-3	第25回：文献講読C-4
第11回：文献講読A-4	第26回：文献講読C-5
第12回：文献講読A-5	第27回：修士論文研究計画討議1
第13回：文献講読A-6	第28回：修士論文研究計画討議2
第14回：課題発表1	第29回：修士論文研究計画討議3
第15回：課題発表2	第30回：修士論文研究計画討議4

心理行動学演習（２）

鈴木 晶夫

各受講者の研究テーマを中心に、その研究の背景、問題、研究目的、研究計画、結果等について個人発表してもらい、討論する。研究発表、討論の内容を中心に評価する。

授業計画：

第１回：演習の進め方オリエンテーション	第16回：研究計画(全体のまとめ)の発表5
第２回：研究背景の発表1(修士論文研究計画を中心に)	第17回：研究計画についての討議1
第３回：研究背景の発表2	第18回：研究計画についての討議2
第４回：研究背景の発表3	第19回：研究計画についての討議3
第５回：研究背景の発表4	第20回：研究計画についての討議4
第６回：研究背景の発表5	第21回：研究結果整理・分析について1
第７回：研究背景の発表6	第22回：研究結果整理・分析について2
第８回：研究背景の問題点討議1	第23回：研究結果整理・分析について3
第９回：研究背景の問題点討議2	第24回：研究結果整理・分析について4
第10回：研究目的の発表	第25回：研究結果整理・分析について5
第11回：研究目的についての討議	第26回：研究成果の発表及び討論1
第12回：研究計画(概要)の発表1	第27回：研究成果の発表及び討論2
第13回：研究計画(方法論)の発表2	第28回：研究成果の発表及び討論3
第14回：研究計画(方法論)の発表3	第29回：研究成果の発表及び討論4
第15回：研究計画(方法論)の発表4	第30回：全体のまとめ及び討論

言語情報科学演習（１）

菊池 英明

音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデル構築およびその応用を目的として、音声言語メディアの特性について調査・分析を行う。具体的には、音声対話インタフェース、感情・態度の理解表出モデル、知的検索エンジンなどへの応用を想定して、音声言語メディアの特性について関連分野の知見を文献により調査したり、音声言語データを収集・解析して、その特性を明らかにする。定期的に進捗状況報告、輪講、発表などを行なう。

演習(1)と演習(2)を同一年次に履修してよい。

成績評価基準:授業出席状況、発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第１回：研究計画の発表	第16回：研究計画の発表
第２回：進捗状況報告(１)	第17回：進捗状況報告(14)
第３回：進捗状況報告(２)	第18回：進捗状況報告(15)
第４回：進捗状況報告(３)	第19回：進捗状況報告(16)
第５回：進捗状況報告(４)	第20回：進捗状況報告(17)
第６回：進捗状況報告(５)	第21回：進捗状況報告(18)
第７回：進捗状況報告(６)	第22回：進捗状況報告(19)
第８回：進捗状況報告(７)	第23回：進捗状況報告(20)
第９回：進捗状況報告(８)	第24回：進捗状況報告(21)
第10回：進捗状況報告(９)	第25回：進捗状況報告(22)

第11回：進捗状況報告(10)	第26回：進捗状況報告(23)
第12回：進捗状況報告(11)	第27回：進捗状況報告(24)
第13回：進捗状況報告(12)	第28回：進捗状況報告(25)
第14回：進捗状況報告(13)	第29回：進捗状況報告(26)
第15回：中間発表	第30回：発表

言語情報科学演習（２）

菊池 英明

音声言語メディアの特性を踏まえたうえで、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築し、音声対話インタフェース、感情理解ロボット、知的検索エンジンなどの実現を試みる。ソフトウェア・システム開発やデータベース構築などの一連の技術サイクルを通して、進捗状況報告、成果発表、デモンストレーション発表などを行なう。

演習(1)と演習(2)を同一年次に履修してよい。

成績評価基準:授業出席状況、発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第 1 回：研究計画の発表	第16回：研究計画の発表
第 2 回：進捗状況報告（１）	第17回：進捗状況報告(14)
第 3 回：進捗状況報告（２）	第18回：進捗状況報告(15)
第 4 回：進捗状況報告（３）	第19回：進捗状況報告(16)
第 5 回：進捗状況報告（４）	第20回：進捗状況報告(17)
第 6 回：進捗状況報告（５）	第21回：進捗状況報告(18)
第 7 回：進捗状況報告（６）	第22回：進捗状況報告(19)
第 8 回：進捗状況報告（７）	第23回：進捗状況報告(20)
第 9 回：進捗状況報告（８）	第24回：進捗状況報告(21)
第10回：進捗状況報告（９）	第25回：進捗状況報告(22)
第11回：進捗状況報告(10)	第26回：進捗状況報告(23)
第12回：進捗状況報告(11)	第27回：進捗状況報告(24)
第13回：進捗状況報告(12)	第28回：進捗状況報告(25)
第14回：進捗状況報告(13)	第29回：進捗状況報告(26)
第15回：中間発表	第30回：発表

知識情報科学演習（１）

松居 辰則

知識情報科学演習(1)では、知識情報処理、感性情報処理、人工知能、認知科学、e-learning など、本研究室において大学院の研究を進める上で基礎基本となる理論、技術、研究方法論の習得を目的とします。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

- ・人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発（音楽情報処理）、・コンピュータの上のエージェント(疑似人間)やロボットと人間とのインタラクション、・コンピュータ上での何気ない操作(マウスやキーボード)からの人間の心理的な状態の推定方法、・人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション

ン、・人間の感じる「調和感」の生成メカニズム、・医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システム、・(うまい)授業、スポーツ、芸術におけるスキルに関する研究(スキルサイエンス)、・人間の「感性」の起源に関する研究、・遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ(研究方法論)が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。したがって、演習(1)では、関連文献の講読(輪講)にみならず、研究を進める上で必要となる実験装置・実験器具の使用目的と操作方法の習得、実験を通しての様々な研究方法論の体験を目的とした実習をバランスよく配置します。

成績評価基準:演習への参加状況と実験レポート、輪講での発表内容で評価する。

授業計画:

第1回: 演習の進め方についての説明	第16回: 実験器具の使用法(5) 力覚デバイス(その1) 動作原理の説明と基本的な操作方法
第2回: 科学技術文書の作成法(1) 論理的展開	第17回: 実験器具の使用法(6) 力覚デバイス(その2) 簡単な実験とデータ解析
第3回: 科学技術文書の作成法(2) TeX のインストールと、TeX による文書作成	第18回: 研究方法論の体験(1) 観察実験(その1) 実験計画と実験環境の整備
第4回: 統計解析パッケージの利用(1) R のインストールと簡単な使い方	第19回: 研究方法論の体験(2) 観察実験(その2) コンテンツ作成、評価実験と分析
第5回: 統計解析パッケージの利用(2) R による統計解析、多変量解析(因子分析など)	第20回: 研究方法論の体験(3) メディアの利用(その1) 仮想現実感(VR)システムの動作原理と使用方法
第6回: 実データを用いての R による解析と TeX を用いてのレポート作成(1)	第21回: 研究方法論の体験(4) メディアの利用(その2) 仮想現実感(VR)のコンテンツの作成と評価
第7回: 実データを用いての R による解析と TeX を用いてのレポート作成(2)	第22回: 輪講(1) 感性情報処理に関する文献(その1)
第8回: 統計的手法の修得(1) 記述統計	第23回: 輪講(2) 感性情報処理に関する文献(その2)
第9回: 統計的手法の修得(2) 推測統計	第24回: 輪講(3) 感性情報処理に関する文献(その3)
第10回: 統計的手法の修得(3) 多変量解析(因子分析、クラスター分析 など)	第25回: 輪講(4) 人工知能・認知科学に関する文献(その1)
第11回: 統計的手法の修得(4) 心理尺度構成(信頼性、妥当性)、SD 法による印象評価 など)	第26回: 輪講(5) 人工知能・認知科学に関する文献(その2)
第12回: 実験器具の使用法(1) アイマーク・レコーダー(その1) 動作原理の説明と基本的な操作方法	第27回: 輪講(6) 人工知能・認知科学に関する文献(その3)

第13回：実験器具の使用法(2) アイマーク・レコーダー(その2) 簡単な実験とデータ解析	第28回：輪講(7) 学習科学・e-learning に関する文献(その1)
第14回：実験器具の使用法(3) 脳波計測計(その1) 動作原理の説明と基本的な操作方法	第29回：輪講(8) 学習科学・e-learning に関する文献(その2)
第15回：実験器具の使用法(4) 脳波計測計(その2) 簡単な実験とデータ解析	第30回：輪講(9) 学習科学・e-learning に関する文献(その3)

知識情報科学演習(2)

松居 辰則

知識情報科学演習(2)では、知識情報科学演習(1)での成果を受けて、各自の研究テーマに関する研究進捗と関連論文等の紹介を中心に進めます。

本研究室では、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」に科学的にアプローチしています。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探索し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。以下は現在進行中の研究のテーマの例です。

(1)人間の「感性」に応じてコンピュータに音楽を編曲させるシステムの開発(音楽情報処理)、(2)コンピュータ上のエージェント(疑似人間)やロボットと人間とのインタラクションに関する研究、(3)コンピュータ上での何気ない操作(マウスやキーボード)からの人間の心理的な状態の推定方法に関する研究、(4)人間が「飽きる」ことの数理モデルとシミュレーション、(5)人間の感じる「調和感」の生成メカニズムに関する研究、(6)人間の心理的要因を考慮した経済予測モデルの研究、(7)医療、介護分野におけるケアプランニングにおける暗黙知の表出、共有、伝承の支援システムに関する研究、(8)(うまい)授業、スポーツ、芸術におけるスキルの表現、共有、伝承に関する研究(スキルサイエンス)、(9)学習者の「やる気」や「モチベーション」を維持するための e-learning システムや教材開発、(10)人間の「感性」の起源に関する研究、(11)遺伝と文化の相互作用による人類進化のメカニズムに関する研究

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ(研究方法論)が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。

成績評価基準:研究進捗発表の内容と文献紹介の内容で評価します。

授業計画:

第1回：演習(2)の進め方や評価に関するガイダンス	第16回：輪講・文献紹介(9) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第2回：輪講・文献紹介(1) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第17回：輪講・文献紹介(10) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第3回：輪講・文献紹介(2) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第18回：輪講・文献紹介(11) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第4回：研究進捗発表(1) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第19回：研究進捗発表(7) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第5回：研究進捗発表(2) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第20回：研究進捗発表(8) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

第6回：輪講・文献紹介(3) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第21回：輪講・文献紹介(12) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第7回：輪講・文献紹介(4) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第22回：輪講・文献紹介(13) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第8回：輪講・文献紹介(5) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第23回：輪講・文献紹介(14) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第9回：研究進捗発表(3) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第24回：研究進捗発表(9) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第10回：研究進捗発表(4) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第25回：研究進捗発表(10) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第11回：輪講・文献紹介(6) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第26回：輪講・文献紹介(15) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第12回：輪講・文献紹介(7) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第27回：輪講・文献紹介(16) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第13回：輪講・文献紹介(8) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介	第28回：輪講・文献紹介(17) 各自の研究に関連した文献の紹介、関連トピックスの紹介
第14回：研究進捗発表(5) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第29回：研究進捗発表(11) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション
第15回：研究進捗発表(6) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション	第30回：研究進捗発表(12) 各自の研究内容の進捗状況に関するプレゼンテーション

人間生体機能動態学演習（1）

宮崎 正己

本授業では、人間と環境を中心とした労働生理学な観点から、人間の諸機能と日常生活に関連した事柄に関して取り上げた文献等を選び輪読をおこなう。

また、感性及び快適性に関することも取り上げる。

評価は、出席とレポートによっておこなう。

授業計画：

第1回（週）：授業の方針	第16回（週）：暑熱下における適正な作業とは
第2回（週）：労働生理学とは	第17回（週）：漁業における労働生理学
第3回（週）：労働生理学の生物学的な意義	第18回（週）：圧作業下における生体反応
第4回（週）：労働生理学の分野に存在する問題について	第19回（週）：圧作業下における生体への影響
第5回（週）：日常生活における労働生理学	第20回（週）：減圧症とは
第6回（週）：身体作業能の評価と身体作業負荷	第21回（週）：宇宙における人の生体への影響
第7回（週）：作業環境の評価法	第22回（週）：宇宙における人の滞在
第8回（週）：精神的あるいは、感情的なストレス	第23回（週）：人の作業能
第9回（週）：作業ストレス	第24回（週）：人体測定とは
第10回（週）：マネジメントのストレス	第25回（週）：人の作業域
第11回（週）：シフト作業とサーカディアンリズム	第26回（週）：ひとの筋肉活動
第12回（週）：航空機制御におけるストレス	第27回（週）：筋肉活動の定量化
第13回（週）：工場における熱ストレス	第28回（週）：疲労とは

第14回（週）：寒冷条件下の於ける人の生体反応	第29回（週）：作業下の於ける疲労回復
第15回（週）：暑熱下環境下における人の生体反応	第30回（週）：人のパフォーマンス研究について

人間生体機能動態学演習（2）

宮崎 正己

本授業では、人間と環境を中心とした労働生理学な観点から、人間の健康に焦点をあてて、授業を進めていく。また、快適性の追求に関しても言及する予定である。

評価は、出席とレポートによっておこなう。

授業計画：

第1回（週）：日常生活におけるストレス	第16回（週）：感性情報処理のまとめ
第2回（週）：唾液から、ストレスが測れるか？	第17回（週）：生活者にとっての商品づくりとは
第3回（週）：酸化還元電位とは	第18回（週）：感性とは何か
第4回（週）：心電図からみたストレスの評価方法について	第19回（週）：感性と商品開発の実例（1）
第5回（週）：水とストレス	第20回（週）：感性と商品開発の実例（2）
第6回（週）：表面微小血管反応とは	第21回（週）：感性と住宅開発
第7回（週）：感性情報処理へのアプローチ	第22回（週）：感性と自動車
第8回（週）：感性と知性の関係	第23回（週）：感性工学手法（1）
第9回（週）：触覚と感性情報	第24回（週）：感性工学手法（2）
第10回（週）：音が導く感性反応	第25回（週）：感性工学手法（3）
第11回（週）：動きにおける感性の分析	第26回（週）：感性工学の手順
第12回（週）：音楽演奏における感性情報	第27回（週）：感性工学の応用事例（1）
第13回（週）：間の感性工学的解明	第28回（週）：感性工学の応用事例（2）
第14回（週）：顔の印象学について	第29回（週）：感性による品質管理とは
第15回（週）：快適性の追求とは	第30回（週）：感性による品質管理の実例

感覚情報処理学演習（1）

百瀬 桂子

感覚系を脳活動により評価する方法の1つとして、脳波などの生体信号を評価するための技術を、文献輪読を通して学ぶ。生体信号特有の不規則性・非線形性を評価するために、まず不規則信号の統計学的取り扱いを学び、さらに特定の感覚応答信号を対象としてとりあげ、その信号処理技術を理解する。

成績評価基準：本演習および各自の研究テーマへの取り組みを総合的に評価する。

授業計画：

第1回：演習の概要と進め方	第16回：研究計画実施状況の報告と討議（3）
第2回：関心のある生体信号計測に関する討議	第17回：研究計画に関する文献講読（5）
第3回：生体信号計測の基礎（1）	第18回：研究計画に関する文献講読（6）
第4回：生体信号計測の基礎（2）	第19回：生体信号処理実習（5）
第5回：生体信号処理の基礎（1）	第20回：生体信号処理実習（6）
第6回：生体信号処理の基礎（2）	第21回：研究計画に関する文献講読（7）
第7回：研究計画に関する文献講読（1）	第22回：研究計画に関する文献講読（8）
第8回：研究計画に関する文献講読（2）	第23回：生体信号処理実習（7）
第9回：研究計画に関する文献講読（3）	第24回：生体信号処理実習（8）
第10回：生体信号処理実習（1）	第25回：研究計画に関する文献講読（9）

第11回：生体信号処理実習(2)	第26回：研究計画に関する文献講読(10)
第12回：研究計画実施状況の報告と討議(1)	第27回：生体信号処理実習(9)
第13回：生体信号処理実習(3)	第28回：生体信号処理実習(10)
第14回：生体信号処理実習(4)	第29回：研究計画実施状況の報告と討議(4)
第15回：研究計画実施状況の報告と討議(2)	第30回：研究計画実施状況の報告と討議(5)

感覚情報処理学演習(2)

百瀬 桂子

感覚系の情報処理過程に関して、コンピュータ技術を活用した評価法とその評価情報の応用・活用について、最近の研究論文輪読と討議を通して、具体的な評価対象や方法論に関する研究を学ぶ。これによって、情報通信技術の生体情報の測定への応用の現状と新たな可能性を論考する。

成績評価基準:本演習および各自の研究テーマへの取り組みを総合的に評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：研究計画実施状況の報告と討議(3)
第2回：関心のある研究領域に関する討議	第17回：研究計画に関する討議(5)
第3回：関心研究領域の文献輪読(1)	第18回：研究計画に関する討議(6)
第4回：関心研究領域の文献輪読(2)	第19回：関心研究領域の文献輪読(9)
第5回：関心研究領域の文献輪読(3)	第20回：関心研究領域の文献輪読(10)
第6回：関心研究領域の文献輪読(4)	第21回：研究計画に関する討議(7)
第7回：研究計画に関する討議(1)	第22回：研究計画に関する討議(8)
第8回：研究計画に関する討議(2)	第23回：関心研究領域の文献輪読(11)
第9回：研究計画に関する討議(3)	第24回：関心研究領域の文献輪読(12)
第10回：関心研究領域の文献輪読(5)	第25回：研究成果発表と討議
第11回：関心研究領域の文献輪読(6)	第26回：研究のとりまとめに関する討議
第12回：研究計画実施状況の報告と討議(1)	第27回：関心研究領域の文献輪読(13)
第13回：関心研究領域の文献輪読(7)	第28回：関心研究領域の文献輪読(14)
第14回：関心研究領域の文献輪読(8)	第29回：研究報告と討議(1)
第15回：研究計画実施状況の報告と討議(2)	第30回：研究報告と討議(2)

生態心理学演習(1)

三嶋 博之

実験論文を読み、討議することを通じて、ギブソン生態心理学の基本的アイデアについて学習するとともに、実証的な研究を自ら発想し遂行するための基礎技術(論文投稿の方法や、実験機材の使用法等)について学習する。実際に研究を遂行していくために必要な種々の実践的知識を吸収するため、グループでの追試研究を行う。成績の評価は、出席状況、発表、成果物等を総合的に勘案して行う。なお、本演習は修士課程1年生を対象とする。

授業計画:

第1回：講義の概要と進め方	第16回：輪読(10)(ダイナミックタッチ実験論文)
第2回：輪読(1)(ダイナミックタッチの理論)	第17回：輪読(11)(ダイナミックタッチ実験論文)
第3回：輪読(2)(ダイナミックタッチの理論)	第18回：輪読(12)(ダイナミックタッチ実験論文)
第4回：輪読(3)(ダイナミックタッチの理論)	第19回：輪読(13)(ダイナミックタッチ実験論文)
第5回：輪読(4)(ダイナミックタッチの理論)	第20回：輪読(14)(ダイナミックタッチ実験論文)

第6回：輪読(5) (ダイナミックタッチの理論)	第21回：輪読(15) (ダイナミックタッチ実験論文)
第7回：輪読(6) (ダイナミックタッチ実験論文)	第22回：ダイナミックタッチ実験の追試(4)
第8回：輪読(7) (ダイナミックタッチ実験論文)	第23回：ダイナミックタッチ実験の追試(5)
第9回：輪読(8) (ダイナミックタッチ実験論文)	第24回：ダイナミックタッチ実験の追試(6)
第10回：輪読(9) (ダイナミックタッチ実験論文)	第25回：ダイナミックタッチ実験の追試(7)
第11回：ダイナミックタッチ実験の追試(1)	第26回：ダイナミックタッチ実験の追試(8)
第12回：ダイナミックタッチ実験の追試(2)	第27回：実験データの検討会(3)
第13回：ダイナミックタッチ実験の追試(3)	第28回：実験データの検討会(4)
第14回：実験データの検討会(1)	第29回：仮説の検討
第15回：実験データの検討会(2)	第30回：レポート課題と解説

生態心理学演習（2）

三嶋 博之

ギブソンおよびその後継者たちによって展開されている生態心理学的研究のうち、受講者の修士論文課題と関連した文献を過去から現在まで網羅的に収集し、検討を加える。また、必要に応じて、関連の統計的手法や、機材、ソフトウェアの使用法について学ぶ。併せて、APA 形式の論文書式について学習する。

成績評価基準：出席状況、発表、成果物等を総合的に勘案して行う。なお、本演習は修士課程2年生を対象とする。

授業計画：

第1回：講義の概要と進め方	第16回：輪読(10) (生態心理学実験論文)
第2回：輪読(1) (APA Style に関して)	第17回：輪読(11) (生態心理学実験論文)
第3回：輪読(2) (APA Style に関して)	第18回：輪読(12) (生態心理学実験論文)
第4回：輪読(3) (APA Style に関して)	第19回：輪読(13) (生態心理学実験論文)
第5回：輪読(4) (APA Style に関して)	第20回：輪読(14) (生態心理学実験論文)
第6回：輪読(5) (生態心理学実験論文)	第21回：輪読(15) (生態心理学実験論文)
第7回：輪読(6) (生態心理学実験論文)	第22回：輪読(16) (生態心理学実験論文)
第8回：輪読(7) (生態心理学実験論文)	第23回：輪読(17) (生態心理学実験論文)
第9回：輪読(8) (生態心理学実験論文)	第24回：時系列データの解析演習(1)
第10回：輪読(9) (生態心理学実験論文)	第25回：時系列データの解析演習(2)
第11回：統計演習(1)	第26回：時系列データの解析演習(3)
第12回：統計演習(2)	第27回：時系列データの解析演習(4)
第13回：統計演習(3)	第28回：時系列データの解析演習(5)
第14回：統計演習(4)	第29回：時系列データの解析演習(6)
第15回：レポート課題と解説(1)	第30回：レポート課題と解説(2)

対話情報処理論演習（1）

市川 薫

1年生を対象とする。

実時間対話音声とコミュニケーション障害者の実時間対話言語である手話や指点字などの手段との対比を通して、対話型自然言語の有する優れた性質や円滑な対話の成立条件を支える性質を考察する。

そのために演習(1)では、基本的対話言語である音声を中心とした対話型言語メディアが持つ物理特性とその分析手法の考え方などの基礎を学ぶ。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 音声の規則合成法3(確率統計HMM方式)
第2回: コミュニケーションと対話	第17回: 音声の規則合成法4(言語処理、概念合成)
第3回: コード・メディア・モダリティー物理量と知覚・認知	第18回: 音声の規則合成法5(プロソディ生成)
第4回: 対話メディアの階層構造	第19回: 音声認識法1(パターンマッチング)
第5回: 談話の構造と対話	第20回: 音声認識法2(線形予測フィルタ)
第6回: 対話と会話	第21回: 音声認識法3(確率統計 HMM 法)
第7回: 発声のメカニズム	第22回: 音声の感情表現と対話
第8回: 聴覚のメカニズム	第23回: 音声の個人性と対話
第9回: 音声スペクトル分析法	第24回: 音声理解
第10回: 線形予測分析法	第25回: 対話における伝達情報と伝達支援情報
第11回: プロソディ分析法	第26回: 伝達情報と音声のプロソディ
第12回: 声道モデルによる音声合成法	第27回: 予告と予測(実時間コミュニケーション構造)
第13回: スペクトルモデルによる音声合成法	第28回: 手話のプロソディ
第14回: 音声の規則合成法1(音響方式)	第29回: 指点字のプロソディ
第15回: 音声の規則合成法2(編集方式)	第30回: 対話研究の課題

対話情報処理論演習(2)

市川 熹

2年生を対象とする。

対話や会話分析の手法を学習する。また、演習(1)の学習成果と併せて、対話型自然言語の有する円滑な対話を成立させている相互インタラクションのダイナミックな条件を考察し、その応用や評価法を学習する。

そのために演習(2)では、対話の言語構造の学習と、対話の持つ相互インタラクションの動的構造、応用と評価法などの検討を行なう。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第16回: 対話コーパスの作成法2(倫理および個人情報)
第2回: 対話情報の階層性	第17回: 対話コーパスの作成法3(収録法)
第3回: 対話情報のコーパス	第18回: 対話コーパスの作成法4(アノテーション法)
第4回: 会話分析と談話分析	第19回: 対話の動的側面のモデル化の検討1(言語レベル:RST 法など)
第5回: 言語行為、発話行為	第20回: 対話の動的側面のモデル化の検討2(言語レベル:ペトリネットなど)
第6回: 発話内行為	第21回: 対話の動的側面のモデル化の検討3(信号レベル:マルチエージェントなど)
第7回: 発話媒介行為	第22回: 対話による知識獲得のモデル化の検討(強化学習など)
第8回: 意図と理解	第23回: 対話モデルの応用1(工学領域でのシステム)
第9回: 計画立案と計画認識	第24回: 対話モデルの応用2(障害者・高齢者支援)

第10回：談話計画	第25回：対話システムの評価法1(音声対話システム)
第11回：多人数対話と話者交代	第26回：対話システムの評価法2(手話対話システム)
第12回：身体性とマルチモーダル	第27回：対話システムの評価法3(メンタルワークロード)
第13回：ジェスチャー単位	第28回：アクセシビリティとユーザビリティ
第14回：キャッチメント	第29回：対話研究と言語学、認知心理学、人工知能
第15回：対話コーパスの作成法1(計画・立案)	第30回：対話研究の課題

[教育コミュニケーション情報科学研究領域]

教育実践学演習（１）

浅田 匡

教育実践を対象とした研究に関して、授業の担い手である教師研究に焦点を当てる。システムズ・アプローチ、現象学的アプローチ、教育技術的アプローチなど、授業研究のさまざまなアプローチがあるが、それらに共通する問題としての教師論を論及する。特に、研究者としての教師が自らの授業実践を研究・改善していくアクション・リサーチおよびそれを共同で行うメンタリング・リサーチについて、文献講読を中心とした論及を行う。アクション・リサーチは、そのバックグラウンドなる考え方が、知識論、ヒューマニスティック・サイコロジー、システム論等、多岐にわたり、第1版と比較しながら、教育におけるアクション・リサーチ研究の変遷から、今後の実践研究の方向性も論及する。中心となる文献は、The Sage Handbook of Educational Action Researchを用いる。また、必要に応じて関連する文献を講読する。評価は、出席、発表およびレポートによる総合評価を行う。

備考：研究共同校の教員との合同講義となる場合がある。

授業計画：

第1回：アクション・リサーチの背景(1)	第16回：アクション・リサーチの実際(4)
第2回：アクション・リサーチの背景(2)	第17回：アクション・リサーチの実際(5)
第3回：実践としての参加型アクション・リサーチ(1)	第18回：アクション・リサーチのためのスキル(1)
第4回：実践としての参加型アクション・リサーチ(2)	第19回：アクション・リサーチのためのスキル(2)
第5回：批判的理論とアクション・リサーチ(1)	第20回：アクション・リサーチのためのスキル(3)
第6回：批判的理論とアクション・リサーチ(2)	第21回：アクション・リサーチのためのスキル(4)
第7回：システム思考とアクション・リサーチ(1)	第22回：アクション・リサーチのためのスキル(5)
第8回：システム思考とアクション・リサーチ(2)	第23回：アクション・リサーチのためのスキル(6)
第9回：社会的構成主義とアクション・リサーチ(1)	第24回：反省的实践を教えること(1)
第10回：社会的構成主義とアクション・リサーチ(2)	第25回：反省的实践を教えること(2)
第11回：倫理とアクション・リサーチ(1)	第26回：アクションリサーチャーの教育(1)
第12回：倫理とアクション・リサーチ(2)	第27回：アクションリサーチャーの教育(2)
第13回：アクション・リサーチの実際(1)	第28回：メンタリングとアクション・リサーチ(1)
第14回：アクション・リサーチの実際(2)	第29回：メンタリングとアクション・リサーチ(2)
第15回：アクション・リサーチの実際(3)	第30回：メンタリングとアクション・リサーチ(3)

教育実践学演習（２）

浅田 匡

教育実践学が研究対象とする、教師の知識研究、教師の信念研究、教師の思考様式、など教師の思考過程に関して、マネジメント学習、教育、発達の観点から論及し、これからの教師及び授業研究の研究課題を探究する。また、学校においてはスクールリーダーシップが求められ、特にスクールリーダーの育成が急務である。

学校におけるリーダーシップに関しても学習や発達の観点から考察する。さらに、ICT 技術の活用と学習、発達、教育との関係をマネジメントの視点から論及する。基本文献は、The Sage Handbook of Management Learning, Education, and Development を用いる。必要に応じて関連する文献を講読する。評価は、出席、発表およびレポートによる総合評価を行う。

備考:学校との共同講義を一部取り入れ、小学校の教員との合同講義となる場合がある。また、これらの論考に基づき、共同校の問題解決プログラムの開発などと連携する場合がある。

授業計画:

第 1 回：マネジメントの学習、教育と発達(1)	第16回：教室における IT(2)
第 2 回：マネジメントの学習、教育と発達(2)	第17回：遠隔学習と Web-based Learning(1)
第 3 回：経験学習の理論(1)	第18回：遠隔学習と Web-based Learning(2)
第 4 回：経験学習の理論(2)	第19回：学習中心のコースデザイン(1)
第 5 回：経験学習の理論(3)	第20回：学習中心のコースデザイン(2)
第 6 回：集団学習と知識の転移(1)	第21回：コーチングとメンタリング(1)
第 7 回：集団学習と知識の転移(2)	第22回：コーチングとメンタリング(2)
第 8 回：リフレクションと組織リフレクション(1)	第23回：コーチングとメンタリング(3)
第 9 回：リフレクションと組織リフレクション(2)	第24回：問題をベースとした学習のアプローチ
第10回：協調学習(1)	第25回：プロジェクトをベースとした学習のアプローチ
第11回：協調学習(2)	第26回：アクション・ラーニング(1)
第12回：リーダーの育成(1)EQ と Emotional Skills	第27回：アクション・ラーニング(2)
第13回：リーダーの育成(2)EQ と Emotional Skills	第28回：リーダーシップ開発の枠組み(1)
第14回：リーダーの育成(3)EQ と Emotional Skills	第29回：リーダーシップ開発の枠組み(2)
第15回：教室における IT(1)	第30回：まとめ

情報意味論演習（１）

岩坪 秀一

アンケート調査の集計結果及び入学試験成績データについて本来の評価目的を達成できなかった例をいくつか取り上げ、その欠点がどこにあったか探るための統計的方法を示し、改善の指針を与える。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第 1 回：演習の概要と進め方	第16回：事例研究(3) (テスト項目の信頼性)
第 2 回：輪読(1) (意味と情報)	第17回：事例研究(4) (テスト項目の信頼性)
第 3 回：輪読(2) (意味と情報)	第18回：事例研究(5) (調査項目の妥当性)
第 4 回：輪読(3) (情報の偏り)	第19回：事例研究(6) (調査項目の妥当性)
第 5 回：輪読(4) (情報の偏り)	第20回：事例研究(7) (調査項目の妥当性)
第 6 回：輪読(5) (調査法)	第21回：事例研究(8) (調査項目の妥当性)
第 7 回：輪読(6) (調査法)	第22回：事例研究(9) (調査項目の信頼性)
第 8 回：輪読(7) (サンプリング)	第23回：事例研究(10) (調査項目の信頼性)
第 9 回：輪読(8) (サンプリング)	第24回：事例研究(11) (調査の設計)
第10回：輪読(9) (調査項目の設計)	第25回：事例研究(12) (調査の設計)
第11回：輪読(10) (調査項目の設計)	第26回：事例研究(13) (調査票作成)
第12回：輪読(11) (調査分析法)	第27回：事例研究(14) (調査票作成)

第13回：輪読(12) (調査分析法)	第28回：事例研究(15) (調査データの収集)
第14回：事例研究(1) (テスト項目の妥当性)	第29回：事例研究(16) (調査データの分析)
第15回：事例研究(2) (テスト項目の妥当性)	第30回：レポート課題と解説

情報意味論演習(2)

岩坪 秀一

情報意味論(1)に基づいて、実際にアンケート調査を計画、実施し、その統計的分析結果から調査票の評価を行う。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第1回：演習の概要と進め方	第16回：実習(13) (予備調査2データの分析結果の検討)
第2回：輪読(1) (調査法)	第17回：実習(14) (調査項目改定)
第3回：輪読(2) (調査分析法)	第18回：実習(15) (調査項目決定)
第4回：実習(1) (調査設計)	第19回：実習(16) (本調査の準備)
第5回：実習(2) (調査設計)	第20回：実習(17) (本調査の実施)
第6回：実習(3) (調査項目作成)	第21回：実習(18) (本調査データの編集)
第7回：実習(4) (調査項目作成)	第22回：実習(19) (本調査データの分析)
第8回：実習(5) (予備調査1)	第23回：実習(20) (本調査データの分析)
第9回：実習(6) (予備調査1データの分析)	第24回：実習(21) (本調査データ分析結果の検討)
第10回：実習(7) (予備調査1データの分析結果の検討)	第25回：実習(22) (本調査データ分析結果の検討)
第11回：実習(8) (調査項目改定)	第26回：実習(23) (本調査データ分析結果の検討)
第12回：実習(9) (調査項目案1作成)	第27回：実習(24) (報告書作成)
第13回：実習(10) (予備調査2の準備)	第28回：実習(25) (報告書作成)
第14回：実習(11) (予備調査2の実施)	第29回：反省と課題
第15回：実習(12) (予備調査2データの分析)	第30回：レポート課題と解説

情報コミュニケーション科学演習(1)

金子 孝夫

コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを目指し、マルチメディア教育の方法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、演習(2)の授業計画との間で、授業の順番を入れかえることがある。

成績評価基準:授業中の発表と実習のレポートにより評価する。

授業計画:

第1回：演習の内容紹介、自己紹介、担当決めなど	第16回：実習(Flashコンテンツの作成)
第2回：実験室の見学 など	第17回：実習課題(1)の発表と提出
第3回：輪読(1)	第18回：実習課題(1)の発表と提出
第4回：輪読(2)	第19回：住まいの概略設計(1)
第5回：輪読(3)	第20回：住まいの概略設計(2)

第6回：輪読(4)	第21回：輪読(7)
第7回：輪読(5)	第22回：実習課題(2)の提示
第8回：輪読(6)	第23回：輪読(8)
第9回：実験課題(1)の提示	第24回：実習(住まいの概略設計)
第10回：実験課題(1)の提示	第25回：輪読(9)
第11回：実習(Flash コンテンツの作成)	第26回：実習(住まいの概略設計)
第12回：実習(Flash コンテンツの作成)	第27回：輪読(10)
第13回：実習(Flash コンテンツの作成)	第28回：実習(住まいの概略設計)
第14回：実習(Flash コンテンツの作成)	第29回：実習課題(2)の発表と提出
第15回：実習(Flash コンテンツの作成)	第30回：実習課題(2)の発表と提出

情報コミュニケーション科学演習(2)

金子 孝夫

コンピュータメディアとしてのテキスト・音声・画像・アニメーションなどのマルチメディア情報を活用して、コミュニケーションネットワークを介して複合コンテンツを発信・受信することで、高等教育、モバイルサービス、広告サービスなどを支援することができる。そこで、効果的な高等教育や各種サービスなどを旨とし、マルチメディアコンテンツの活用法とその効果について実験・調査検討を行う。なお、演習(1)の授業計画との間で授業の順番を入れかえることがある。

成績評価基準:授業中の発表と実習のレポートにより評価する。

授業計画:

第1回：授業ガイダンス	第16回：研究テーマの決定
第2回：研究テーマの相談	第17回：研究テーマに関する実験調査(1)
第3回：輪読(1)	第18回：研究テーマに関する実験調査(2)
第4回：輪読(2)	第19回：研究テーマに関する実験調査(3)
第5回：進路に関する懇談会	第20回：研究テーマに関する実験調査(4)
第6回：進路に関する懇談会	第21回：論文形式のレポート作成(1)
第7回：輪読(3)	第22回：論文形式のレポート作成(2)
第8回：輪読(4)	第23回：論文形式のレポート作成(3)
第9回：輪読(5)	第24回：論文形式のレポート提出
第10回：輪読(6)	第25回：発表用スライドの作成(1)
第11回：輪読(7)	第26回：発表用スライドの作成(2)
第12回：輪読(8)	第27回：発表用スライドの作成(3)
第13回：研究内容の検討(1)	第28回：発表用スライドの提出
第14回：研究内容の検討(2)	第29回：発表会(1)
第15回：研究内容の検討(3)	第30回：発表会(2)

ネットワーク情報システム学演習(1)

金 群

情報処理の基礎理論および高度な応用技術について学ぶ。人間中心のネットワーク情報システムをテーマに、(1)ネットワーク情報システムの基盤をなすデータベースの応用技術、(2)利用者の振る舞いに適応するユーザ・インターフェース、(3)誰もが簡単に利用できる安全・安心な情報環境、(4)人間中心の Web 情報探索と共有活用、(5)高度な情報通信技術によるeラーニング支援環境の構築などを、受講生の関心と興味に

応じて一部選択し、取り上げる。そして、これらのネットワーク情報システムに関する新たなモデル手法とフレームワーク、構築法などを紹介しながら、具体例を通して、研究遂行上必要な基礎知識と関連する基盤技術および問題発見・解決力を習得させる。

教科書:とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。

参考文献:授業中に紹介する。

成績評価基準:課題レポートなどによる。

授業計画:

第1回: イントロダクション1(前期授業の概要と進め方)	第16回: イントロダクション2(後期授業の概要と進め方)
第2回: データベース応用技術(1)	第17回: Web 情報探索と共有活用(1)
第3回: データベース応用技術(2)	第18回: Web 情報探索と共有活用(2)
第4回: データベース応用技術(3)	第19回: Web 情報探索と共有活用(3)
第5回: ユーザ・インターフェース技術(1)	第20回: e-ラーニング支援技術(1)
第6回: ユーザ・インターフェース技術(2)	第21回: e-ラーニング支援技術(2)
第7回: ユーザ・インターフェース技術(3)	第22回: e-ラーニング支援技術(3)
第8回: 前期中間まとめ・討論会	第23回: 後期中間まとめ・討論会
第9回: 安全・安心な情報環境(1)	第24回: 情報システム技術の最新動向と展望(1)
第10回: 安全・安心な情報環境(2)	第25回: 情報システム技術の最新動向と展望(2)
第11回: 安全・安心な情報環境(3)	第26回: 情報システム技術の最新動向と展望(3)
第12回: 輪読・討論会(1)	第27回: 輪読・討論会(1)
第13回: 輪読・討論会(2)	第28回: 輪読・討論会(2)
第14回: 輪読・討論会(3)	第29回: 輪読・討論会(3)
第15回: 前期総まとめ・討論会	第30回: 後期総まとめ・討論会

ネットワーク情報システム学演習(2)

金 群

サービス・コンピューティングなど最新のネットワーク技術について学ぶ。コンピュータと人間が協調できるネットワーク情報システムをテーマに、(1)情報を分散して蓄積、管理、利用するための分散データベース技術、(2)何時でも何処でも誰もがアクセスできるユビキタス・ネットワーク環境とそれを利用した知識情報共有・活用支援、(3)ライフタイムにわたる情報マネジメント、(4)時間・空間を越えたコラボレーションを円滑にするグループウェア技術とそれを利用した協調作業支援、(5)情報弱者を含む多様な利用者を対象とした Web サービス・ユニバーサルサービスなどを、受講生の関心と興味に応じて一部選択し、取り上げる。そして、これらのネットワーク情報システムに関する最新の技術動向と展望を紹介しながら、具体的な実現を通して、研究遂行上必要な要素技術と研究方法論を習得させる。

教科書:とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。

参考文献:授業中に紹介する。

成績評価基準:課題レポートなどによる。

授業計画:

第1回: イントロダクション1(前期授業の概要と進め方)	第16回: イントロダクション2(後期授業の概要と進め方)
第2回: 分散データベース技術(1)	第17回: グループウェア技術と協調作業支援(1)

第3回：分散データベース技術(2)	第18回：グループウェア技術と協調作業支援(2)
第4回：分散データベース技術(3)	第19回：グループウェア技術と協調作業支援(3)
第5回：ユビキタス・ネットワーク技術(1)	第20回：ユニバーサル Web サービス(1)
第6回：ユビキタス・ネットワーク技術(2)	第21回：ユニバーサル Web サービス(2)
第7回：ユビキタス・ネットワーク技術(3)	第22回：ユニバーサル Web サービス(3)
第8回：前期中間まとめ・討論会	第23回：後期中間まとめ・討論会
第9回：情報マネジメント(1)	第24回：ネットワーク技術の最新動向と展望(1)
第10回：情報マネジメント(2)	第25回：ネットワーク技術の最新動向と展望(2)
第11回：情報マネジメント(3)	第26回：ネットワーク技術の最新動向と展望(3)
第12回：輪読・討論会(1)	第27回：輪読・討論会(1)
第13回：輪読・討論会(2)	第28回：輪読・討論会(2)
第14回：輪読・討論会(3)	第29回：輪読・討論会(3)
第15回：前期総まとめ・討論会	第30回：後期総まとめ・討論会

インストラクショナルデザイン論演習(1)

向後 千春

インストラクショナルデザインの領域において有意義な研究をするための基礎を身につけます。前期には、この領域における自分のテーマを設定し、先行研究のサーベイ、研究計画の立案をします。後期には、研究計画に基づいて、研究を実施し、研究レポートを作成します。「インストラクショナルデザイン論演習(2)」との同時受講はできません。最終的にはミニ修論(1,000字×30ページ以上)を作成します。なお、本授業は、週ごとに教室での実習とオンデマンド授業が交代します。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、ミニ修論を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：(教室授業)授業の進め方	第16回：(教室授業)研究実施へのオリエンテーション
第2回：(コースナビ)テーマを探す	第17回：(コースナビ)研究実施の準備
第3回：(教室授業)テーマを探す	第18回：(教室授業)研究実施の準備
第4回：(コースナビ)先行研究を探す	第19回：(コースナビ)研究の実施とデータ収集(1)
第5回：(教室授業)先行研究を探す	第20回：(教室授業)研究の実施とデータ収集(1)
第6回：(コースナビ)序論を書く	第21回：(コースナビ)研究の実施とデータ収集(2)
第7回：(教室授業)序論を書く	第22回：(教室授業)研究の実施とデータ収集(2)
第8回：(コースナビ)方法を書く	第23回：(コースナビ)データ整理と統計処理
第9回：(教室授業)方法を書く	第24回：(教室授業)データ整理と統計処理
第10回：(コースナビ)予備研究の実施	第25回：(コースナビ)ミニ修論作成(1)
第11回：(教室授業)予備研究の実施	第26回：(教室授業)ミニ修論作成(1)
第12回：(コースナビ)結果と考察を書く	第27回：(コースナビ)ミニ修論作成(2)
第13回：(教室授業)結果と考察を書く	第28回：(教室授業)ミニ修論作成(2)
第14回：(コースナビ)発表する	第29回：(コースナビ)プレゼンテーション
第15回：(教室授業)発表する	第30回：(教室授業)プレゼンテーション

インストラクショナルデザイン論演習(2)

向後 千春

インストラクショナルデザイン論演習(1)に引き続き、各自のテーマにあわせて修士論文レベルの研究を指導

します。「インストラクショナルデザイン論演習(1)」の履修を条件とします。最終的には修論(1,000字×80ページ以上)を作成します。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、修論を総合的に評価する。

授業計画:

第1回:(教室授業)授業の進め方	第16回:(教室授業)研究実施へのオリエンテーション
第2回:(コースナビ)テーマを探す	第17回:(コースナビ)研究実施の準備
第3回:(教室授業)テーマを探す	第18回:(教室授業)研究実施の準備
第4回:(コースナビ)先行研究を探す	第19回:(コースナビ)研究の実施とデータ収集(1)
第5回:(教室授業)先行研究を探す	第20回:(教室授業)研究の実施とデータ収集(1)
第6回:(コースナビ)序論を書く	第21回:(コースナビ)研究の実施とデータ収集(2)
第7回:(教室授業)序論を書く	第22回:(教室授業)研究の実施とデータ収集(2)
第8回:(コースナビ)方法を書く	第23回:(コースナビ)データ整理と統計処理
第9回:(教室授業)方法を書く	第24回:(教室授業)データ整理と統計処理
第10回:(コースナビ)予備研究の実施	第25回:(コースナビ)修論作成(1)
第11回:(教室授業)予備研究の実施	第26回:(教室授業)修論作成(1)
第12回:(コースナビ)結果と考察を書く	第27回:(コースナビ)修論作成(2)
第13回:(教室授業)結果と考察を書く	第28回:(教室授業)修論作成(2)
第14回:(コースナビ)発表する	第29回:(コースナビ)プレゼンテーション
第15回:(教室授業)発表する	第30回:(教室授業)プレゼンテーション

情報コミュニケーション技術論演習(1)

スコット ダグラス

This seminar's theme is "information and communication technologies." In the first semester, we look at the many ways people communicate, including face-to-face, telephone, email, computer and video conferencing. Topics of interest include cell phone use by Japanese young people, Internet-based communications by American college students, and gender differences in the use of communication technologies. Students read one or more articles each week and discuss them in class. Compared with traditional lecture courses, students a greater responsibility to be prepared for every class so they can actively participate in discussions.

This seminar is taught in English, and all readings, homework, and theses are done in English. Students should have TOEIC scores of 600+ and above to function effectively in this class. Students interested in studying the English language or linguistics should select a different seminar.

Textbook: Materials will be provided.

Grading Method: Grades are based on attendance, participation, homework, and writing assignments.

A Class Plan:

1. Introduction, course overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	16. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
2. Introduction, course overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	17. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).

3. Introduction to communication technologies.	18. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
4. Introduction to communication technologies.	19. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
5. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	20. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
6. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	21. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
7. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	22. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
8. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	23. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
9. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	24. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
10. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	25. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
11. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	26. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
12. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	27. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
13. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	28. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).
14. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	29. Semester summary and Fall semester planning.
15. Read this week's article and discuss the main points as a group (topic and article to be announced in class).	30. Semester summary and Fall semester planning.

情報コミュニケーション技術論演習（２）

スコット ダグラス

In the second semester, students will prepare for their graduation thesis by doing background research on a

topic related to communication technologies, usually one of the topics covered during the first semester. This preliminary work forms the basis of their graduation thesis.

This seminar is taught in English, and all readings, homework, and theses are done in English. Students should have TOEIC scores of 600+ and above to function effectively in this class. Students interested in studying the English language or linguistics should select a different seminar.

Textbook: Materials will be provided.

Grading Method: Grades are based on attendance, participation, homework, and written assignments.

A Class Plan:

1. Introduction, semester overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	16. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
2. Introduction, semester overview, and activities. The following schedule is intentionally vague. Course topics and articles change each year. Detailed information will be provided at the start of the semester.	17. Academic paper writing: Citations and references.
3. Introduction to the individual research project.	18. Academic paper writing: Citations and references.
4. Introduction to the individual research project.	19. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
5. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	20. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
6. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	21. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
7. Introduction to academic paper writing.	22. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
8. Introduction to academic paper writing.	23. Academic paper writing: Methods section.
9. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	24. Academic paper writing: Methods section.
10. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	25. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
11. Academic paper writing: Outlining and paragraph structure.	26. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
12. Academic paper writing: Outlining and paragraph structure.	27. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
13. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	28. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.
14. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	29. Course summary & graduation thesis planning.
15. Review project progress as a group. Group discussion on topics related to these themes.	30. Course summary & graduation thesis planning.

教育情報工学演習（１）

永岡 慶三

eテストについて、教科書「植野、永岡(2008)『eテスト』、培風館」を基本に輪講を行う。eテストの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更、調整する場合がある。教育情報工学演習(2)と連動して行う。

成績評価基準:授業への出席、要約報告・質疑応答の協議への参加の度合より評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：eテストと標準化2
第2回：基本講義	第17回：eテストと標準化3
第3回：eテストの概要1	第18回：討議
第4回：eテストの概要2	第19回：論述式項目の自動採点1
第5回：eテストの概要3	第20回：論述式項目の自動採点2
第6回：討議	第21回：論述式項目の自動採点3
第7回：テスト理論1	第22回：討議
第8回：テスト理論2	第23回：自動作問技術1
第9回：テスト理論3	第24回：自動作問技術2
第10回：討議	第25回：自動作問技術3
第11回：適応型テスト1	第26回：演習1
第12回：適応型テスト2	第27回：演習2
第13回：適応型テスト3	第28回：特別講究
第14回：討議	第29回：総合討議
第15回：eテストと標準化1	第30回：確認テストと講評

教育情報工学演習（２）

永岡 慶三

eテストについて、教科書「植野、永岡(2008)『eテスト』、培風館」を基本に輪講を行う。eテストの基本原理や具体システムについて、要約報告・質疑応答により討議・演習を行う。履修者人数により内容は変更、調整する場合がある。教育情報工学演習(1)と連動して行う。

成績評価基準:授業への出席、要約報告・質疑応答の協議への参加の度合より評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第16回：英語検定におけるeテスト2
第2回：基本講義	第17回：英語検定におけるeテスト3
第3回：多様なテスト履歴データの分析手法1	第18回：討議
第4回：多様なテスト履歴データの分析手法2	第19回：eラーニングとeテスト1
第5回：多様なテスト履歴データの分析手法3	第20回：eラーニングとeテスト2
第6回：討議	第21回：eラーニングとeテスト3
第7回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析1	第22回：eラーニングとeテスト4
第8回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析2	第23回：eラーニングとeテスト5
第9回：大学入試センターのテストデータベースによる項目分析3	第24回：演習1

第10回：討議	第25回：演習2
第11回：人事測定とeテスト1	第26回：演習3
第12回：人事測定とeテスト2	第27回：特別講究1
第13回：人事測定とeテスト3	第28回：特別講究2
第14回：討議	第29回：総合討論
第15回：英語検定におけるeテスト1	第30回：確認テストと講評

インターネット科学演習（1）

西村 昭治

インターネットの仕組みおよびインターネット上の様々なサービスに解説する。受講者は、演習課題として実際に様々なサービスを利用しつつ、有効な活用法を模索し、新たなサービスに関して考察を行う。演習課題の成果により評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス(1)：科目の目的	第16回：前期復習
第2回：ガイダンス(2)：授業実施方法等	第17回：後期ガイダンス
第3回：インターネットに関する各種統計(1)	第18回：インターネット上のサービス(5) ：メタバース
第4回：実習：インターネットに関する各種統計の調査(1)	第19回：実習：メタバースに関する調査
第5回：インターネットに関する各種統計(2)	第20回：インターネット上のサービス(6)：Ajax
第6回：実習：インターネットに関する各種統計の調査(2)	第21回：実習：Ajaxに関する調査
第7回：インターネット上のサービス(1)：電子メール	第22回：インターネット上のサービス(7) ：Web API(1)
第8回：実習：電子メールプロトコルに関する調査	第23回：実習：Web API(Amazon)に関する調査
第9回：インターネット上のサービス(2)：WWW	第24回：インターネット上のサービス(8) ：Web API(2)
第10回：実習：WWWプロトコルに関する調査	第25回：実習：Web API(Google)に関する調査
第11回：インターネット上のサービス(3)：ファイル共有	第26回：インターネット上のサービス(9) ：Web API(3)
第12回：実習：ファイル共有に関する調査	第27回：実習：Web API(その他)に関する調査
第13回：インターネット上のサービス(4)：動画配信	第28回：インターネット上のサービス(10) ：Mash up
第14回：実習：動画配信に関する調査	第29回：実習：Mash upに関する調査
第15回：中間まとめ	第30回：まとめ

インターネット科学演習（2）

西村 昭治

インターネット科学演習(1)を受けて、インターネットの最新技術の解説をおこなう。受講者は演習課題として実際にインターネットの最新技術を活用したサービスを利用しつつ、有効な活用法を模索し、新たなサービスに関して考察を行う。演習課題の成果により評価する。受講者はインターネット科学演習(1)既習者に限定するとともに同時履修は認めない。

授業計画:

第1回: ガイダンス(1): 科目の目的	第16回: 前期復習
第2回: ガイダンス(2): 授業実施方法等	第17回: 後期ガイダンス
第3回: JavaScript 入門(1)	第18回: Amazon Web API(1)
第4回: 実習: JavaScript の基本(1)	第19回: 実習: Amazon Web API の活用(1)
第5回: JavaScript 入門(2)	第20回: Amazon Web API(2)
第6回: 実習: JavaScript の基本(2)	第21回: 実習: Amazon Web API の活用(2)
第7回: JavaScript 入門(3)	第22回: Zend Framework
第8回: 実習: JavaScript による Web API の活用	第23回: 実習: Zend Framework の基礎
第9回: PHP 入門(1)	第24回: Google Maps API
第10回: 実習: PHP の基本(1)	第25回: 実習: Google Maps API の活用
第11回: PHP 入門(2)	第26回: Google Data API
第12回: 実習: PHP の基本(2)	第27回: 実習: Google Data API の活用
第13回: PHP 入門(3)	第28回: Mash up
第14回: 実習: PHP による Web API の活用	第29回: 実習: 簡単な Mash up
第15回: 中間まとめ	第30回: まとめ

教育開発論演習(1)

野嶋 栄一郎

教え—学ぶ過程に関わるヒトと環境とそれらの接面に関するシステムについて講義及び討議を行う。通常このような分野は教育工学とよばれるが、より広く、教育に関する科学的研究を志向している。教育工学、教育心理学、教育測定学、認知心理学、教育学などの諸分野にまたがる内容となる。理論的中心課題、研究の方法論等、研究の核となる部分に関連するテーマが中心となる。特に人間科学としての教育工学の位置づけに、また人間科学とシステム理論の関連性に言及することを試みる。

成績評価基準:

- 1) レポートおよびそれに準じる提出物による評価
- 2) 授業中の質疑応答の質の評価

授業計画:

第1回: コトバと体験による教育	第16回: 授業評価の技法
第2回: 映像と教育	第17回: 指導と評価の一体化
第3回: 開かれた学習環境と能動的な学習活動	第18回: 学習活動の過程に在る評価
第4回: 学習過程としての科学的思考の発達	第19回: ヒトの行動と文脈
第5回: 理科の学習と創造性の教育	第20回: コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価(1)
第6回: 教育機器とコミュニケーション	第21回: コンピュータ利用の協同作業に及ぼすパートナーの顔画像の評価(2)
第7回: 放送教育と学習過程	第22回: ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係(1)
第8回: 教育評価の理論的基礎(1)	第23回: ヒトとヒトが対峙する関係とコンピュータとヒトの関係(2)
第9回: 教育評価の理論的基礎(2)	第24回: メディアと教育測定(1)

第10回：教育評価の理論的基礎(3)	第25回：メディアと教育測定(2)
第11回：教育評価の理論的基礎(4)	第26回：メディアと教育測定(3)
第12回：教育評価で人を育てる(1)	第27回：オープン教育と学習活動の測定(1)
第13回：教育評価で人を育てる(2)	第28回：オープン教育と学習活動の測定(2)
第14回：教育評価で人を育てる(3)	第29回：オープン教育と学習活動の測定(3)
第15回：評価で授業を改善するー総論	第30回：エスノメソドロジーによる社会的相互交渉の分析

教育開発論演習（2）

野嶋 栄一郎

教育開発論演習(1)は、比較的、基礎的、理論的色彩が強いが、ここでは演習(1)をベースに、データや開発課題を眼前にした、具体的な課題提供を試みる。カリキュラム開発と評価、教材開発と評価、教授＝学習過程に関わる実践的研究、コンピュータネットワークを前提とした新しい学習環境の開発研究、マルチメディアの教育効果、教育実践に関わる測定と評価等柔軟性に富んだテーマ設定を試みる。

成績評価基準：

1) レポートおよびそれに準じる提出物による評価

2) 授業中の質疑応答の質の評価

授業計画：

第 1 回：学業成績固定要因の分析	第16回：アクトメータシステムの開発とオープンスペースの学習行動の評価(1)
第 2 回：藤田論文(1975)の検討(1)	第17回：アクトメータシステムの開発とオープンスペースの学習行動の評価(2)
第 3 回：藤田論文(1975)の検討(2)	第18回：アクトメータシステムの開発とオープンスペースの学習行動の評価(3)
第 4 回：岸・野嶋論文(2007)の検討(1)	第19回：アクトメータシステムの開発とオープンスペースの学習行動の評価(4)
第 5 回：岸・野嶋論文(2007)の検討(2)	第20回：アクトメータシステムの開発とオープンスペースの学習行動の評価(5)
第 6 回：多重対問形式を利用した形成的評価(1)	第21回：研究のデザインと改善・評価(1)
第 7 回：多重対問形式を利用した形成的評価(2)	第22回：研究のデザインと改善・評価(1)
第 8 回：S-P 表による授業の分析と評価(1)	第23回：研究のデザインと改善・評価(2)
第 9 回：S-P 表による授業の分析と評価(2)	第24回：研究のデザインと改善・評価(2)
第10回：S-P 表による授業の分析と評価(3)	第25回：研究のデザインと改善・評価(3)
第11回：S-P 表による授業の分析と評価(4)	第26回：研究のデザインと改善・評価(3)
第12回：野嶋・高橋論文(1987)によるマイクロティーチングの評価(1)	第27回：研究のデザインと改善・評価(4)
第13回：野嶋・高橋論文(1987)によるマイクロティーチングの評価(2)	第28回：研究のデザインと改善・評価(4)
第14回：野嶋・高橋論文(1987)によるマイクロティーチングの評価(3)	第29回：研究のデザインと改善・評価(5)
第15回：野嶋・高橋論文(1987)によるマイクロティーチングの評価(4)	第30回：研究のデザインと改善・評価(5)

教育コミュニケーション学演習（１）

保崎 則雄

学校での教育活動、教科活動、教科外活動において、人、言語、アーティファクトが学習者、教員のコミュニケーション力を育成するために、どのような役割、機能を果たしているのか、果たすべきなのかということを研究する。具体的には、言語活動の重要性、学習対象語であり教室言語である英語の在り方、学校教育／社内教育などにおけるメディア使用などについても検討する。

また、ワークショップ型の学び、フィールドトリップの教育機能、情報館としての図書館の機能、ZPD, SL などについても必要に応じて触れる。

受講生は、関連分野の書籍、論文を輪読しつつ、現実の教育現場に存在（不存在）するコミュニケーション過程の改善について考察を深める。

成績評価基準:レポート、発表、ディスカッション、自己評価を総合的に判断する。

授業計画: (学校ボランティア活動を春学期から開始の予定)

第1回：研究課題の紹介と学校ボランティア活動の報告とディスカッション(春学期中継続)	第16回：小学校英語活動の歴史的俯瞰1
第2回：研究課題の紹介と学校ボランティア活動の報告とディスカッション(継続)	第17回：小学校英語活動の歴史的俯瞰2
第3回：研究課題の絞り込みと文献紹介(データ収集と分析)	第18回：小中学校連携の教育について考える1
第4回：研究課題の絞り込み(継続)と文献検索の方法	第19回：小中学校連携の教育について考える2
第5回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告1	第20回：中高等学校連携の教育について考える1
第6回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告2	第21回：中高等学校連携の教育について考える2
第7回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告3	第22回：幼稚園から社会人につながる英語教育について考える
第8回：研究課題に絡んだ文献の輪読と報告4	第23回：「今、コミュニケーション教育に何が問われているのか」
第9回：研究課題につながる研究計画書の作成指導と輪読(継続)	第24回：メディア教育研究へつなげるために
第10回：研究課題につながる研究計画書の作成指導と輪読(継続)	第25回：言語教育研究へつなげるために1
第11回：研究計画書に基づく研究推進と輪読(継続)	第26回：言語教育研究へつなげるために2
第12回：研究計画書に基づく研究推進(輪読は継続)	第27回：研究課題の進捗状況の報告1
第13回：研究計画書に基づく研究推進(輪読は継続)	第28回：研究課題の進捗状況の報告2
第14回：研究計画書に基づく研究推進(輪読は継続)	第29回：研究課題の進捗状況の報告3
第15回：研究計画書の書き方	第30回：授業のまとめと評価

教育コミュニケーション学演習（２）

保崎 則雄

受講生の研究課題を中心に、修論作成に向けての指導が中心となる。その過程で国内外における関連学会での発表を義務づける。論文作成にあたっては、「APA 論文作成マニュアル」を参考にする。

成績評価基準:レポート、発表、ディスカッション、自己評価を総合的に判断する。

授業計画:(秋学期は video conference, face-to-face, on-demand の併用の予定)

第 1 回：研究計画書の修正とディスカッション	第16回：「教育メディア研究」から読み取る1
第 2 回：文献輪読とディスカッション	第17回：「教育メディア研究」から読み取る2
第 3 回：文献輪読とディスカッション	第18回：「TESOL Quarterly」から読み取る1
第 4 回：文献輪読とディスカッション	第19回：「TESOL Quarterly」から読み取る2
第 5 回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第20回：「TESOL Quarterly」から読み取る3
第 6 回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第21回：「Language Ed. & Technology」から読み取る1
第 7 回：文献輪読とディスカッション、学会誌発表論文の作成	第22回：「Language Ed. & Technology」から読み取る2
第 8 回：文献輪読とディスカッション	第23回：「Language Ed. & Technology」から読み取る3
第 9 回：文献輪読とディスカッション	第24回：教育研究の現状の紹介1
第10回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第25回：教育研究の現状の紹介2
第11回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第26回：教育研究のあり方
第12回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第27回：修士論文の進捗状況の報告1
第13回：文献輪読とディスカッション、修論の研究計画	第28回：修士論文の進捗状況の報告2
第14回：文献輪読とディスカッション	第29回：修士論文の進捗状況の報告3
第15回：修論作成への個別指導	第30回：授業のまとめと評価

情報メディア教育論演習（１）

森田 裕介

情報メディアを活用した教育の一つとして、オンデマンド・コンテンツの利用があげられる。本演習では、オンデマンドコンテンツの作成から配信まで、すべてを一人で行うための基礎的な技能を習得する。まず、サーバの構築の演習を行う。OS は Linux とし、コマンドの復習からストリーミングサーバの構築までを実施する。次に、オンライン学習コンテンツの開発を実施する。ネットワークに関する基礎的な知識をベースとして、映像教材の開発を行う。続いて、学習管理システムに関する演習を行う。ここでは Moodle などフリーの LMS (Learning Management System) を取り上げる。最後に、オンライン学習の評価に関する演習を行う。立体視の特性、立体映像と視覚負担に関する基礎知識を習得する。次に、立体映像の撮影を行うとともにインターネット上に配信するための技能を習得する。

成績評価基準:授業中の小課題と作品制作によって行う。

授業計画:

第 1 回：導入	第16回：オンライン学習コンテンツの開発（７）： 動画・音声の配信実験
第 2 回：サーバの構築(1):Linux のインストール	第17回：オンライン学習コンテンツの開発（８）： オーサリングツールの活用

第3回：サーバの構築(2):コマンド	第18回：オンライン学習コンテンツの開発(9): オーサリングツールによる同期
第4回：サーバの構築(3):Web サーバ	第19回：オンライン学習コンテンツの開発(10): Web サーバとストリーミングサーバの活用
第5回：サーバの構築(4):ファイル共有	第20回：オンライン学習コンテンツの開発(11): 学習コンテンツの配信実験
第6回：サーバの構築(5):ストリーミング・サーバ のインストール	第21回：学習管理システム(1): 学習管理システムの実際
第7回：サーバの構築(6):ストリーミング・サーバの 設定	第22回：学習管理システム(2): オンライン学習の実際
第8回：ネットワーク映像配信(1):動画配信とUDP	第23回：学習管理システム(3):学習履歴
第9回：ネットワーク映像配信(2): 映像のエンコードとデコード	第24回：学習管理システム(4):学習支援方法
第10回：オンライン学習コンテンツの開発(1): サンプル紹介	第25回：学習管理システム(5):BBS による討議
第11回：オンライン学習コンテンツの開発(2): 設計と計画	第26回：学習管理システム(6):Blog
第12回：オンライン学習コンテンツの開発(3): 動画撮影	第27回：オンライン学習の評価(1):システム
第13回：オンライン学習コンテンツの開発(4): キャプチャとノンリニア編集	第28回：オンライン学習の評価(2):コンテンツ
第14回：オンライン学習コンテンツの開発(5): 特殊効果	第29回：オンライン学習の評価(3):学習支援
第15回：オンライン学習コンテンツの開発(6): エンコーディング	第30回：まとめ

情報メディア教育論演習（2）

森田 裕介

情報メディアを活用した教育の一つとして、バーチャルリアリティ教材の作成を行う。まず、コンピュータグラフィックスの基礎を学び、プリミティブの配置、マテリアル、テクスチャマッピング、カメラの配置、ライティングなどを習得する。続いて、VR 空間の立体映像表示を試みる。

成績評価基準:授業中の小課題と作品制作によって行う。

授業計画:

第1回：導入	第16回：立体映像の編集(9): 立体映像のエンコーディング
第2回：立体映像教材の基礎(1):奥行き感と立体 映像	第17回：コンピュータ・グラフィックスの基礎(1):ソ フトウェア
第3回：立体映像教材の基礎(2):両眼立体情報	第18回：コンピュータ・グラフィックスの基礎(2):モ デリング
第4回：立体映像教材の基礎(3):奥行き感度	第19回：コンピュータ・グラフィックスの基礎(3):テ クスチャマッピング

第5回：立体映像教材の基礎(4)：立体視の特性	第20回：コンピュータ・グラフィックスの基礎(4)：アニメーション
第6回：立体映像教材の基礎(5)：立体映像と視覚負担	第21回：コンピュータ・グラフィックスの基礎(5)：特殊効果
第7回：立体映像教材の基礎(6)：立体ディスプレイ	第22回：CG教材の作成(1)：ソフトウェアの活用
第8回：立体映像の撮影(1)：カメラフォルダの取扱い	第23回：CG教材の作成(2)：モデリングの実際
第9回：立体映像の撮影(2)：デュアルカメラの特性	第24回：CG教材の作成(3)：テクスチャマッピングの実際
第10回：立体映像の撮影(3)：映像特性	第25回：CG教材の作成(4)：アニメーションの実際
第11回：立体映像の編集(4)：デュアルカメラ映像のノンリニア編集	第26回：CG教材の作成(5)：特殊効果の実際
第12回：立体映像の編集(5)：キャプチャ	第27回：仮想空間の構築(1)：CG教材の立体映像提示
第13回：立体映像の編集(6)：偏光式立体映像	第28回：仮想空間の構築(2)：インタラクティブ性
第14回：立体映像の編集(7)：裸眼式立体映像	第29回：仮想空間の構築(3)：デバイス
第15回：立体映像の編集(8)：液晶シャッター式立体映像	第30回：まとめ

【講義科目】

[地域・地球環境科学研究領域]

環境管理計画学特論 (偶数年度開講) 【2010年度休講】 天野 正博

地球環境問題のうち地球温暖化、熱帯林減少問題を取り上げ、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書を用いて、問題の実態を分析する。また、関連する国際条約文書を教材として取り上げ、こうした環境問題に対する人類の取り組みについて議論を行い、問題解決のための理解を深める。なお、地球温暖化の基礎知識、京都議定書の内容は既知のこととして講義を進めるので、学部講義「環境管理計画学」を履修していることが望ましい。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：授業の概要と進め方	第9回：IPCC 第4次報告書の輪読(8)
第2回：IPCC 第4次報告書の輪読(1)	第10回：気候変動枠組み条約の輪読と解説(1)
第3回：IPCC 第4次報告書の輪読(2)	第11回：気候変動枠組み条約の輪読と解説(2)
第4回：IPCC 第4次報告書の輪読(3)	第12回：気候変動枠組み条約の輪読と解説(3)
第5回：IPCC 第4次報告書の輪読(4)	第13回：京都議定書の輪読と解説(1)
第6回：IPCC 第4次報告書の輪読(5)	第14回：京都議定書の輪読と解説(2)
第7回：IPCC 第4次報告書の輪読(6)	第15回：確認テストと解説
第8回：IPCC 第4次報告書の輪読(7)	

地球生態学特論

太田 俊二

生態学は葉一枚のなかでの生物の動きから、地球規模の植物群系や純一次生産力の分布まで、さまざまな

空間スケールを理解する学問である。また、生物の分布や個体数が時間的にどのように変化してきているのかを探るため、時間スケールは数秒から数十年、ときには数万年単位に及ぶこともある。この講義では比較的大きな空間(地球規模)と長めの時間スケールで生物の生きていく姿を追いかけていこうと考えている。そのため気候学的な思考法について、また、生態学初学者向けに個体群動態などの時間変化の考え方についても講義する予定である。

成績評価基準:授業中の取り組みを直接評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス、概論	第9回: 生態系の構造と機能(1) 地球の物質生産
第2回: 個体間の相互作用と個体群(1) 種内競争と密度効果、自己間引き	第10回: 生態系の構造と機能(2) 物質生産と現存量の比、生物群集の多様性
第3回: 個体間の相互作用と個体群(2) ロトカ・ヴォルテラの捕食式、メタ個体群	第11回: 生態系の構造と機能(3) 生元素の循環
第4回: 個体間の相互作用と個体群(3) 個体群のサイクル変動とそのメカニズム	第12回: 生態系の構造と機能(4) エネルギー流、生態効率
第5回: 生物群集とその分布(1) 栄養段階と食物連鎖	第13回: 地球規模の生態学(1) 生態モデリング、炭素収支
第6回: 生物群集とその分布(2) 植物の環境形成作用と遷移、更新	第14回: 地球規模の生態学(2) 地表面の変化、熱収支
第7回: 生物群集とその分布(3) バイオーム	第15回: 地球環境システムのなかの生物の役割
第8回: 生物群集とその分布(4) 植生の変動と気候要因	

環境生態学特論

(奇数年度開講)

森川 靖

光合成植物の誕生は35億年前である。この植物は、無限にある太陽エネルギーを、水と二酸化炭素から化学エネルギー(有機物)に変換し、この有機物から始まる複雑な生態系を地球にもたらした。人類がこの生態系の一構成員であった時代は長く、人類は生態系の変化に対応して生存する他の動物とまったく変わりはなかった。しかし、文明を手にした人類は、森林を耕地、草地に変え、また化石燃料を利用することによって、地球大気に影響を与えるようになった。生態系の構造と機能、生態系への人為影響(酸性雨、熱帯林減少問題など)、人間生存に関わる環境と食糧などについて論議する。

履修にあたっては事前に相談すること。

講義はオンディマンドと併用する。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第1回: 講義の進め方	第9回: 人と食糧…先進国の肥満・途上国の飢餓問題
第2回: 生態系の構造と機能	第10回: 酸性雨と森林衰退問題…本当に酸性雨?
第3回: 物質と元素の循環	第11回: 熱帯林減少・その原因と再生…地域住民の利益が必要

第4回：生態系の汚染…汚染の発生原因と影響	第12回：二酸化炭素と森林の役割…森林は二酸化炭素の貯蔵庫だが
第5回：イースター島の教え…地球環境問題の縮図	第13回：京都議定書における森林の役割…森林の吸収にたよっているが
第6回：森と文明(古代～ローマ)…文明の前に森があり、文明の後に砂漠が残る森林	第14回：修士論文、テーマと内容
第7回：森と文明(大航海時代～植民地～近代)…白い金(砂糖)をめぐる	第15回：研究思想と方法論
第8回：日本の森林の変遷…古代になかったアカマツ林？	

環境社会学特論

(偶数年度開講)

鳥越 皓之

環境社会学についての専門性の高いレベルの方法論の検討をする。したがって、すでにこの分野についての学部での環境社会学以上の十分な研究史の知識と分析能力があることを受講の条件とする。また、すべての授業の出席を前提とする。自分で環境社会学的課題を見つけだし、現在の環境社会学の動向を踏まえて報告をすることが義務づけられる。

本年度は Tadashi Fukutake Japanese Rural Sociology を読む。この英文を読みながら、日本の村落組織について討議する。各人はこの本を古本などによって入手すること。

成績評価基準: 学生の報告内容によって行なう。

授業計画:

第1回：環境社会学の進め方と基本方針	第9回：グループ発表とディスカッション(4)
第2回：環境社会学概説(1)	第10回：グループ発表とディスカッション(5)
第3回：環境社会学概説(2)	第11回：グループ発表とディスカッション(6)
第4回：環境社会学史(1)	第12回：グループ発表とディスカッション(7)
第5回：環境社会学史(2)	第13回：最終レポートについて
第6回：グループ発表とディスカッション(1)	第14回：最終レポート討議
第7回：グループ発表とディスカッション(2)	第15回：環境社会学の課題と今後の可能性
第8回：グループ発表とディスカッション(3)	

民族誌学特論

(奇数年度開講)

矢野 敬生

「環境と文化」に関するモノグラフを素材にとりあげる。フィールドワークの成果としての民族誌を「書く」ことを念頭におきながら、モノグラフを「読む」ことを課題とする。文化人類学を専攻しない院生の受講も考慮して、一般的な和書(柿崎京一・矢野敬生他編2008『東アジア村落社会の基礎構造』御茶の水書房)をとりあげ、このうちから韓国と日本編を中心に専門的な Ethnography を読む予定である。

成績評価基準: 出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：講義ガイダンス	第9回：Prof. 柿崎「家と同族」
第2回：韓国桃李里モノグラフ概説	第10回：Prof. 矢野(晋)「農家労働力」
第3回：Prof. 文「家・家族」論	第11回：大沢「水利慣行」
第4回：Prof. 林「家口・チップ」論	第12回：Prof. 矢野「祭祀組織」

第5回：Prof.金「同族組織」	第13回：日本編のまとめ
第6回：Prof.韓「地域社会」	第14回：日本と韓国との比較
第7回：Prof.蘇「信仰」	第15回：各自の分担テーマのまとめ、批評
第8回：日本・瀬沢新田の概況	

人間環境変遷特論

井内 美郎

地球環境問題の自然科学的側面を理解するためには、地球システムの様々な側面を理解する必要がある。本講義では、地球を取り巻くエネルギーバランス、大気循環系、海洋循環系、固体地球、フィードバックシステムなどについて学ぶ。

成績評価基準：小テストおよび定期試験の結果を総合して評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンスおよび地球環境変動について	第9回：生物界—代謝、生態系、多様性—
第2回：デイジーワールド—システムのとらえ方—	第10回：地球の起源と生命
第3回：地球規模のエネルギーバランス—温室効果について—	第11回：生命活動の大気への影響—酸素とオゾンの発生—
第4回：大気循環系	第12回：長期的気候変動
第5回：海洋循環	第13回：地球の歴史における生物多様性
第6回：大気—海洋系のモデリング—	第14回：第四紀の氷河作用
第7回：固体地球における循環—プレートテクトニクス—	第15回：短期の気候変動・地球温暖化
第8回：元素循環—炭素循環—	

地域資源特論

柏 雅之

20世紀以降、化石資源に依存してきた先進工業諸国の農業生産のあり方は、今日大きな限界に突き当たろうとしている。地球・地域環境問題と化石資源の枯渇問題である。こうしたなかで、資源保全・循環型の持続的農業・地域システムの構築が求められている。本講義では、こうした問題の背景を明らかにするとともに、ローカルレベルでの取組みのあり方について理解を深めてもらう。ここでのキーワードは、「地球環境時代にふさわしい農の再定義の必要性」、「財政支出が投資効果を発揮する地域社会経済システムの構築」である。EU の先端的な政策システムや実践事例、わが国の萌芽的事例をととして問題解決への方角を考えられるようにしていく。

成績評価基準：レポート

授業計画：

第1回：食料・農業・環境問題の連関	第9回：農業政策の論理（価格政策）
第2回：世界の食料問題	第10回：農業政策の論理（構造政策）
第3回：日本の食料問題	第11回：日本農政の展開過程
第4回：世界の農業問題	第12回：欧州農政の展開過程
第5回：日本の農業問題	第13回：農政改革の論理（EU とアメリカ）
第6回：世界の農産物需給予測	第14回：農政改革の論理（日本）
第7回：エネルギーと農業問題	第15回：農村地域政策
第8回：物質循環と農業問題	

野生動物学特論

三浦 慎悟

野生動物の行動生態学のうちとくに生活史戦略と関連する個体群生態学を取り上げる。多様な行動や生活史をもつ鳥類や哺乳類を対象に、その社会構造、繁殖システム、個体群の動態と成長、生活史などの基礎的な知識を習得し、これらを基礎に個体群のモデル化とシミュレーションの方法、生活史分析法を学び、野生動物保全と管理への応用を試みる。野生動植物個体群の生活史と動態に興味と関心のある者が望ましい。成績評価は、一連の授業プログラムと課題の累積的な達成であるために、出席を最大限に重視する。

授業計画:

第1回：授業の概要とイントロダクション	第9回：個体群生態学の応用(2)
第2回：適応度と生活史	第10回：個体群生態学の応用(3)
第3回：生命表の解析	第11回：個体群生態学の応用(4)
第4回：生物個体群の構造と動態	第12回：適応度と個体群感度分析(1)
第5回：動物個体群のシミュレーション(1)	第13回：適応度と個体群感度分析(2)
第6回：動物個体群のシミュレーション(2)	第14回：適応度と個体群弾性度分析
第7回：動物個体群のシミュレーション(3)	第15回：確認テストと解説
第8回：個体群生態学の応用(1)	

開発援助実践学特論

天野 正博

先進国と途上国の間における南北問題を理解し、貧困問題が途上国側の努力だけでは解決できない現状において、どのような援助を先進国がすべきか、その概念と具体的な技術方法を習得することを目的としている。具体的には、農林業、環境分野の開発援助のあり方についての講義を受けた後、実際に国際協力機構(JICA)が実施している途上国の研修員向け授業を、途上国からの研修員と共に受講する。JICAでの授業を受けることにより、開発援助を实践するために必要な事項を分析し、望ましい開発援助方法について考える。なお、途上国の貧困問題や環境に対しある程度の知識を必要とするため、環境あるいは社会領域の研究室に在籍し、熱帯林保全論を受講、あるいは同等の知識を有していることを受講の条件とする。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

備考:第1回の講義を所沢キャンパスで受講した後は、夏休みと冬休みに国際協力機構・筑波研修センターで開催される研修コースから、関心があるコースを選択し集中講義の形式で受講する。このため、受講したコースによっては採点が期日より遅れる場合がある。また、東京の広尾にある「JICA 地球のひろば」で開催されるJICAの研修説明会に出席する必要がある。

授業計画:

第1回：開発援助の概念、実践方法についての講義	第9回：JICAの授業を受講
第2回：JICAの途上国からの研修員向け授業に関するガイダンス	第10回：JICAの授業を受講
第3回：JICAの授業を受講	第11回：JICAの授業を受講
第4回：JICAの授業を受講	第12回：JICAの授業を受講
第5回：JICAの授業を受講	第13回：JICAの授業を受講
第6回：JICAの授業を受講	第14回：開発援助のあり方、実践方法についての考察
第7回：JICAの授業を受講	第15回：開発援助のあり方、実践方法についての考察
第8回：JICAの授業を受講	

【人間行動・環境科学研究領域】

学習動機づけ特論

青柳 肇

最新の学習と動機づけ研究について講義した後、関連した文献を読み、それについて議論する。

成績評価基準: 文献の読みこなし状態と議論での発言状態及び出席状態

授業計画:

第1回: 学習動機づけ研究の概要(1)	第9回: 文献講読(7)
第2回: 学習動機づけ研究の概要(2)	第10回: 文献講読(8)
第3回: 文献講読(1)	第11回: 文献講読(9)
第4回: 文献講読(2)	第12回: 文献講読(10)
第5回: 文献講読(3)	第13回: 文献講読(11)
第6回: 文献講読(4)	第14回: 文献講読(12)
第7回: 文献講読(5)	第15回: 文献講読(13)
第8回: 文献講読(6)	

発達行動学特論

【2010年度休講】

根ヶ山 光一

親子関係の変化をめぐる諸問題について、子別れの観点から動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。なお、本講義はオンデマンド方式と分類されるが、実際には所沢キャンパスでの教室における授業とオンデマンド授業を隔週で行うハイブリッド型とする。

教科書: 根ヶ山光一 著「〈子別れ〉としての子育て」(NHK 出版)

成績評価基準: 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 授業の概要説明	第9回: 食をめぐる対立(2)討論
第2回: 離れつつ保護する(1)講義	第10回: 子どものメッセージを読みとる(1)講義
第3回: 離れつつ保護する(2)討論	第11回: 子どものメッセージを読みとる(2)討論
第4回: 子別れのプロセス①(1)講義	第12回: ほどよい隔たりとは(1)講義
第5回: 子別れのプロセス①(2)討論	第13回: ほどよい隔たりとは(2)討論
第6回: 子別れのプロセス②(1)講義	第14回: 子どものからだど危害(1)講義
第7回: 子別れのプロセス②(2)討論	第15回: 子どものからだど危害(2)討論
第8回: 食をめぐる対立(1)講義	

建築計画学特論

(奇数年度開講)

佐野 友紀

建築、都市計画のために、人間の行動観察や建築の使われ方等のフィールド調査、文献調査、実験室実験の手法を学ぶ。また、実際の調査データをもとに、統計的分析を行い、現象を予測、評価することで、建築計画にフィードバックする手法を習得する。この際に、数理モデル、数学的・統計的分析手法を用いる。また、建築の安全性、利便性、持続可能性等についてのテーマについて、問題点の解明と解決策の提案を行った上で、論文形式のレポートとしてまとめる。

教科書: 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。

参考文献:建築計画教科書、都市計画教科書、建築人間工学事典(いずれも彰国社)

成績評価基準:各課題の評価、取り組み等の、結果を総合的に評価する予定である。

授業計画:

第1回: ガイダンス(建築計画学とは?)	第9回: 質問紙調査(3)
第2回: 機器寸法計測(1)	第10回: 質問紙調査(4)
第3回: 機器寸法計測(2)	第11回: グループ調査(1)
第4回: 行動観察調査(1)	第12回: グループ調査(2)
第5回: 行動観察調査(2)	第13回: グループ調査(3)
第6回: 行動観察調査(3)	第14回: グループ調査(4)
第7回: 質問紙調査(1)	第15回: レポート課題と解説
第8回: 質問紙調査(2)	

行動理論特論

木村 裕

適応を獲得するということは、直面する問題、困難、課題、を解決することである。適応の過程を確認する方法として、一つに、行動の変容過程を確認することがあげられよう。心理学は、行動の形成の原理として“古典的条件づけ”を導入する一方で、“道具的条件づけ”の過程を見出し、困難を解決して新しい行動様式を獲得する過程を理解する可能性の幅を広げてきた。この特論では、まず、パブロフ(Pavlov, I. P.)が脳の機能の研究に用いた“古典的条件づけ”がどのようなものであったかを確認し、行動主義の主唱者ワトソン(Watson, J. B.)によって心理学研究に用いられた事例などを確認するところから始めたい。“道具的条件づけ”については、ソーンダイク(Thorndike, E. L.)、ハル(Hull, C. L.)、スキナー(Skinner, B. F.)等の考え方や理論を、マッキントッシュ(Mackintosh, N. J.)、シュバルツ(Schwartz, B.)、メイザー(Mazur, J. E.)、アンダーソン(Anderson, J. R.)等によるとらえ方を参考にして確認してゆきたい。また、日常生活への応用可能性について行動分析学の観点から検討を試みたい。

成績評価は、出席率(50%)とレポート(50%)によります。

授業計画:

第1回: 行動変容、学習、二つの型の「条件づけ」について	第9回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(2)
第2回: 「古典的条件づけ」: 刺激の意味の獲得と反応との連合	第10回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(3)
第3回: 「古典的条件づけ」: 古典的条件づけの手続きの例	第11回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(4)
第4回: 「古典的条件づけ」: 典型的事例(1)	第12回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(5)
第5回: 「古典的条件づけ」: 典型的事例(2)	第13回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(6)
第6回: 「オペラント条件づけ」: オペラント条件づけの手続きの例	第14回: 「行動分析学」への展開(1)
第7回: 「オペラント条件づけ」: 三項随伴性と強化子の機能	第15回: 「行動分析学」への展開(2)
第8回: 「オペラント条件づけ」: 典型的事例(1)	

発達科学特論

大藪 泰

乳幼児の社会的認知能力の発達について論じる。人間の心は、他者との間で、他の霊長類には見られないほど豊かな共有世界を構築する。誕生直後より人を志向する乳児の心は、養育者からの共感的な関わりを梃子にして、心と心の結びつきを強めてゆく。そこには外界との関係性に気づく、きわめて特異で有能な情動と認知の働きがある。この特論では、新生児がもつ生物としての「ココロ」が、養育者との関係を足場に、人間らしく文化化された「心」に発達する過程を展望する。特に、同一の事物に他者と一緒に注意を向ける「共同注意」(joint attention)という現象を基底におき、乳幼児の「初期能力」「自己感の発生」「人との関係性」「物との関わり」「シンボルの形成」といった現象について論じることになるだろう。授業はパワーポイントを用いた講義形式で行われる。多くの映像(静止画、動画)を使用し、乳幼児の行動を身近に感じられるようにしたい。英文資料も使用する予定である。また随時質疑応答の時間を設ける。

尚、本講義内容は、臨床発達心理士の DP 科目「認知」1-3、1-4、2-1、3-1、3-4、DP 科目「社会情動」1-4、1-5、DP 科目「言語」1-2、1-3、1-4に該当する。

成績評価基準:授業出席状況、レポート等により評価する。

授業計画:

第1回: 受講ガイダンス	第9回: 乳幼児の自己感の発生—言語反応—
第2回: 乳児発達研究の起源	第10回: 人と物の特性の違いの認識—運動と形態—
第3回: 無能な乳児観と有能な乳児観	第11回: 人と物の特性の違いの認識—動作と相互作用—
第4回: 新生児の初期行動	第12回: 人との共有世界の構築—共同注意研究の経緯—
第5回: 母親の養育行動と新生児の応答性	第13回: 人との共有世界の構築—対面的共同注意—
第6回: 新生児から乳児への発達移行—行動状態—	第14回: 人との共有世界の構築—意図共有的共同注意—
第7回: 新生児から乳児への発達移行—知覚能力—	第15回: 人との共有世界の構築—シンボル共有的共同注意—
第8回: 乳幼児の自己感の発生—鏡像反応—	

建築環境学特論

小島 隆矢

建築学における環境心理生理研究分野では、近年、住居・建築・都市などの環境について、広い意味での顧客(利用者、居住者、所有者、管理者等)の意識・行動・ニーズ・CS(顧客満足)を把握するための調査分析手法が独自の発展をみせている。本講義では、特に「コンジョイント分析」という、実験計画法を応用して回答者の価値意識を定量的に把握する調査分析手法を取り上げ、講義と実習(PCを用いたデータ分析の実習を含む)を行う。実習の結果は調査報告書の形式にまとめ、発表を行う。講義部分は主にオンデマンドで行い、実習と発表は教室で行う。オンデマンド講義の回数は、「授業計画」欄に記載の通り、授業回数の約半分となる予定である。

成績評価基準:調査報告書と発表を主に評価し、教室授業の出席・オンデマンド講義の参照等の状況などを若干加味して成績評価を行う。

授業計画:

第1回: 授業の概要と進め方(教室授業)	第9回: 調査用紙の作成(教室授業)
第2回: コンジョイント分析の事例(オンデマンド)	第10回: コンジョイント分析による調査実習(教室授業)

第3回：コンジョイント分析の仕組み(オンデマンド)	第11回：調査データの入力・加工(オンデマンド)
第4回：直交表とその周辺(オンデマンド)	第12回：コンジョイント分析におけるデータ分析(オンデマンド)
第5回：要因と水準、評価方法の設定(教室授業)	第13回：データ分析の経過発表(教室授業)
第6回：交互作用を考慮した実験計画(オンデマンド)	第14回：分析結果の発表・講評(1)(教室授業)
第7回：最適化計画、拡張計画(オンデマンド)	第15回：分析結果の発表・講評(2)(教室授業)
第8回：要因・水準の割付け(教室授業)	

社会文化心理学特論

山本 登志哉

人間の精神が持つ本質的な社会文化性を、媒介的な関係の形成・展開という視点から理解します。心理学全体の再定位を図る文化心理学の視点と、集団差を問題にする比較文化心理学の視点の可能性と限界を考察し、系統発生・歴史発生・個体発生と文化性の交差の中に生まれ育つ人間を理解する視点を培うことをねらいます。より具体的には物質的な世界(資源)を含む多様な関係のネットワークの中に生まれ落ち、その関係構造に動かされ、またそれを動かしながら生きている人間の姿を、具体的な事例を多角的に深く読み込む中で明らかにしながら、そのような人間のあり方を記述する心理学の理論的な視点を探っていきます。

教科書:なし

参考文献:

マイケル・コール「文化心理学」(新曜社)

バーバラ・ロゴフ「文化的営みとしての発達」(新曜社)

Yamamoto, T., & Takahashi, N., 2007, Money as a Cultural Tool Mediating Personal Relationships: Child Development of Exchange and Possession, Valsiner, J. & Rosa, A. (eds.) Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology, Cambridge University Press, New-York, 508-523

山本登志哉「供述に於ける語りとその外部:体験の共同化と「事実」を巡って」(サトウタツヤ・南博文編、質的心理学講座第三巻:社会と場所の経験、東京大学出版会 所収)

廣松渉「役割理論の再構築のために」著作集第5巻(岩波書店) 他

成績評価基準:レポートまたは試験による。

授業計画:

第1回：社会文化心理学の基本的な問い	第9回：間主観的な関係から共同主観的な関係へ
第2回：心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(1)	第10回：物理的事実世界の共同主観的形成過程(1)
第3回：心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(2)	第11回：物理的事実世界の共同主観的形成過程(2)
第4回：心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(3)	第12回：社会文化的存在としての人間精神の共同主観的媒介構造とその展開(1)
第5回：文化が立ち現れるとき:異文化の疑似体験	第13回：社会文化的存在としての人間精神の共同主観的媒介構造とその展開(2)
第6回：人の理解と物の理解の本質的な違い:志向性について	第14回：差の文化心理学・実践と文化の機能的実体化
第7回：志向的な関係の系統発生	第15回：まとめ
第8回：志向的な関係の個体発生と間主観性	

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学特論

河西 宏祐

労使関係論について考察する。受講生には毎時間の研究報告、レポート提出を義務づける。それらを総合的に判断して成績評価を行う。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第9回: 研究発表・レポート提出(4)
第2回: 労使関係論講義(1)	第10回: 労使関係論講義(5)
第3回: 研究発表・レポート提出(1)	第11回: 研究発表・レポート提出(5)
第4回: 労使関係論講義(2)	第12回: 労使関係論講義(6)
第5回: 研究発表・レポート提出(2)	第13回: 研究発表・レポート提出(6)
第6回: 労使関係論講義(3)	第14回: 労使関係論講義(7)
第7回: 研究発表・レポート提出(3)	第15回: 全体を通してのレポート提出(7)
第8回: 労使関係論講義(4)	

歴史人類学特論

蔵持 不三也

本講は、文化人類学と歴史学の接点で、近年その成果が世界的な評価を受けるようになっている歴史人類学を再検討することを目的とする。具体的には蔵持自身の歴史理論のみならず蔵持もその一部を著書や論文、翻訳などで紹介しているフランスのアナル派(新しい歴史学派)、さらにはイタリアのC・ギンズブルクなどの作業を取り上げるが、本講のもうひとつの狙いは、一連の講義を通じて、受講生が歴史に対していかなる視座を構築しうるかにある。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 歴史の見方・考え方	第9回: 文献解題
第2回: 歴史の見方・考え方	第10回: 文献解題
第3回: 歴史の見方・考え方	第11回: 文献解題
第4回: 歴史人類学の方法論	第12回: 文献解題
第5回: 歴史人類学の方法論	第13回: 文献解題
第6回: 文献解題	第14回: 文献解題
第7回: 文献解題	第15回: まとめ
第8回: 文献解題	

アジア地域研究特論

(偶数年度開講)

店田 廣文

アジア社会に関する英文文献の講読をおこなう。取り上げるテーマは、都市、都市化、人口、高齢化、少子化、環境、移民、移動などのうちから、選択する予定である。これまでに取り上げた文献は、Ideal and Reality in Asian Marriage, Transnational Migration and Work in Asia, Urban Symbolism, などである。

成績評価基準:授業中の発表、レポート等により総合的に評価する。

授業計画:

第1回: アジア地域研究イントロダクション	第9回: 文献講読と発表・討論(8)
第2回: 文献講読と発表・討論(1)	第10回: 文献講読と発表・討論(9)

第3回：文献講読と発表・討論(2)	第11回：文献講読と発表・討論(10)
第4回：文献講読と発表・討論(3)	第12回：文献講読と発表・討論(11)
第5回：文献講読と発表・討論(4)	第13回：文献講読と発表・討論(12)
第6回：文献講読と発表・討論(5)	第14回：文献講読と発表・討論(13)
第7回：文献講読と発表・討論(6)	第15回：レポート提出と解説
第8回：文献講読と発表・討論(7)	

移民研究特論

(奇数年度開講)

森本 豊富

日本人移民に関する歴史的な考察を中心に講義し、ドキュメンタリーフィルムの鑑賞とディスカッションを行う。受講生は移民についての言語、教育、国籍、デカセギ、国際関係、コミュニティなどの諸側面に関する調査研究の最新動向を把握するために『移民研究年報』や International Migration Review などに掲載されている移民関連の論文を読み、レビューとして報告する。

成績評価基準:出席30%、レビュー30%、教場試験40%で評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：招聘講師
第2回：日系移民史(概説)	第10回：移民関連論文のレビュー
第3回：日系移民史(各論:北米・布哇)	第11回：移民関連論文のレビュー
第4回：日系移民史(各論:ブラジル)	第12回：移民関連論文のレビュー
第5回：日系移民史(各論:沖縄)	第13回：移民関連論文のレビュー
第6回：日系移民史(各論:デカセギ)	第14回：移民関連論文のレビュー
第7回：日系移民関連ドキュメンタリー鑑賞	第15回：理解度の確認
第8回：日系移民関連ドキュメンタリー鑑賞	

家族社会学特論

(奇数年度開講)

池岡 義孝

本講義では、日本の家族社会学の研究史を詳説する。対象とするのは、「家族社会学」という学問領域がまだ通常科学化していなかった戦前段階から現在に至るまでとし、日本の研究に影響を与えた欧米の研究も必要に応じて取り上げることしたい。

教科書:とくに指定しない。

参考文献:必要に応じて、教場でそのつど指示する。

成績評価基準:出席状況と学期末レポートにより評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス(本講義の概要と進め方)	第9回：核家族論にもとづく戦後家族社会学の成立:核家族論争
第2回：家族の科学的研究の歴史的発達段階1:欧米の場合	第10回：批判的潮流1:マルクス主義的家族研究
第3回：家族の科学的研究の歴史的発達段階2:日本の場合	第11回：批判的潮流2:人類学による家族・親族定義をめぐる批判
第4回：戦前の家族研究1:社会学および人類学・民族学からの整理	第12回：批判的潮流3:歴史学からする近代家族論

第5回：戦前の家族研究2:モノグラフ的家族研究・マクロデータによる家族研究	第13回：新たな試み1:ライフコース論
第6回：戦前の家族研究3:大家族論・小家族論・直系家族論	第14回：新たな試み2:構築主義的家族研究
第7回：戦後の家族社会学の再出発と通常科学化	第15回：総括
第8回：パラダイムの確立:小山隆編『現代家族の研究』	

都市社会学特論

(偶数年度開講)

臼井 恒夫

近年、先進国の大都市の構造転換についてさまざまな角度から多くの研究が積み重ねられている。ここでは、都市社会学の研究を中心にこれまでに蓄積されてきた研究成果のなかから基本的かつ重要と思われる研究を取りあげながら、今日の都市の変容を読み解くための視点や論点について解説する。

成績の評価は出席点、授業への参加度、報告内容、レポートによって総合的に判断する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：高度成長と地域社会の変容(2)
第2回：現代都市の変容(1)	第10回：階級・階層とエスニシティ(1)
第3回：現代都市の変容(2)	第11回：階級・階層とエスニシティ(2)
第4回：変化する都市構造(1)	第12回：ニュータウンの変容
第5回：変化する都市構造(2)	第13回：郊外の誕生と変容
第6回：産業都市の変容(1)	第14回：グローバリゼーションと都市の変容
第7回：産業都市の変容(2)	第15回：レポート課題と解説
第8回：高度成長と地域社会の変容(1)	

科学史科学哲学特論

(偶数年度開講)

加藤 茂生

授業内容:テーマは「寺田寅彦とその後継者たち」。寺田寅彦は物理学者であったが、夏目漱石を師と仰ぐ文人でもあり、日常現象を科学的な視点から分析した随筆でも有名である。寅彦は漱石の『三四郎』に登場する野々宮さんのモデルとも言われている。寅彦の物理学は、自然界の複雑な事象を直観的なモデルで近似的に扱い、しばしば統計を用いて分析するところに特徴があった。彼の物理学者としての洞察は漱石ゆずりの写生的な描写を散りばめた洒脱な随筆の随所に見られ、旧制高校の教養主義的な文化に育まれていた理科系の若者を魅了した。そして1935年(昭和10年)に亡くなるまで、寅彦は中谷宇吉郎や坪井忠二、藤岡由夫、平田森三、田口泂三郎ら寺田の物理学の方法を身につけた多くの実験物理学者や地球物理学者を輩出したのである。この授業では、寅彦やその弟子たちの科学思想について検討し、文学との関係も含め、昭和戦前期の科学について考察する。授業では具体的な資料に基づいた細部の考察が中心となる。

授業方法:ほとんどの時間をディスカッションにあてる。教員が題材として一次資料や二次資料を示し、学生はそれを理解し、考察し、学生同士で討論を行う。

成績評価基準:授業時の議論への貢献度＝80%。学期末レポート＝20%。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(4)
第2回：近代日本科学史の基礎知識	第10回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(5)
第3回：寺田寅彦の科学思想(1)	第11回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(6)

第4回：寺田寅彦の科学思想(2)	第12回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(7)
第5回：寺田寅彦の科学思想(3)	第13回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(8)
第6回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(1)	第14回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(9)
第7回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(2)	第15回：総括的考察
第8回：寺田寅彦の後継者たちの科学思想(3)	

考古学特論

(奇数年度開講)

谷川 章雄

近世都市江戸の考古学に関する研究論文をとり上げ、それを解説しながら、考古資料の特質と限界、考古学独自の分析方法、思考方法を明らかにし、隣接する歴史学・民俗学などの諸分野との学際的研究のあり方をみていくことにしたい。すなわち、考古学の視点から、総合的・学際的研究を行うにあたっての課題と展望を考えることがこの講義の目的である。

成績評価基準:レポートを課す。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：近世考古学と歴史学(1)
第2回：資料論の背景	第10回：近世考古学と歴史学(2)
第3回：武家屋敷の調査(1)	第11回：柳田国男の考古学観
第4回：武家屋敷の調査(2)	第12回：民具研究と考古学
第5回：町屋の調査	第13回：生活用具の復元
第6回：ごみ処理とリサイクル	第14回：袍衣納めの考古学
第7回：上水の調査	第15回：レポート課題と解説
第8回：墓と社会	

フランス表象文化史研究特論

中村 要

フランスおよびフランス語圏を対象とする地域文化研究の一環として、フランスの表象文化について歴史的展望を行なう。人間を取り巻くさまざまな表象を分析することにより、文化の多様な様態を明らかにする。日本文化との比較、異文化接触の問題も視野に入れる。

主な研究課題:フランスの特殊性と普遍性、表象と共同体、他者との共生、ヨーロッパの現在。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業のオリエンテーション。	第9回：学生による表象文化研究に関する発表。 ディスカッション。
第2回：表象文化研究の歴史的展望(1)。ディスカッション。	第10回：学生による表象文化研究に関する発表。 ディスカッション。
第3回：表象文化研究の歴史的展望(2)。ディスカッション。	第11回：学生による表象文化研究に関する発表。 ディスカッション。
第4回：表象文化研究の歴史的展望(3)。ディスカッション。	第12回：学生による表象文化研究に関する発表。 ディスカッション。
第5回：表象文化研究の歴史的展望(4)。ディスカッション。	第13回：学生による表象文化研究に関する発表。 ディスカッション。

第6回：表象文化研究の歴史的展望(5)。ディスカッション。	第14回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。
第7回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。	第15回：授業のまとめ。
第8回：学生による表象文化研究に関する発表。ディスカッション。	

ドイツ近代国民国家特論

(奇数年度開講)

村上 公子

明治期の日本が、自国の「近代化」のモデルとしたのは、1871年に成立したばかりのドイツ帝国であった。「ドイツ」という国家はどのような成り立ちをし、そこにはどのような特徴が見られるのかを歴史的事実に即して考察する。

テキストとして、Wege - Irrwege - Umwege, Die Entwicklung der parlamentarischen Demokratie in Deutschland, Berlin 2002

から抜粋した解説文を用いる。

成績評価基準：講義参加度、研究テーマの理解度を勘案して評価を行う。

※テキストはコピーで用意する。

授業計画：

第1回：授業概要、テキスト紹介	第9回：Das kaiserliche Deutschland (2)
第2回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (1)	第10回：Das kaiserliche Deutschland (3)
第3回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (2)	第11回：Das kaiserliche Deutschland (4)
第4回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (3)	第12回：Die Weimarer Republik (1)
第5回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (4)	第13回：Die Weimarer Republik (2)
第6回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (5)	第14回：Die Weimarer Republik (3)
第7回：Vor-und Frühparlamentarismus und die Revolution von 1848/49 (6)	第15回：Das Dritte Reich
第8回：Das kaiserliche Deutschland (1)	

生活文化史研究特論

(偶数年度開講)

余語 琢磨

暮らし(生活・生業)をめぐる人々の多様な営みをどのように捉えるか、この難問を文化人類学と歴史学の交差する地点から複眼的に理解するために、いくつかの基本文献をとりあげ、その着想、基本的視座、方法論、分析・考察の妥当性、成果と残された問題点などについて概説するとともに、受講生には、各文献に関連する発展的研究の輪読・解題を行ってもらう。

この作業を通して、日常性、歴史、技術、共同体、身体、民俗医療、心理、社会、文化などのキーワードをめぐる活発な議論が教場で展開することを期待している。扱う基本文献は授業計画にあげたものを予定しているが、受講生の関心のありように応じて柔軟に変更していきたい。

成績評価基準:講義への参加度(30%)および解題発表またはレポート内容(70%)により評価する。

授業計画:

第1回: 授業ガイダンス	第9回: 関連研究解題(4)
第2回: 『日常性の構造』(ブローデル)を読む	第10回: 『秩序の方法』(浜本満)を読む
第3回: 関連研究解題(1)	第11回: 関連研究解題(5)
第4回: 『日常実践のポイエティック』(セルトー)を読む	第12回: 『心理学と人類学』(ヤホダ)を読む
第5回: 関連研究解題(2)	第13回: 関連研究解題(6)
第6回: 『状況に埋め込まれた学習』(レイブ&ウェンガー)を読む	第14回: 『文化を書く』(クリフォード&マーカス編)を読む
第7回: 関連研究解題(3)	第15回: 関連研究解題(7)
第8回: 『身体構築学』(福島真人編)を読む	

社会学説特論

西原 和久

本年度は、自己と他者の関係に焦点を当てつつ、グローバル化時代に対応する相互行為論に基づいた社会学説の検討をおこなう。

①具体的には、まず近代・社会・国家への私たち自身のまなざしを検討した後に、社会学成立期の古典的社会学説の意義と問題点を、具体的な歴史的展開を追いながら考察する。

あわせて、戦前期と戦後期の日本社会と日本社会学を、アジアや世界を射程に入れつつ、現代社会(学)との比較の意味を込めて、検討する。

②さらに講義の中盤では、1960年代を中心とする社会学説を検討した後に、構造主義などの思潮も視野に入れて、現代社会学理論に直接につながる1980年代の現代社会学説の検討をおこなう。基本となるのは、これまでの相互行為論的視点の意義と問題点である。

③そのうえで、現代社会学やその理論がグローバル時代に果たす役割を考察する。その際、中心となるのは、新たな(発生源論的)相互行為論に立脚し、グローバル時代に対応した、間主観的・人際的な現象学的社会学の視点である。外国人労働者問題をはじめとする身近な例を数多く取り上げながら、また NPO/NGO の話も交えて、私たちの常識を問い直しつつ、現代そして未来において「社会学に何ができるのか」を検討していきたいと考えている。

なお、教科書として『入門・グローバル化時代の新しい社会学』(西原和久他編、新泉社、2007年)、参考書として『社会学キーコンセプト「批判的社会理論」の基礎概念57』(N・クロスリー著・西原和久監訳、新泉社、2008年)、および『新しい社会学のあゆみ』(新睦人編、有斐閣、2006年)を用いる。

成績評価基準:出席35% 試験(ないしレポート)65%

授業計画:

第1回: 1-1: 受講ガイダンス+序論・〈自己〉と〈他者〉を問い直す	第9回: 5-1: 構造主義とポスト構造主義をめぐって: 近代批判と言語論
第2回: 1-2: 〈社会〉とは何か: 社会・近代・市民・国家を問い直す	第10回: 5-2: 1980年代の〈統合的社会学理論〉: その意義と限界を問う
第3回: 2-1: 社会学の成立と20世紀初頭の社会: 帝国期社会学の視線	第11回: 5-3: 言語ゲーム論・構築主義・エスノメソドロロジーの新展開

第4回：2－2:1930年代の問い:批判的社会学理論の前提・問い・射程	第12回：6－1:現象学の展開:間主観性と間身体性、そして人際交流論
第5回：3－1:戦前期日本とアジア:東洋と西洋あるいは近代化と社会学	第13回：6－2:ポスト〈90年〉:グローバル時代の新しい現象学的社会学
第6回：3－2:戦後期日本社会を問い直す:〈1960年代〉の〈若者〉群像	第14回：7－1:結論・21世紀の社会学:〈他者〉・アジア・世界への視線
第7回：4－1:現代社会学の基底1・〈機能社会学〉と社会システム理論	第15回：7－2:教場試験(あるいはレポート課題)と講評(解説)
第8回：4－2:現代社会学の基底2:〈意味社会学〉の相互行為論的視点	

自然人類学特論

藤田 尚

自然人類学は、ヒトを主として生物学の立場から研究する学問領域である。われわれの身体的・社会的特徴が、どうして、いつ獲得されたのかは、実は霊長類の進化の過程の中に解答が求められる。人間科学を大学院レベルで専攻する学生諸君には、是非本講義を通じて、ヒトとは人間とは何者なのか、われわれはどのように形成され、どこへ向かって進化しようとしているのかを学んでほしい。

成績評価基準:出席とレポートによる。

授業計画:

第1回：自然人類学分野の論文講読	第9回：自然人類学分野の論文講読
第2回：自然人類学分野の論文講読	第10回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第3回：自然人類学分野の論文講読	第11回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第4回：自然人類学分野の論文講読	第12回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第5回：自然人類学分野の論文講読	第13回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第6回：自然人類学分野の論文講読	第14回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第7回：自然人類学分野の論文講読	第15回：古病理学的研究の紹介と講義(パワーポイント使用)
第8回：自然人類学分野の論文講読	

スペイン社会文化特論

(奇数年度開講)

竹中 宏子

スペインは、地域色が強く、多様性を特徴とする国だといわれる。本講義では、スペインの社会や文化に関する研究史を通して国家や地域社会と文化の問題を議論し、その視点からスペインの社会・文化的な内実を明らかにする。そこでは特に、フランコ独裁政権以後の時代を取り上げ、スペインにおける人類学やフォークロアの研究史を追いつながり、「スペイン」という近代国民国家とその地域性について考えたい。なお、本授業は文献を輪読する演習形式で行なわれる。スペイン語または英語で書かれた文献を扱う予定である。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 受講ガイダンス	第9回: 輪読(5)
第2回: スペインの社会と文化に関する概説	第10回: 輪読(6)
第3回: スペイン地域主義に関する概説	第11回: 輪読(7)
第4回: 輪読(1)	第12回: 輪読(8)
第5回: 輪読(2)	第13回: 輪読(9)
第6回: 輪読(3)	第14回: 輪読(10)
第7回: 輪読(4)	第15回: 輪読(5)～(10)に関する内容のまとめ・議論
第8回: 輪読(1)～(4)に関する内容のまとめ・議論	

[健康・生命科学研究領域]

生体発達科学特論

(偶数年度開講)

木村 一郎

近年著しい進展を見せている生体発達科学(発生生物学)について、その基盤となっている伝統的発生学を踏まえながら、発生遺伝学を中心とした知見を紹介する。特に細胞の増殖・分化、形態形成等を扱いながら、個体発生における構造と機能の構築の基礎となる細胞の動態について考察する。また、発生生物学の応用としての発生工学、生殖医療などの生命操作技術についても紹介する。

成績評価基準:出席状況および課題レポートを評価する。

授業計画:

第1回: 発生生物学の研究史と基本概念	第9回: エピジェネティクス(1)
第2回: 発生生物学の研究手法	第10回: エピジェネティクス(2)
第3回: 発生における細胞の分裂と系譜	第11回: 細胞・個体の老化と死(1)
第4回: 細胞の分化(1)	第12回: 細胞・個体の老化と死(2)
第5回: 細胞の分化(2)	第13回: 発生生物学の応用:発生工学(1)
第6回: パターンと形態の形成(1)	第14回: 発生生物学の応用:発生工学(2)
第7回: パターンと形態の形成(2)	第15回: 総括
第8回: パターンと形態の形成(3)	

細胞組織学特論

(偶数年度開講)

小室 輝昌

細胞組織学の基礎的事項の復習的内容と、研究トピックスの両者より構成。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 細胞組織学序論	第9回: 組織学各論(研究トピックス)1
第2回: 方法論	第10回: 組織学各論(研究トピックス)2
第3回: 細胞学1	第11回: 組織学各論(研究トピックス)3
第4回: 細胞学2	第12回: 組織学各論(研究トピックス)4
第5回: 組織学総論(研究トピックス)1	第13回: 組織学各論(研究トピックス)5
第6回: 組織学総論(研究トピックス)2	第14回: 組織学各論(研究トピックス)6
第7回: 組織学総論(研究トピックス)3	第15回: 教場試験および解説
第8回: 組織学総論(研究トピックス)4	

生体機能学特論

今泉 和彦

本特論では、以下の最近のトピックスについて講義する。

成績評価基準:BBSの発言数とレポートの内容で評価する。

授業計画:

第1回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(1)	第9回: 亜鉛欠乏と生体機能との関連(2)
第2回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(2)	第10回: 鉄欠乏と生体機能との関連
第3回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(3)	第11回: 香辛料(特にトウガラシ成分)摂取と生体機能との関連
第4回: 茶カテキン摂取による生体機能との関連(1)	第12回: 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(1)
第5回: 茶カテキン摂取による生体機能との関連(2)	第13回: 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(2)
第6回: ドーピング作動薬と生体機能との関連(1)	第14回: 最近の研究成果の紹介
第7回: ドーピング作動薬と生体機能との関連(2)	第15回: 最近の研究成果の紹介
第8回: 亜鉛欠乏と生体機能との関連(1)	

神経内分泌学特論

山内 兄人

からだの機能は液性情報と神経情報にコントロールされている。血液を介して情報を伝達するホルモンは液性情報の代表である。一方、脳は脳神経、脊髄神経により体内外の知覚情報を受け、かつ、筋や内臓に指令情報を送る神経情報の本部である。ホルモンを分泌する内分泌器官も神経制御を受け、脳の神経細胞もホルモンによって影響を受ける。また、脳そのものからも、ホルモンが分泌されている。内分泌系と神経系のお互いの関係や、神経と内分泌系によるからだの機能の制御を明らかにしていく学問が神経内分泌学である。この講義では、性行動や母性行動、排卵、妊娠、授乳などの生殖生理の神経内分泌制御を研究室の最新の知見を中心に学ぶ。特にセロトニン神経に焦点をあてる。

教科書: 脳がこどもを産む 平凡社選書 194 1999

参考書: 脳の性分化 裳華房 2006、ホルモンの人間科学 コロナ社 2006、脳の人間科学 コロナ社 2006、性差の人間科学 コロナ社 2008 9月刊行

その他: 講義順、内容が変わることもあります。教科書は授業前に必ず読んでおいてください。

研究室: E530号室

URL: <http://www.f.waseda.jp/hedgehog/>

成績評価基準: 出席とレポートをもとに総合的に評価します。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第9回: セロトニンと妊娠
第2回: 脳機能	第10回: セロトニンと母性行動、授乳
第3回: セロトニン神経	第11回: 性分化序説
第4回: 内分泌学	第12回: 脳機能の性分化1
第5回: 雌生殖機能序説	第13回: 脳機能の性分化2
第6回: セロトニンと雌性行動	第14回: セロトニンと性分化1
第7回: セロトニンと雄性行動	第15回: セロトニンと性分化2
第8回: セロトニンと排卵	

運動制御・バイオメカニクス特論

鈴木 秀次

日常生活やスポーツ活動時に起こる動きの仕組みを運動制御とバイオメカニクスの立場から解説し、その動きの科学的根拠がどこにあるかを講義する。特にいま話題となっている初動負荷トレーニングについて、なぜこのトレーニングによって、スポーツ活動に必須の条件であるスピードとパワーがそなわり、躍動感、リズム、爆発力が身につくのか。さらにこのトレーニングによって、柔軟性が高まり、怪我の予防と健康増進につながるのかについて最近の実験データを踏まえながら解説する。

本授業は、全回オンデマンド授業として実施します。

参考書:特になし

成績評価基準:レポート

授業計画:

第1回: はじめに	第9回: 随意運動
第2回: 初動負荷トレーニングと従来の筋力トレーニングとの違い	第10回: 運動における小脳の係わり
第3回: 初動負荷トレーニング動作のキネマティクス	第11回: 運動における大脳基底核の係わり
第4回: 初動負荷トレーニング動作のキネティクス	第12回: 初動負荷トレーニングの効果1
第5回: 初動負荷トレーニング動作時の筋活動	第13回: 初動負荷トレーニングの効果2
第6回: 初動負荷トレーニングによる動きづくり	第14回: 初動負荷トレーニングの今後の課題
第7回: 運動における筋紡錘の係わり	第15回: まとめ
第8回: 反射運動	

神経機能学特論

永島 計

講義では神経機能、特に自律神経に焦点をあて解説を加えていく。特に自律神経の解剖、生理を整理するとともに現在すすんでいる研究のトピックスをテーマに進行する。大学院生が対象であるので、まず個々にテーマを与えプレゼンテーションをしながら、解説していく。トピックスとしては代謝、摂食、体温、体液、生体リズム、睡眠などをあげ、その研究法などについても理解を深めることを目的とする。論文、総説などを題材とする。

成績評価基準:発表 レポートで評価

授業計画:

第1回: 自律神経の解剖、生理の基本の理解	第9回: 睡眠(神経機構)
第2回: 視床下部、脳幹の機能の理解	第10回: 睡眠(分子機構)
第3回: 体温調節と自律神経(1)	第11回: 体液調節(1)
第4回: 体温調節と自律神経(2)	第12回: 体液調節(2)
第5回: 摂食の調節(神経機構)	第13回: 運動と自律神経(1)
第6回: 摂食の調節(ホルモン)	第14回: 運動と自律神経(2)
第7回: 生体リズム(神経機構)	第15回: 総括とレポート
第8回: 生体リズム(分子機構)	

健康医学特論

(奇数年度開講)

河手 典彦

わが国は既に超高齢社会を呈しているが、この状況下で健康寿命延長をめざした国民の「健康」に対する関心の高まりは近年とくに顕著である。全ての人間生活の基盤である健康を保持するためには、先ず日常の様々な生活習慣や環境因子などの検証に基づいて、疾病に侵されないための有効な対策を見出し実践する

ことが重要となる(一次予防)。

更に健康を保持するためには、所謂二次予防や三次予防といった臨床医学に直結する領域について、各個人が可能な限り正確な知識・情報を持って、万が一の罹患等の際にも慌てる事なく適切な選択と行動がとれることが理想である。

このような観点に基いて、わが国で遭遇する可能性の高い代表的疾患を対象として、その疫学や病態などの基本的な医学知識の正確な習得から解説する。次いで健診の理解にも繋がる有効な各種の診断方法の実状を提示する。さらにその疾患の標準的治療法、および臨床医学の第一線に於ける関連トピックスなどを紹介しながら、健康生活獲得のための方策を具体的に考えていく。その内容から、今までの各自の健康の重要性の認識に新たな視点を加え、自身の健康医学観形成の一助とすることが本講の基本的な狙いである。

成績評価基準:授業出席状況と試験成績などから総合的に評価する。

授業計画:

第1回:健康医学序論	第9回:肺癌
第2回:高血圧症	第10回:胃癌
第3回:心臓疾患	第11回:大腸癌
第4回:脳卒中	第12回:乳癌、子宮癌
第5回:糖尿病	第13回:前立腺癌
第6回:高脂血症、高尿酸血症	第14回:白血病
第7回:肝臓疾患	第15回:教場試験とその解説
第8回:呼吸器疾患(非癌)	

応用健康科学特論

【2010年度休講】

竹中 晃二

従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養(肥満)、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させることに注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う観点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウェルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が注目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

成績評価基準:毎回のBBSへの書き込み課題、小レポートの提出、スクーリングにおける研究発表および課題レポートによって加算評価を行う。

授業計画:

第1回:講義の概要と背景	第9回:健康指導に活かすカウンセリング
第2回:健康行動変容	第10回:高齢化社会と転倒予防
第3回:健康行動変容プログラム開発の興味とグループ分け	第11回:プログラム開発の手順と方法
第4回:子どもの健康づくり	第12回:プログラム開発の中間発表
第5回:ヘルスコミュニケーション	第13回:ヘルスプロモーションビデオの鑑賞

第6回：ストレスマネジメント	第14回：効果的なデリバリーチャンネル
第7回：ダイエットプログラム	第15回：スクーリング：グループ別研究発表
第8回：禁煙プログラム	

ヘルスプロモーション特論

(奇数年度開講)

辻内 琢也

世界保健機構(WHO)は、健康のための基本的条件・資源として、平和・住居・教育・食物・収入・安定した生態系・生存のための諸資源・社会的正義と公正、を挙げている。また、疾病の予防は個人のみで実現できるものではなく、社会環境の整備が必要であり、病気になった人をいわずに非難することは避けるべきであると明言している。本特論では、健康増進言説・予防医学言説・自己決定言説の背後にあるポリティクスを浮き上がらせ、物語りと対話に基づく医療(NBM; Narrative Based Medicine)に基づいた新しい健康づくりのあり方について考察してゆく。本講座はグループ学習と発表を中心としたボトムアップ方式で行う。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表と発言、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方、グループ分けとテーマの決定	第9回：グループ発表とディスカッション4
第2回：医療人類学概説(1)	第10回：グループ発表とディスカッション5
第3回：医療人類学概説(2)	第11回：グループ発表とディスカッション6
第4回：医療社会学概説(1)	第12回：グループ発表とディスカッション7
第5回：医療社会学概説(2)	第13回：グループ発表とディスカッション8
第6回：グループ発表とディスカッション1	第14回：肯定派・否定派に分かれてディベート討論会
第7回：グループ発表とディスカッション2	第15回：レポート課題と解説
第8回：グループ発表とディスカッション3	

分子神経学特論

榊原 伸一

神経系は生物の行動を効率的に行うために外界からの情報を伝達、処理するために発達したシステムであり、人間の生理現象や行動をコントロールする重要な器官です。しかしその形成される過程や発達後に維持されるメカニズムはまだわからないことが多いのが現状です。本講義では脳や脊髄の構築を概観し、さらにその発生過程を分子レベル、細胞レベル、組織レベルの各レベルから多面的に理解することを目指します。また代表的ないくつかの研究論文(英語)を輪読することによって、教科書や講義では得られないより深い理解をめざします。

講義は、論文の輪読が大きな比重を占めますから事前の予習とまとめが必須となります。

成績評価基準:演習やレポートによる理解度

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：演習(論文輪読)
第2回：神経系の概観 各部の形態と機能(1)	第10回：成体の神経系の発生と神経幹細胞(1)
第3回：神経系の概観 各部の形態と機能(2)	第11回：成体の神経系の発生と神経幹細胞(2)
第4回：神経組織の成立ちと構成細胞(ニューロンの構造と機能)	第12回：演習(論文輪読)
第5回：神経組織の成立ちと構成細胞(グリアの種類と機能)	第13回：神経系の発生の異常

第6回：演習(論文輪読)	第14回：演習(論文輪読)
第7回：神経系の発生メカニズム(1)	第15回：レポート課題指定と質疑応答
第8回：神経系の発生メカニズム(2)	

[健康福祉科学研究領域]

福祉ロボット工学特論

可部 明克

各国で研究開発が進められているサービスロボット、特に福祉ロボットについて要素技術を調査し、ベースとなるロボット(e-PUCK ロボットなど)を使用して機能設計を行い、開発プロジェクトを経験する。

また、課題提出により自らの専門分野に関連するロボット技術の深堀を行う。

成績評価基準：

- ①授業での発言頻度・内容
- ②プロジェクトの内容(創造性、専門性、実現性)
- ③課題提出

“For International Students”

A project oriented course dealing with the overall principles of Service Robotics, currently developed in the world, especially for healthcare and welfare purposes. Pick up several technical issues as introduction, and design the main functions based on the robot system for education (e-PUCK robot, and others).

The final report about specific technical issues of robotics, related to major of each student, is required.

1. Trajectory Control of Robot (Mechanical Structure, 3D-Coordinate Frames, Numerical Control)
2. Sensor System of Robot (Vision, Voice Recognition, Bio-sensor, RF-ID)
3. Network System (Basic Configuration, Communication Protocol, Specific Network)
4. Application Systems of Robot (Application Functions for Healthcare and Welfare, Bio-sensor systems, Other Application Systems)

Note: The main language of this course is Japanese. Instructions and Information are provided in English for International Students additionally.

1. Contribution by discussion
2. Project Achievement (Creativity, Speciality, Feasibility)
3. Final Report

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：ネットワークシステム(通信プロトコル)
第2回：ロボットの動作制御(基本構造の把握)	第10回：ネットワークシステム(具体的なネットワークシステム)
第3回：ロボットの動作制御(システム構成、座標系)	第11回：課題:ロボットの応用システム設計(機能1: 特定アプリケーションなど)
第4回：ロボットの動作制御(制御方法)	第12回：課題:ロボットの応用システム設計(機能2: 生体計測応用システムなど)

第5回：ロボットのセンサシステム(ビジョン)	第13回：課題:ロボットの応用システム設計(まとめ)
第6回：ロボットのセンサシステム(音声)	第14回：最終レポートの作成
第7回：ロボットのセンサシステム(IC タグ、生体センサー等)	第15回：最終レポートによるディスカッション
第8回：ネットワークシステム(基本構成)	

老年社会福祉学特論

(偶数年度開講)

加瀬 裕子

老年学は、個人の身体的変化から社会的現象まで、老化に伴う諸問題について研究する学問である。老化に伴う問題を、社会福祉学の視点から研究する老年社会福祉学は、単に老人福祉を対象とするものではない。高齢化や少子化によって生じる個人の生活への影響や社会構造への影響について、国際的動向を踏まえて概説する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：高齢者の身体的、心理的、社会的変化	第9回：アメリカの高齢者介護
第2回：高齢者の生活保障	第10回：高齢者の在宅ケア・介護保険と在宅サービスの現状―
第3回：高齢者の健康と医療政策の焦点	第11回：高齢者の在宅ケアチームアプローチとケアマネジメント―
第4回：高齢者の健康づくりとサクセスフル・エイジング	第12回：変わる高齢者のネットワークと地域包括支援センターの役割
第5回：高齢者の心理と意識	第13回：認知症ケア 1
第6回：高齢者の社会貢献	第14回：認知症ケア 2
第7回：老人福祉法と老人福祉サービス	第15回：授業のまとめ
第8回：アメリカの高齢者住宅	

生命医療倫理学特論

(偶数年度開講)

土田 友章

生命医療の倫理の基本的諸問題を通覧し、とりわけ死生学に焦点をあてて検討する。さらに、それらの基礎となる倫理論を考察する。

成績評価基準:クラスへの参加、積極的発言、期末小論文などを総合して評価する。

スポーツ健康マネジメント特論

(奇数年度開講)

吉村 正

チームマネジメント、目標達成マネジメント、「やる気」が出るマネジメント、監督やコーチ(指導者)の在り方、役割、指導法、また、施設・用具や金銭の扱い方等について講義する。加えて、スポーツ健康マネジメントに関する文献講読や現場実習も行い、それらについて相互に議論する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

第1回：オリエンテーション スポーツ健康マネジメントとは	第9回：コーチングの実際②
第2回：チームマネジメント	第10回：パートナーシップについて
第3回：目標達成マネジメント	第11回：早稲田大学のスポーツ健康マネジメント①
第4回：「やる気」が出るマネジメント	第12回：早稲田大学のスポーツ健康マネジメント②

第5回：監督の在り方	第13回：総合型地域スポーツクラブについて
第6回：ヘッドコーチ・アシスタントコーチの在り方	第14回：健康日本21について
第7回：コーチングとは	第15回：まとめ
第8回：コーチングの実際①	

社会保障政策特論 (奇数年度開講)【2010年度休講】 植村 尚史

年金、医療、介護など社会保障政策に関する具体的テーマについて、最近の政策の動向を説明するとともに、課題を設定し、報告、ディスカッション等を行う。

成績評価基準:適宜課題を出す。その内容とディスカッションへの参加状況によって評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：社会保障を巡る諸情勢の変化Ⅱ
第2回：福祉国家の変容Ⅰ	第10回：これからの社会保障Ⅰ
第3回：福祉国家の変容Ⅱ	第11回：これからの社会保障Ⅱ
第4回：福祉国家の変容Ⅲ	第12回：社会保障改革の動向Ⅰ
第5回：我が国の社会保障政策の変遷Ⅰ	第13回：社会保障改革の動向Ⅱ
第6回：我が国の社会保障政策の変遷Ⅱ	第14回：社会保障改革の動向Ⅲ
第7回：我が国の社会保障政策の変遷Ⅲ	第15回：ディスカッション
第8回：社会保障を巡る諸情勢の変化Ⅰ	

健康福祉管理特論 扇原 淳

本講義では、健康管理と福祉管理の2つの領域に関する最新の研究成果や政策の現状と展望について概説する。健康管理領域では、日本および世界が抱える健康問題(人口・保健統計、感染症、生活習慣病、環境汚染、気象・気候、薬物、国際保健協力等)とその対策の現状について具体的事例を挙げるとともに最新の研究成果について概説する。福祉管理領域では、福祉管理政策・制度の歴史、現実の福祉行政組織・機関・施設等の運営・管理(組織や人材管理の基本、医療保険、介護保険、ヘルスプロモーション、事故防止と安全確保等)および地域福祉管理(NPO、NGO、ボランティア等)の現状と課題および当該分野の研究動向について概説する。

成績評価基準:平常点60%、レポート40%とし、2つを合計し60%以上を合格とする。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：保健医療福祉における格差(2)
第2回：公衆衛生と疫学統計指標	第10回：社会福祉計画
第3回：人口問題	第11回：地域福祉と介護保険
第4回：予防医学と母子保健	第12回：福祉施設の財源と経営戦略
第5回：健康教育と学校保健	第13回：福祉施設の人材確保・育成・定着
第6回：地球環境問題と水問題	第14回：福祉施設のリスクマネジメント
第7回：国際保健医療教育支援活動	第15回：まとめ
第8回：保健医療福祉における格差(1)	

予防医学特論 町田 和彦

広義の予防医学の定義としては個々の疾病に対して臨床家が患者に対して衛生活動を行う場合も含めるこ

ともあるが、日本では人間を取り巻く自然環境や社会的環境の健康に及ぼす影響を調べ、疾病の予防と健康の保持増進を図る衛生学と公衆衛生学を統括したものと考えられてきた。特に本研究科は医学部ではないので後者を重視した予防医学の立場をとるが、近年では健康の保持、増進から疾病の早期発見、疾病悪化予防、リハビリテーション、福祉政策にいたる広域的な健康福祉医療政策を見据えた予防医学について講義を中心に行っていく。学部を広義と異なり、予防医学の全般について講義するものでなく、私が今まで衛生学、公衆衛生学、環境保健学の各分野で行ってきた研究を特に研究のプロセスにこだわって授業を行うつもりである。

取り上げられるテーマとしては、今まで研究者としてたどってきた順に次のようなテーマを考えている。1. 日内リズムの生体に与える影響(動物実験)、2. 感染症の疫学(麻疹ワクチンの効果と流行に及ぼす影響の把握)(血清疫学調査)、3. カドミウムを中心とした微量元素の生体影響(動物実験)、4. 鉱山地域における微量元素の飲料水、農作物、生体に及ぼす影響(試料分析調査)、5. 無医地区における健康管理(健康調査)、6. 非A非B肝炎および成人T細胞白血病の血清疫学調査(試料分析調査)、7. ライフスタイル(特に自由運動習慣とストレスについて)の非特異免疫を中心とした生体防御機能に及ぼす影響(動物実験)、8. 高齢者のライフスタイルと健康や生きがいとの関係についての健康管理調査、9. 渡良瀬川・利根川・江戸川水系における河川水と水道水の関係(化学分析調査)、10. 大学時代の運動と中高年期の健康と生きがいについて(アンケート調査)、11. ライフスタイルが医療費に及ぼす影響に関する調査研究(日本におけるレセプト調査)、12. 中国(天清市)における高齢者に対する健康増進運動と医療行動調査、13. 健康福祉医療政策

成績評価基準: 毎回の授業についての感想と各自の研究についてのレポートおよび出席等で総合的に判断
授業計画:

第1回：予防医学と私の足跡—実験科学と調査—	第9回：河川水と水道水の比較調査、大学時代の運動と中高年の健康(質問紙法による調査)
第2回：生物学の進歩・環境衛生(日内リズム: 動物実験)	第10回：分子予防医学研究(動物実験による日内リズム研究を中心にして)
第3回：感染症の疫学—梅毒、日本脳炎、麻疹調査—	第11回：狭山市と名栗村における健康増進運動：血清疫学的調査を含めた総合調査
第4回：重金属代謝実験(動物実験)	第12回：天津市における健康増進運動と医療行動調査
第5回：カドミウム投与実験と鉱山地域の環境汚染調査	第13回：天津市におけるスピリリナ投与調査、マッサージの効果調査
第6回：山村無医地区の健康管理—非A非B肝炎、ATLの血清疫学調査	第14回：日本・韓国における高齢者施設の感染症対策と生きがいづくりと健康
第7回：ミネラルと健康(動物実験)、栄養調査、体力科学研究	第15回：研究発表
第8回：適度な運動・ストレスと非特異免疫を中心とした生体防御機能(動物実験)	

福祉教育特論

前橋 明

本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。

したがって、本講では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。なお、本講義内容は、DP 科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、7-5に該当する。

成績評価基準:出席、発表やディスカッションへの参加(50%)、課題レポートの提出(50%)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 授業の概要と進め方	第9回: 育児・保育現場での支援と福祉の心
第2回: 福祉教育の目的と内容	第10回: 輝く子どもの未来づくり(子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える)
第3回: 高等学校福祉科の現状と課題	第11回: 学校ならびに家庭や地域における福祉教育の具体的実践・ボランティア活動
第4回: 高等学校福祉科が行っている福祉体験・レポート課題の提示	第12回: レポート課題報告と討論・評価①
第5回: 福祉体験Ⅰ(車椅子援助体験)	第13回: レポート課題報告と討論・評価②
第6回: 福祉体験Ⅱ(視覚障がい者の方への手引き体験)	第14回: レポート課題報告と討論・評価③
第7回: 福祉体験Ⅲ(福祉レクリエーション)	第15回: 課題レポートの最終提出と解説
第8回: バリアフリー調査・チェックリスト作成	

緩和医療学特論

(偶数年度開講)

小野 充一

講義の目標:

- A) 緩和医療学全般に関する知識を得て、緩和医療の中心的な概念を理解する。
- B) プロフェッショナルとして、ハードな現場に立つ際のコミュニケーションの手法を理解し、身につける。
- C) 臨床死生学における様々な課題を検証し、解決に向けて取り組む姿勢を身につける。
- D) 緩和医療学で用いる調査や研究手法を理解する。

授業内容: 緩和医療の現場で直面している多くの課題について、グループでテーマを選択して、各グループでテーマに関連した論文を2編選択し、批判的に検証する。その後に、グループ発表を行い、さらに多角的な検証を全体の総括討論で行う。この作業を2巡したのちに、緩和医療の課題と将来像と言うテーマで総括討論(個人を行う)

成績評価基準: 講義出席状況、論文の発表、最終レポートの総合評価

授業計画:

第1回: イントロダクション/講義のねらい・進行予定	第9回: 発表・討論(グループC・D)
第2回: 批判的検証とは	第10回: グループ作業
第3回: グループ作業	第11回: 発表・討論(グループA・B)
第4回: 発表・討論(グループA・B)	第12回: 総括討論
第5回: グループ作業	第13回: グループ報告のまとめ・総括
第6回: 発表・討論(グループC・D)	第14回: 総括討論(個人)/緩和医療の課題と将来像
第7回: 総括討論	第15回: 総括討論のまとめ・解説
第8回: グループ作業	

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野を網羅しながら刺激的問題提起を含む教科書を選定する予定である(具体的な書名は、開講時に提示する)。「子どもとは何か」「子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。

成績評価基準:課題レポートの提出、発表や討論への参加から総合的に評価する。

備考:本講義内容は、DP 科目基礎1-3、4-1、DP 科目認知2-1、2-2、DP 科目社会情動1-6、1-7 および DP 科目育児保育1-1、1-2、2-1、2-2、6-2、6-6、7-3、7-4、7-5、7-7に該当する。

授業計画:

第1回:オリエンテーション(含:教科書選定のためのニーズ調査)	第9回:子どもの居場所(その2)
第2回:子どもの権利規範の形成過程(権利思想、権利論、権利宣言、権利条約)	第10回:子どもの居場所見学(その1:早期療育教室)
第3回:子どもの権利条約(その1:子どもの参加)	第11回:子どもの居場所見学(その2:フリースクール、たまり場)
第4回:子どもの権利条約(その2:子どもの意見表明権)	第12回:子どもの居場所見学(その3:プレイパーク)
第5回:子どもの権利条約(その3:教育を受ける権利)	第13回:見学レポートの発表(その1)
第6回:いじめ・不登校・ひきこもり(その1)	第14回:見学レポートの発表(その2)
第7回:いじめ・不登校・ひきこもり(その2)	第15回:まとめ(子どもと保護者への支援のあり方)
第8回:子どもの居場所(その1)	

精神保健福祉特論

(偶数年度開講)

田中 英樹

精神保健福祉学は、精神保健という特定領域分野における社会福祉の政策と実践を範疇に形成されつつある。しかし、成立間もない若い学問であり、その体系化は今日の課題でもある。歴史的に見ると精神保健福祉学は、1997年の精神保健福祉士法の制定により、指定科目として「精神保健福祉論」が登場したことを契機に実体化した。この内容には、精神障害者福祉論そのものであり、必ずしも精神保健福祉と同義語ではない。しかし、精神保健福祉学の主要な内容であることも明らかである。

そこで、本講義では、精神障害者福祉をベースに広く精神保健福祉を国民の精神保健全般を福祉的視座から論考・解題していくこととする。講義では、精神障害者福祉の歴史と形成過程、関連する法の変遷、障害の構造的理解、障害者自立支援法、関連施策、精神障害者の現状と人権、スティグマ、メンタルヘルスの諸課題などを取り上げながら考察していきたい。

成績評価基準:授業の出席状況及びレポート等を総合的に評価する

授業計画:

第1回:わが国の精神保健・精神保健福祉の現状	第9回:精神保健福祉士の役割
第2回:障害者福祉の理念と精神保健福祉学	第10回:精神障害者リハビリテーションの課題
第3回:精神保健福祉の歴史(日本)	第11回:精神障害者の人権
第4回:精神保健福祉の歴史(欧米)	第12回:関連法、関連施策について
第5回:精神保健福祉の歴史(アジア・オセアニア)	第13回:相談援助活動とストレスモデル
第6回:精神医学の基礎知識	第14回:精神保健福祉とコミュニティソーシャルワーク

第7回：メンタルヘルスとライフサイクル	第15回：レポート課題と解説
第8回：精神障害者施策の現状	

健康福祉支援工学特論

(奇数年度開講)

畠山 卓朗

障害がある人と生活支援機器、さらにはそれを支える社会環境などに着目し、障害がある人の QOL (Quality of Life、生活の質) 向上を目指した研究を行うための基礎を身につけます。

具体的なテーマとしては、自立生活への動機付けと生活支援機器が果たす役割、生活支援機器供給システムのあり方、障害者用インタフェースの開発とユーザビリティ評価、バリアフリーとユニバーサル・デザインなど広範囲の研究テーマをカバーします。

成績評価基準: 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：バリアフリーを考える(1)
第2回：障がいを考える	第10回：バリアフリーを考える(2)
第3回：自立を考える	第11回：ユニバーサル・デザイン(1)
第4回：人と生活環境、社会・自然・動物との相互作用	第12回：ユニバーサル・デザイン(2)
第5回：動機付けはいかんして導き出されるか	第13回：人間中心設計について
第6回：生活支援機器とその役割	第14回：まとめ、レポート課題提示
第7回：生活支援機器供給システムのあり方	第15回：フリーディスカッション
第8回：障がい者用インタフェース	

ソーシャルワーク特論

岩崎 香

主要なソーシャルワーク理論に関する考察を深め、実践に関する実証研究のあり方を学ぶことを目的とする。

まず、ソーシャルワーク理論の歴史を概観し、主要なソーシャルワーク理論について学ぶ。その上で近年のソーシャルワーク実践に関する実証研究の方法論の動向を理解し、理論と実践のあり方、現状について考察する。

評価方法は、授業における発表及び学期末レポートとする。

授業計画:

第1回：授業に関するオリエンテーション	第9回：エンパワーメント・アプローチ
第2回：ソーシャルワークの実践モデルについて	第10回：ナラティブ・アプローチ
第3回：診断主義と機能主義	第11回：実証研究(1)
第4回：問題解決アプローチ	第12回：実証研究(2)
第5回：家族療法とソーシャルワーク	第13回：実証研究(3)
第6回：行動療法とソーシャルワーク	第14回：実証研究(4)
第7回：課題中心アプローチ	第15回：まとめ
第8回：エコロジカル・アプローチ	

[臨床心理学研究領域]

社会病理学特論

野村 忍

現代社会は、技術革新、情報化、グローバル化、少子高齢化社会など多くの難問に直面している。こ

うした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な情動変化とそれに伴う身体的変化、さらにはそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。この科目では、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、および種々の社会病理的問題の対策について講義する。

成績評価基準:出席点、研究発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：社会病理学総論	第10回：不安障害
第3回：労働安全衛生法の解説	第11回：適応障害
第4回：ストレスのアセスメント	第12回：研究発表(1)
第5回：テクノストレス	第13回：研究発表(2)
第6回：アルコール性障害	第14回：研究発表(3)
第7回：過労死	第15回：レポート課題と解説
第8回：過労自殺	

臨床心理査定特論Ⅱ

佐々木 和義、大月 友

検査対象者の状態像の把握、ウェクスラー式知能の実践的解釈、諸発達検査について講義する(佐々木担当)。

パーソナリティ検査、行動観察、状態・症状の査定、およびテストバッテリーの組み方について講義する(大月担当)。

成績評価基準:出席点50%、期末レポート50%。

授業計画:

第1回：対象者の状態像の把握(感覚障害、認知障害、感覚性失語症)	第9回：パーソナリティ検査の解釈と報告書の作成
第2回：対象者の状態像の把握(行為障害、運動性失語症、動機づけと注意の問題)	第10回：パーソナリティ検査結果のフィードバック
第3回：ウェクスラー式知能検査の構造と他の知能検査、発達検査	第11回：行動観察の方法
第4回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際:事例(1)	第12回：行動観察実習
第5回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際:事例(2)	第13回：状態・症状の査定(1)
第6回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際と、報告書の書き方:事例(3)	第14回：状態・症状の査定(2)
第7回：WISC-Ⅲ知能検査の解釈の実際と、報告書の書き方:事例(4)	第15回：テストバッテリーの組み方
第8回：パーソナリティ検査の理論と実施法	

*第1～7回は佐々木担当。8～15回は大月担当。

臨床心理学特論Ⅱ

根建 金男

認知行動療法と相互補完的な関係にある、構成主義心理療法(constructive psychotherapies)、なかでも特に、George Kelly によって提唱されたパーソナル・コンストラクト療法(Personal Construct Therapy)について学ぶ。そのために、関連の文献を輪読し、議論する。

成績評価基準:出席状況、平常点を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 受講ガイダンス	第9回: 「ジョージ・ケリ研究(2)」(論文)に関する発表と討論(1)
第2回: 構成主義心理療法とパーソナル・コンストラクト療法の概説	第10回: 「ジョージ・ケリ研究(2)」(論文)に関する発表と討論(2)
第3回: 「構成主義心理療法に対する評価」(論文)に関する発表と討論(1)	第11回: 「ジョージ・ケリ研究(2)」(論文)に関する発表と討論(3)
第4回: 「構成主義心理療法に対する評価」(論文)に関する発表と討論(2)	第12回: 「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」(論文)に関する発表と討論(1)
第5回: 「構成主義心理療法に対する評価」(論文)に関する発表と討論(3)	第13回: 「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」(論文)に関する発表と討論(2)
第6回: 「ジョージ・ケリ研究(1)」(論文)に関する発表と討論(1)	第14回: 「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」(論文)に関する発表と討論(3)
第7回: 「ジョージ・ケリ研究(1)」(論文)に関する発表と討論(2)	第15回: 「George A. Kelly の個人的構成概念の心理学」(論文)に関する発表と討論(4)
第8回: 「ジョージ・ケリ研究(1)」(論文)に関する発表と討論(3)	

臨床心理面接法特論Ⅰ

菅野 純

教育臨床場面(教育相談、発達相談、スクールカウンセラー、学校心理士など)を想定し、そこでの援助、治療、コンサルテーションなどの展開の方法を学ぶ。基本的方法を学んだ後、事例検討を行う。受講者がそれぞれの臨床現場でかかわる事例を持ち寄っての検討も行いたい。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、発表および討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 教育臨床心理学概論	第9回: 教育相談事例研究(4)
第2回: 教育相談事例研究(1)	第10回: 教育臨床の方法(1) 学級崩壊への介入
第3回: 教育相談事例研究(2)	第11回: 教育臨床の方法(2) 学校コンサルテーション①
第4回: 発達相談事例研究(1)	第12回: 教育臨床の方法(3) 学校コンサルテーション②
第5回: 発達相談事例研究(2)	第13回: 教育臨床の方法(4) ロールプレイングを通じた生徒との関わり実習
第6回: 教育臨床における心理アセスメントの方法(1) 文章完成法(SCT)テスト児童編	第14回: 教育臨床の方法(5) ロールプレイングを通じた保護者との関わり実習
第7回: 教育臨床における心理アセスメントの方法(2) 文章完成法(SCT)テスト生徒編	第15回: 教育臨床の方法(6) ロールプレイングを通じた教師との関わり実習
第8回: 教育相談事例研究(3)	

教育臨床心理学特論

菅野 純

現代の学校教育場面では、従来の教育的方法では対処できない問題が数多く出現している。たとえば、子供の発達障害から不適応行動、家庭崩壊や愛情飢餓など心理環境の原因からくる問題行動、そして子どもへの指導や保護者の対応などに悩み追い詰められていく教師たち…など学校はあたかも社会の縮図のごとく問題が折り重なっている。それらの問題に対して、文化的・社会的および歴史的視点を踏まえた臨床心理学的理論と方法を用いて説明をはかりたい。

成績評価基準:出席状況、レポート、および教場試験により総合的に評価する。

授業計画:

第1回:教育臨床と心理臨床	第9回:青少年の攻撃性(4) 現代における事例②
第2回:社会的ひきこもり問題(1) 文化的考察	第10回:「心の癒し」(1) 教育臨床心理学的考察
第3回:社会的ひきこもり問題(2) 教育臨床心理学的考察	第11回:「心の癒し」(2) 心理臨床学的考察
第4回:社会的ひきこもり問題(3) 現代におけるひきこもり事例	第12回:時代の中の青年心理(1) 文化・教育臨床心理学的考察
第5回:社会的ひきこもり問題(4) ひきこもりと犯罪	第13回:時代の中の青年心理(2) 事例検討
第6回:青少年の攻撃性(1) 文化的考察	第14回:教育臨床心理学の方法
第7回:青少年の攻撃性(2) 教育臨床心理学的考察	第15回:文化臨床心理学の方法
第8回:青少年の攻撃性(3) 現代における事例①	

臨床心理査定特論Ⅰ

熊野 宏昭

ロールシャッハ・テストは、投影法パーソナリティ検査の中で臨床現場で最もよく使われているものである。その理由は、パーソナリティ障害、精神病性障害、発達障害などが疑われる場合に、1回の検査で臨床的判断に役に立つ情報が得られるからである。また、他の投影法検査と比べて、はるかにデータベースが充実しており、自動診断システムも開発され、実証的な研究の数が多いことも利点となる。本講義では、3人一組のグループを構成してお互いに検査を実施し、さらにはスコアリング法、解釈法などに関する発表を担当しながら、スコアリングと解釈の進め方を身につけることを目標にする。

成績評価基準:授業出席や発表参加状況等から評価する。

授業計画:

第1回:心理アセスメントとロールシャッハ	第9回:スコアリング実習(3)
第2回:ロールシャッハ・テスト実施技法	第10回:解釈のための基礎知識
第3回:検査実施実習(1)	第11回:解釈実習(1)
第4回:検査実施実習(2)	第12回:解釈実習(2)
第5回:検査実施実習(3)	第13回:解釈実習(3)
第6回:スコアリングのための基礎知識	第14回:その他の投影法概説
第7回:スコアリング実習(1)	第15回:まとめ
第8回:スコアリング実習(2)	

臨床心理学特論Ⅰ

鈴木 伸一

うつ病(うつ病性障害)、不安障害、適応障害、摂食障害、身体表現性障害などといった成人に比較的多く見

られる精神関連障害の心理社会的特徴を理解するとともに、これらの問題へのアセスメントと治療的介入（認知行動療法、行動療法など）の実践について解説する。また、事例検討などを通して介入のプランニングや他職種との連携などについても具体的に学んでいく。

参考図書：

鈴木伸一・神村栄一 実践家のための認知行動療法テクニックガイド 北大路書房

坂野雄二（編訳）エビデンスベースト心理治療マニュアル 日本評論社

成績評価基準：授業中の発表・発言等を総合して評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション	第9回：認知行動療法の理論と実践（7）
第2回：認知行動療法基礎	第10回：認知行動療法の理論と実践（8）
第3回：認知行動療法の理論と実践（1）	第11回：認知行動療法の理論と実践（9）
第4回：認知行動療法の理論と実践（2）	第12回：認知行動療法の理論と実践（10）
第5回：認知行動療法の理論と実践（3）	第13回：認知行動療法の理論と実践（11）
第6回：認知行動療法の理論と実践（4）	第14回：認知行動療法の理論と実践（12）
第7回：認知行動療法の理論と実践（5）	第15回：まとめ
第8回：認知行動療法の理論と実践（6）	

臨床心理面接法特論Ⅱ

嶋田 洋徳

本特論では、心理臨床面接で必要とされるさまざまなスキルの獲得を目的とする。具体的には、主訴の把握、臨床心理アセスメント、診断基準、問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動観察、介入方針や治療仮説の立案（主として行動分析）、面接の進め方、介入の中間評価と方針の変更の検討、治療の終結と評価の方法を中心に概説を行い、同時に実習を行う。また、受講生が担当している事例についても、前述の観点から検討を行う。

成績評価基準：出席状況、提出物の評価、講義中の発表、および、試験の得点等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：イントロダクション、臨床心理学的アプローチの方法	第9回：行動の生起頻度を増大させる随伴操作の理論と実際
第2回：臨床心理面接の進め方の理論と実際	第10回：不適切な行動を減少させる結果操作の理論と実際
第3回：主訴の把握、臨床心理アセスメント、診断基準の理論と実際	第11回：分化強化、刺激制御、シェイピングの理論と実際
第4回：問題の焦点づけ、支援目標の設定、行動目標の作成の理論と実際	第12回：機能査定と機能分析の理論と実際
第5回：データの収集、グラフ化と行動観察の理論と実際	第13回：行動変容の般化の理論と実際
第6回：介入方針、治療仮説の立案の理論と実際	第14回：行動のセルフ・コントロールの理論と実際
第7回：一事例実験デザインの理論と実際	第15回：治療の終結の理論と実際、まとめ
第8回：介入の中間評価と方針変更の検討の理論と実際	

行動療法特論

嶋田 洋徳

行動療法とは、学習理論、もしくは行動理論に基づいた心理療法の総称である。行動療法の特徴は、様々な心理的諸問題を、人間の社会化あるいは個性化のプロセスにおいて誤って学習された結果や習慣もしくは適応的な行動や反応を未だ獲得していない結果や状態であると考ええる点にある。本特論では、行動療法の歴史や基本的発想、理論的基礎を概観するとともに、症例研究を通して行動療法の理論と実際について理解することを目的とする。

なお、本特論は、全回オンデマンド授業として実施する。

また、人間科学部設置科目「行動療法」の単位を取得した者は、本特論の履修はできない。

成績評価基準:出席状況(制限時間内のアクセス記録)、BBS の書き込みによる提出物の評価、および、試験の得点等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：オペラント型介入(シェイピング法など)
第2回：心理学における「行動」	第10回：認知媒介型介入(モデリング法など)
第3回：行動療法の考え方・位置づけ	第11回：行動療法の手続き(行動観察など)
第4回：問題行動・不適応症状の概念	第12回：治療効果の測定(統制群法、単一事例実験計画法など)
第5回：心理学的諸問題や精神疾患のアセスメント	第13回：行動療法の特徴
第6回：行動の学習(さまざまな行動が身につく過程)	第14回：セルフ・コントロール
第7回：行動(機能)分析	第15回：まとめ
第8回：レスポナント型介入(系統的脱感作法など)	

臨床心理基礎実習Ⅰ

菅野 純、根建 金男

前半は菅野が担当し、臨床場面でのインテーク面接から終了に至るまでのプロセスを実習を通して学んでいく。主にクライアントセンタードの技法を中心に、クライアントの見たて方、カウンセリング上生じる諸問題の解決法などを学ぶ。描画療法、コラージュ、箱庭療法、プレイセラピーの実習も行っていく。

後半は根建が担当し、行動療法と認知行動療法の技法を実習を通じて学ぶ。具体的には、行動療法の技法(リラクセーション法、系統的脱感作法など)、認知行動療法の技法(認知的再体制化法)をとりあげる。必要に応じて、これらの技法の背景になっている考え方や理論についてもふれる。

成績評価基準:出席状況、平常点を総合的に評価する。

授業計画:

前半(菅野 純担当)

第1回：臨床心理基礎実習概論(1)	第16回：カウンセリング実習(4)生徒編②
第2回：臨床心理基礎実習概論(2)	第17回：カウンセリング実習(5)保護者編①
第3回：発達検査(WISC-Ⅲ)施行法(1)	第18回：カウンセリング実習(6)保護者編②
第4回：発達検査(WISC-Ⅲ)施行法(2)	第19回：カウンセリング実習(7)親子編①
第5回：発達検査(WISC-Ⅲ)解釈法(1)	第20回：カウンセリング実習(8)親子編②
第6回：発達検査(WISC-Ⅲ)解釈法(2)	第21回：カウンセリング実習(9)家族編①
第7回：生育歴調査の方法(1)	第22回：カウンセリング実習(10)家族編②
第8回：生育歴調査の方法(2)	第23回：絵画療法実習(1)

第9回：初回面接実習(1)	第24回：絵画療法実習(2)
第10回：初回面接実習(2)	第25回：スクイグル法実習
第11回：初回面接実習(3)	第26回：プレイセラピー実習
第12回：初回面接実習(4)	第27回：コラージュ法実習(1)
第13回：カウンセリング実習(1) 児童編①	第28回：コラージュ法実習(2)
第14回：カウンセリング実習(2) 児童編②	第29回：箱庭療法実習(1)
第15回：カウンセリング実習(3) 生徒編①	第30回：箱庭療法実習(2)

後半(根建 金男担当)

第1回：受講ガイダンス	第16回：漸進的弛緩法実習(1)
第2回：ビデオ「行動療法」の視聴と討論	第17回：漸進的弛緩法実習(2)
第3回：「継時近接法による登校拒否の治療」(ケース研究)に関する発表と討論(1)	第18回：漸進的弛緩法実習(3)
第4回：「継時近接法による登校拒否の治療」(ケース研究)に関する発表と討論(2)	第19回：系統的脱感作法に関する発表と討論(1)
第5回：「生活習慣と社会的学習」(論考)に関する発表と討論(1)	第20回：系統的脱感作法に関する発表と討論(2)
第6回：「生活習慣と社会的学習」(論考)に関する発表と討論(2)	第21回：系統的脱感作法実習(1)
第7回：ビデオ「行動教育の実際-非反響語の形成、発声行動の形成」の視聴と討論(1)	第22回：系統的脱感作法実習(2)
第8回：ビデオ「行動教育の実際-非反響語の形成、発声行動の形成」の視聴と討論(2)	第23回：系統的脱感作法実習(3)
第9回：ビデオ「自律訓練法の実際」の視聴と討論(1)	第24回：認知的再体制化法に関する発表と討論(1)
第10回：ビデオ「自律訓練法の実際」の視聴と討論(2)	第25回：認知的再体制化法に関する発表と討論(2)
第11回：自律訓練法実習(1)	第26回：認知的再体制化法実習(1)
第12回：自律訓練法実習(2)	第27回：認知的再体制化法実習(2)
第13回：自律訓練法実習(3)	第28回：認知的再体制化法実習(3)
第14回：漸進的弛緩法に関する発表と討論(1)	第29回：認知的再体制化法実習(4)
第15回：漸進的弛緩法に関する発表と討論(2)	第30回：授業全体のまとめ

臨床心理基礎実習Ⅱ

菅野 純、根建 金男

前半は菅野が担当し、臨床場面でのインテーク面接から終了に至るまでのプロセスを実習を通して学んでいく。主にクライアントセンタードの技法を中心に、クライアントの見たて方、カウンセリング上生じる諸問題の解決法などを学ぶ。描画療法、コラージュ、箱庭療法、プレイセラピーの実習も行っていく。

後半は根建が担当し、行動療法と認知行動療法の技法を実習を通じて学ぶ。具体的には、行動療法の技法(リラクゼーション法、系統的脱感作法など)、認知行動療法の技法(認知的再体制化法)をとりあげる。必要に応じて、これらの技法の背景になっている考え方や理論についてもふれる。

成績評価基準:出席状況、平常点を総合的に評価する。

授業計画:

前半(菅野 純担当)

第1回:臨床心理基礎実習概論(1)	第16回:カウンセリング実習(4)生徒編②
第2回:臨床心理基礎実習概論(2)	第17回:カウンセリング実習(5)保護者編①
第3回:発達検査(WISC-III)施行法(1)	第18回:カウンセリング実習(6)保護者編②
第4回:発達検査(WISC-III)施行法(2)	第19回:カウンセリング実習(7)親子編①
第5回:発達検査(WISC-III)解釈法(1)	第20回:カウンセリング実習(8)親子編②
第6回:発達検査(WISC-III)解釈法(2)	第21回:カウンセリング実習(9)家族編①
第7回:生育歴調査の方法(1)	第22回:カウンセリング実習(10)家族編②
第8回:生育歴調査の方法(2)	第23回:絵画療法実習(1)
第9回:初回面接実習(1)	第24回:絵画療法実習(2)
第10回:初回面接実習(2)	第25回:スクイグル法実習
第11回:初回面接実習(3)	第26回:プレイセラピー実習
第12回:初回面接実習(4)	第27回:コラージュ法実習(1)
第13回:カウンセリング実習(1)児童編①	第28回:コラージュ法実習(2)
第14回:カウンセリング実習(2)児童編②	第29回:箱庭療法実習(1)
第15回:カウンセリング実習(3)生徒編①	第30回:箱庭療法実習(2)

後半(根建 金男担当)

第1回:受講ガイダンス	第16回:漸進的弛緩法実習(1)
第2回:ビデオ「行動療法」の視聴と討論	第17回:漸進的弛緩法実習(2)
第3回:「継時近接法による登校拒否の治療」(ケース研究)に関する発表と討論(1)	第18回:漸進的弛緩法実習(3)
第4回:「継時近接法による登校拒否の治療」(ケース研究)に関する発表と討論(2)	第19回:系統的脱感作法に関する発表と討論(1)
第5回:「生活習慣と社会的学習」(論考)に関する発表と討論(1)	第20回:系統的脱感作法に関する発表と討論(2)
第6回:「生活習慣と社会的学習」(論考)に関する発表と討論(2)	第21回:系統的脱感作法実習(1)
第7回:ビデオ「行動教育の実際-非反響語の形成、発声行動の形成」の視聴と討論(1)	第22回:系統的脱感作法実習(2)
第8回:ビデオ「行動教育の実際-非反響語の形成、発声行動の形成」の視聴と討論(2)	第23回:系統的脱感作法実習(3)
第9回:ビデオ「自律訓練法の実際」の視聴と討論(1)	第24回:認知的再体制化法に関する発表と討論(1)
第10回:ビデオ「自律訓練法の実際」の視聴と討論(2)	第25回:認知的再体制化法に関する発表と討論(2)
第11回:自律訓練法実習(1)	第26回:認知的再体制化法実習(1)
第12回:自律訓練法実習(2)	第27回:認知的再体制化法実習(2)

第13回：自律訓練法実習(3)	第28回：認知的再体制化法実習(3)
第14回：漸進的弛緩法に関する発表と討論(1)	第29回：認知的再体制化法実習(4)
第15回：漸進的弛緩法に関する発表と討論(2)	第30回：授業全体のまとめ

臨床心理実習Ⅰ

熊野 宏昭、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

この授業の受講生は、臨床心理基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実際について、実習を通して理解することを目的とする。

人間科学学術院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、および、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(8)
第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第17回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)
第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第18回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(9)
第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第19回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)
第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第20回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(10)
第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第21回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)
第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第22回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(11)
第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)	第23回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)
第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第24回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(12)
第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)	第25回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)
第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第26回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(13)
第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)	第27回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)
第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第28回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(14)
第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(7)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

臨床心理実習Ⅱ

熊野 宏昭、嶋田 洋徳、鈴木 伸一

この授業の受講生は、臨床心理基礎実習ⅠおよびⅡを履修した大学院生に限る。心理臨床面接におけるインテーク、アセスメントおよび治療支援的援助の実際について、実習を通して理解することを目的とする。

人間科学学術院心理相談室におけるインテーク面接および関連施設で担当したケースについてのスーパービジョンを中心に、実践的な面接スキル、他スタッフとの連携などを学習する。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、および、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(8)
第2回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第17回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)
第3回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第18回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(9)
第4回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第19回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)
第5回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(1)	第20回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(10)
第6回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第21回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)
第7回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第22回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(11)
第8回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(4)	第23回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)
第9回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(2)	第24回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(12)
第10回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(5)	第25回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)
第11回：教育分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第26回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(13)
第12回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)	第27回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(6)
第13回：医療分野の実習報告とスーパービジョン、および討論(3)	第28回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(14)
第14回：心理相談室の実習報告とスーパービジョン、および討論(7)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理療法特論Ⅰ

(偶数年度開講)

山口 創

本講義では、数ある心理療法のなかで、特に身体的アプローチをするものについて取り上げる。身体的アプローチをする心理療法として、たとえば自律訓練法や動作療法が知られているが、それらの技法に留まらず、

広い観点から「身体から心へ」と影響を与える体系としてボディ・ワークも取り上げる。講義ではまず、これらのアプローチに共通する基礎的な研究や理論について紹介し、次いで身体志向的な心理療法や心身の健康増進を目指した技法について紹介していく。具体的には、心理療法として自律訓練法、動作法、マインドフルネスを、ボディワークとして野口体操、太極拳、ヨーガ、マッサージなどを取り上げる。授業を通じて各療法について体験的に学べるように、ボディワークの実習も行う。また各自が興味ある論文を発表してもらい、全員でディスカッションする。

成績評価基準:授業への出席状況、発表内容、質疑応答やディスカッションへの参加状況などを総合して行う。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：ボディワーク1
第2回：現代における身体的アプローチの意義	第10回：ボディワーク2
第3回：身体心理学1	第11回：ボディワーク3
第4回：身体心理学2	第12回：発表とディスカッション1
第5回：身体心理学3	第13回：発表とディスカッション2
第6回：身体志向的心理療法1	第14回：発表とディスカッション3
第7回：身体志向的心理療法2	第15回：まとめと総括
第8回：身体志向的心理療法3	

心理療法特論Ⅱ

(奇数年度開講)

三浦 正江

本講義では、治療的手法および予防的手法として注目されているストレス・マネジメント・プログラムについて取り上げる。具体的には、心理的ストレス理論の主要概念であるストレスラー、認知的評価、コーピング、ストレス反応について理解する。そして、治療場面において認知やコーピングの問題をどのように扱うかを考える。また、ストレス反応を軽減する効果的な方法として、漸進的筋弛緩法や自律訓練法の実施方法と臨床事例への適用を紹介する。最後に、ストレス・マネジメント・プログラムや心理的ストレス理論を活かした予防的介入の具体例を取り上げる。心理臨床の専門家として、ストレス・マネジメント・プログラムを様々な領域において実施可能となることが本講義の目標である。

成績評価基準:授業出席状況、発表内容、ディスカッション等での発言、課題等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：ストレス・コーピング(1)
第2回：心理的ストレス理論(1)	第10回：ストレス・コーピング(2)
第3回：心理的ストレス理論(2)	第11回：ストレス・コーピング(3)
第4回：リラクゼーション技法(1)	第12回：予防的介入(1)
第5回：リラクゼーション技法(2)	第13回：予防的介入(2)
第6回：認知的評価(1)	第14回：予防的介入(3)
第7回：認知的評価(2)	第15回：講義全体のまとめ
第8回：認知的評価(3)	

学校臨床心理学特論

小林 正幸

学校心理学を理論的背景に、スクール・カウンセラーあるいは校内で教育相談推進者のレベルの力量を目指す。ある意味ではそれ以上の水準の習得を目指す。(1)カウンセラー、教育相談担当者、研究者としての構え・働きかけ・姿勢を形成する。(2)実践に密着した題材から学ぶ。(3)実践的に思考し、実践的な技術を習得

する、実践にかかわる体系的知識を獲得する。内容としては、現代の教育問題の中核を占める不登校問題を中心に講義する。また、チームで支援する観点から発達障害のある子どもや不登校の子どもへの学校関係者の協働による支援についても取り上げ、チーム支援の具体的方法を学ぶ。

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2、2-2、3-3、4-3、4-5、4-6、5-3、および、DP 科目情動1-1、1-2、1-6、2-3、2-4に該当する

成績評価基準:評価は、多軸的絶対評価で、ポイント制を用いる。

到達度について、レポートの相互評価ポイント、自発的に行う特別レポートの評価ポイント、授業の途中で行う作業ポイントなどを加算することにより、数量化して評価を行う。評価体系が複雑なので、初回に解説を行う。

授業計画:

第1回：現代の教育問題の意味(1)	第9回：協働による子ども支援
第2回：現代の教育問題の意味(2)	第10回：面接の方法(本人面接)
第3回：問題行動の形成要因	第11回：面接演習
第4回：問題行動の維持要因	第12回：面接演習
第5回：学校での事例検討(1)	第13回：コンサルテーションの方法
第6回：学校での事例検討(2)	第14回：コンサルテーションの演習
第7回：学校での事例検討(3)	第15回：事例研究コンテスト(2)
第8回：事例研究コンテスト(1)	

行動医学特論

熊野 宏昭

行動医学は、人間の身体・心理・社会面の相互連関を前提として、医師、コメディカル、心理、教育、スポーツ、栄養など様々な分野の専門家が協力して成り立つ分野である。本講義では、(1)行動医学的に見た不健康や病気の成り立ちとそれへの介入法(ストレス、リラクセーション、認知行動療法、マインドフルネス、アクセプタンス&コミットメント・セラピー)、(2)行動医学の主要な対象疾患としての心身症と生活習慣病(心身症と生活習慣病、パーソナリティと健康、糖尿病の行動医学)、(3)行動医学における先進的な研究法とその成果(行動変容の脳内機構、生態学的経時的評価法、QOL と治療の科学化)について順次講義を進め、日本ではまだまだ発展途上ではあるが大きなポテンシャルを持つこの分野の本質的理解を目指す。

成績評価基準:授業出席状況、Q&Aへの参加状況等から評価する。

授業計画:

第1回：行動医学の人間理解	第9回：パーソナリティと健康
第2回：ストレス科学の基本	第10回：糖尿病の行動医学
第3回：リラクセーション	第11回：行動変容の脳内機構
第4回：認知行動療法	第12回：生態学的経時的評価法
第5回：マインドフルネス	第13回：QOL と治療の科学化
第6回：アクセプタンス&コミットメント・セラピー	第14回：受講生とQ&A②
第7回：受講生とQ&A①	第15回：ディスカッション
第8回：生活習慣病と心身症	

社会心理学特論

浦 光博

人間の社会行動を、自己、他者、集団・組織、社会といった複数レベル間の相互影響過程の中での確に理解するための理論的・概念的枠組み、ならびに実証研究のための方法論の修得を目指す。特に、社会的排

斥が人と社会に及ぼす影響に焦点を当て、その影響過程の重層性について検討する。

成績評価基準:レポートにより評価する。

授業計画:

第1回: オリエンテーション: 社会行動における重層的な影響過程	第9回: サポート過程の基盤的メカニズム
第2回: 孤立と排斥の健康リスク	第10回: サポートのネガティブ効果
第3回: 孤立と排斥の社会リスク	第11回: 親密さのネガティブ効果
第4回: 孤立と排斥はなぜ人の健康を損なうのか	第12回: 貧しさと格差と対人関係
第5回: 孤立と排斥はなぜ社会を劣化させるのか	第13回: 嫉妬と劣等感の社会的起源
第6回: 社会的排斥と心の痛み(1)	第14回: 自ら孤立してしまう人たち
第7回: 社会的排斥と心の痛み(2)	第15回: ディスカッション
第8回: 心理社会的資源とサポート	

心理学研究法特論

福井 至

主要な心理学研究法である実験計画法、調査研究法、および事例研究法について、その意義と実際の方法について解説していく。また、質的研究法による仮説構成法や、Evidence-based Psychotherapy に必要なRCT、準実験や単一事例の実験計画法などの比較的新しい展開についても、その意義と実際の方法について解説する。

(生協で以下の2冊を購入して、予習しておくこと。)

「南風原朝和・市川仲一・下山晴彦編 心理学研究法入門 東京大学出版会」

「田中敏・山際勇一郎著 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 教育出版」)

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 授業の概要と進め方・心理学の研究とは何か	第9回: 準実験と単一事例実験
第2回: 質的調査	第10回: 教育・発達における実践研究
第3回: グランディッド・セオリー	第11回: 臨床における実践研究
第4回: 事例研究	第12回: 事例研究について
第5回: 量的調査	第13回: 事例報告の書き方
第6回: 実験の論理と方法	第14回: 研究の展開
第7回: 分散分析1	第15回: まとめ
第8回: 分散分析2	

心理統計法特論

笹川 智子

本講義の目的は、心理学領域で必要とされる、基礎的な統計の方法論を習得することである。

講義では主として(1)尺度構成法、(2)実験計画法、(3)多変量解析について取り上げる。心理学研究の代表的な研究デザインについて学ぶことで、心理統計を用いた論文を読みこなすだけでなく、自ら実験計画を立て、適切な方法でデータの解析ができるようになることを目指す。基礎理論の理解を優先させ、論理的思考力を養い、解析の過程でトラブルが起こった際にも、自ら問題解決できるような力を養うことが到達目標である。

なお、成績評価は出席状況に加えて、講義中の課題、および最終レポートの評価によるものとする。また、受講生の理解度を確認するため、小テストやアンケートを実施することがある。

授業計画:

第1回: オリエンテーション	第9回: 変数間の関係を記述しよう
第2回: 基礎統計の復習	第10回: 多変量解析とは
第3回: 尺度構成法(1)	第11回: 回帰分析
第4回: 尺度構成法(2)	第12回: 因子分析
第5回: よりよい尺度の作成を目指して	第13回: 共分散構造分析(1)
第6回: 実験計画法(1)	第14回: 共分散構造分析(2)
第7回: 実験計画法(2)	第15回: 総まとめ
第8回: 分散分析のさまざまな形	

精神医学特論

赤穂 理絵

①授業概要

前半10回の講義では、主たる精神疾患である『統合失調症』『気分障害(うつ病、躁病)』『神経症性障害』について、各々の症状と対応について概説する。特に現代の社会問題になっている“うつ病の増加”“自殺の増加”“ストレス反応性の精神障害(適応障害、PTSD)”については、詳細に解説する。後半5回で、癌をはじめとする重症身体疾患にあたっての人間の心理状態とサポートのあり方について、『リエゾンコンサルテーション精神医学』『サイコオンコロジー(精神腫瘍学)』『緩和医療における精神医学』の観点から解説する。

②授業の到達目標

『統合失調症』『気分障害』『神経症性障害』の概要を理解する。

うつ病、自殺の増加の現状を理解し、問題意識を持つことができる。

重症疾患を持つ人の心理状態、ケアあり方を理解し、“人間の生と死”に関して考える時間を持つ。

成績評価基準:授業中の発表あるいはレポート50%、平常点50%

授業計画:

第1回: 精神科概要	第9回: 不安性障害Ⅱ
第2回: 統合失調症Ⅰ(症状)	第10回: その他の精神障害
第3回: 統合失調症Ⅱ(疫学、治療)	第11回: リエゾンコンサルテーション精神医学
第4回: 統合失調症Ⅲ(社会復帰リハビリテーション)	第12回: サイコオンコロジーⅠ(精神腫瘍学)
第5回: 気分障害Ⅰ(症状)	第13回: サイコオンコロジーⅡ(医療におけるコミュニケーション)
第6回: 気分障害Ⅱ(疫学、治療)	第14回: 緩和医療における精神医学Ⅰ
第7回: 自殺の現状と対策	第15回: 緩和医療における精神医学Ⅱ (家族・遺族ケア)
第8回: 不安性障害Ⅰ	

心身医学特論

野村 忍

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面をも含めて全人的なアプローチを行う医学である。この科目では、心身症、神経症やうつ病などの病態についての理解および診断・治療法について、講義および実習を行う。また、最新のトピックスについてのレポート発表およびディスカッションを通して学習を深める。この授業は、心理臨床を志す人を主な対象として、必要な心身医学的知識・技術の習得を目標とする。

成績評価基準:出席点、研究発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：心身医学総論	第10回：自律訓練法の実習
第3回：薬物療法	第11回：交流分析の実習
第4回：心理療法	第12回：研究発表(1)
第5回：循環器心身症	第13回：研究発表(2)
第6回：消化器心身症	第14回：研究発表(3)
第7回：呼吸器心身症	第15回：レポート課題と解説
第8回：不安障害	

心理臨床現場実習Ⅰ

菅野 純

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実習分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅱ

野村 忍

この科目は、人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の実習分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導)

導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回:オリエンテーション	第16回:現場実習事前指導(2)
第2回:現場実習事前指導(1)	第17回:教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回:教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回:医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回:医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回:現場実習事後指導(2)
第14回:現場実習事後指導(1)	第29回:後期のまとめ
第15回:前期のまとめ	第30回:総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅲ

根建 金男

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回:オリエンテーション	第16回:現場実習事前指導(2)
第2回:現場実習事前指導(1)	第17回:教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回:教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回:医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回:医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回:現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)

第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅳ

佐々木 和義

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:実習レポートやSV時のやりとり等を総合して評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅴ

嶋田 洋徳

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)

第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅵ

鈴木 伸一

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅶ

熊野 宏昭

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題に対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)
第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

心理臨床現場実習Ⅷ

大月 友

この授業の受講生は、臨床心理学研究領域に所属する大学院生に限る。人間科学学術院心理相談室をはじめとして、学外の教育分野および医療分野などの心理臨床の現場におけるさまざまな技術を獲得し、それを向上させることを目的とする。

具体的には、心理臨床実習を通して、インテーク、アセスメント、他のスタッフとの連携、マネジメント、治療支援的援助などについて学ぶ。また、担当したケースの理解をはじめとして、関連する諸問題のに対するスーパービジョン(事前指導、および事後指導を含む)を定期的に受けることを通して、今後の学習課題を明確にする。

成績評価基準:授業中の発表、討論への参加、実習レポート等の提出物を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：現場実習事前指導(2)
第2回：現場実習事前指導(1)	第17回：教育分野における心理臨床現場の実際(2)
第3回：教育分野における心理臨床現場の実際(1)	第18回：医療分野における心理臨床現場の実際(2)
第4回：医療分野における心理臨床現場の実際(1)	第19回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(10)
第5回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(1)	第20回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(11)
第6回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(2)	第21回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(12)

第7回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(3)	第22回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(13)
第8回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(4)	第23回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(14)
第9回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(5)	第24回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(15)
第10回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(6)	第25回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(16)
第11回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(7)	第26回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(17)
第12回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(8)	第27回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(18)
第13回：現場実習の振り返りと今後の方針検討(9)	第28回：現場実習事後指導(2)
第14回：現場実習事後指導(1)	第29回：後期のまとめ
第15回：前期のまとめ	第30回：総合まとめ

[感性認知情報システム研究領域]

感性心理学特論

齋藤 美穂

感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法也多岐にわたる。そこでこの特論では、まず、感覚と感性について基礎的側面を概説した後、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当てて応用的側面に関して講義する。特にノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知的側面に着目することを手がかりとして感性を考えていく。また文化的な共通点を知ると共に、相違点を講じることによって、感性に対する理解を深めるのと同時に自文化・他文化に対する理解も深めていく。なお授業では体験型の実習を含む場合もあるので、オンデマンドでも開講されるが、講義には出席し対面で受講することが望ましい。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の課題・レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：感性心理学の概要	第9回：感性の基礎的側面の理解:感性の測定方法
第2回：感性研究テーマの理解	第10回：感性の応用的側面の理解: 嗜好と感性(色彩嗜好の国際比較)
第3回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (視知覚の緒特性)	第11回：感性の応用的側面の理解: 嗜好と感性(肌の色の好みと国際比較)
第4回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (視知覚の脳内情報処理メカニズム)	第12回：感性の応用的側面の理解: 嗜好と感性(概念色の国際比較)
第5回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (聴覚の緒特性と情報処理)	第13回：感性の応用的側面の理解:表情と感性
第6回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (嗅覚の緒特性と情報処理)	第14回：感性の応用的側面の理解: 感覚協調と感性(色と香り、色と音)
第7回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (味覚の緒特性と情報処理)	第15回：感性心理学のまとめと感性研究の展望
第8回：感性の基礎的側面の理解:感覚と感性 (触覚の緒特性と情報処理)	

安全人間工学特論

(偶数年度開講)

石田 敏郎

人間工学は、異なるシステムおよび環境下における精神的、身体的タスクを行うための人間の役割、能力お

よびその限界を研究することを目的としている。本講では、産業現場、交通場面での人間行動を取り上げ、安全を保つための人間工学的研究について述べる。また、近年多発するヒューマンエラーに関し、その考え方、分析の方法および人間工学的対策立案に関して概括する。

成績評価基準:授業中の発表とレポート等を総合的に評価

授業計画:

第1回：授業の目的と進め方	第9回：交通と安全(1)
第2回：人間工学と安全	第10回：交通と安全(2)
第3回：安全に関わる人間特性(1)	第11回：事故防止の人間工学的対策(1)
第4回：安全に関わる人間特性(2)	第12回：事故防止の人間工学的対策(2)
第5回：事故分析の目的	第13回：事故事例研究(1)
第6回：事故分析の方法	第14回：事故事例研究(2)
第7回：分野別の事故分析(1)	第15回：まとめ
第8回：分野別の事故分析(2)	

生活支援工学特論

(奇数年度開講)

藤本 浩志

自立した生活を機器や道具によって支援することについて、その基本的な考え方や具体的な機器や道具の原理等について講義する。また併せてその効果の評価方法についても言及する。様々な生活支援機器が開発されているが、それらの効果の評価を試みる場合、それらを利用する目的に立ち戻って評価方法を検討する必要がある。感覚機能支援、運動機能支援について、それらの機器や道具の具体的な事例を紹介しながら解説を行なう。そのために必要な基礎的な知識や方法もその際に同時に説明する。これらの講義内容を踏まえて、後半では各履修学生に課題を提示し、各履修学生がプレゼンテーションを行う。さらにその内容に基づいてディスカッションを行い、理解を深める。

評価については、プレゼンテーションの内容と共にディスカッションの際の姿勢や内容を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：生活支援機器や福祉機器の事例紹介(2)
第2回：ヒトの運動機能(特に下肢運動機能)(1)	第10回：生活支援機器や福祉機器の事例紹介(3)
第3回：ヒトの運動機能(特に下肢運動機能)(2)	第11回：課題に対する履修生による関連プレゼンテーションと討論(1)
第4回：ヒトの運動機能(特に下肢運動機能)(3)	第12回：課題に対する履修生による関連プレゼンテーションと討論(2)
第5回：ヒトの感覚機能(特に皮膚感覚機能)(1)	第13回：課題に対する履修生による関連プレゼンテーションと討論(3)
第6回：ヒトの感覚機能(特に皮膚感覚機能)(2)	第14回：課題に対する履修生による関連プレゼンテーションと討論(4)
第7回：ヒトの感覚機能(特に皮膚感覚機能)(3)	第15回：総括と講評
第8回：生活支援機器や福祉機器の事例紹介(1)	

情報処理心理学特論

(奇数年度開講)

中島 義明

認知心理学が登場してから、最初の「第一の時代」が経過した。この間に、この新しい視点に立つ心理学はそれなりの実績を積み上げてきた。しかし、この時代になされた「認知変数」の切り出しは、本来は「統合体」とし

て融合し一つのまとまりをもった対象を、分析的研究に「都合の良いように」切り取ったものと言えよう。それゆえ、認知心理学の次の「第二の時代」には、これらの変数の一部を重ね合わせたり、さらに別の方向から眺めることによりそれまで独立して取り扱われてきた複数の「認知変数」を統合したり、接続させるといった作業がなされるべきである。

「今」こそ、認知心理学は自ら努力してでも「第二の時代」に入るべきである。本講義では、この信念に基づき、これまで認知心理学や伝統的心理学で取り扱われてきた諸「認知変数」(もしくは「認知的構成概念」)を理論的に検討し、この種の「連結」作業を試みるものである。

教科書として、下記の書物を使用する。

中島義明著『認知変数連結論』コロナ社2007年刊

成績評価基準:出席状況と適宜与える課題に対する発表内容に基づき行う。

授業計画:

第1回: 授業の概要と進め方	第9回: 「プライミング効果」と「ストループ効果」の連結性
第2回: 認知心理学的変数の「設定」と「連結」	第10回: 「展望的記憶」と「ワーキングメモリ」の連結性、「日常性の心理学」と「実験室の心理学」の連結性、マクロアプローチとミクロアプローチ
第3回: 心理学的諸理論を連結する「ルート・メタファー」	第11回: 各自の研究テーマと情報処理心理学の連結性(1)
第4回: 認知心理学を覆う「メタフォリカル」な発想傾向	第12回: 各自の研究テーマと情報処理心理学の連結性(2)
第5回: 「スキーマ」概念に媒介された「エラー発生」の認知モデルと「認知療法の ICS 理論」との連結性	第13回: 各自の研究テーマと情報処理心理学の連結性(3)
第6回: 「二重符号化理論」と「二重処理理論」と「ワーキングメモリ理論」と「処理資源理論」との連結性	第14回: 各自の研究テーマと情報処理心理学の連結性(4)
第7回: 「ワーキングメモリ」と「長期記憶」の連結性	第15回: レポート課題と解説
第8回: 「ストループ効果」と「ワーキングメモリ」と「処理資源」との連結性	

【必要に応じた変更があり得る】

教授学習過程特論

宮崎 清孝

教授学習過程論とは聞き慣れない言葉だろう。これは人間の認知の謎に、学習という切り口から迫ろうとする認知科学の一分野である。認知科学に対する今日のアプローチには、その脳神経的基盤を求めようとするもの、認知を(特に神経系とのアナロジーを用いながら)モデリングしていこうとするもの、認知を環境との相互作用として捉えようとするもの、さらに認知の個人史(発達)的、歴史的成立過程を見ていこうとするものなどが存在する。この最後の立場を「文化歴史的なアプローチ」と呼ぶことがあるが、この立場からは、学習は認知の中心的な課題である。とりわけ、文化へと参加していくこととして学習を捉えるこの立場からは、学習は個人一個で起こるものではなく、学習を支える周りの人間の教授活動との関係の中で起こると考えられる。この授業では、このような考えからの認知科学について学ぶことになる。授業では講義のほか、英文の講読や実際の授

業例の分析を適宜交えておこなう予定である。

成績評価基準:授業への出席と発言などの貢献に基づいておこなう。

授業計画:

第1回: 認知科学としての教授学習過程(1)	第9回: 協働的学習(2)
第2回: 認知科学としての教授学習過程(2)	第10回: 協働的学習(3)
第3回: 状況論的認知論と文化歴史的アプローチ(1)	第11回: 授業事例の分析(1)
第4回: 状況論的認知論と文化歴史的アプローチ(2)	第12回: 談話・対話・学習(1)
第5回: 知識をめぐる諸問題(1)	第13回: 談話・対話・学習(2)
第6回: 知識をめぐる諸問題(2)	第14回: 談話・対話・学習(3)
第7回: 知識をめぐる諸問題(3)	第15回: 授業事例の分析(2)
第8回: 協働的学習(1)	

感情心理学特論

鈴木 晶夫

感情の定義はいろいろな側面から記述できる。「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と広義に考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の測定・アセスメント、感情の発達、個人差・文化差、感情の表出と解釈、文化と社会、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、その関連領域を幅広くとらえられる視点を養うことを学習目標とする。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の多様な考え方について学ぶ。さらに研究発表、研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

本講義内容は、臨床発達心理士(臨床発達心理士認定運営機構)DP 科目「社会情動」(1-1、1-2、1-3、1-4、1-5、1-7、2-1、3-1)に該当する。

課題に対するプレゼンテーション、レポートを中心に平常レポートを加味して評価する。

授業計画:

第1回: 受講のためのオリエンテーション	第9回: 感情の表出と解釈(2)
第2回: 感情研究に関する哲学・歴史(1)	第10回: 感情関連学会について
第3回: 感情研究に関する哲学・歴史(2)	第11回: 課題についての発表(1)
第4回: 感情の定義	第12回: 感情と発達、社会・文化
第5回: 基本情動	第13回: 課題についての発表(2)
第6回: 感情の次元的研究	第14回: 感情とストレス・健康・感情障害
第7回: 感情の測定方法	第15回: 感情研究まとめ
第8回: 感情の表出と解釈(1)	

言語情報科学特論

菊池 英明

言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

なお、本講義内容は、DP 科目 言語1-5に該当する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 導入 言語情報科学とは	第9回: 音声言語生成のモデル(2)
第2回: 言語情報の諸相(1)	第10回: 音声言語生成のモデル(3)
第3回: 言語情報の諸相(2)	第11回: 音声言語インタラクションのモデル(1)
第4回: 言語情報の諸相(3)	第12回: 音声言語インタラクションのモデル(2)
第5回: 音声言語理解のモデル(1)	第13回: 音声言語インタラクションのモデル(3)
第6回: 音声言語理解のモデル(2)	第14回: 研究事例の紹介
第7回: 音声言語理解のモデル(3)	第15回: まとめ
第8回: 音声言語生成のモデル(1)	

知識情報科学特論

松居 辰則

この講義では、人工知能に関する基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることにより「人間とコンピュータの共存」というテーマについて深く考えます。なお、授業はオンデマンドでも開講されますが、講義には出席し対面で受講することが望ましい。

成績評価基準:レポート(3回程度)(80点配点)、出席点(20点配点)で総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 講義の内容の説明、人工知能研究の目指すもの、人工知能研究の歴史	第9回: 論理による柔軟な知識表現(様相論理、非単調論理、ファジィ論理)
第2回: 知識の定義、知識の分類、知識の表現方法	第10回: ニューラルネットワーク(1)
第3回: 問題表現(木構造、フレーム表現、意味ネットワーク)	第11回: ニューラルネットワーク(2)
第4回: 探索による問題解決	第12回: 遺伝的アルゴリズム
第5回: 様々な推論方式	第13回: 知的エージェントと Web インテリジェンス
第6回: 記号論理による知識表現	第14回: 人工知能の応用システム(1) エキスパートシステム
第7回: 記号論理による推論方式	第15回: 人工知能の応用システム(2) データマイニング、情報検索 など
第8回: 述語論理による知識表現と推論方式	

人間生体機能動態学

(奇数年度開講)

宮崎 正己

本授業では、人間と環境を中心とした労働生理学に関する原著・評論・概説を取り上げる。現代的な意義に関して、論議をおこなう。

評価は、出席とレポートによっておこなう。

授業計画:

第1回: muscular work とは	第16回: 人間の五感とは
第2回: 作業の神経的制御について	第17回: 快適性の追求とは
第3回: 作業効率を改善するには	第18回: 感性とは

第4回：体の大きさ	第19回：日本人と感性
第5回：重労働	第20回：工学における感性とは
第6回：熟達した作業とは	第21回：工学における感性教育の位置付け
第7回：精神的な活動	第22回：感性の教育とベンチャー
第8回：疲労	第23回：感性と課題
第9回：作業ストレス	第24回：日本における感性教育とは
第10回：作業時間と食習慣	第25回：感性とものづくり
第11回：夜間作業とシフト作業	第26回：感性と創造力
第12回：視覚	第27回：これからの感性教育をめぐる
第13回：照明の人間工学的原則	第28回：五感の生理学
第14回：騒音と振動	第29回：五感を研ぎ澄ますとは
第15回：室内環境	第30回：五感の応用の事例

感覚情報処理学特論

(奇数年度開講)

百瀬 桂子

感覚系の情報処理機構を明らかにするためには、感覚を定量的に測定する必要がある。本講義では、生体計測を利用した測定方法を取りあげ、関連する生体電気磁気現象と計測原理・技術について解説する。感覚知覚情報処理に関わる中枢神経系に加えて、自律神経活動についてもとりあげ、生体活動とその測定方法を総合的にとらえる視点を養うことを目指す。講義の後半では、学術論文講読により、関連する研究事例を知り、理解を深めることを目指す。

成績評価基準: 平常点とレポートによる。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：心拍の計測と処理
第2回：生体電気磁気現象	第10回：自律神経活動と呼吸活動
第3回：生体信号の非侵襲計測	第11回：生体信号を利用した研究(文献講読)(1)
第4回：生体信号処理の基礎	第12回：生体信号を利用した研究(文献講読)(2)
第5回：脳機能計測(1)脳波	第13回：生体信号を利用した研究(文献講読)(3)
第6回：脳機能計測(2)事象関連電位	第14回：生体信号を利用した研究(文献講読)(4)
第7回：脳機能計測(3)機能的MRI	第15回：レポート課題と講評
第8回：脳機能計測(4)NIRS、MEG、PET	

視覚デザイン

(奇数年度開講)

市原 茂

感覚・知覚測定法、視覚系の構造と機能、視覚刺激の特性、色覚、形態知覚、空間知覚、運動知覚、感覚間相互作用など、人間の感覚と知覚のメカニズムに関する基礎的な問題を解説するとともに、関連する最新のトピックスを紹介し、さらには、デザインへの応用を視野に入れた応用研究を展望する。

成績評価基準: 学期末に課すレポートにより評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：空間知覚(1)
第2回：感覚・知覚測定法(1)	第10回：空間知覚(2)
第3回：感覚・知覚測定法(2)	第11回：運動知覚(1)
第4回：視覚系の構造と機能、視覚刺激の特性	第12回：運動知覚(2)

第5回：色覚(1)	第13回：感覚間相互作用
第6回：色覚(2)	第14回：視覚とデザイン
第7回：形態知覚(1)	第15回：レポート課題と解説
第8回：形態知覚(2)	

生態心理学特論

三嶋 博之

本講義では、生態心理学者 James J. Gibson (1902－1979) の「知覚システム論」について、Gibson の第二の著作である“The Senses considered as perceptual systems” (1966) を題材としながらその主張を確認し、またその現代的な意味について検討する。教科書については教場で指示する。

成績評価基準：出席状況、授業中の議論への貢献、およびレポート等を総合的に勘案して行う。

授業計画：

第1回：刺激情報源としての環境	第9回：視覚システムとその進化
第2回：刺激情報の獲得	第10回：視覚システムと環境情報
第3回：知覚システム	第11回：人的な環境における光の構造
第4回：基礎的的定位システム	第12回：包囲光情報の抽出
第5回：聴覚システム	第13回：情報抽出理論
第6回：触覚システム	第14回：知覚の失敗
第7回：触覚－体性感システム	第15回：レポート課題と解説
第8回：味覚－嗅覚システム	

対話情報処理特論

市川 熹

私たちは、母国語で対話をするときは、話す内容を意識することはあっても、話すこと自体を意識することは殆どない。音声と手話、指点字を比較検討すると、これらの言語では表出と同時に消失するにもかかわらず、円滑な対話コミュニケーションが成立している。

社会的存在である人にとって、情報の取得と発信だけでなく、対話や会議を通して意見を複数参加者により実時間でまとめることも基本的に極めて重要な機能である。本講義は、学部授業における情報発信の視点を中心とした「音声情報処理と対話言語」、人の情報取得の機能を中心とした「情報福祉技術と人間」の延長上に位置づけする。

具体的には、実時間対話音声とコミュニケーション障害者の実時間対話言語である手話や指点字などの手段との対比や、障害者を含む複数参加者による実時間意思決定の場面を含む会議の考察などを通して、対話型自然言語の有する優れた性質や対話の円滑な成立条件を考察し、それを活かした情報機器開発の視点の基礎を育むとともに、メディアの優れた構造や人の優れた知的機能に関する考察を行う。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：ガイダンス	第9回：視覚対話型言語手話
第2回：対話の形態	第10回：視覚対話型言語手話と実時間コミュニケーション
第3回：コード・メディア・モダリティ	第11回：触覚実時間言語と指点字の実時間コミュニケーション
第4回：談話と対話の理論	第12回：身体動作と多人数対話

第5回：言語行為と意図	第13回：対話研究の応用
第6回：談話及び対話の構造	第14回：学習障害と対話研究
第7回：聴覚対話型言語音声	第15回：対話研究の課題
第8回：聴覚対話型言語音声と実時間コミュニケーション	

MR I によるヒト脳機能画像研究特論

渡邊 丈夫

磁気共鳴画像法(MRI)は、強力な磁場と電磁波を用いて生体内部の情報を画像化する方法であり、解剖学的形態を画像化するだけでなく、脳血流変化を計測することによって脳機能を画像化することもできる。近年、MRIを用いたヒト脳機能局在研究により、脳の様々な解剖学的部位とそれらが持つ機能との関連が急速に明らかにされつつある。

本講座では、理論と実践の双方から、すなわちMRI実験や画像解析法の理論および実際のヒト脳機能局在研究に関するゼミナール形式の授業を行う。主に機能的MRI(fMRI)を対象とするが、脳波(EEG)、ポジトロン断層法(PET)、脳磁図(MEG)、機能的近赤外線スペクトロスコピー(fNIRS)など他の非侵襲脳機能画像研究も積極的に参考にする。

教科書:なし

参考文献:各種書籍、論文

成績評価基準:発表、出席点、授業中の発言。授業への積極的参加を奨励する。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：受講生による文献調査・発表
第2回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義	第10回：受講生による文献調査・発表
第3回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義	第11回：受講生による実験計画・発表・検討
第4回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義	第12回：受講生による実験計画・発表・検討
第5回：MRI実験や画像解析法の理論に関する講義	第13回：受講生による実験計画・発表・検討
第6回：受講生による文献調査・発表	第14回：受講生による実験計画・発表・検討
第7回：受講生による文献調査・発表	第15回：受講生による実験計画・発表・検討
第8回：受講生による文献調査・発表	

※発表は毎週約3人ずつ、20分以内のプレゼンテーションおよび10分の質疑応答とする。

MR I によるヒト脳機能画像研究演習

渡邊 丈夫

磁気共鳴画像法(MRI)は、強力な磁場と電磁波を用いて生体内部の情報を画像化する方法であり、解剖学的形態を画像化するだけでなく、脳血流変化を計測することによって脳機能を画像化することもできる。近年、MRIを用いたヒト脳機能局在研究により、脳の様々な解剖学的部位とそれらが持つ機能との関連が急速に明らかにされつつある。

本講座では、受講生が自ら文献調査を行い、実験を計画し、実際に脳画像を解析して脳の活動部位を同定することを通して、MRIを用いたヒト脳機能画像研究の手法を身につけることを目的とする。文献調査、実験計画はゼミナール形式、視聴覚刺激の作製および脳画像解析、活動部位の同定は演習形式で授業を行う。主に機能的MRI(fMRI)を対象とするが、脳波(EEG)、ポジトロン断層法(PET)、脳磁図(MEG)、機能的近赤外線スペクトロスコピー(fNIRS)など他の非侵襲脳機能画像研究も積極的に参考にする。前期科目「MRIによるヒト脳機能画像研究特論」の受講は必須ではないが、受講していればより理解が深まるであろう。

教科書:なし

参考文献:各種書籍、論文

評価方法:発表、出席点、授業中の発言。授業への積極的参加を奨励する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第9回: 受講生が計画した実験に用いる視聴覚刺激の作製
第2回: MRIを用いたヒト脳機能画像研究の概要	第10回: 受講生が計画した実験に用いる視聴覚刺激の作製
第3回: 受講生による文献調査・発表	第11回: 受講生が計画した実験に用いる視聴覚刺激の作製
第4回: 受講生による文献調査・発表	第12回: 脳画像解析演習
第5回: 受講生による文献調査・発表	第13回: 脳画像解析演習
第6回: 受講生による実験計画・発表・検討	第14回: 脳画像解析演習
第7回: 受講生による実験計画・発表・検討	第15回: 脳活動部位の同定
第8回: 受講生による実験計画・発表・検討	

※発表は毎週約3人ずつ、20分以内のプレゼンテーションおよび10分の質疑応答を目安とする。

[教育コミュニケーション情報科学研究領域]

教師学特論

浅田 匡

教師の成長・発達の問題を、専門家としての省察のあり方とそれを促進する方法、さらには「研究者としての教師 (teacher researcher)」としての専門的知識及び専門的技能に関して論及する。実践に基づく専門的知識の伝達の方法を検討する。それらに基づき、教師としてのあり方、教師としての専門性を、「技術熟達者モデル」と「反省的実践家モデル」とを統合することから考察する。授業形態は、基本文献をベースに発表および解説・討論という形式をとる。成績評価は、講義における出席、発表およびレポートにより総合的に行う。

備考: 受講者は必ず基本文献を講読の上、参加すること。

授業計画:

第1回: 教師の知識(1)	第9回: メンタリングによる学習(2)
第2回: 教師の知識(2)	第10回: メンタリングによる学習(3)
第3回: 教師の知識(3)	第11回: メンターの知識(1)
第4回: 教師の知識(4)	第12回: メンターの知識(2)
第5回: リフレクティブ・ティーチング(1)	第13回: カリキュラムとリフレクション(1)
第6回: リフレクティブ・ティーチング(2)	第14回: カリキュラムとリフレクション(2)
第7回: リフレクティブ・ティーチング(3)	第15回: カリキュラムとリフレクション(3)
第8回: メンタリングによる学習(1)	

マルチメディア特論

金子 孝夫

音声、静止画、映像などの各種マルチメディア情報のそれぞれの高度な表現法と技術の詳細について理解することを目標に講義する。これらの各メディアを統合し、コンピュータ上で処理する技術(情報圧縮、メディア処理)、ならびにマルチメディアを支えるハードウェアとソフトウェア(記録、再生、編集処理)についての情報を

中心に解説し、さらにマルチメディア技術の応用について実習を行う。第1回目の授業のみ対面授業で実施し、第2回目以降はオンデマンド授業で実施する。

成績評価基準:実習課題の発表とレポートにより評価する。

授業計画:

第1回：授業の内容紹介、自己紹介など	第9回：実習課題(1)
第2回：静止画(画像とデジタルカメラ)	第10回：実習課題(1)レポートと課題の提出
第3回：静止画(画像とデジタルカメラ)	第11回：実習課題(2)課題の説明
第4回：音声(音の性質・デジタル音声)	第12回：実習課題(2)
第5回：音声(音の性質・デジタル音声)	第13回：実習課題(2)レポートと課題の提出
第6回：動画(ビデオ録画・視聴と編集)	第14回：実習のまとめ
第7回：動画(ビデオ録画・視聴と編集)	第15回：実習課題の発表と講評
第8回：実習課題(1)課題の説明	

ソフトウェア工学特論

金 群

ソフトウェア工学とは、品質の良いソフトウェアをいかに効率良く開発するかを研究する学問である。ソフトウェアの開発・管理は、ユーザの要求を適確に把握することから始まり、要求分析、仕様作成などの設計プロセスを経て、具体的なプログラムを作成し、テストを行い、運用、保守に至るものである。授業では、ソフトウェア開発プロセスを中心に、ソフトウェア工学の基本理論と技法について学び、最新のソフトウェア開発手法と関連知識を理解する。ソフトウェアは論理的な人工物であり、ソフトウェアの開発は人間が行うものである。ソフトウェア工学は、開発対象となるソフトウェアそのものを研究するだけでなく、ソフトウェア開発プロセスにおける人間の行う行動を研究する学問でもある。授業では、ソフトウェア工学の人間的な側面についても考察する。

教科書:授業中に紹介

参考文献:授業中に紹介

成績評価基準:課題レポートなどによる。

授業計画:

第1回：イントロダクション(授業の概要と進め方)	第9回：プログラミングの心理学
第2回：ソフトウェア工学概論	第10回：ソフトウェア工学の文化
第3回：ソフトウェア工学の人間的な側面	第11回：輪読・討論会(2)
第4回：ソフトウェア開発プロセス	第12回：ソフトウェア工学特論演習(3)
第5回：ユーザ・インターフェース・デザイン	第13回：ソフトウェア工学特論演習(4)
第6回：輪読・討論会(1)	第14回：ソフトウェア工学の最新トピックス
第7回：ソフトウェア工学特論演習(1)	第15回：期末課題・討論会(課題とレポート)
第8回：ソフトウェア工学特論演習(2)	

科学英語論文作成法

【2010年度休講】

ロバート グレイ

Guidance in the conventions of writing research reports, abstracts and bibliographies following the conventions of the 'academic genre' are presented. A textbook-focused approach addresses a variety of topics such as Organization, Sentence Structure, Grammar and Mechanics, and The Writing Process. Assessment is based on class participation, and an English report of 1,000 words due at the end of the semester.

A Class Plan:

1. ORIENTATION	9. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING
2. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	10. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING
3. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	11. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING
4. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	12. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING
5. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	13. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING
6. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	14. REVIEW
7. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	15. EVALUATION
8. TEXT, PEER DISCUSSION, INDIVIDUAL WHITING	

科学英語論文口演法

【2010年度休講】

ロバート グレイ

Public speaking practice for the purpose of making academic presentations in English. Students are required to speak on their main field of study, and their current research program. Speeches are critiqued by participating class members. Guidance is given by the instructor to facilitate proficiency in oral presentations, and in taking and responding to questions from the floor. Evaluation is based on the presentation of speeches, and on class participation.

A Class Plan:

1. ORIENTATION	9. DISCURSIVE SPEECH (GROUP 4)
2. BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 1)	10. FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 1)
3. BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 2)	11. FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 2)
4. BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 3)	12. FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 3)
5. BIOGRAPHICAL SPEECH (GROUP 4)	13. FIELD OF STUDY SPEECH (GROUP 4)
6. DISCURSIVE SPEECH (GROUP 1)	14. REVIEW
7. DISCURSIVE SPEECH (GROUP 2)	15. EVALUATION
8. DISCURSIVE SPEECH (GROUP 3)	

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

フロイト、ユングとともに臨床心理学の基礎を作ったアルフレッド・アドラーは、臨床心理学者であると同時に、子どものしつけや教育、そして個人を基盤とした社会の変革に深い関心を抱いていました。この授業では、インストラクショナルデザインの思想的な基盤としてアドラー心理学を取り上げ、その全体像を知るとともに、アドラー心理学を基礎とした教育とはどういうものになるのかについて考えていきます。

この授業は、1週目のコースナビによるオンライン授業と2週目の教室授業とで1セットになっています。コース

ナビの週では、オンデマンド授業を視聴してもらい、質問やコメントなどを BBS に書き込んでもらいます。翌週の教室授業では、オンデマンド授業を視聴したことを前提として、全員参加による議論を行います。

成績評価基準: 授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第 1 回 : (教室授業) 授業の進め方	第 9 回 : (教室授業) 臨床心理学の歴史
第 2 回 : (コースナビ) 心理学の科学性	第10回 : (コースナビ) ライフスタイル
第 3 回 : (教室授業) 心理学の科学性	第11回 : (教室授業) ライフスタイル
第 4 回 : (コースナビ) アドラー心理学の基本前提(1)	第12回 : (コースナビ) 子どもの教育
第 5 回 : (教室授業) アドラー心理学の基本前提(1)	第13回 : (教室授業) 子どもの教育
第 6 回 : (コースナビ) アドラー心理学の基本前提(2)	第14回 : (コースナビ) まとめと振り返り
第 7 回 : (教室授業) アドラー心理学の基本前提(2)	第15回 : (教室授業) まとめと振り返り
第 8 回 : (コースナビ) 臨床心理学の歴史	

情報コミュニケーション技術特論

スコット ダグラス

This course will explore various aspects of communication technology use. We will read and talk about our communication options, for instance, face-to-face, telephone, e-mail, BBS, and video conferencing. Where possible, we will compare the relative situations in American and Japan, although examples from other countries are welcome.

Course readings and classes will be held in English. Students should have TOEIC scores of 600 and above to function effectively in this class.

Active in-class participation is essential to this course. Students will receive a daily participation grade.

Textbook: To be announced in class.

Grading Method: Grades are based on attendance, participation, and assignments.

A Class Plan:

1. Introduction, course overview, and activities.	9. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
2. Overview of article selection.	10. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
3. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	11. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
4. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	12. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
5. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	13. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
6. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	14. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.
7. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	15. Course summary.
8. Review articles and worksheets. Discuss selected articles as a group.	

教育情報工学特論

(奇数年度開講)

永岡 慶三

論理的思考や数理的思考と教育・学習について講究する。論理・数理・水平思考パズルを通して、テクノロジー化や教育への適用を目的に、設計・評価の方法論および基本理念・指針について討論する。「論理的能力はパズルでテストできる」(バートランド・ラッセル)。

成績評価基準:授業への参加の度合、課題に対する回答状況、確認テストより評価する。

授業計画:

第1回: ガイダンス	第9回: 水平思考問題
第2回: 論理および数理	第10回: 問題評価演習1
第3回: 思考と教育・学習	第11回: 問題評価演習2
第4回: 語彙式問題	第12回: 問題作成演習1
第5回: 論理問題	第13回: 問題作成演習2
第6回: 数理問題	第14回: 確認テストと講評1
第7回: 物理問題	第15回: 確認テストと講評2
第8回: 心理問題	

インターネット科学特論

西村 昭治

2008年現在、およそ6億台のコンピュータが接続され約7億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。成績は、月1回程度課す課題の成果により評価する。

授業計画:

第1回: はじめに:授業ガイダンス	第9回: P2P
第2回: インターネット科学とは	第10回: ネットワークの近未来
第3回: 過去へさかのぼるタイムマシーン	第11回: 研究紹介(1): 動画を用いた新しいコミュニケーション
第4回: インターネット科学の道具:統計ツール	第12回: 研究紹介(2):バーチャルリアリティ
第5回: インターネットの歴史	第13回: 研究紹介(3):Catterbot
第6回: Google	第14回: 研究紹介(4):モーションキャプチャー
第7回: ウェブ進化論(その1)	第15回: まとめ
第8回: ウェブ進化論(その2)	

教育開発特論

野嶋 栄一郎

教育開発特論は大きく次の二つの部分に分かれる。

1. 教育心理学を中心とする教育思潮の概説

発達、学習、動機付け、個人差、学級集団、教育環境、教授学習過程、完全習得学習、教育の人間化、教育工学の展開等が、主たるテーマとなる。

2. 教育における開発研究の代表的事例と実践・評価

教育目標の分析と記述、タスクアナリシス、CAI システムの開発と実践・評価、社会的構成主義と学習環境、eラーニングの実践と評価

2. と1. は統合的に、開発された具体例とそれを構成する個別理論として解説される。

なお、授業はオンデマンドでも開講されるが、講義には出席し対面で受講することが望ましい。

成績評価基準:

1) レポートおよびそれに準じる提出物による評価

2) 授業中の質疑応答の質の評価

授業計画:

第1回：学力観と教育測定観(総論)	第9回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(1)
第2回：実体的学力観と機能的学力観	第10回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(2)
第3回：学習成果の評価から学習過程の評価へ	第11回：コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(3)
第4回：行動主義、認知科学、社会的構成主義の学力観と教育学	第12回：ヒトとヒトが対峙する関係とヒトとコンピュータが対峙する関係
第5回：狭義の教育測定から広義の教育測定へ	第13回：メディアと教育測定(総論)
第6回：ヒトの行動と文脈(総論)	第14回：情報のモダリティと測定
第7回：ヒトの行動は文脈の中で変わるか？	第15回：視聴テスト
第8回：異なった文脈下における衝動型—熟慮型の変容実験	

言語教育方法特論

保崎 則雄

この授業では、まず ZPD と第二言語習得における Krashen のインプット仮説を有機的に比較検証し、その過程で BICS、CALP、二重氷山仮説、bilingualism、PIP、TIP、register switch、historical teaching methods (communicative approach、suggestopaedia などまで)などの基本概念を言語教育カリキュラムにどのように関連づけるのかということを模索する。合わせて、言語教育にメディアが歴史的にどのような役割を果たして来たのかということ、1940年代米国で開発された Language Lab に始まって、現代の CALL、遠隔教育、online 教育の事例とともに理解、評価する。主に扱う言語教育は、一応 LET、JACET、TESOL、TEFL、JASL、JAFL である。合わせて、言語教育における、状況的学習とフィールドトリップの機能、メディア利用の教育の効果と効率、チームティーチングの課題、教員養成・研修における教材開発などについても、扱う予定である。輪読する雑誌は、言語教育、TESOL Quarterly、Language Laboratory、教育学分野の専門誌などを中心とする。

2010年度はオンデマンドを中心に授業を行なう予定である。

成績評価基準: レポート、課題発表、ディスカッションで評価する。

授業計画:

第1回：授業紹介	第9回：小学校英語活動における Language use と usage について考える
第2回：基本概念の紹介(ZPD、二重氷山仮説、BICS、CALP、i+1など)	第10回：小中学校としての英語教育／学習の課題
第3回：基本学習概念の紹介(状況論的学習とインプット仮説など)	第11回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション1

第4回：言語教育における Field trip/study tour の意義	第12回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション2
第5回：Cognitive Academic Learning Proficiency の紹介	第13回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション3
第6回：Common underlying proficiency model を考える	第14回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション4
第7回：英語教育における Situation-based learning の意義	第15回：授業のまとめ 授業評価
第8回：2009年時点における CALL の実態と歴史的俯瞰	

教育システム工学

野口 裕之

心理学の研究や臨床場面で用いられる「心理測定尺度」や実際の教育場面で用いられる「テスト」は、その結果が個人の処遇や研究成果に大きな影響を及ぼすため、細心の注意をもって作成され、その性能について十分な評価がなされる必要があります。

この講義では、心理測定尺度やテストを開発・評価するのに必要な「項目分析法」や「テスト理論」の基本事項、さらにテストが及ぼす社会的な影響などについて解説する予定です。統計数理の理論的側面に偏らず、実際に実施されている大規模テストを例にして、実用水準におけるテスト理論の有用性を理解してもらえようように配慮します。具体的な事例には、講師が現在フィールドにしている日本語教育の領域で用いられるテストを取り上げ、言語テストの教育や社会への影響について触れることが多くなります。

従来の客観式テストの分析方法を主としますが、パフォーマンス・テストの特徴や分析方法についても取り上げ、さらに、現代テスト理論の流れのひとつである「項目応答理論」についても入門程度の話をしていきます。

統計的方法の予備知識としては、平均・分散・標準偏差・相関係数という術語がわかる程度を仮定するだけです。数式は見るのも嫌だ、記号は嫌いだ、という方にはこの講義は向きません。ただし、高校で数学が得意であった必要は全くありませんが、きちんと理解するためには自分で手を動かして数式を展開することも必要になります。

なお、教科書は定めず、講師作成のプリントとパワーポイントとを用いる予定であり、参考文献は必要に応じて講義の中で紹介します。

評価に関しては、筆記試験とレポートによります。

【注意】講師はここで講義するのは初心者ですので、受講生の方々の予備知識の水準や主たる関心についてまだ十分に認識できていません。そのため、授業計画や評価に関しては執筆時点での予定であり、開講後の状況を見て柔軟に対応・変更する可能性のあることを予め了解しておいて頂くようお願いします。

講義内容はおよそ以下の通りである。

- 1 テスト項目の分析
- 2 テストの信頼性(精度)
 - 標準誤差と信頼性係数
 - 信頼性係数の推定
 - パフォーマンス・テストにおける信頼性
- 3 テストの妥当性
- 4 項目応答(反応)理論入門
- 5 外国語としての日本語教育を例としたテストの分析

授業計画:

第1回: テストとは	第9回: 日本語能力の測定
第2回: テスト作成の流れ	第10回: 項目応答理論1—その必要性—
第3回: 項目分析	第11回: 項目応答理論2—モデル—
第4回: 測定と誤差	第12回: 項目応答理論3—尺度の等化—
第5回: 古典的テスト理論1—信頼性の定義—	第13回: 項目応答理論4—特異項目 (DIF) 分析—
第6回: 古典的テスト理論2—信頼性係数の推定—	第14回: パフォーマンスの測定—口頭能力の測定—
第7回: 古典的テスト理論3—測定の妥当性—	第15回: 全体を通しての質問と回答
第8回: 外国語試験の分析	

ワークショップデザイン特論

山内 祐平

参加型体験学習の新しい様式として注目されているワークショップに関して、その歴史やデザインの特徴を検討し、実際にワークショッププランを作成することによって、創発的学習を志向した学習環境デザインについて実践的なスキルを学ぶとともに、その本質に迫る議論を行う。

成績評価基準: ワークショッププランに関する相互評価

授業計画:

第1回: 学習環境デザインとワークショップ(1)	第9回: ワークショッププランニング/テーマ設定(2)
第2回: 学習環境デザインとワークショップ(2)	第10回: ワークショッププランニング/学習活動のデザイン(1)
第3回: ワークショップの歴史(1)	第11回: ワークショッププランニング/学習活動のデザイン(2)
第4回: ワークショップの歴史(2)	第12回: ワークショッププランニング/学習空間のデザイン(1)
第5回: ワークショップ熟達者のデザインプロセス	第13回: ワークショッププランニング/学習空間のデザイン(2)
第6回: ワークショップ熟達者のキャリア発達	第14回: ワークショッププランニング/総合討議
第7回: ワークショッププランニング/グループ分け	第15回: ワークショッププランの発表
第8回: ワークショッププランニング/テーマ設定(1)	

情報メディア教育特論

森田 裕介

情報メディアを活用した教育に関する研究について、方法、開発、評価の観点から理解を深める。まず、情報社会における情報メディアの存在とその教育利用について概観する。次に、情報メディアを活用した教育に関する研究領域として、Web-Based Learning、動画伝送、マルチメディア活用、仮想現実や拡張現実に関する技術の応用を取り上げ、それぞれについて事例を提示する。この講義を受けて、受講者は、論文を読んでレポートを作成し、ビデオプレゼンテーションを行う。最後に、情報メディアを活用した教育の有用性と限界について議論を行う。

成績評価基準: オンデマンド講義の視聴30%、BBS での議論30%、提出課題40%とし、総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 導入	第9回: 情報メディアを活用した教育(4): 仮想現実や拡張現実に関する技術の応用
第2回: 情報社会における教育	第10回: ビデオプレゼンテーションとディスカッション: Web-Based Learning

第3回：BBS ディスカッション:情報社会における教育	第11回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション:動画伝送
第4回：情報メディアと学習者特性	第12回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション:マルチメディア活用
第5回：BBS ディスカッション:学習者特性	第13回：ビデオプレゼンテーションとディスカッション:仮想現実や拡張現実に関する技術の応用
第6回：情報メディアを活用した教育(1): Web-Based Learning	第14回：総合討論
第7回：情報メディアを活用した教育(2): 動画伝送	第15回：まとめ
第8回：情報メディアを活用した教育(3): マルチメディア活用	

定性データ解析特論

岩坪 秀一

アンケート調査等、複数の調査項目に選択肢を設定して被験者に回答を求めるいわゆる定性的なデータから有用な情報をくみ出すための統計手法を理解し、実際に使いこなすことができるようにすることを目指す。予備調査の分析結果からアンケート調査項目が妥当なものであるかどうか評価・判定し、その改善に資する方法についても触れたい。

授業概要:多変量データ解析法の分野のうち、アンケート調査結果から情報を汲み出す定性的データを解析するための統計手法を紹介する。

授業の到達目標:統計ソフトウェアを正しく使いこなして実際に応用しその結果を正しく解釈できる能力を培う。
成績評価基準:課題を出すのでレポートの内容によって評価する。

授業計画:

第1回：講義の概要と進め方	第9回：定性データに潜在している複数の尺度を抽出する方法(数量化3類)(2)
第2回：定性データ向け重回帰分析(数量化1類)(1)	第10回：定性データに潜在している複数の尺度を抽出する方法 (対応分析:Correspondence Analysis)
第3回：定性データ向け重回帰分析(数量化1類)(2)	第11回：応用例(1)
第4回：応用例	第12回：応用例(2)
第5回：定性データ向け判別分析(数量化2類)(1)	第13回：対象間の近さに基づく空間配置法(数量化4類と多次元尺度構成法)
第6回：定性データ向け判別分析(数量化2類)(2)	第14回：応用例
第7回：応用例	第15回：レポート課題と解説
第8回：定性データに潜在している複数の尺度を抽出する方法(数量化3類)(1)	

学習環境デザイン特論

尾澤 重知

本講義では、何らかのテクノロジーを用いた学習支援の方法について、教育工学、学習科学、組織科学の観

点から検討する。前半で基本的な概念や、テクノロジーについて理解を深め、後半はそれぞれのテーマについて、国内外の文献や、事例の批判的検討を行う。

講義、輪講、ケース・スタディ、ディスカッション等を通して、(1)関連する理論(もしくは「持論」)を第三者に対して説明する力、(2)現場・環境から帰納的に学習を行い、事例から学ぶ姿勢、(3)学習環境のデザインと評価技法の習得を目指す。

なお、担当者は本年度新規に着任し、本講義は初めて開講される科目である。共に試行錯誤しながら、自ら環境を構築しようとする学生の履修が望ましい。

成績評価基準:授業内プレゼンテーション50%、質疑応答、授業への参加・貢献25%、学期末レポート25%

授業計画:

第1回: ガイダンス(学習環境とは何か)	第9回: 知識創造とナレッジマネジメント(1) 知識共有を阻害する要因
第2回: 基本概念の整理(1) 知識構成、状況論、コミュニティ・オブ・プラクティス等	第10回: 知識創造とナレッジマネジメント(2) 事例研究(富士ゼロックス等)
第3回: 基本概念の整理(2) 暗黙知、形式知、ナレッジマネジメント、ワークプレイスラーニング等	第11回: イノベーション(1) イノベーションの促進要因とジレンマ
第4回: テクノロジーへの理解(1) コンピュータを用いた学習支援、協調学習支援(CSCL)	第12回: イノベーション(2) 事例研究(IDEO 等)
第5回: テクノロジーへの理解(2) Twitter、SNS、セカンドライフ、セカイカメラ等の新メディア	第13回: ワークプレイスラーニング(1) 「場」と「デザイン」
第6回: 学習環境の評価法(概論)	第14回: ワークプレイスラーニング(2) 事例研究(履修者の関心に応じて決定する)
第7回: 学習環境とテクノロジー(1) 事例研究(セサミストリート)	第15回: 全体のまとめ・討論、学期末レポート
第8回: 学習環境とテクノロジー(2) 事例研究(NHK エデュケーションナル)	

一修士課程 1 年制コース

【教育臨床コース】

【研究指導】

学校臨床心理学研究指導

菅野 純

学校教育における教育臨床の諸問題に関する参加各人の研究テーマをもとに指導を行なう。データの収集、分析、研究論文作成、発表などの各方法についての指導を通して、参加各人が教育臨床に関する研究能力を獲得することを目指す。

臨床認知発達学研究指導

佐々木 和義

教育臨床に関する、科学的な課題論文の作成の指導を行う。学生のフィールドの中で実施できるテーマを選び、研究計画の立案、倫理審査申請書の作成、データの解析法、結果の表示、および考察に関して助言を行う。

発達障害に関するテーマは、発達障害児・者の特性、発達障害児・者への支援方法、親・兄弟、教師への支援方法などである。しかし、フィールドとの関連の重要性を考慮して、相談によって進めていく。

【コース必修（演習）】

学校臨床心理学演習（１）

菅野 純、大月 友

学校教育における教育臨床の諸問題をテーマに演習を行なう。

学校臨床心理学に関する理論、子どもの心理や能力、対人行動などのアセスメント方法、不登校、いじめ、反社会的行動、家庭内暴力、自殺といった問題への対処および援助方法、教職員のメンタルヘルスなどについて、文献講読や実践発表、事例研究などを中心に演習をすすめていく。

成績評価基準：出席状況、レジュメ、発表および討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画：

第 1 回：オリエンテーション・心理学研究法〈合同ゼミ〉	第16回：課題研究論文構想発表〈合同ゼミ〉
第 2 回：心理学研究と研究倫理〈合同ゼミ〉	第17回：課題研究論文の書き方〈合同ゼミ〉
第 3 回：単一事例計画法〈合同ゼミ〉	第18回：文献の報告と討議（６）：課題研究論文の参考文献（１）
第 4 回：心理統計の基礎・データ入力と記述統計量の算出〈合同ゼミ〉	第19回：文献の報告と討議（７）：課題研究論文の参考文献（２）
第 5 回：文献の報告と討議（１）	第20回：文献の報告と討議（８）：課題研究論文の参考文献（３）
第 6 回： t 検定（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第21回：文献の報告と討議（９）：課題研究論文の参考文献（４）
第 7 回：文献の報告と討議（２）	第22回：文献の報告と討議（１０）：課題研究論文の参考文献（５）
第 8 回：実験計画法と分散分析（理論編）〈合同ゼミ〉	第23回：課題研究論文の経過報告・指導（１）
第 9 回：文献の報告と討議（３）	第24回：課題研究論文の経過報告・指導（２）
第10回：一要因分散分析と多重比較（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第25回：課題研究論文の経過報告・指導（３）
第11回：文献の報告と討議（４）	第26回：課題研究論文の経過報告・指導（４）
第12回：二要因分散分析と交互作用（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第27回：課題研究論文に関する討議（１）〈合同ゼミ〉
第13回：文献の報告と討議（５）	第28回：課題研究論文に関する討議（２）〈合同ゼミ〉
第14回：二要因分散分析と交互作用（理論編・実践編）〈合同ゼミ〉	第29回：課題研究論文のプレゼンテーション〈合同ゼミ〉
第15回：課題研究論文構想発表〈合同ゼミ〉	第30回：まとめ〈合同ゼミ〉

臨床認知発達学演習（１）

佐々木 和義

課題論文の作成に向けて、必要なスキルを習得することを目的とする。文献の学生による報告と、それに対する討議によって、参考文献の読み方、目的のとらえ方、手続き、結果の分析方法、および考察の仕方を習得す

る。また、データの入力、処理、および分析法を実習する。さらに、課題論文作成の練習となるごく規模の小さいプレ課題論文の作成をする。最終的には、経過を報告・検討しながら、課題論文の作成に向けた作業を行う。

成績評価基準:出席点50%、発表と討論への参加状況50%。

授業計画:

第1回:オリエンテーション・心理学研究法〈合同ゼミ〉	第16回:課題論文の構想発表〈合同ゼミ〉
第2回:心理学研究と研究倫理〈合同ゼミ〉	第17回:課題研究論文の書き方〈合同ゼミ〉
第3回:単一事例計画法〈合同ゼミ〉	第18回:文献の報告と討議(6):課題研究論文の参考文献(1);系統的脱感作法のWS
第4回:心理統計の基礎・データ入力と記述統計量の算出〈合同ゼミ〉	第19回:文献の報告と討議(7):課題研究論文の参考文献(2);エクスポージャー法のWS
第5回:文献の報告と討議(1):レジュメの作成、発表および討論のオリエンテーション;問題解決訓練のワークショップ(WS)	第20回:文献の報告と討議(8):課題研究論文の参考文献(3);学級単位の社会的訓練
第6回: t 検定(理論編・実践編)〈合同ゼミ〉	第21回:文献の報告と討議(9):課題研究論文の参考文献(4);学級単位の社会的訓練の立案
第7回:文献の報告と討議(2):個人(1);オペラント療法の基本的な考え方と環境調整とWS	第22回:課題研究論文の経過報告・指導(1);学級単位の社会的訓練のWS
第8回:実験計画法と分散分析(理論編)〈合同ゼミ〉	第23回:課題研究論文の経過報告・指導(2);ペアレントトレーニング
第9回:文献の報告と討議(3):個人(2);結果刺激(強化刺激・弱刺激)とWS	第24回:課題研究論文の経過報告・指導(3);ペアレントトレーニングのWS
第10回:一要因分散分析と多重比較(理論編・実践編)〈合同ゼミ〉	第25回:課題研究論文の経過報告・指導(4);ペアレントトレーニングのWS
第11回:文献の報告と討議(4):個人(3);セルフコントロール法とWS	第26回:課題論文に関する討議〈個別ゼミ〉
第12回:二要因分散分析多重比較(理論編・実践編)〈合同ゼミ〉	第27回:課題論文に関する討議(1)〈合同ゼミ〉
第13回:文献の報告と討議(5):個人(4);ATとリラクゼーション法	第28回:課題論文に関する討議(2)〈合同ゼミ〉
第14回:二要因分散分析多重比較(理論編・実践編)〈合同ゼミ〉	第29回:課題論文のプレゼンテーション〈合同ゼミ〉
第15回:課題論文の構想発表〈合同ゼミ〉	第30回:まとめ〈合同ゼミ〉

【コース必修(実習)】

心理教育臨床実習

菅野 純、佐々木 和義、大月 友

教育臨床に関して、受講生がそれぞれの場で実際にかかわっている事例を取り上げ事例検討を行なう。心理的・環境的原因によって生じる児童・生徒の教育臨床の問題と発達・障害的原因によって生じる教育臨床的

問題を取り上げる。

1回の授業について持ち回りで1事例を取り上げ、レジュメを作成して発表をし、検討結果を現場に持ち帰って、かかわり方の修正を行う。

成績評価基準:出席状況、レジュメ、発表および討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例15)
第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例1)	第17回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例16)
第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例2)	第18回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例17)
第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例3)	第19回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例18)
第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例4)	第20回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例19)
第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例5)	第21回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例20)
第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例6)	第22回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例21)
第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例7)	第23回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例22)
第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例8)	第24回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例23)
第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例9)	第25回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例24)
第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例10)	第26回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例25)
第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例11)	第27回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例26)
第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例12)	第28回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例27)
第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例13)	第29回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例28)
第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例14)	第30回：まとめ

心理臨床事例実習

菅野 純、佐々木 和義、大月 友

心理相談室、教育臨床場面、医療場面などにおける心理臨床の事例の発表に対して検討をする。環境や事例に対するアセスメント、およびアプローチ法に関する討議を行う。毎回2事例をとりあげる。

成績評価基準:出席状況、討論への参加の程度等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第16回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例29・30)
第2回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例1・2)	第17回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例31・32)
第3回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例3・4)	第18回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例33・34)
第4回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例5・6)	第19回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例35・36)
第5回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例7・8)	第20回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例37・38)
第6回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例9・10)	第21回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例39・40)
第7回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例11・12)	第22回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例41・42)
第8回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例13・14)	第23回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例43・44)
第9回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例15・16)	第24回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例45・46)
第10回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例17・18)	第25回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例47・48)
第11回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例19・20)	第26回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例49・50)
第12回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例21・22)	第27回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例51・52)
第13回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例23・24)	第28回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例53・54)
第14回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例25・26)	第29回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例55・56)
第15回：事例発表および、アセスメント・アプローチ法・今後の方針に関する討議(事例27・28)	第30回：まとめ

【コース選択必修】

教育心理学特論

青柳 肇

教育心理学のうち「学習と動機づけ」と「適応」に関して文献講読する。文献を読み、その内容についてディスカッションを行う。

成績評価基準: 文献の読みこなし状態と議論の状態及び出席状態

授業計画:

第1回：学習に関する文献講読(1)	第9回：動機づけに関する文献講読(4)
第2回：学習に関する文献講読(2)	第10回：動機づけに関する文献講読(5)
第3回：学習に関する文献講読(3)	第11回：適応に関する文献講読(1)
第4回：学習に関する文献講読(4)	第12回：適応に関する文献講読(2)
第5回：学習に関する文献講読(5)	第13回：適応に関する文献講読(3)
第6回：動機づけに関する文献講読(1)	第14回：適応に関する文献講読(4)
第7回：動機づけに関する文献講読(2)	第15回：適応に関する文献講読(5)
第8回：動機づけに関する文献講読(3)	

臨床認知発達学特論

佐々木 和義

発達障害児・者の認知、身辺自立行動、社会的スキルなどの発達の諸問題を取り上げ、各々の能力とは何か、その発達の臨床的意味、その障害のアセスメントなどに関して、講義する。毎回、健常発達の様相を示して対比させる。

なお、本講義内容は臨床発達心理士の DP 科目「認知」1-1、1-2、1-4、1-8、2-1、2-2、3-1、3-2、3-3、3-4、3-5、3-6、3-7、DP 科目「社会情動」1-1、1-2、1-6、2-1、2-2、DP 科目「言語」2-1に該当する。

成績評価基準:出席点40%、授業中の質疑応答30%、期末レポート30%。

授業計画:

第1回：オリエンテーション。発達の諸問題。注意欠陥／多動性障害の定義。	第9回：アスペルガー障害の、発達の様相。健常発達との対比。小レポート。
第2回：注意欠陥／多動性障害の、乳幼児期から小学校低学年の発達の様相。健常発達との対比。	第10回：学習障害の定義、および幼児期から小学校低学年の発達の様相。健常発達との対比。
第3回：注意欠陥／多動性障害の、小学校中学年から高学年の発達の様相(行動)。健常発達との対比。	第11回：学習障害の、小学校中学年から成人期の発達の様相。健常発達との対比。小レポート。
第4回：注意欠陥／多動性障害の、小学校中学年から高学年の発達の様相(認知、社会的スキル)。健常発達との対比。	第12回：精神遅滞の定義、および乳幼児期から小学校中学年の様相。健常発達との対比。
第5回：注意欠陥／多動性障害の、思春期から成人期の発達の様相。健常発達との対比。小レポート。	第13回：精神遅滞の、思春期から成人期の発達の様相。健常発達との対比。小レポート。
第6回：自閉性障害の定義、および乳幼児期から小学校低学年の発達の様相。健常発達との対比。	第14回：ブラダウィリ症候群とダウン氏症候群の、発達障害の発達の様相。健常発達との対比。
第7回：自閉性障害の、小学校中学年から高学年の発達の様相。健常発達との対比。	第15回：その他の発達障害の発達の様相。
第8回：自閉性障害の、思春期から成人期の発達の様相。健常発達との対比。	

臨床心理学特論Ⅲ

熊野 宏昭

臨床心理学とは「病気や障害、あるいは不幸な経験などによって引き起こされる心理的苦悩を軽減するために心理的援助を行い、それを通して問題の解決や改善を目指す学問」とされている。本講義では、非常に広汎なこの学問の対象領域のうち、心理臨床に携る人々が治療の場で遭遇することが多い精神障害についての理解を深めるために、異常心理学に関する解説を行う。そして次に、臨床心理学的介入がどのような理論や技法に基づき行われるのかの理解を目指して、標準的な現実指向的介入法であるリラクゼーション法と認知行動療法、認知の機能に焦点づけする臨床行動分析とマインドフルネス、そして人生の節目の時期に有用となる力動的心理療法とシステム論的家族療法について順次解説する。

成績評価基準:授業出席状況と討論への参加点を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：オリエンテーション	第9回：パーソナリティ障害／精神病的障害
第2回：臨床心理学の構造と実践	第10回：発達臨床心理学概説
第3回：臨床心理学研究における測定	第11回：病態毎の治療戦略(薬物療法を含む)
第4回：臨床心理アセスメント概説	第12回：リラクゼーション／認知行動療法
第5回：異常心理学概説	第13回：マインドフルネス／臨床行動分析
第6回：気分障害／不安障害	第14回：力動的心理療法／家族療法
第7回：摂食障害／身体表現性障害	第15回：受講生とQ&A
第8回：心身症／生活習慣病	

特別支援教育特論

佐々木 和義

発達障害児・者の認知、言語、身辺自立行動、社会的スキルなどの発達の諸問題を取り上げ、その発達の概観をし、生物学的・神経学的基礎、認知的基礎、社会的基礎を講義する。さらに、教育的側面と社会的・文化的側面についても理解を深めつつ、発達支援について講義する。

なお、本講義内容は臨床発達心理士の DP 科目「基礎」2-1、2-2、4-1、4-2、4-3、4-4、4-5、4-6、「認知」1-1、1-2、1-4、1-6、1-7、2-1、2-2、3-2、3-4、3-6、3-7、DP 科目「社会情動」1-1、3-1、3-2、DP 科目「言語」1-1、1-2、1-3、1-4、1-5、1-6、1-7、2-2、2-3、2-4、2-5に該当する。

成績評価基準:出席点50%、期末レポート50%。

授業計画:

第1回：オリエンテーション。行動的アプローチ法。	第9回：自閉性障害の、思春期から成人期の発達の様相、およびジョブスキルなどの自立への支援法。
第2回：注意欠陥／多動性障害の、乳幼児期から小学校低学年の発達の様相、および支援法。	第10回：アスペルガー障害の、発達の様相、および支援法。レポート課題。
第3回：注意欠陥／多動性障害の、小学校中学年から高学年の発達の様相、および社会的スキル訓練。	第11回：学習障害の、乳幼児期から小学校低学年の発達の様相、および支援法(学習スキル・身辺自立)。
第4回：注意欠陥／多動性障害の、小学校中学年から高学年の様相、およびセルフコントロール法。	第12回：学習障害の、小学校中学年から成人期の発達の様相、および支援法(社会的スキル・問題解決)。

第5回：注意欠陥／多動性障害の、思春期から成人期の発達の様相、および支援法。レポート課題。	第13回：精神遅滞の、乳幼児期から小学校中学年の様相、および支援法(身辺自立)。
第6回：自閉性障害の定義、乳幼児期から小学校低学年の発達の様相、および支援法(身辺自立)。	第14回：精神遅滞の、思春期から成人期の発達の様相、および支援法(社会的スキル)。
第7回：自閉性障害の定義、乳幼児期から小学校低学年の発達の様相、および支援法(言語・認知)。	第15回：発達障害児に関するペアレントトレーニング。
第8回：自閉性障害の、小学校中学年から高学年の発達の様相、および社会的スキル訓練。	

教育臨床査定特論

大月 友

学校教育場面における心理教育的アセスメントの理論と実際を学んでいく。具体的には、学校教育現場での心理教育的アセスメントの意義や倫理、個人や集団に対するさまざまなアセスメント方法、各種心理検査・発達検査の理論的背景、実習を通した心理検査・発達検査の技術獲得、各種指標に基づく教育評価および支援計画の立て方などを学んでいく。なお、本講義内容は、DP 科目「基礎」3-2～3-4、4-1、4-2、5-4、「社会情動」2-1～2-5、「言語」2-1、2-3、2-5に該当する。

成績評価基準：出席状況、発表および討論への参加などを総合的に評価する。

授業計画：

第1回：オリエンテーション・学校現場における教育評価と心理教育的アセスメント	第9回：知能検査結果の解釈(2)
第2回：心理教育的アセスメントの基本的考え方	第10回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助の立案(1)
第3回：心理教育的アセスメントの方法論	第11回：知能検査結果の解釈に基づく指導援助の立案(2)
第4回：心理教育的アセスメントにおける心理検査	第12回：パーソナリティ検査の実施法
第5回：個人と集団に対するアセスメント	第13回：パーソナリティ検査結果の解釈
第6回：知能検査の実施法(1)	第14回：パーソナリティ検査結果の解釈に基づく指導援助の立案
第7回：知能検査の実施法(2)	第15回：心理教育的アセスメントに基づく指導援助
第8回：知能検査結果の解釈(1)	

乳幼児発達心理学特論

井原 成男

最も大きい括りでいうと、アタッチメントの発達について論じる。今年度は、これまでの研究を集大成した、移行対象から見たアタッチメントについて論じるが、常に病院での小児科臨床を念頭に置き、そこで得た知識が、学校現場ほかの他領域に、本質を変えることなくどのように応用できるか、受講生とともに考えて行きたい。Winnicott, Klein, Bion のみでなく、Stern, Mahler, Erikson についてもふれたい。

使用予定教科書：移行対象の臨床的展開－ぬいぐるみの発達心理学、岩崎学術出版社、2006年刊(教科書については、開講時に著者割引で購入できるよう配慮します。)

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2～3-4、4-2、4-4～4-6、DP 社会情動1-1～1-2、1-4～2-1、2-3～2-4、3-1～3-2に該当する。

成績評価基準：出席状況、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: オリエンテーション	第9回: アタッチメント理論のあらまし
第2回: 移行対象論(1)あらまし	第10回: アタッチメント理論の歴史
第3回: 移行対象論(2) Winnicott 論	第11回: アタッチメント理論の応用
第4回: 移行対象論(3) Stern, Erikson, Bion, Mahler	第12回: 症例研究(1)
第5回: 移行対象論(4) 移行対象と自閉対象	第13回: 症例研究(2)
第6回: 移行対象論(5) 移行対象と自閉症(1)	第14回: 症例研究(3)
第7回: 移行対象論(6) 移行対象と自閉症(2)	第15回: まとめと全体討論
第8回: 移行対象と発達心理学	

教育開発特論

野嶋 栄一郎

教育開発特論は大きく次の二つの部分に分かれる。

1. 教育心理学を中心とする教育思潮の概説

発達、学習、動機付け、個人差、学級集団、教育環境、教授学習過程、完全習得学習、教育の人間化、教育工学の展開等が、主たるテーマとなる。

2. 教育における開発研究の代表的事例と実践・評価

教育目標の分析と記述、タスクアナリシス、CAI システムの開発と実践・評価、社会的構成主義と学習環境、eラーニングの実践と評価

2. と1. は統合的に、開発された具体例とそれを構成する個別理論として解説される。

なお、授業はオンデマンドでも開講されるが、講義には出席し対面で受講することが望ましい。

成績評価基準:

1) レポートおよびそれに準じる提出物による評価

2) 授業中の質疑応答の質の評価

授業計画:

第1回: 学力観と教育測定観(総論)	第9回: コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(1)
第2回: 実体的学力観と機能的学力観	第10回: コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(2)
第3回: 学習成果の評価から学習過程の評価へ	第11回: コンピュータ利用の協同作業におけるヒトの行動と文脈(3)
第4回: 行動主義、認知科学、社会的構成主義の学力観と教育工学	第12回: ヒトとヒトが対峙する関係とヒトとコンピュータが対峙する関係
第5回: 狭義の教育測定から広義の教育測定へ	第13回: メディアと教育測定(総論)
第6回: ヒトの行動と文脈(総論)	第14回: 情報のモダリティと測定
第7回: ヒトの行動は文脈の中で変わるか?	第15回: 視聴テスト
第8回: 異なった文脈下における衝動型—熟慮型の変容実験	

発達行動学特論

【2010年度休講】

根ヶ山 光一

親子関係の変化をめぐる諸問題について、子別れの観点から動物行動学の知見もまじえつつ講じる。とくに

現代社会における親子関係とその身体性に注目し、子別れの過程や、それを取り巻く哺乳類・霊長類としての生物学的要因、テクノロジーや価値観などの社会文化的要因と、その相互関連性を中心に検討する。なお、本講義はオンデマンド方式と分類されるが、実際には所沢キャンパスでの教室における授業とオンデマンド授業を隔週で行うハイブリッド型とする。

教科書：根ヶ山光一 著「〈子別れ〉としての子育て」(NHK 出版)

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：授業の概要説明	第9回：食をめぐる対立(2)討論
第2回：離れつつ保護する(1)講義	第10回：子どものメッセージを読みとる(1)講義
第3回：離れつつ保護する(2)討論	第11回：子どものメッセージを読みとる(2)討論
第4回：子別れのプロセス①(1)講義	第12回：ほどよい隔たりとは(1)講義
第5回：子別れのプロセス①(2)討論	第13回：ほどよい隔たりとは(2)討論
第6回：子別れのプロセス②(1)講義	第14回：子どものからだど危害(1)講義
第7回：子別れのプロセス②(2)討論	第15回：子どものからだど危害(2)討論
第8回：食をめぐる対立(1)講義	

インストラクショナルデザイン特論

向後 千春

フロイト、ユングとともに臨床心理学の基礎を作ったアルフレッド・アドラーは、臨床心理学者であると同時に、子どものしつけや教育、そして個人を基盤とした社会の変革に深い関心を抱いていました。この授業では、インストラクショナルデザインの思想的な基盤としてアドラー心理学を取り上げ、その全体像を知るとともに、アドラー心理学を基礎とした教育とはどういうものになるのかについて考えていきます。

この授業は、1週目のコースナビによるオンライン授業と2週目の教室授業とで1セットになっています。コースナビの週では、オンデマンド授業を視聴してもらい、質問やコメントなどを BBS に書き込んでもらいます。翌週の教室授業では、オンデマンド授業を視聴したことを前提として、全員参加による議論を行います。

成績評価基準：授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画：

第1回：(教室授業)授業の進め方	第9回：(教室授業)臨床心理学の歴史
第2回：(コースナビ)心理学の科学性	第10回：(コースナビ)ライフスタイル
第3回：(教室授業)心理学の科学性	第11回：(教室授業)ライフスタイル
第4回：(コースナビ)アドラー心理学の基本前提(1)	第12回：(コースナビ)子どもの教育
第5回：(教室授業)アドラー心理学の基本前提(1)	第13回：(教室授業)子どもの教育
第6回：(コースナビ)アドラー心理学の基本前提(2)	第14回：(コースナビ)まとめと振り返り
第7回：(教室授業)アドラー心理学の基本前提(2)	第15回：(教室授業)まとめと振り返り
第8回：(コースナビ)臨床心理学の歴史	

学校臨床心理学特論

小林 正幸

学校心理学を理論的背景に、スクール・カウンセラーあるいは校内で教育相談推進者のレベルの力量を目指す。ある意味ではそれ以上の水準の習得を目指す。(1)カウンセラー、教育相談担当者、研究者としての構え・働きかけ・姿勢を形成する。(2)実践に密着した題材から学ぶ。(3)実践的に思考し、実践的な技術を習得する、実践にかかわる体系的知識を獲得する。内容としては、現代の教育問題の中核を占める不登校問題を

中心に講義する。また、チームで支援する観点から発達障害のある子どもや不登校の子どもへの学校関係者の協働による支援についても取り上げ、チーム支援の具体的方法を学ぶ。

なお、本講義内容は、DP 科目基礎1-2、2-2、3-3、4-3、4-5、4-6、5-3、および、DP 科目情動1-1、1-2、1-6、2-3、2-4に該当する

成績評価基準:評価は、多軸的絶対評価で、ポイント制を用いる。

到達度について、レポートの相互評価ポイント、自発的に行う特別レポートの評価ポイント、授業の途中で行う作業ポイントなどを加算することにより、数量化して評価を行う。評価体系が複雑なので、初回に解説を行う。

授業計画:

第1回：現代の教育問題の意味(1)	第9回：協働による子ども支援
第2回：現代の教育問題の意味(2)	第10回：面接の方法(本人面接)
第3回：問題行動の形成要因	第11回：面接演習
第4回：問題行動の維持要因	第12回：面接演習
第5回：学校での事例検討(1)	第13回：コンサルテーションの方法
第6回：学校での事例検討(2)	第14回：コンサルテーションの演習
第7回：学校での事例検討(3)	第15回：事例研究コンテスト(2)
第8回：事例研究コンテスト(1)	

応用健康科学特論

【2010年度休講】

竹中 晃二

従来、健康教育の研究では、ヒトの健康阻害要因の除去や制御、たとえば喫煙、飲酒、栄養(肥満)、運動不足、ストレス問題など、健康に対するネガティブな要因を別々に評価し、それらを除去したり、変容させることに注意が向けられていた。しかし、最近ではヒトの健康関連問題を「総合的」に捉えたり、健康関連問題を「行動」として扱う観点が主流を占めるようになってきた。前者の観点では、健康阻害要因のそれぞれは複雑にリンクしており、そのため総合的な健康プログラムとしてのウェルネス活動、またはヘルスプロモーション活動が注目を浴びている。たとえば、健康危険因子の評価、禁煙、血圧コントロール、運動や体力作り、体重コントロール、栄養教育、ストレス・マネジメント、腰痛予防などを一つの総合的プログラムとして扱い、健康教育と実践を一つの範疇で捉える動きである。もう一つの観点は、ヒトの健康に関わる行為を「行動」と見なし、その行動を変容させたり維持させるためにいくつかの健康行動モデルを想定し、それらのモデルによって介入を考えるという研究である。

成績評価基準:毎回の BBS への書き込み課題、小レポートの提出、スクーリングにおける研究発表および課題レポートによって加算評価を行う。

授業計画:

第1回：講義の概要と背景	第9回：健康指導に活かすカウンセリング
第2回：健康行動変容	第10回：高齢化社会と転倒予防
第3回：健康行動変容プログラム開発の興味とグループ分け	第11回：プログラム開発の手順と方法
第4回：子どもの健康づくり	第12回：プログラム開発の中間発表
第5回：ヘルスコミュニケーション	第13回：ヘルスプロモーションビデオの鑑賞
第6回：ストレスマネジメント	第14回：効果的なデリバリーチャンネル
第7回：ダイエットプログラム	第15回：スクーリング:グループ別研究発表
第8回：禁煙プログラム	

インターネット科学特論

西村 昭治

2008年現在、およそ6億台のコンピュータが接続され約7億人のユーザがいるというインターネットの世界は様々な意味で新しい研究対象となっている。本講義ではインターネットの定義から始まり、その歴史をひもとくとともにそれを成り立たせる様々な技術の解説を試みる。また、インターネット上の様々なサービスを解説するとともに、今後の動向について考察する。成績は、月1回程度課す課題の成果により評価する。

授業計画:

第1回: はじめに:授業ガイダンス	第9回: P2P
第2回: インターネット科学とは	第10回: ネットワークの近未来
第3回: 過去へさかのぼるタイムマシーン	第11回: 研究紹介(1): 動画を用いた新しいコミュニケーション
第4回: インターネット科学の道具:統計ツール	第12回: 研究紹介(2):バーチャルリアリティ
第5回: インターネットの歴史	第13回: 研究紹介(3):Catterbot
第6回: Google	第14回: 研究紹介(4):モーションキャプチャー
第7回: ウェブ進化論(その1)	第15回: まとめ
第8回: ウェブ進化論(その2)	

臨床心理学校地域援助特論

大月 友

乳幼児期から青年期にいたる児童・生徒の心理行動面、発達面の諸問題に対して、育児・保育・教育場面などの地域で実践される臨床心理学的支援の理論と実際を学んでいく。具体的には、地域援助の方法論としてのコンサルテーションやカンファレンス、スクールカウンセリング、他職種との連携による支援、保護者への支援、学級集団を対象とした心理教育的支援などに関して、その理論的背景を学ぶとともに具体的な実践方法の獲得を目指す。なお、本講義内容は、DP 科目「基礎」4-1～4-6、5-3、「育児保育」2-1～2-3、5-1～5-4、6-2～6-5、7-2～7-6に該当する。

成績評価基準:出席状況、発表および討論への参加などを総合的に評価する。

授業計画:

第1回: オリエンテーション	第9回: 社会的スキル訓練の理論的背景
第2回: 地域援助の考え方と基本的姿勢	第10回: 社会的スキル訓練の実際
第3回: スクールカウンセラーと連携支援	第11回: 問題解決訓練の理論的背景
第4回: コンサルテーションの理論と方法	第12回: 問題解決訓練の実際
第5回: コンサルテーションの実際	第13回: ストレスマネジメント訓練の理論的背景
第6回: 保護者への支援1(コンサルテーション)	第14回: ストレスマネジメント訓練の実際
第7回: 保護者への支援2(親訓練)	第15回: 地域・社会への働きかけ
第8回: 学級集団への予防開発的介入と治療教育的介入	

【コース選択】

家族臨床心理学特論

菅野 純

不登校やいじめ、家庭内暴力など、子どもの臨床的諸問題は家族と切り離せない。本講義では家族心理学

や家族療法についての最近のテーマを取り上げ、家族がかかわるさまざまな事例を検討し、教育臨床実践との関連をはかりたい。テーマとしては、臨床発達心理学における養育者へのカウンセリングや、対象者・家族とのコミュニケーション方法、家族の病理・事例検討、社会情動発達に関する理論およびアセスメント、介入と支援の実際、教育現場および育児現場での支援の方法などを扱う。

成績評価基準:出席状況(20%)、レポート(30%)、家族臨床心理学研究レポート(50%)によって総合的に評価する。

なお、本講義内容は、臨床発達心理士の DP 科目「基礎」4-5、4-6、「社会情動」1-7、2-2、2-3、2-4、3-1、3-2、「育児保育」6-2、6-3、6-4に該当する。

授業計画:

第1回: 家族臨床心理学概論	第9回: 家族の臨床的問題(3) 発達障害における具体的支援の進め方
第2回: 家族の歴史と現在	第10回: 家族への家族臨床心理学的アプローチ(1) 個人療法
第3回: 家族の臨床的問題(1) 不登校一人間関係の障害と情動失調への介入の方法一	第11回: 家族への家族臨床心理学的アプローチ(2) 家族療法
第4回: 家族の臨床的問題(2) 家庭内暴力一青年期危機のアセスメントと対応一	第12回: 家族への家族臨床心理学的アプローチ(3) 子どもの発達支援① 保護者への支援
第5回: 家族アセスメント(1) 子どもの社会情動発達の基礎	第13回: 家族への家族臨床心理学的アプローチ(4) 子どもの発達支援② 子ども本人への支援
第6回: 家族アセスメント(2) 子どもの社会情動発達のアセスメント① 他者および環境を通して	第14回: 家族への家族臨床心理学的アプローチ(5) 子どもの発達支援③ 地域・社会への支援
第7回: 家族アセスメント(3) 子どもの社会情動発達のアセスメント② 面接法による思春期青年期危機のアセスメント	第15回: 家族のライフサイクルと家族の発達課題
第8回: 家族アセスメント(4) 子どもの社会情動発達のアセスメント③ ケース研究	

学校臨床生徒指導学特論

嶋田 洋徳

本特論では、学童期から思春期、青年期に至るまでに生じるさまざまな学校の内外の生徒指導(特にいわゆる生徒指導や教育相談)上の諸問題を取り上げ、それらの理解と臨床心理学的な立場からの具体的な援助の方法を概説する。また、それらの援助方法の基盤となるカウンセリングの諸理論についても概説する。さらに、スクールカウンセラーなどの相談職員との連携の具体的なあり方についても言及する。なお、本特論は、全回オンデマンド授業として実施する。

また、本講義内容は、臨床発達心理士の DP 科目「基礎」2-1、3-3、4-2、4-3、4-5、5-4、DP 科目「社会情動」1-1、1-7、2-2、2-3、2-4、DP 科目「言語」1-1、1-3、1-6、1-7に該当する。

成績評価基準:出席状況(制限時間内のアクセス記録)、および BBS の書き込みによる提出物の評価等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: イントロダクション、生徒指導の定義	第9回: 学校内の機能的役割分担
第2回: スクールカウンセラーと相談職員	第10回: 学校内の行動連携

第3回：教師の活動、スクールカウンセラー等の活動	第11回：発達障害と特別支援教育 (言語発達の基礎、言語発達支援を含む)
第4回：3つの心理学的アプローチとその差異	第12回：行動コンサルテーション
第5回：行動分析的アプローチ	第13回：社会教育と保護者
第6回：行動観察の方法	第14回：最終課題とその解説
第7回：中間課題とその解説	第15回：まとめ
第8回：機能分析的なケース理解	

教育集団心理学

岡安 孝弘

現代の学校において、特に不登校やいじめへの適切な対処方法や予防的対策を講じることが急務の課題となっている。本講義では、そのための方法として、学級集団および不安、抑うつ、攻撃性等の何らかのリスクの高い小集団に対して、学校不適応を予防するために開発されたプログラム(社会的スキル教育、ストレスマネジメント教育、不安や抑うつ予防プログラム、怒りマネジメントプログラムなど)の基礎的な考え方やその内容について解説するとともに、より良いプログラムの開発を目指して受講者と意見を交換したい。

成績評価基準:出席状況やレポートの内容を総合的に判断して評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：抑うつ・不安予防のライフスキル教育(1)
第2回：児童生徒の学校不適応の現状	第10回：抑うつ・不安予防のライフスキル教育(2)
第3回：認知・行動の変容技法(1)	第11回：怒りコントロールプログラム(1)
第4回：認知・行動の変容技法(2)	第12回：怒りコントロールプログラム(2)
第5回：社会的スキル教育(1)	第13回：中学校におけるプログラムの適用事例
第6回：社会的スキル教育(2)	第14回：高校におけるプログラムの適用事例
第7回：ストレスマネジメント教育(1)	第15回：レポート課題と解説
第8回：ストレスマネジメント教育(2)	

教授学習過程特論

宮崎 清孝

教授学習過程論とは聞き慣れない言葉だろう。これは人間の認知の謎に、学習という切り口から迫ろうとする認知科学の一分野である。認知科学に対する今日のアプローチには、その脳神経的基盤を求めようとするもの、認知を(特に神経系とのアナロジーを用いながら)モデリングしていこうとするもの、認知を環境との相互作用として捉えようとするもの、さらに認知の個人史(発達)的、歴史的成立過程を見ていこうとするものなどが存在する。この最後の立場を「文化歴史的なアプローチ」と呼ぶことがあるが、この立場からは、学習は認知の中心的な課題である。とりわけ、文化へと参加していくこととして学習を捉えるこの立場からは、学習は個人一個で起こるものではなく、学習を支える周りの人間の教授活動との関係の中で起こると考えられる。この授業では、このような考えからの認知科学について学ぶことになる。授業では講義のほか、英文の講読や実際の授業例の分析を適宜交えておこなう予定である。

成績評価基準:授業への出席と発言などの貢献に基づいておこなう。

授業計画:

第1回：認知科学としての教授学習過程(1)	第9回：協働的学習(2)
第2回：認知科学としての教授学習過程(2)	第10回：協働的学習(3)
第3回：状況論的認知論と文化歴史的アプローチ(1)	第11回：授業事例の分析(1)

第4回：状況論的認知論と文化歴史的アプローチ(2)	第12回：談話・対話・学習(1)
第5回：知識をめぐる諸問題(1)	第13回：談話・対話・学習(2)
第6回：知識をめぐる諸問題(2)	第14回：談話・対話・学習(3)
第7回：知識をめぐる諸問題(3)	第15回：授業事例の分析(2)
第8回：協働的学習(1)	

発達科学特論

大藪 泰

乳幼児の社会的認知能力の発達について論じる。人間の心は、他者との間で、他の霊長類には見られないほど豊かな共有世界を構築する。誕生直後より人を志向する乳児の心は、養育者からの共感的な関わりを梃子にして、心と心の結びつきを強めてゆく。そこには外界との関係性に気づく、きわめて特異で有能な情動と認知の働きがある。この特論では、新生児がもつ生物としての「ココロ」が、養育者との関係を足場に、人間らしく文化化された「心」に発達する過程を展望する。特に、同一の事物に他者と一緒に注意を向ける「共同注意」(joint attention)という現象を基底におき、乳幼児の「初期能力」「自己感の発生」「人との関係性」「物との関わり」「シンボルの形成」といった現象について論じることになるだろう。授業はパワーポイントを用いた講義形式で行われる。多くの映像(静止画、動画)を使用し、乳幼児の行動を身近に感じられるようにしたい。英文資料も使用する予定である。また随時質疑応答の時間を設ける。

尚、本講義内容は、臨床発達心理士のDP科目「認知」1-3、1-4、2-1、3-1、3-4、DP科目「社会情動」1-4、1-5、DP科目「言語」1-2、1-3、1-4に該当する。

成績評価基準:授業出席状況、レポート等により評価する。

授業計画:

第1回：受講ガイダンス	第9回：乳幼児の自己感の発生—言語反応—
第2回：乳児発達研究の起源	第10回：人と物の特性の違いの認識—運動と形態—
第3回：無能な乳児観と有能な乳児観	第11回：人と物の特性の違いの認識—動作と相互作用—
第4回：新生児の初期行動	第12回：人との共有世界の構築—共同注意研究の経緯—
第5回：母親の養育行動と新生児の応答性	第13回：人との共有世界の構築—対面的共同注意—
第6回：新生児から乳児への発達移行—行動状態—	第14回：人との共有世界の構築—意図共有的共同注意—
第7回：新生児から乳児への発達移行—知覚能力—	第15回：人との共有世界の構築—シンボル共有的共同注意—
第8回：乳幼児の自己感の発生—鏡像反応—	

福祉教育特論

前橋 明

本講では、児童を対象にした福祉教育をとりあげる。福祉教育は、将来、社会の担い手となる子どもたちが、人を人として尊び、人間一人ひとりが平等で、かつ、相互に思いやりの心で援助し合っていくという「福祉」の心を育てることを通して、福祉に対する理解と関心を深めるとともに、社会に奉仕する実践的態度の育成を図ることをねらいとする。また、福祉教育は、子どもたちの人間性の育成に密接な関わりをもつものであるから、学校における教育活動だけでなく、学校外における家庭や地域の全教育活動を通して行う必要性を理解する。

したがって、本講では、学校ならびに家庭や地域における福祉教育のあり方やその具体的実践について演習する。なお、本講義内容は、DP 科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、7-5に該当する。

成績評価基準:出席、発表やディスカッションへの参加(50%)、課題レポートの提出(50%)から総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：育児・保育現場での支援と福祉の心
第2回：福祉教育の目的と内容	第10回：輝く子どもの未来づくり(子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える)
第3回：高等学校福祉科の現状と課題	第11回：学校ならびに家庭や地域における福祉教育の具体的実践・ボランティア活動
第4回：高等学校福祉科が行っている福祉体験・レポート課題の提示	第12回：レポート課題報告と討論・評価①
第5回：福祉体験Ⅰ(車椅子援助体験)	第13回：レポート課題報告と討論・評価②
第6回：福祉体験Ⅱ(視覚障がい者の方への手引き体験)	第14回：レポート課題報告と討論・評価③
第7回：福祉体験Ⅲ(福祉レクリエーション)	第15回：課題レポートの最終提出と解説
第8回：バリアフリー調査・チェックリスト作成	

産業職業社会学特論

河西 宏祐

労使関係論について考察する。受講生には毎時間の研究報告、レポート提出を義務づける。それらを総合的に判断して成績評価を行う。

授業計画:

第1回：ガイダンス	第9回：研究発表・レポート提出(4)
第2回：労使関係論講義(1)	第10回：労使関係論講義(5)
第3回：研究発表・レポート提出(1)	第11回：研究発表・レポート提出(5)
第4回：労使関係論講義(2)	第12回：労使関係論講義(6)
第5回：研究発表・レポート提出(2)	第13回：研究発表・レポート提出(6)
第6回：労使関係論講義(3)	第14回：労使関係論講義(7)
第7回：研究発表・レポート提出(3)	第15回：全体を通してのレポート提出(7)
第8回：労使関係論講義(4)	

知識情報科学特論

松居 辰則

この講義では、人工知能に関する基本的な理論や技術を多くの事例を通して紹介します。人工知能はコンピュータに「人間のような振る舞いをさせる」ことを目的とした、理論・技術です。講義の進め方は、数学的、技術的な話に偏ることなく、「人工知能」というものが正しくイメージできるようになることを目標とします。この講義を通して、人工知能の魅力を知ると同時に、その限界も知ることで「人間とコンピュータの共存」というテーマについて深く考えます。なお、授業はオンデマンドでも開講されますが、講義には出席し対面で受講することが望ましい。

成績評価基準:レポート(3回程度)(80点配点)、出席点(20点配点)で総合的に評価する。

授業計画:

第1回：講義の内容の説明、人工知能研究の目指すもの、人工知能研究の歴史	第9回：論理による柔軟な知識表現(様相論理、非単調論理、ファジィ論理)
第2回：知識の定義、知識の分類、知識の表現方法	第10回：ニューラルネットワーク(1)
第3回：問題表現(木構造、フレーム表現、意味ネットワーク)	第11回：ニューラルネットワーク(2)
第4回：探索による問題解決	第12回：遺伝的アルゴリズム
第5回：様々な推論方式	第13回：知的エージェントとWeb インテリジェンス
第6回：記号論理による知識表現	第14回：人工知能の応用システム(1) エキスパートシステム
第7回：記号論理による推論方式	第15回：人工知能の応用システム(2) データマイニング、情報検索 など
第8回：述語論理による知識表現と推論方式	

社会病理学特論

野村 忍

現代社会は、技術革新、情報化、グローバル化、少子高齢化社会など多くの難問に直面している。こうした社会環境の中で生活する現代人は多くのストレスを経験している。ストレスの影響は、不快な情動変化とそれに伴う身体的変化、さらにはそれらを解消するための行動変化としてあらわれる。したがって、ストレス性健康障害としては、種々の心理反応、身体反応と行動上の問題に分類される。この科目では、産業ストレスの今日的課題、ストレスのアセスメント法、および種々の社会病理的問題の対策について講義する。

成績評価基準:出席点、研究発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回：授業の概要と進め方	第9回：気分障害
第2回：社会病理学総論	第10回：不安障害
第3回：労働安全衛生法の解説	第11回：適応障害
第4回：ストレスのアセスメント	第12回：研究発表(1)
第5回：テクノストレス	第13回：研究発表(2)
第6回：アルコール性障害	第14回：研究発表(3)
第7回：過労死	第15回：レポート課題と解説
第8回：過労自殺	

感情心理学特論

鈴木 晶夫

感情の定義はいろいろな側面から記述できる。「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれ、主体の状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と広義に考え、感情研究の歴史、感情の生物学的・神経心理学的アプローチ、感情の測定・アセスメント、感情の発達、個人差・文化差、感情の表出と解釈、文化と社会、臨床、感情障害、健康、感情に関連する社会的プロセスなど、その関連領域を幅広くとらえられる視点を養うことを学習目標とする。

この講義では、上記のテーマに関するこれまでの研究を概観し、感情研究の多様な考え方について学ぶ。さらに研究発表、研究論文などを材料に感情研究の様々な問題を考えたい。

本講義内容は、臨床発達心理士(臨床発達心理士認定運営機構)DP 科目「社会情動」(1-1、1-2、1-

3、1-4、1-5、1-7、2-1、3-1)に該当する。

課題に対するプレゼンテーション、レポートを中心に平常レポートを加味して評価する。

授業計画:

第1回：受講のためのオリエンテーション	第9回：感情の表出と解説(2)
第2回：感情研究に関する哲学・歴史(1)	第10回：感情関連学会について
第3回：感情研究に関する哲学・歴史(2)	第11回：課題についての発表(1)
第4回：感情の定義	第12回：感情と発達、社会・文化
第5回：基本情動	第13回：課題についての発表(2)
第6回：感情の次元的研究	第14回：感情とストレス・健康・感情障害
第7回：感情の測定方法	第15回：感情研究まとめ
第8回：感情の表出と解説(1)	

言語教育方法特論

保崎 則雄

この授業では、まず ZPD と第二言語習得における Krashen のインプット仮説を有機的に比較検証し、その過程で BICS、CALP、二重氷山仮説、bilingualism、PIP、TIP、register switch、historical teaching methods (communicative approach、suggestopaedia などまで)などの基本概念を言語教育カリキュラムにどのように関連づけるのかということを模索する。合わせて、言語教育にメディアが歴史的にどのような役割を果たして来たのかということ、1940年代米国で開発された Language Lab に始まって、現代の CALL、遠隔教育、online 教育の事例とともに理解、評価する。主に扱う言語教育は、一応 LET、JACET、TESOL、TEFL、JASL、JAFL である。合わせて、言語教育における、状況的学習とフィールドトリップの機能、メディア利用の教育の効果と効率、チームティーチングの課題、教員養成・研修における教材開発などについても、扱う予定である。輪読する雑誌は、言語教育、TESOL Quarterly、Language Laboratory、教育工学分野の専門誌などを中心とする。

2010年度はオンデマンドを中心に授業を行なう予定である。

成績評価基準:レポート、課題発表、ディスカッションで評価する。

授業計画:

第1回：授業紹介	第9回：小学校英語活動における Language use と usage について考える
第2回：基本概念の紹介(ZPD、二重氷山仮説、BICS、CALP、i+1など)	第10回：小中学校としての英語教育／学習の課題
第3回：基本学習概念の紹介(状況論的学習とインプット仮説など)	第11回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション1
第4回：言語教育における Field trip/study tour の意義	第12回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション2
第5回：Cognitive Academic Learning Proficiencyの紹介	第13回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション3
第6回：Common underlying proficiency modelを考える	第14回：受講生の研究課題のプレゼンとディスカッション4
第7回：英語教育における Situation-based learning の意義	第15回：授業のまとめ 授業評価
第8回：2009年時点における CALL の実態と歴史的俯瞰	

言語情報科学特論

菊池 英明

言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。この講義では、コンピュータ・情報処理技術を導入した音声言語理解・生成・インタラクションのモデル化及びシステム開発の事例を紹介する。

なお、本講義内容は、DP 科目 言語1－5に該当する。

成績評価基準:授業出席状況、授業中の発表、レポート等を総合的に評価する。

授業計画:

第1回: 導入 言語情報科学とは	第9回: 音声言語生成のモデル(2)
第2回: 言語情報の諸相(1)	第10回: 音声言語生成のモデル(3)
第3回: 言語情報の諸相(2)	第11回: 音声言語インタラクションのモデル(1)
第4回: 言語情報の諸相(3)	第12回: 音声言語インタラクションのモデル(2)
第5回: 音声言語理解のモデル(1)	第13回: 音声言語インタラクションのモデル(3)
第6回: 音声言語理解のモデル(2)	第14回: 研究事例の紹介
第7回: 音声言語理解のモデル(3)	第15回: まとめ
第8回: 音声言語生成のモデル(1)	

児童家庭福祉特論

川名 はつ子

少子高齢社会の脅威を強調した社会防衛のための少子化対策を超えて、誰もが人間らしい生き方を追求できるように、子どもと家庭の側から「よりよく生きること」を考えたい。児童家庭福祉を専攻しない院生の受講も考慮し、この分野を網羅しながら刺激的問題提起を含む教科書を選定する予定である(具体的な書名は、開講時に提示する)。「子どもとは何か」「子どもの権利」などの問題意識を念頭におき、トピックスや事例をまじえた講義とする。

成績評価基準:課題レポートの提出、発表や討論への参加から総合的に評価する。

備考:本講義内容は、DP 科目基礎1－3、4－1、DP 科目認知2－1、2－2、DP 科目社会情動1－6、1－7およびDP 科目育児保育1－1、1－2、2－1、2－2、6－2、6－6、7－3、7－4、7－5、7－7に該当する。

授業計画:

第1回: オリエンテーション(含:教科書選定のためのニーズ調査)	第9回: 子どもの居場所(その2)
第2回: 子どもの権利規範の形成過程(権利思想、権利論、権利宣言、権利条約)	第10回: 子どもの居場所見学(その1:早期療育教室)
第3回: 子どもの権利条約(その1:子どもの参加)	第11回: 子どもの居場所見学(その2:フリースクール、たまり場)
第4回: 子どもの権利条約(その2:子どもの意見表明権)	第12回: 子どもの居場所見学(その3:プレイパーク)
第5回: 子どもの権利条約(その3:教育を受ける権利)	第13回: 見学レポートの発表(その1)
第6回: いじめ・不登校・ひきこもり(その1)	第14回: 見学レポートの発表(その2)
第7回: いじめ・不登校・ひきこもり(その2)	第15回: まとめ(子どもと保護者への支援のあり方)
第8回: 子どもの居場所(その1)	

生体機能学特論

今泉 和彦

本特論では、以下の最近のトピックスについて講義する。

成績評価基準:BBSの発言数とレポートの内容で評価する。

授業計画:

第1回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(1)	第9回: 亜鉛欠乏と生体機能との関連(2)
第2回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(2)	第10回: 鉄欠乏と生体機能との関連
第3回: 飲酒(アルコール摂取)と生体機能との関連(3)	第11回: 香辛料(特にトウガラシ成分)摂取と生体機能との関連
第4回: 茶カテキン摂取による生体機能との関連(1)	第12回: 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(1)
第5回: 茶カテキン摂取による生体機能との関連(2)	第13回: 骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節(2)
第6回: ドーピング作動薬と生体機能との関連(1)	第14回: 最近の研究成果の紹介
第7回: ドーピング作動薬と生体機能との関連(2)	第15回: 最近の研究成果の紹介
第8回: 亜鉛欠乏と生体機能との関連(1)	

社会文化心理学特論

山本 登志哉

人間の精神が持つ本質的な社会文化性を、媒介的な関係の形成・展開という視点から理解します。心理学全体の再定位を図る文化心理学の視点と、集団差を問題にする比較文化心理学の視点の可能性と限界を考察し、系統発生・歴史発生・個体発生と文化性の交差の中に生まれ育つ人間を理解する視点を培うことをねらいます。より具体的には物質的な世界(資源)を含む多様な関係のネットワークの中に生まれ落ち、その関係構造に動かされ、またそれを動かしながら生きている人間の姿を、具体的な事例を多角的に深く読み込む中で明らかにしながら、そのような人間のあり方を記述する心理学の理論的な視点を探っていきます。

教科書:なし

参考文献:

マイケル・コール「文化心理学」(新曜社)

バーバラ・ロゴフ「文化的営みとしての発達」(新曜社)

Yamamoto,T., & Takahashi,N., 2007, Money as a Cultural Tool Mediating Personal Relationships: Child Development of Exchange and Possession, Valsiner,J. & Rosa,A. (eds.) Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology, Cambridge University Press, New-York, 508-523

山本登志哉「供述に於ける語りとその外部:体験の共同化と「事実」を巡って」(サトウタツヤ・南博文編、質的心理学講座第三巻:社会と場所の経験、東京大学出版会 所収)

廣松渉「役割理論の再構築のために」著作集第5巻(岩波書店) 他

成績評価基準:レポートまたは試験による。

授業計画:

第1回: 社会文化心理学の基本的な問い	第9回: 間主観的な関係から共同主観的な関係へ
第2回: 心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(1)	第10回: 物理的事実世界の共同主観的形成過程(1)
第3回: 心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(2)	第11回: 物理的事実世界の共同主観的形成過程(2)
第4回: 心とは何か?文化とは何か? 社会文化心理学の方法論(3)	第12回: 社会文化的存在としての人間精神の共同主観的媒介構造とその展開(1)
第5回: 文化が立ち現れるとき:異文化の疑似体験	第13回: 社会文化的存在としての人間精神の共同主観的媒介構造とその展開(2)

第6回：人の理解と物の理解の本質的な違い：志向性について	第14回：差の文化心理学・実践と文化の機能的実体化
第7回：志向的な関係の系統発生	第15回：まとめ
第8回：志向的な関係の個体発生と間主観性	

－博士後期課程－

【研究指導】

[地域・地球環境科学研究指導]

環境管理計画学研究指導

天野 正博

地球規模での環境問題のうち、地球温暖化と森林との関係、熱帯林の減少問題に焦点を当てながら、地球環境問題の状況を現地調査、統計データなどから分析するとともに、問題が生じる社会構造を明らかにするために現象をモデル化する手法を習得し、これを用いてどのような対策を立てるべきかを考える。また、地球環境問題を解決するための様々な国際的取り決めに対する各国の利害関係と取り組み方を、京都議定書の吸収源を中心に検討する。演習では、数学モデル・計量地理学・GISなどの手法を習得して、特定の地域を対象にランドスケープレベルでの環境計画を策定する。こうした研究手法をベースにし、地球環境問題に関連したテーマを各自が設定し、共同研究の形で研究指導を行う。

Keywords: 地球環境問題、地球温暖化、温暖化ガス、熱帯林、環境計画、京都議定書

人口学研究指導

阿藤 誠

人口研究分野の中から各自が選んだ研究課題に沿った研究計画にそって、研究指導スケジュールを立て、博士論文の各段階でアドバイスを与え、博士論文の作成につなげていく。

環境生態学研究指導

森川 靖

環境は生態系に影響を与えるが生態系もまた環境に影響を与える。こうした環境と生態系との関係を、地球的規模で起こっている環境変動の視点から解析する。解析には生態系の諸機能の知識及び測定・解析手法の習熟が重要で、これらの基盤的研究から環境問題の解決に資する研究を進める。

環境社会学研究指導

鳥越 皓之

環境社会学・環境民俗学分野の博士論文作成のための指導を目的とする。当該分野の方法論の検討、現代社会との関わり等についても分析を深めることになる。

水域環境学研究指導

井内 美郎

湖沼域等の陸水環境変遷史解明に関する文献学習、分析方法の学習及び実施、分析結果の考察・発表及び討論を行う。

地域資源論研究指導

柏 雅之

地球環境時代に相応した持続可能な農業生産、地域再生と政策システム、農山村地域資源管理システム、

フードシステム、バイオマス産業社会などに関する研究のフロンティア前進に資することのできる人材養成をめざした研究指導をおこなう。また、博士後期課程の初年度を中心に方法論としての農業農村経済学や地域政策論の先端部分に関する知見をより深めてもらえる指導もおこなう。

基礎的な学習として、農業問題に関しては、農政改革の論理をめぐる学説検討を日本と EU の場合を通してみていく。日本の農政改革に関しては、主に生源寺眞一(東京大学)、本間正義(同)、田代洋一(横浜国大)などの著書・論文を素材に、背景となる経済理論と実態認識について考えていく。地域再生・同政策に関しては欧州のソーシャル・エコノミーから学びえるものを考えていく。

動物行動生態学研究指導

三浦 慎悟

野生動物の行動生態学、個体群生態学、野生動物管理から特定の研究テーマ設定を踏まえ、研究テーマの意義を最新の研究的状況の中で位置づけるとともに、論文作成のための方法(資料収集法および分析法)を議論し、その進捗状況を点検しながら、論文作成、学会発表へと導く。

[人間行動・環境科学研究領域]

発達行動学研究指導

根ヶ山 光一

各自の研究テーマについて、研究計画(いかなる課題に焦点化し、そこに他の先行研究と差違化していかにより originality を盛り込むか、どう仮説を立てそれをどういう手法によって明らかにするか)・実施(フィールドや実験場面をどう確保し、具体的な手続きをどうするか)・分析(どのような分析手法を用いて、どのように結果をまとめるか)・考察(データと仮説・先行研究をつきあわせ、整合性のある議論をどう行うか)・発表(研究成果をどうまとめ、口頭もしくは論文で発表するか)の指導を行うとともに、博士論文の執筆を指導する。

建築計画学研究指導

佐野 友紀

建築、都市計画に関わる問題を発見し、分析を行うことで、問題解決の方法を提案することを目的とする。受講者各自が設定した建築・都市計画に関わるテーマについて、実習的な調査分析を行う。加えて、数理的、統計的分析を含んだ手法によって現象を分析し、結論を導き出す方法を学ぶ。授業では受講者の発表を通して、問題解決の方法を探る。また、研究指導等を通して、成果を論文形式にまとめ、発表する。

社会文化心理学研究指導

山本 登志哉

共同主観的に成立する社会文化的なものとしての「心」という視点から、さまざまな心理現象を分析する指導を行います。

[文化・社会環境科学研究領域]

産業職業社会学研究指導

河西 宏祐

労使関係論について、文献を講読するとともに実証的研究を実施し、それを通して論文の作成を行う。

文化生態学研究指導

蔵持 不三也

この研究指導では、受講生の研究テーマの展開を促すための助言とともに、論文作成のための実践的な手法を教授する。そのため、受講生は研究発表を義務づけられる。

アジア社会論研究指導

店田 廣文

中東・北アフリカ、アジアおよび日本の都市社会を主たる対象に、各自の研究課題に即して、実証的な比較研究を実施する。とりわけ「近代」以降の都市社会の歴史的な社会変動も視野におさめつつ、比較研究の指導をおこなう。研究課題は、都市化や都市成長などの都市社会研究に限定しておらず、少子高齢化、家族の変容、開発協力、移民や人口政策、イスラーム化など、発展途上社会の多様な研究課題が指導の対象となる。また、諸外国を対象とする調査研究については、積極的に現地留学などの機会を得るようにさせている。

移住論研究指導

森本 豊富

日本及び海外の移民研究に関する動向を踏まえ、個々の研究課題に即して指導する。国内外の関連学会での発表や執筆活動を重ねながら、移民研究に関する学問分野において独創的かつ貢献度の高い博士論文の執筆を目指す。また、修士課程の学生や学部ゼミ生との交流も積極的に行い、研究者としてのみならず教育者としての指導力の養成にも努めることを期待する。

[健康・生命科学研究領域]

生体発達科学研究指導

木村 一郎

細胞の増殖、分化、形態形成を制御している様々な要因について研究する。特に、細胞培養系を用いて骨格筋前駆細胞の分化過程の制御機構、とりわけ、成長因子などの液性因子の作用を中心に研究する。主な研究課題は、体節の筋原細胞や成体の筋衛星細胞の増殖、分化、細胞移動等の制御機構、筋細胞の死と再生の制御機構、筋前駆細胞における細胞融合の制御機構など。原則として、修士課程の研究指導と同内容のものをより高度に発展させる。

生体構造学研究指導

小室 輝昌

末梢神経系終末部とその支配領域の構造について、主として電子顕微鏡的手法、免疫組織化学的手法等を使って明らかにし、各組織、器官における神経性調節機構について理解をすすめる。現在は、自律神経系末梢部の構造について、特に意を注いでいる。

生体機能学研究指導

今泉 和彦

骨格筋の可塑性(肥大・萎縮)とその調節機構、微量元素(亜鉛・鉄)欠乏による遺伝子発現および生体情報伝達シグナル応答とその機構、ドーピング作動薬(β_2 -アゴニスト)・茶カテキン・アルコール・香辛料摂取による代謝応答とその調節機構を明らかにするため、主として動物実験を中心として研究する。これらの研究を推進すると共に、日々の研究、論文の検索・読み方、実験法の測定・解析の習得および研究発表・論文の書き方・纏め方などについて直接指導・助言する。このような能力を涵養することによって健康と生体機能に関わる生理科学分野を発展させ、広い視野に立って深い専門性を活かせる人材の育成を目指す。

神経内分泌学研究指導

山内 兄人

修士課程と同様に、ラットの脳における生理現象および行動の制御機構を神経内分泌学、神経組織化学、神経解剖学および神経行動学的手法により解析し、脳の性差およびその機序をも明らかにする。特にセロトニン神経系に着目している。国際誌に掲載できる研究をおこなう。

運動制御・バイオメカニクス研究指導

鈴木 秀次

学部および大学院修士レベルにおける運動制御とバイオメカニクスをベースとして、より高度な身体運動の仕組みの研究を実施するための研究指導を行う。よって研究指導内容は、1)筋の収縮様式とそれらの神経制御機序、2)姿勢維持や運動時の脊髄レベルにおける反射の関与、3)筋収縮後の短期可塑性、4)ロコモーション等における身体運動時の力の物理的特性と神経筋協応能などのテーマが中心である。これらの研究を推進し博士論文を完成させるためのレベルの高い指導・助言を行う。

統合生理学研究指導

永島 計

恒常性の維持、体温、体液をキーワードに研究を遂行し、主に生理学、神経科学の研究方法を習得する。また学会発表、論文発表を行い、生理科学者として独立して研究を遂行する知識、能力、意欲を獲得することを目標にする。

応用健康科学研究指導

竹中 晃二

ヒトの自発的操作に関わる健康行動全般(リラクセーション、趣味活動、運動、スポーツ、食生活、ストレスマネジメント、禁煙など)を研究材料として、それらの社会・心理学的効果を行動科学の視点に基づいて研究を行う。子どもから中高年、高齢者、さらに疾患患者を対象として、行動の開始・継続を促す実践面についても研究を行う。本研究指導では、主に介入研究に焦点を絞り、理論を実践に活かす工夫を行う。

医療人類学研究指導

辻内 琢也

医療人類学(medical anthropology)では、身体的・心理的・社会的・文化的(bio-psycho-socio-cultural)な複合産物として構成されている健康や病い(health and illness)という現象を、人文社会科学のアプローチ(文化人類学・社会人類学)および自然科学のアプローチ(自然人類学)の両輪を用いて、広く人類の全歴史を背景に通文化・比較文化的に探求する。

世界各地域(特に東―南―東南アジア地域)に広がる災厄や苦悩(suffering)に対峙する多元的医療システム、心理臨床や福祉領域における臨床人類学(clinical anthropology)、近代生物医学システムの抱える諸課題を問う批判的医療人類学(critical anthropology)、電磁波・化学物質・ストレスなどの現代社会を取り巻く生活環境病、機能的な身体症候群・線維筋痛症・電磁波過敏症・認知症・癌などの難病をめぐる病いの語り(illness narratives)、多文化包括的なケアの実践を目指す人類学的医療(anthropological medicine)、老いと死の看取りの文化人類学、物語りと対話に基づく医療(Narrative Based Medicine)、などを研究対象とする。

本講座では、学部・修士課程で文化人類学や社会人類学を専攻した学生のみならず、医学部や看護学部で医療を専攻した者、理学療法士・言語療法士・作業療法士・芸術療法士・音楽療法士などのメディカルスタッフ、鍼灸按摩師や柔道整復師など補完代替医療を実践する者、心理臨床を行う臨床心理士で質的研究を志す者、社会福祉士や医療ソーシャルワーカーで多文化間臨床に関心のある者に開かれた研究指導を行う。

【健康福祉科学研究領域】

予防医学研究指導

町田 和彦

21世紀の日本は人類がかつて経験しなかったほどの急速な高齢化社会と様々な要因による地球環境の悪化が現実のものとなることが予想される。そのため、予防医学では人間をとりまく各種外部要因(汚染物質、栄養、運動、ストレス等)と我々の生命を維持する内部環境との関係を血清疫学的手法と生体防御機構である貧食・殺菌能、非特異、特異免疫能の測定等の生化学的手法を用いて明らかにすること、超高齢社会をひかえ

健康で生きがいのある人生をおくることができるように個人の自立と健康増進を柱とした健康福祉医療政策を研究指導の主体とする。また、地球環境問題のような大学内での研究では難しいテーマについては、他の国立研究機関との共同研究も可能である。

【臨床心理学研究領域】

心身医学研究指導

野村 忍

心身医学は、患者を身体面のみならず心理社会面を含めて全人的なアプローチを行う医学である。心身症、神経症やうつ病の診断・治療に関わる研究のみならず、健常者における心身関連の研究やヘルスプロモーションに関わる研究も行っている。この科目では、博士論文作成の指導(グループ指導ならびに個人指導)を行う。各自の研究計画に基づき、研究指導スケジュールを立て、研究計画の実践、論文作成まで指導する。また、学会発表や論文投稿についても指導する。

認知行動カウンセリング学研究指導

根建 金男

認知行動カウンセリングは、従来の行動カウンセリングと認知的アプローチが融合して形成された比較的新しいアプローチである。近年は、認知行動カウンセリングを支える認知行動理論の発展もめざましい。特に、不安障害、強迫性障害、統合失調症などの新しいモデルが提示され、それらをめぐる実証研究も盛んである。一方、構成主義的認知行動カウンセリングの動向も活発になってきた。構成主義では、人の一生涯の成長を視野にいれたうえで、人が世界をどう構成(認識)しているかをその人の側から理解し、アプローチしようとする。この考え方は、エビデンス重視の認知行動カウンセリングの弱点を補い発展させるうえで重要である。カウンセリングは精神疾患を有する人に限らず健常者をも広く対象とするものであることを認識したうえで、認知行動カウンセリング学を更に発展させるような研究を進めていくことが求められる。そのような研究について、この研究指導では、研究計画の立案、研究の実施、データの解析、論文の作成など博士論文の執筆に関する全般にわたって、指導(個人単位、グループ単位)を行う。また必要に応じて、学会発表や投稿論文について指導する。

行動臨床心理学研究指導

嶋田 洋徳

臨床心理学におけるさまざまな問題に対して、(認知)行動論的アプローチを用いて研究と実践を行なう。具体的には、行動療法、認知行動療法の観点から理解される症状や問題行動の理論モデルの検討、治療モデルの検討、症状や問題行動の形成と維持、治療に及ぼす個人差変数の検討などを行なう。そして、博士論文の作成を念頭に置き、研究計画の立案、データの収集と解析、論文の執筆、研究成果の公表に関する指導を行なう。

産業カウンセリング学研究指導

鈴木 伸一

うつ病、不安障害、心身症などのさまざまなストレス関連疾患の発症・維持・悪化に関与する諸要因の影響性を検討するとともに、ストレス関連疾患の予防・治療・リハビリテーションに向けた認知行動的介入の方法論について研究する。また、研究の焦点としては、単に精神衛生上の問題のみを取り上げるのではなく、成人が抱えやすい生活上の問題や罹患しやすい身体疾患(生活習慣病や慢性疾患など)の予防およびケアにも焦点を当てたトータル・ヘルス・プロモーションを目指した研究を行う。

博士後期課程においては、研究室で行っている「うつ・不安のメカニズムに関する基礎研究班」、「チーム医療を基盤としたメンタルケアシステムに関する研究班」、および「健康づくり・ストレスマネジメントに関する研究

班」の各プロジェクトに主導的に関わるとともに、関係諸機関と連携した先進的研究に取り組んでいく。

[感性認知情報システム研究領域]

感性認知科学研究指導

齋藤 美穂

日本語の「感性」は今や国際語“Kansei”として認知されつつあるが、感性は非常に幅が広い研究テーマであり、研究の視点も研究手法も多岐にわたる。この研究指導では、感性の指標としての「嗜好」に焦点を当て、具体的研究として色彩やデザインの認知およびその利用方法、さらにそれらの嗜好に対する文化的差異を切り口とした研究を主たるテーマとして感性を検討し指導する。ノンバーバルコミュニケーションに役立ち、カルチャーフリーなツールである色彩やデザインに対する認知や感性的な側面を十分に検討する事は重要なテーマとなる。また特に文化的差異を視野に入れる事は、グローバルな視点で感性を捉えなければならないマーケティング戦略には、これからますます必要になると考えられる。これらの研究テーマ(より詳細な研究テーマは「感性認知科学演習(1)」および「感性認知科学演習(2)」を参照)に沿って吟味された各人の研究について、実験計画における方法論や理論の検討と討議を重ね、さらに学会発表や投稿論文に対する助言と指導、学位論文に対する直接的な指導を行っていく。

安全人間工学研究指導

石田 敏郎

安全人間工学は、種々のシステムや環境における精神的、身体的作業を行う際の人間の役割、能力および限界を研究し、安全に作業を遂行するための方策を探る研究分野である。最近、新しい技術の発展やシステムの巨大化に伴い、人間のエラーによる事故や不具合が多く発生している。認知科学的なアプローチにより、事故・不具合の原因を探り、人間行動に適合した対策を策定し、提案することを中心に指導する。そのため、認知心理学的なヒューマンエラーの考え方と人間工学的な事故分析の方法についての研究指導を行い、そこから導き出されるヒューマンエラー防止対策について検討する。また、実験的手法により人間の安全行動を評価する方法論を同時に指導し、科学論文を作成する際の技法を習得させる。現在の主な研究テーマは、事故分析方法の研究開発、自動車運転時の視覚情報処理および事故要因の検討、リスク行動の分析および各種ヒューマン・インターフェイスの人間工学的評価である。

福祉工学研究指導

藤本 浩志

広義の福祉工学の研究対象として、広くヒューマンインターフェースを考え、ヒトの様々な機能の解明を目指す。感覚機能に関しては、特に皮膚感覚に着目してその機能の定量的な評価を試みる。他方、運動機能に関しては特に下肢による移動機能に着目する。これらの基礎的な研究によって得られた知見に基づき、健常者をも含めたユニバーサルデザインのコンセプトの具現化を目指す。また狭義の福祉機器である障害者のための自立支援機器の開発を行う。研究指導においては、個々のテーマごとに目的設定、アプローチの考案と選択の方法論を具体的に助言指導する。

情報処理心理学研究指導

中島 義明

主観主義パラダイムと客観主義パラダイムとの間での往復運動の中で、一つ止揚された弁証法的発展のプロセスの結果として誕生した認知心理学の視座よりさまざまな情報処理に関する問題を取り上げ、これらを実証的に研究する。例えば、処理資源、ワーキングメモリ、プライミング効果、認知地図、スキーマといったような現象に関連した問題の切り出しを行う。これらの研究を進める際には、これまでの理論モデルをより精緻化することを目指すだけでなく、現代の生活世界の中で直面する関連した諸問題の解決をも十分に志向する。本

研究指導の過程を経て、博士学位論文作成へと導く。

心理行動学研究指導

鈴木 晶夫

人間を研究する際の視点として、認知的、行動的、生理的側面が考えられ、それぞれを単独に研究することもできるが、その相互作用も重要である。特に、行動的側面と心理的側面との関係、身体と精神の相互作用を中心に、健康、感情、言語的・非言語的情報の機能、人間関係、生活習慣、東洋的思想からの健康観、身体観などの軸を考慮した研究をテーマとしたい。

各自の研究テーマ、研究計画に基づいて、その内容(研究史、目的、仮説、方法、分析、考察)についての指導とともに、博士論文の執筆を指導する。その基盤ともなる学会発表や論文投稿についても指導する。

言語情報科学研究指導

菊池 英明

情報化社会の進展に伴い音声言語メディアの役割は今後一層重要になる。言語情報科学とは、情報科学を視座の中心に据えて、音声言語メディアについて総合的に考察し、人間の言語行動をモデル化しようとする学問分野である。具体的には、言語学、心理学、認知科学、脳科学といった人間科学の基礎学問を前提としながら、コンピュータ・情報処理技術の導入や開発を通じて、音声言語の理解・生成・インタラクションなどのモデルを構築していく。主な研究課題は、会話メカニズムの解明、人と機械の対話インタフェース、音声による感情・態度の理解・表出モデル、知的検索エンジンなど。

知識情報科学研究指導

松居 辰則

「人間の深い知識への科学的アプローチ」をテーマに対して多面的(理論的・技術的・実践的)に研究を行います。具体的には、1)人間の「感性」や「暗黙知」への情報科学的アプローチ(ヒューマンインタフェース、音楽情報処理、スキルサイエンス など)、2)知識獲得プロセスの測定・評価のための量的&質的手法の開発、3)学習情報からのデータマイニングと具体的な学習支援システムへの実装、4)人間のもつ暗黙知(ノウハウ)の抽出・管理・共有の支援手法(スポーツ、医療、伝統芸能など)、5)感性を刺激するような e-learning システムや学習教材の開発、などが研究テーマとなります。

これからの時代は情報機器、特にコンピュータやインターネット技術と人間が高度に共生し、人間中心の豊かで安心な生活環境を構築して行かねばなりません。そのためには、コンピュータに高度な知性(Intelligence)をもたせるための人工知能研究、知識処理研究への期待は今まで以上に大きくなってきます。

そこで本研究室では、我々人間がもつ「感性」や、実生活空間の中での「暗黙知」について様々な観点から研究をしています。「感性」や「暗黙知」についての研究は柔軟な発想力と多様な研究方法論が必要です。本研究室でも、多種多様な観点と方法論で人間の「感性」や「暗黙知」にアプローチしています。具体的な研究内容は下の項目を参考にしてください。少し大げさかもしれませんが、人間の「心」の起源を探求し、そして、それをコンピュータで扱い、さらに、そのようなコンピュータと人間がどのように共生してゆけばいいのか…を研究室をあげての大きなテーマにしています。

人間の「知識」や「感性」に関して研究を推進するためには様々な研究アプローチ(研究方法論)が必要です。人間の行動や心理を詳細に分析・モデル化してコンピュータシステムとして実現する方法、もしくは数理モデルとして表現して数学的に解析、シミュレーションによって新たな法則性や知見を発する方法。実環境のもとで実験を行い、仮説検証的に様々な現象のメカニズムを解明する方法。そして、徹底した文献調査によりマクロな視点からの論理を組み立てる方法。など様々です。まずは研究のテーマを明確にして、それを実現するための適切な対象領域と研究方法論を決めることになります。その後は、ユニークな研究を期待しています。

感覚情報処理学研究指導

百瀬 桂子

さまざまな情報メディア・情報機器と人間の関わり合いを、主に生理的側面からとらえて解析し、得られた知見をヒューマンインタフェースの高度化や医療に活用するための研究を行う。主に、ヒトの感覚機能およびその神経情報処理に着目し、それらの機構を客観的にとらえるための技術として、神経モデルのコンピュータシミュレーションや実際の脳活動計測データを利用する。研究テーマとしては、神経モデル解析による脳内情報処理機構の解明、感覚情報処理機構を脳活動によりとらえるための生体信号処理方式の検討、生理指標によりヒューマンインタフェースを評価する方式の検討、感覚機能診断のための計測方法などが挙げられる。このような研究について、研究計画の立案と実践、論文作成を指導する。

対話情報処理研究指導

市川 熹

例えば以下のような視点を参考に体系的テーマを自立的に策定し、研究を進めることを指導する。

音声対話では何故連続している音韻の列の中から言葉と言葉の境目が直ちに判るのか、何故脳の中に記憶されているであろう何万語、何十万語もある単語から特定の言葉が直ちに引き出せるのか、何故引き出された単語と単語の関係(文の構造)が直ちに判るのか、何故円滑な話者交替が実現されるのかなど、いずれも非常に不思議である。余裕を持って予測できるような仕掛けと、効率的な心内辞書のアクセス法が存在することが予想される。

また、話し手の発声と平行してその音声は聞き手により聴取され、理解が進行し、反応が現れ、またその反応に応じて発声が影響されるという、ダイナミックな制御を行う情報が存在すると考えられる。話者交替の制御などの対話制御なども含む情報である。

- A. 伝達内容情報 最終的に伝えられた内容
- B. 伝達支援情報 実時間での理解を支援する情報
 - ・伝達内容構造情報
 - ・伝達内容構造予告情報
 - ・話者交替予告(対話進行支援)情報

この伝達支援情報Bには様々なレベルの予告情報が含まれ、それを利用し予測することによって、聞き手の知覚や理解の負担を軽減する非常に大きな役割を果たしていると考えている。

このような視点から、音声や手話のような実時間対話言語には、仮説として、対話参加者が予測可能な階層的予告機能が存在するものと考えている。例えば

- a. 話者交替の予告情報とその活用(予測)機能
- b. 文及び文章構造の予告情報とその活用(予測)機能
- c. 語彙レベル分節位置予告情報とその活用(予測)機能
- d. 後続音韻の予告情報とその活用(予測)機能

などである。

a～cはプロゾディが重要な役割を果たしていると予測される。

そこで、音声の基本周波数のパターンに隣接する音声区間の間の無音区間の時間長もパラメータに加え、連続する3つの音声区間の係り受け関係を推定する手法を検討する。

さらに、先行する音声区間の情報のみから、後続の音声区間の情報を使うことなく、後続の音声区間への係り受け関係を予測する可能性を検討する。

複数対話では、参加者に情報の授受の速度に差がある場合、遅い者が話題の展開に取り残されることが最大の問題である。話題の展開に追従できる(一種の実時間性)ように、対話の流れを制御する工夫が必要になる。

[教育コミュニケーション情報科学研究領域]

情報コミュニケーション科学研究指導

金子 孝夫

音声、画像、データなどのマルチメディアによる情報コミュニケーション科学の研究手法について、実験と研究動向の調査などの研究指導を行う。具体的には、デジタル情報処理、デジタルデータ伝送、コンピュータによるデータ入出力、ヒューマンインタフェースなどの情報コミュニケーション科学研究のための技術を調査研究の対象とする。これらの調査研究によって、博士論文を執筆できるようになる。

ネットワーク情報システム学研究指導

金 群

技術の進展に対応できる柔軟性や突発的な障害に対する高信頼性など、より広い視野からネットワーク情報システムを見通した基礎的研究、ならびに、安全・安心なサステナブル情報環境・サービスを提供するためのネットワーク情報システムの一層の高度化をめざした理論と応用の両面にわたる研究を行う。ネットワーク情報システムはとくに人間の知的活動とのつながりが深いことから、情報・ネットワーク・情報システムに関する科学を学際的観点からとらえ、人間とネットワーク情報システムとの関わり合いを重視しながら、総合的かつ体系的な構築方法論を探究する。それらを通して、専門分野における深い学識と思考力をもち、新しい学問の芽を育てることができるような、創造性の豊かな研究者を育成する。

教科書：とくに指定しないが、必要に応じて随時参考文献や資料などを指定するか配る。

参考文献：随時紹介する。

インストラクショナルデザイン論研究指導

向後 千春

インストラクショナルデザインにおける各自の研究テーマを設定し、研究計画の立案、研究の実施、研究論文の執筆、学会での発表、学会誌への投稿までを指導します。これらを積み上げて、最終的には、博士論文の作成を指導します。

教育情報工学研究指導

永岡 慶三

修士課程での教育情報工学研究の発展として、特定研究領域の研究動向の把握、論文や報告書の肯定的・批判的解釈のしかた、独創的な課題設定や問題発見・解決の方法論について指導する。さらに研究費管理、後輩指導、研究遂行上の関係者とのコラボレーションの実際について具体的な行動目標を設定してシミュレーション形式の指導を行う。さらに研究成果をまとめ、実際に査読制度の整備された日本教育工学会などの国内学会あるいは国際学会への学術論文投稿を目標とする指導を行う。

教育開発論研究指導

野嶋 栄一郎

教員、学生双方による各自の最新の研究成果の報告とそれに関わる質疑応答。並びに学位論文完成に向けてのモニタリング。主な研究課題は、1) 教授＝学習過程における測定・評価の研究、2) 新しい学校モデルとその評価研究、3) インターネット利用による日米の異文化間交流カリキュラムの実践と評価、4) 映像情報の処理過程と認知研究、5) 授業のデジタルアーカイブの開発とそれを利用した授業モデルの開発・評価。

Keywords: 教育測定、教育評価、教授＝学習過程、新しい学校モデル、インターカルチュラルコミュニケーション、認知過程、カリキュラム、アクションリサーチ、授業アーカイブ、遠隔教育

2005年度以前入学者対象科目

－博士後期課程－

【研究指導】

〔スポーツ科学研究領域〕

スポーツ人類学研究指導

寒川 恒夫

博士論文の作成指導を行う。最広義のスポーツ(民族スポーツ、国際スポーツ、過去スポーツ、遊戯、舞踊、養生法、武術・武道、などなど)の文化人類学研究の他に、身体文化(Körperkultur)と関わる身体論をも扱う。また、スポーツ人類学の主要方法論であるフィールドワークを学ぶため、海外における民族スポーツの調査が予定されている。

スポーツ神経科学研究指導

彼末 一之

運動に必要な神経機構について①基本的な脳機構の解析と②実際のスポーツをモデルとした運動の解析、を並行して行うことで、基礎から応用までの広い視点を養うことを目標として指導を行う。特に高次脳機能解析にはMRIを使った解析を原理から実際まで学んで特定のテーマについて研究する。一方スポーツの解析は野球、陸上競技などを中心に系統的な解析を行って競技力向上につなげられるような研究を行うことを目標とする。

XVII 全学共通設置科目の概要

次の科目は、全学共通設置科目として全大学院学生を対象に設置されている。

聴講を希望する場合は、所沢総合事務センターで交付する聴講願を使用し、所定の方法によって申請すること。なお、聴講するには指導教員の承認が必要となり、事前に申請書に指導教員の押印が必要となる。

修得した単位は、他箇所聴講科目と合わせて10単位を限度に修了に必要な単位に算入することができる。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 01（文章作成力養成）	太田 裕子	前期	2	木 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「文章作成力養成」クラス）は、自分の修士論文・博士論文を書くために学びたい人のためのクラスです。

「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画（研究計画は1,000字）を、書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、宛計画書を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否とクラス分けの結果は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

- 第1回：外来語と専門用語を扱う
- 第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く
- 第3回：接続表現で文と文をつなげる
- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作って書く
- 第6回：「パラグラフ」を作る
- 第7回：主張を根拠で支える
- 第8回：論点を整理する
- 第9回：抽象度の調節をする
- 第10回：参考文献を示す

- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする
- 第13回：図や表を作る
- 第14回：「私語り」から脱出する
- 第15回：題名をつける

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブックーライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房、2008）2,000円＋税

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 02（指導力養成）	佐渡島紗織	前期	2	木 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学（院）では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業（「指導力養成」クラス）では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。

本授業は、修士1年生、博士1・2年生のみを対象とします。「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画（研究計画は1,000字）を書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、研究計画書を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

- 第1回：外来語と専門用語を扱う
- 第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く
- 第3回：接続表現で文と文をつなげる

- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作って書く
- 第6回：「パラグラフ」を作る
- 第7回：主張を根拠で支える
- 第8回：論点を整理する
- 第9回：抽象度の調節をする
- 第10回：参考文献を示す
- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする

■ 教科書

準教科書：佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房、2008）2,000円＋税

（どうしても購入しなければならないというものではないが、授業内容が本書に準拠しているので、手元に置くことをお勧めします。）

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%

■ 関連URL

<http://www.cie-waseda.jp/awp/ondemand/tutortraining.html>「学術的文章の作成」授業ページ

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 03（留学生向け）	加納なおみ	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

- ・修士論文などアカデミックライティングの構成と書き方のプロセスを理解し、論理的整合性、一貫性を高める書き方を学ぶ。
- ・思考を深め、文章化するために有効な方法を学び、自分の意見を確立していく。
- ・読み手の視点を獲得しながら、書き手としての成長をめざす。
- ・学術論文の書式を学ぶ。
- ・ピア活動を通じ、ライティングコミュニティー／グループ構築の可能性を探る。
- ・文章と口頭発表の特色を理解し、基本を習得する。

■ 授業計画

- 第1回：枠組み・研究課題・研究対象・研究方法を設定する
- 第2回：先行研究・資料を調べる
- 第3回：引用する(1)
- 第4回：引用する(2)
- 第5回：レビューを書く
- 第6回：「マップ」を作り、論点を決める
- 第7回：リサーチクエスションを立てる

- 第8回：アウトラインを作る
- 第9回：パラグラフを書く
- 第10回：推敲する その(1)
- 第11回：図表・文献リストを作成する
- 第12回：口頭発表し、フィードバックし合う(1)
- 第13回：口頭発表し、フィードバックし合う(2)
- 第14回：推敲する その(2)
- 第15回：総まとめ

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された課題の出来栄え 60%、口頭発表 10%

■ 関連URL

http://open-waseda.jp/common/contents/syllabus/9a00006003_02.html

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 04（文章作成力養成）	佐渡島紗織 吉野亜矢子	後期	2	火2時限

■ 授業概要・授業の到達目標

■ 授業計画

■ 教科書

■ 参考文献

■ 評価方法

■ 備考

■ 関連URL

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 05（指導力養成）	太田 裕子	後期	2	木3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本授業は、学術的な文章を書く上で重要な技能を身につけること、及びその指導法を身につけることを目的とします。日本の大学(院)では、多くの授業や演習で、レポートを最終評価の判断材料にするにも関わらず、レポートや論文の書き方を体系的に指導するシステムがありません。早稲田大学では、本授業を通して学生が学問をするための基礎的な態度を知り、学術的な文章を書くための技能を身につけることを奨励しています。

「学術的文章の作成とその指導」は、三つのクラスに分かれています。「文章作成力養成」クラスと「指導力

養成」クラスと「留学生向け」の三つです。本授業(「指導力養成」クラス)では、自分の修士論文・博士論文の準備という目的に加えて、早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおいて、学部生向け授業の指導補助に携わるための応募資格レベル到達を目指します。(早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムにおける学部生指導補助については、http://www.waseda.jp/cie/writing_center/pdf/ta.pdfをご覧ください。)

本授業は、修士1年生、博士1・2年生のみを対象とします。「志望理由」の欄に、修士または博士の研究計画(研究計画は1,000字)を、書いて下さい。クラス定員は20名です。希望者数が定員を超えた場合は、研究計画書を審査して履修者の決定を行います。ご了承下さい。履修の可否とクラス分けの結果は、4月5日前後にメールでお知らせします。

文章を書く技能は、他の技能と同様、フィードバックを受けて初めて磨かれるものです。しかし、文章へのフィードバックは、残念ながら、通常ではなかなか得ることができません。そこでこの授業では、論理的で明快な学術的文章を書くための技能を、実際に文章を書き、直していくことで学びます。具体的には、週ごとに一つの技能または一つのライティング・プロセスを扱います。授業では、その技能に関する説明や練習を行い、授業後にその週の技能を使って短い文章を書いてくる課題が出されます。クラスの他の学生と文章を読み合い意見交換をするピア・レスポンス方式をとりますので、活発な授業への参加を期待しています。

■ 授業計画

- 第1回：外来語と専門用語を扱う
- 第2回：言葉と思考、「一文一義」で書く
- 第3回：接続表現で文と文をつなげる
- 第4回：語句を明確に使う
- 第5回：「マップ」を作って書く
- 第6回：「パラグラフ」を作る
- 第7回：主張を根拠で支える
- 第8回：論点を整理する
- 第9回：抽象度の調節をする
- 第10回：参考文献を示す
- 第11回：「ブロック引用」をする
- 第12回：要約引用をする
- 第13回：図や表を作る
- 第14回：「私語り」から脱出する
- 第15回：題名をつける

■ 教科書

佐渡島紗織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブックーライティングの挑戦15週間』(ひつじ書房、2008)2,000円＋税

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された文章の出来栄え 70%。

■ 関連URL

「学術的文章の作成」授業ページ

<http://www.cie-waseda.jp/awp/ondemand/tutortraining.html>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
学術的文章の作成とその指導 06（留学生向け）	加納なおみ	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

- ・修士論文などアカデミックライティングの構成と書き方のプロセスを理解し、論理的整合性、一貫性を高める書き方を学ぶ。
- ・思考を深め、文章化するために有効な方法を学び、自分の意見を確立していく。
- ・読み手の視点を獲得しながら、書き手としての成長をめざす。
- ・学術論文の書式を学ぶ。
- ・ピア活動を通じ、ライティングコミュニティー／グループ構築の可能性を探る。
- ・文章と口頭発表の特色を理解し、基本を習得する。

■ 授業計画

第1回：枠組み・研究課題・研究対象・研究方法を設定する

第2回：先行研究・資料を調べる

第3回：引用する(1)

第4回：引用する(2)

第5回：レビューを書く

第6回：「マップ」を作り、論点を決める

第7回：リサーチクエスチョンを立てる

第8回：アウトラインを作る

第9回：パラグラフを書く

第10回：推敲する その(1)

第11回：図表・文献リストを作成する

第12回：口頭発表し、フィードバックし合う(1)

第13回：口頭発表し、フィードバックし合う(2)

第14回：推敲する その(2)

第15回：総まとめ

■ 評価方法

授業への参加 30%、提出された課題の出来栄え 60%、口頭発表 10%

■ 関連URL

http://open-waseda.jp/common/contents/syllabus/9a00006002_06.html

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム
(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
国際人養成実践講座	内海 善雄 松本 充司	後期	2	木 5 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前国際電気通信連合 (ITU、国連の専門機関) 事務総局長より、外国人との交渉や国際社会で活躍するための基礎知識と心構えを、第一線で活躍している実務家も招き、実践的に付与する。対外交渉や国際機関での仕事のやり方の実際を知るとともに、国際社会の人間関係や、国際関係のパワーポリティクスを理解する。なお、本科目は日本語で授業を行なうが、相当程度の英語使用能力が要求される。また、大学院生を対象に授業を行なうが、将来国際社会での活躍を志す学部生 (3年以上) にも開放する。

■ 授業計画

第 1 回：国際社会とは

第 2 回：国際交渉の基本 (1)

第 3 回：国際機関

第 4 回：国際機関の中の人事管理

第 5 回：国民性

第 6 回：国際会議 (1) 概要

第 7 回：国際会議 (2) 実地経験

第 8 回：国際会議 (3) 議事手続き

第 9 回：国際社会で働く (1) ゲスト

第 10 回：国際社会で働く (2) ゲスト

第 11 回：国際社会で働く (3) ゲスト

第 12 回：国際交渉の基本 (2)

第 13 回：スピーチのしかた (1)

第 14 回：スピーチのしかた (2)

第 15 回：スピーチのしかた (3)

■ 教科書

内海善雄著「勝つための国際交渉術」日刊工業新聞社

内海善雄著「国連という錯覚—日本人の知らない国際力学」日本経済新聞出版社

■ 参考文献

授業中に適宜紹介する

■ 評価方法

(1) 出席 50%。

(2) レポート 50% (テーマを与え、国際会議で行うスピーチの原稿を作成)。

■ 備 考

<http://yutsumi.web.fc2.com/Education/wasedacourse.htm>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>) で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
研究倫理概論	土田 友章 浦川道太郎 高林 龍 深澤 良彰 福田 耕治	後期	2	フルオンデマンド

■ 授業概要・授業の到達目標

最近、研究倫理をめぐる虚偽記載、データ捏造等の不正行為等が相次いで明らかになっています。論文作成・発表、共同研究等の研究活動を遂行するうえで、予めわきまえておくべき研究倫理について、知的財産権、被験者保護等の基本的事項をはじめ、欧米諸国における取り組み、利益相反、企業倫理、更には研究ノートとデータ管理、安全保障等に関する事項について、学内外の専門の先生方により、具体的な事例を多く交えながらオンデマンド形式でお伝えします。文系理系を問わず今後研究に従事する多くの大学院生および学部3・4年生が、研究倫理に関する理解を深め、研究者として地球市民として世界に参加してゆく態度を整えることを期待します。

■ 授業計画

【序論 なぜ研究の倫理か 現代世界における科学技術研究】

第1回：はじめに なぜ研究倫理か

第2回：EU/欧米諸国における研究倫理

第3回：研究における不正行為：FFP(ねつ造・改ざん・盗用)の実例

第4回：研究における不正行為と法：民事訴訟

【研究の計画】

第5回：研究計画のあり方

第6回：被験者保護の基本(1)(ヒトゲノム、ES細胞を含む)

第7回：被験者保護の基本(2)(動物実験を含む)

第8回：質的調査の研究倫理(新規)

第9回：利益相反の諸相

【研究の遂行】

第10回：研究ノートとデータ管理の実践

第11回：メンターとトレイニー、Authorshipと出版の倫理、共同研究

【研究の成果】

第12回：知的財産をめぐる

第13回：研究倫理と企業倫理

第14回：安全保障の観点から見た科学技術者の社会的責任

第15回：研究倫理の実践：早稲田大学の体制

■ 教科書

未定

■ 参考文献

未定

■ 評価方法

講義後の小テストを踏まえ総合的に評価する。

■ 備 考

○理系、文系を問わない内容です。多くの大学院学生に受講して欲しいと思います。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
質的研究方法入門	太田 裕子	前期	2	火 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

質的研究方法を用いた研究を行い、人文社会科学系の学術論文を作成する際必要となる基本的な考え方や研究手法を学ぶことを、本授業の目的とする。

質的研究方法は、実証研究における領域のひとつで、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする」(フリック, 2002, p. 19)点がその特徴である。大がかりな質問紙調査や実験によって収集したデータを統計処理する数量的研究方法に対し、質的研究方法は、観察、インタビュー、映像分析などの手法を単独または複数組み合わせることによって、現象を捉えようとする。

どのような手法を用いてデータを収集し分析するかは、研究者の立場や研究の問いによって決定づけられる。そのため、本授業では、質的研究方法の理論的背景を理解したうえで、受講者が自分の研究の立場や問いに適した研究方法を見つけることを目指す。本授業では、特に観察とインタビューを取り上げ、それらの種類と方法を学ぶ。

本授業は、次の三点をねらいとする。

- 1) 質的研究方法の理論的背景、および観察とインタビューの種類と方法を理解する。
- 2) 質的研究法の強みと弱み、倫理的問題を理解する。
- 3) 観察、インタビューの手法を用いた研究をデザインし、実施することができる。

受講者は、実際に観察やインタビューを用いた研究を行い、小型の学術論文を作成することを通して、上記三点を学ぶ。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

課題レポート60%、最終レポート25%、授業への参加度15%

■ 備 考

本授業は、初めて質的研究方法を学ぶ修士課程の学生を主な対象とする。所属する研究科で研究方法に関する授業が設置されている場合には、そちらを受講されたい。

また、本授業は、フィードバックの都合上、受講者を20名までとさせていただきます。そのため、履修希望者が定員を超える場合には、書類選考を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
グローバル起業戦略 - 夢は世界に（大学院用）	大久保秀夫 東出 浩教	前期	2	木 6 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

(1) 授業の目的

授業の目的は、「自分の人生を彩るグローバルな事業達成体験」を積み重ねるための、「起業家的なマインドセット」と「グローバルビジネス展開のためのスキルセット」を大学院の方々に身につけていただくことです。

不確実なこれからの時代に“幸せで成功したキャリア”を勝ち取るためには、国境の枠を超えて活躍できる能力が必要不可欠であり、この点は諸外国の科学的な研究成果を振り返っても明らかです。

言語能力も重要ですが、むしろ、自分で事業を興す、もしくは企業の一員として企業での新規プロジェクトを担当し、事業開始後、数年の内には海外数カ国（しばしば数十カ国）のパートナーとアライアンスを組む。結果、世界の様々な地域の顧客に喜ばれる“価値”を提供できる。これらを達成するためのスキルと能力がキャリアへの扉を開くキーになることが分かっています。国内の大企業で自分のポジションを守っていれば幸せになれる、という時代は終わりました。

(2) 授業の方法

授業は大きくは3つのブロックに分けられます。すべてのブロックにおいて、ゲストや教員からの一方的なメッセージ発信ではなく、ゲスト、教員、受講者がやり取り（講演、インタビューセッション、ケースディスカッション等）をしながら、受講者“腹に何かが落ちる”経験を達成することを目標とします。

具体的に、第一のブロックでは、日本の起業家の方々と、すでに国境を越えて羽ばたき大きな成功を収めている起業家をお招きします。ゲスト講師による実践的な経験・体験をふまえた上での講義担当教員との「対談」と受講者の質疑が授業のコアになります。

第二ブロックでは、大所高所から日本企業の国際化を眺められてきた方々を交え、受講者、担当教員との対話と議論をオーガナイズします。

そして、第三ブロックでは、ここ3年ほどの間にグローバル市場にチャレンジをし始めた新進気鋭の起業家をお招きし、将来の国境を越えた起業へのヒントを紡ぎ出します。

また、受講者の方々には、“大きく夢”をもってもらうための2つのプロジェクトワークにチャレンジしてもらうこととなる予定です。

(3) フォーバル寄附講座

本講座は、株式会社フォーバルからの寄附講座となっています。フォーバル社は1980年に創業され（<http://www.forval.co.jp/index.htm>）、今日まで成長し続けている企業です。現在でも、数々の新規事業を手掛け、一方で、アントレプレナー制度などにより、起業家の育成に取り組むと共に、数々の“国境を超える活動”に取り組んでいます。

■ 授業計画

全12回の授業を以下の予定で実施します（一部変更の可能性あり）。

第1回：講義：「グローバル起業戦略の意味、意義、重要性」とは

本講義の主題の解説、ゲスト講演を聞くにあたっての事前学習の提示など

- 第2回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(1)
ユニデン株式会社 取締役ファウンダー 藤本 秀朗
- 第3回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(2)
株式会社パソナ 代表取締役 南部 靖之
- 第4回：起業そしてグローバリゼーションを達成した起業家および企業戦略のケーススタディ(3)
株式会社エイチ・アイ・エス 取締役会長 澤田 秀雄
- 第5回：これまでのまとめ
担当教員による講義および受講者との議論、および翌週のプレゼンテーションへの導入
- 第6回：受講者の皆さんのプロジェクトワークの第一回発表と議論
- 第7回：日本放送協会(NHK)第17代会長 海老沢 勝二、および
在タイ日本国元大使 太田 博 + 懇親会(1回目)
- 第8回：第2回課題に向けたワークショップ
- 第9回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(1)
株式会社クリーク・アンド・リバー社 代表取締役 井川 幸広
- 第10回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(2)
株式会社デジタルハーツ 代表取締役 宮澤 栄一
- 第11回：グローバル戦略を展開しつつある起業家および企業戦略のケーススタディ(3)
株式会社ディー・エヌ・エー 代表取締役社長 南場 智子
- 第12回：受講者の皆さんのプロジェクトワークの第二回発表とラップアップ + 懇親会(2回目)
- (注1) 5月第2週、第3週に関しては休講の予定。全3回に相当する補講を、受講者の予定を勘案し期間中に設定します。
- (注2) 第7週および第12週に関しては、6限および7限の時間帯に懇親会を開催いたします。

■ 教科書

特に指定しない。必要に応じて講義内で資料を配布する

■ 評価方法

出席点(ゲスト対談へのコメントなど含む)…40%

ワークショップ、中間提出課題…20%

レポート課題…40%

■ 備考

(1) 寄附講座の特色として、フォーバル社において培われた知識・経験・ネットワークを活かしたリアリティのある、一方通行でない授業を実施します。受講者・講演者が本音を語り合う交流会、アントレプレナー制度やインターンシップなどの機会へも積極的に参加し自分を成長させてもらえればと期待しています。

(2) フォーバル社寄附講座も今年で3年目です。今回は、「グローバル起業戦略」と内容も一新した新規科目になっていますので、これまでに「ブロードバンド起業塾」を受講した方も履修可能です。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
持続可能な発展とリスクマネジメント (アジア編) (大学院用)	天児 慧 天野 正博 勝間 靖 森川 靖 山田 満	前期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

今日、世界は「人間の安全保障」ひいては「持続可能性」という問題に直面しており、国際社会では、持続可能な発展に向けて企業に対する様々な要請も強くなっている。そこで前期では人間の新たな脅威の問題を特にアジアを中心に考え、状況の把握とその問題解決への取り組みを考える。これらはグローバルな現象として理解できるものであるが、そこには「アジア的特徴」を見ることができ、アジア自身がそのことをしっかりと認識し対応していく必要があり、いかにしてこの問題に取り組んでいくべきか、何をなすべきかが問われてくる。

この講座ではこれらの問題に関する専門的知識を提供し、かつ企業の取組みの現状を説明する。特にアジアの全般的な状況の理解を目的とする。

■ 授業計画

第1回：天児 慧 総論1

第2回：関 正雄 総論2

第3回：松岡俊二：環境

第4回：松岡俊二：環境

第5回：天野正博：環境

第6回：佐野 肇(株式会社損保ジャパン・リスクマネジメント、ERM研究開発部上席研究員)＝自然災害・気候変動とリスクファイナンス

第7回：阿古智子：感染症

第8回：大谷順子：感染症

第9回：工藤宏一郎：感染症

第10回：山本雅司(株式会社損保ジャパン・リスクマネジメント取締役、BCM事業本部長)＝感染症リスクマネジメント

第11回：阿古智子：貧困と女性

第12回：勝間 靖：貧困と人権

第13回：堀井 浩：エネルギー問題とガバナンス

第14回：福渡 潔(株式会社損害保険ジャパンCSR・環境推進室課長)＝持続可能な発展と企業経営
＜演習＞

第15回：結論(天児、関)

■ 教科書

特に指定なし。

■ 参考文献

第1回の時に、全体の参考文献の資料配布予定。

■ 評価方法

出席数とレポート提出(特に関心の高かった3つ以上の回の講義内容をベースにテーマ設定をし、関連付けながらレポートにする)A4用紙4枚以上、もしくは試験による。

■ 備 考

特に指定なし。

■ 関連URL

必要な場合、第1回時に連絡。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
儒教を読み解く	永 冨 青 地	夏季	2	無その他

■ 授業概要・授業の到達目標

本講義では、儒教の特質と機能を再検討しつつ、儒教は東アジアの歴史と文化に何をもたらしたか、現代において儒教はいかなる意味を持っているのかを考えていく。ゲストスピーカーとして中国、北京大学の高名な儒教研究者を複数招聘し、中国において展開している最新の儒教研究方法とその成果を講義してもらう。それによって受講者は儒教研究の最先端を共有することになる。また、儒教の過去・現在・未来についても議論していきたい。なお、本科目は夏季集中講義とする。

ゲストスピーカーの北京大学の各先生は中国語で授業を行うため、日本語への通訳もつけることとする。

本授業は大学院生を対象とする。

■ 授業計画

第1回：再度儒教を問う1

第2回：再度儒教を問う2

第3回：儒教の特質についての討論

第4回：中国における儒教の機能1

第5回：中国における儒教の機能2

第6回：中国における儒教の機能についての討論

第7回：東アジア思想史上における儒教の意味1

第8回：東アジア思想史上における儒教の意味2

第9回：東アジア思想史上における儒教の意味についての討論

第10回：儒教研究はいかにあるべきか1

第11回：儒教研究はいかにあるべきか2

第12回：儒教研究はいかにあるべきかについての討論

第13回：現代における儒教1

第14回：現代における儒教2

第15回：現代における儒教についての討論

■ 教 科 書

特に指定しない。

■ 参考文献

随時指示する。

■ 評価方法

レポートと平常点。

■ 備 考

オリエンテーション:4月9日(金) 12:20-12:50(予定)

授業日程: 8月2日(月) - 6日(金) (1日3コマ×5日間)

授業時間:第1時限は13時から、第2時限は14時45分から 第3時限は16時30分から

教室:22号館8階の会議室 (本部キャンパス、道路をはさんで中央図書館のはすむかいの黄色いビル)

8月2日(月) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月3日(火) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月4日(水) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月5日(木) 第1時限-第3時限(13:00-18:00)

8月6日(金) 第1時限-第3時限(13:00-18:00) ※3時限は懇親会

変更の可能性があるため、詳細はCourse N@viのお知らせを随時参照のこと

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日/時限
中国研究の最前線	周 程 劉 傑	前期	2	木 5 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

この講義では、現在の中国研究で話題になっている事柄を論議する。本講義では、北京大学をはじめとする中国の有力大学からゲストスピーカーを招へいし、最先端の中国研究についての報告を行うことも予定する。講義使用言語は日本語と中国語とする。中国語での講義については通訳が付くので、中国の思想、文化、環境、社会などの問題に関心を持つ大学院生なら誰でも受講可能である。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

研究発表、授業・討議への参加度、レポート等を総合的に判断する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
地域研究としての台湾	梅森 直之 浅古 弘 江 正殷 春山 明哲	前期	2	火 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現在の台湾を、どのように理解すればよいか。また、これからの台湾の行方はいかなるものか。台湾を的確に捉えるには、どうすればよいのだろうか。本講義では、台湾を様々な角度から検討し、地域研究としての台湾の可能性を考える。また、こうした新しい台湾研究のあり方を模索することによって、既存の比較政治学、比較法学、比較歴史研究、東アジア研究に関しても、新たな視点を提供したい。

本講義は、オムニバス形式の講義であり、政治学、歴史学、法学、地域研究を専門とする、複数の教員が担当する。それぞれ専門分野から台湾研究の現状、可能性等について、受講生とともに文献・資料等を通じて検討し議論を行う。また、学外で活躍する研究者の招聘も積極的に行い、最先端の台湾研究と接触する機会を提供する。

■ 授業計画

- ・本講義は、複数の教員によるオムニバス形式の講義である。
- ・教員は原則としてすべての講義に出席し、議論に参加する。
- ・主なテーマは下記の通り。ただし、内容や順番に関しては変更の可能性がある。
- ・また、何義麟氏(国立台北教育大学)がゲスト・スピーカーとして参加する。

第1回：イントロダクション：台湾研究のおもしろさ

第2回：日本における台湾研究の歴史

第3回：台湾研究最前線1：岡松文書をめぐって

第4回：台湾研究最前線2：裁判史料をめぐって

第5回：台湾研究最前線3：2.28事件

第6回：台湾研究最前線4：多文化主義と多言語主義1

第7回：台湾研究最前線5：多文化主義と多言語主義2

第8回：台湾統治の開始1：日清戦争から征服戦争へ

第9回：台湾統治の開始2：後藤新平とその統治1

第10回：台湾統治の開始3：後藤新平とその統治2

第11回：台湾統治の展開1：矢内原忠雄とその時代

第12回：台湾統治の展開2：抗日運動の諸相

第13回：台湾統治の展開3：霧社事件

第14回：脱植民地への展望

第15回：レビュー

■ 教科書

講義中に指示する。

■ 参考文献

講義中に指示する。

■ 評価方法

研究発表、授業・討議への参加度、レポート等を総合的に判断する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日中関係の構造分析	徐 顕芬	後期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本講義は、現代の日中関係を構造的に理解することを目的に設定する。この分野の基本的文献を読み、ディスカッションを行う。具体的には、第1に、日中両国間の相互作用のダイナミクスを長いスパンで把握する。第2に、日中関係をめぐる国際環境、特に日・米・中三ヶ国関係の変遷を考察する。そして第3に、日中関係をめぐる日中それぞれの国内政治、政策決定を検討する。特に政策決定アクター（組織及び人物）を整理し、「世代交替」の意味合いを分析する。

講義の進め方については、講師による講義形式（最初の15分間程度）と、履修者による文献の内容報告・発表というゼミナール形式を併用して実施する。

期末に履修者全員のレポート集『日中関係の構造分析』2010年度号（仮題）を作成する予定。

■ 授業計画

未定

■ 評価方法

成績の評価は、授業での報告・ディスカッションへの貢献度と、期末レポートに基づく。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本列島の日常史（前編）	新川登亀男	前期	2	金 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

日本列島を対象とした歴史研究には長い蓄積があり、多くの成果が生まれている。しかし、かかえている課題も多い。そこで、これらのことを整理しつつ、21世紀の歴史研究と歴史理解のあり方について考えてみたい。なかでも、列島の古代史に生きた人々の論理や日常性および感性をどのように掘り起こし、あるいは取り戻して、再構成し、いきいきとした歴史記述を残していくには、どうしたらよいのか。当たり前の課題なのだが、これこそが歴史に取り組む本道ではなかろうか。そして、もっとも忘れがちで、かつ難しい課題である。

ここでは、これに取り組む手掛かりとして、高取正男の著書『神道の成立』（平凡社）を輪読し、自由に議論したい。著者は既に故人であるが、本書は歴史学・民俗学・宗教学などを総動員して、古代列島人の論理と心性を活写してみせた名著として語り継がれている。

授業参加者については、専門専攻を問わない。むしろ、歴史一般に関心を抱く各研究科の各専攻の人々に期待したい。そして、参加者それぞれの分野（方法）とテキストの方法とを突き合わせながら、創造的

に考えていきたい。同時に、日本列島史のとらえ方を学び、それを各自の専門専攻のなかに取り入れて活かしてもらうことを目標としている。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション(進行計画の説明、意見交換)
- 第2回：高取正男に関する説明と確認
- 第3回：参加者の問題意識と課題の報告・議論1
- 第4回：参加者の問題意識と課題の報告・議論2
- 第5回：参加者の問題意識と課題の報告・議論3
- 第6回：『神道の成立』(以下、テキストと略称) 輪読1(「本来的な世俗的宗教」1)
- 第7回：テキスト輪読2(「本来的な世俗的宗教」2)
- 第8回：テキスト輪読3(「神仏隔離の論拠」1)
- 第9回：テキスト輪読4(「神仏隔離の論拠」2)
- 第10回：テキスト輪読5(「神道の自覚過程」1)
- 第11回：テキスト輪読6(「神道の自覚過程」2)
- 第12回：テキスト輪読7(「浄穢と吉凶」1)
- 第13回：テキスト輪読8(「浄穢と吉凶」2)
- 第14回：テキスト輪読9(「女性司祭」)
- 第15回：総括と成果確認

■ 教科書

高取正男『神道の成立』(平凡社ライブラリーほか)

■ 参考文献

- 高取正男『民間信仰史の研究』(法蔵館)
- 高取正男『日本的思考の原型』(平凡社ライブラリーなど)

■ 評価方法

平常点80%、レポート20%

■ 備考

専門の枠を超えて飛翔し、そして、専門に立ち帰るダイナミズムを共有したい。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本列島の日常史 (後編)	海老澤 衷	後期	2	火 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

政治史や経済史に収斂されない日常的に営まれる歴史の書として、ここでは網野善彦氏の著作を取り上げたい。1970年代から2000年代初頭にかけて、日本の歴史学界に多大な影響を及ぼした氏の業績は、網野史学と呼ばれ、『網野善彦著作集』19巻にまとめられている。このなかで、歴史研究者のみならず、一般の読者にも広く読まれた『無縁・公界・楽/日本中世における自由と平和』(1978年、平凡社)を取り上げたい。豊富な史料が載せられており、厳密な史料読解を行いながら、網野史学の特質を探っていく。この書には歴史研究者から多くの批判が寄せられ、それに網野氏が反論して熱い論争が交わされた。その過程を学ぶこと

ができるのも本書を取り上げた理由である。講読のテキストとしては、平凡社ライブラリーの『[増補]無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』を用いる。

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション〈本授業の進め方について〉
- 第2回：「エンガチョ」・「江戸時代の縁切寺」について
- 第3回：「若狭の駆け込み寺 万徳寺の寺法」について
- 第4回：「周防の「無縁所」」について
- 第5回：「京の「無縁所」」について
- 第6回：「無縁所と氏寺」について
- 第7回：「公界所と公界者」について
- 第8回：「自治都市」について
- 第9回：「一揆と惣」について
- 第10回：「十楽の津と楽市楽座」について
- 第11回：「無縁・公界・楽」について
- 第12回：「山林」について
- 第13回：「市と宿」について
- 第14回：「墓所と禅律僧・時衆」について
- 第15回：まとめ

■ 教科書

平凡社ライブラリー150『[増補]無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』(平凡社、1996年)

■ 参考文献

『網野善彦著作集』全19巻(岩波書店)

■ 評価方法

出席状況、課題・提出物等による。

■ 備考

網野氏を批判した論考についても十分検討を加えたい。

■ 関連URL

<http://www.f.waseda.jp/ebisawa/ebisawa/index.html> (海老澤衷研究室)

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html> (東京大学史料編纂所)

<http://www.rekihaku.ac.jp/> (国立歴史民俗博物館)

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
信仰と思想（前編）	永富 青地	前期	2	月 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

中国明代、そして日本の江戸時代において大きな影響力を有していた陽明学は、決して宗教ではない。しかしながら、陽明およびその弟子たちが共有していた「良知」への強烈な確信は、確かに信仰と呼ぶにふさわしいものであろう。また、それは中国思想のバックボーンである性善説の、一つの頂点なのである。

本演習では、陽明の語録として中国及び江戸期日本において広く読まれた伝習録を読むことにより、陽明学の精髓を探っていききたい。

■ 授業計画

- 第1回：徐愛との出会い
- 第2回：朱子学との決別
- 第3回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 1
- 第4回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 2
- 第5回：上巻における徐愛以外の弟子との対話 3
- 第6回：強敵との対決 中巻
- 第7回：抜本塞源論 1
- 第8回：抜本塞源論 2
- 第9回：抜本塞源論 3
- 第10回：良知とは何か 下巻
- 第11回：良知とは何か 2
- 第12回：良知とは何か 3
- 第13回：無善無悪説の衝撃 1
- 第14回：無善無悪説の衝撃 2
- 第15回：無善無悪説の衝撃 3

■ 教科書

和刻本伝習録のコピーを配布する

■ 参考文献

教場で指示する

■ 評価方法

授業中の応答を中心とするため、予習は欠かせない

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
信仰と思想（後編）	森 由利亜	後期	2	金 7 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

○授業概要

この授業では、現在世界の道教学を牽引する最も重要な学者の一人であるJohn Lagerwayによって著され、すでに研究上の古典としての地位を獲得している著作、Taoist Ritual in Chinese Society and History (Macmillan Publishing Company, New York; Collier Macmillan Publishers, London, 1987)を通読します。毎回一章をあつかい、そこで扱われている内容の大綱を把握し、最終的には本書を通覧し、その全体的な構想や主題についての考察を行います。

各授業ではテキスト自体を読むことはあまりありません。むしろ、予習してきていただいた内容をまとめてゆくことが教場での主たる作業内容になるでしょう。章ごとに担当者を割り当ててゆく予定です。授業を効率化するために簡単なレジュメを用意してもらいます。

○到達目標

ラガウェイの道教学の基本的な観点を習得するとともに、より一般的には道教に関する知識を英語でどのように表現するかを学ぶ機会となるはずです。また、学術的な英語を速読する練習にもなります。

■ 授業計画

第1回：Introduction: What is Taoism

第2回：Ch.1

第3回：Ch.2

第4回：Ch.3

第5回：Ch.4

第6回：Ch.5

第7回：Ch.6

第8回：Ch.7

第9回：Ch.8

第10回：Ch.9

第11回：Ch.10

第12回：Ch.11

第13回：Ch.12

第14回：Ch.13

第15回：Ch.14-Conclusion

■ 教科書

Lagerway, John. Taoist Ritual in Chinese Society and History, Macmillan Publishing Company, New York; Collier Macmillan Publishers, London, 1987.

現在では入手困難な書であるため、必要な部分をコピーして配布します。

■ 参考文献

特になし。

■ 評価方法

出席と平常点を勘案します。平常点としては、毎回予習を行って臨んでいるかどうか、正確な読解ができているかどうか特に注目されます。

■ 備考

特になし。

■ 関連URL

特になし。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
民族と人類（前編）	岡内 三眞	前期	2	金 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

『天工開物』を読み、実験を試み技術の歴史を確かめて、現代技術との比較を試みる。

宋 應星『天工開物』は、中国明代の1637年に刊行された技術書である。藪内 清の訳注をテキストにして、万物の生産と加工技術を明らかにし、現代技術との関連を探る。

このため考古学資料、民族資料、文献資料などを参考にし、生産、加工について実験を試み、受講者自身が工夫しながら当時の技術を復原する。

『天工開物』のさまざまな技術の中から一つを選んで読解する。その技術をあとづけ現代にいかに関係するかをたどり、現代社会との関係を明らかにすることを到達目標とする。

■ 授業計画

第1回：テキスト『天工開物』の紹介、授業計画の説明

第2回：テキストの読解と実験準備

第3回：テキストの読解と実験の予測

第4回：考古資料、民族資料、文献史料の読解と実験

第5回：各種資料、テキストの読解と実験

第6回：各種資料、テキストの読解と実験

第7回：各種資料、テキストの読解と実験

第8回：各種資料、テキストの読解と実験

第9回：各種資料、テキストの読解と実験

第10回：各種資料、テキストの読解と実験

第11回：各種資料、テキストの読解と実験

第12回：各種資料、テキストの読解と実験

第13回：読解、実験結果など研究成果の取りまとめ

第14回：研究成果のパワーポイントによる発表

第15回：研究成果の報告書作成

■ 教科書

宋 應星撰、藪内 清訳注1969『天工開物』東洋文庫130 平凡社

■ 評価方法

出欠席40%、実験経過30%、研究発表10%、研究報告書20%

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
民族と人類（後編）	李 成市	後期	2	火 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

今西龍(1875－1932)は、京都帝国大学教授・京城帝国大学教授として、朝鮮前近代史の研究に多くの業績を残している。著者に『新羅史研究』『百濟史研究』『朝鮮古史の研究』『朝鮮史の栞』『高麗及李朝史研究』などがあるが、それらはすべて没後に刊行された。『高麗及李朝史研究』(1974年)を除いて、1934年から1937年までに近沢書店(京城)から刊行され、その後、1970年に国書刊行会から復刻版が刊行されている。

とりわけ朝鮮古代史研究の開拓者として、文献学、考古学(現地調査)を駆使した研究は、今も古典として

の輝きを失わない。入手は困難であるが、まずは『新羅史研究』所載の論文から、特色ある研究を選んで読んでゆきたい。

これまで植民地統治下でなされた今西の研究については、韓国や北朝鮮の学界では批判的な見解も少なくなかったが、近年、韓国において『新羅史研究』が翻訳刊行されたように、その学問的価値は今でも失われることはない。

当時の研究状況と全く異なるのは、考古学的な成果と、木簡や石碑など出土文字資料の発見であるが、そうした変化にもかかわらず学問的な価値を失わないのは、その研究方法に認めることができる。歴史研究がなされた時代状況という文脈を意識しながら、真の意味での史学史的な位置づけができるような読み込みを心がけたい。

■ 授業計画

- 第1回：解題と文献の選定
- 第2回：文献の講読1
- 第3回：文献の講読2
- 第4回：文献の講読3
- 第5回：文献の講読4
- 第6回：文献の講読5
- 第7回：文献の講読6
- 第8回：文献の講読7
- 第9回：文献の講読8
- 第10回：文献の講読9
- 第11回：文献の講読10
- 第12回：文献の講読11
- 第13回：文献の講読12
- 第14回：史学史から見た今西龍の検討
- 第15回：講義の総括

■ 評価方法

授業の参加度

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
EU機構と政策過程研究	福田 耕治	前期	2	火 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現代行政の活動は、もはや「国民国家」の枠内にとどまらない。現代国家の行政活動が、なぜ、さまざまな領域で国際化、グローバル化を余儀なくされ、国際機構行政を発達させ、NGOや企業、個人との協力関係をも強化していかざるを得なくなったのか、国際行政と国内行政の制度的諸関係はどのように発展してきたのか、規制行政の国際化や国際的調整をめぐる諸問題の論点は何か、について考える。

2010年度は、EU機構と政策過程研究を中心とし、欧州ガバナンスの機能と構造を取りあげる。リスボン条約は、今後のEU統合の方向性、行方を考える上で重要な機構的枠組み、政策過程などを規定するEUの新

たな基本条約であるといつてよい。本演習では、リスボン条約を単に概観するだけではなく、EU主要機関の特質や機構改革の方向性、その意味あるいは、EUにおける多様なガバナンス方式の比較を通じて、リスボン条約の意義と問題点を理論的かつ実証的に検討を行い、欧州統合の全体像を俯瞰し、EUを体系的に捉えられるよう政治経済学や国際関係論の理論にも配慮するとともに、それぞれの学問分野における専門的研究へと誘えるよう、研究の方法論をも含めた丁寧な指導を行う。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンスー国際行政とは何か。
- 第2回：EUの国際行政と加盟国行政の関係、第1次資料、EU公式資料
- 第3回：欧州ガバナンスの構造とEU諸機関
- 第4回：EU法秩序・リスボン条約の構造と機能
- 第5回：欧州理事会とEU閣僚理事会
- 第6回：欧州議会の機能と構造
- 第7回：欧州議会と国際政党、直接選挙の現状分析
- 第8回：欧州委員会の機能と構造ーリスボン条約による改革
- 第9回：欧州委員会事務局の構造と国際公務員人事行政
- 第10回：EU政策過程の構造と利益集団、NGOの機能
- 第11回：EU政策形成・決定過程と加盟国統治機構の関係・共同体方式ガバナンス
- 第12回：EU政策実施過程と加盟国行政機関
- 第13回：EUの政策評価制度とNPM改革
- 第14回：EU財政構造と財務行政管理
- 第15回：EU・欧州ガバナンスの課題

■ 教科書

福田耕治『国際行政学——国際公益と国際公共政策』有斐閣、2003年。
 福田耕治編著『EU・欧州統合研究』成文堂、2009年。

■ 参考文献

EUに関する最新の英語研究論文を中心に取り上げ、検討、議論する。
 福田耕治編『EUとグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年。

■ 評価方法

授業の際の報告、議論、質疑応答、レポートによる。

■ 関連URL

<http://jpn.cec.eu.int> <http://europa.eu.int/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
EU国際公共政策の研究	福田 耕治	後期	2	火 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

現代世界には、解決を必要としているさまざまな問題がある。しかし、国家レベルの公共政策だけでは問題解決が困難か、非効率である場合が少なくない。そこで本講義では、グローバル化に伴う地球環境の破

壊、途上国の開発に伴う貧困層の拡大、人権の抑圧、あるいは国境を越える組織犯罪や感染症の拡大など、地球規模の諸問題を解決するための国際公共政策、あるいは各国の公共政策や規制を調整し、整合化させるための国際的規範、措置のモデルとして、EUの国際公共政策(環境、開発、人権、人道、社会保障、公共空間、共通外交・安全保障政策など)を事例として取り上げる。文理融合・学際的な視点から考察し、それぞれの政策領域の特色や他の公共政策との関係、今後の課題等についてエビデンスに基づいて議論する。

■ 授業計画

第1回：EU環境エネルギー政策

第2回：EU科学技術政策、イノベーション政策

第3回：EU共通農業政策

第4回：EU人の自由移動政策

第5回：EU財政・金融政策

第6回：EU地域開発・空間政策

第7回：EU社会政策・社会保障政策

第8回：EU保健・医療政策、

第9回：EU雇用・労働政策

第10回：EU教育・文化・言語政策

第11回：EU移民・難民政策

第12回：EU通商政策、中小企業政策

第13回：EU開発途上国政策

第14回：EU外交・安全保障・防衛政策

第15回：EU人権・人道政策

をもふまえ、EU国際公共政策と加盟国の国内公共政策との間の関係、

について討論を通じて理解を深める

■ 教科書

福田耕治編『EU・欧州統合研究』成文堂、2009年および

International Review of Administrative Sciences, Journal of Common Market Studies, International Organization, Journal of Public Policy, など、主として最新の学術誌所収の論文を選んで教材とする。

■ 参考文献

福田耕治編『EUとグローバル・ガバナンス』早稲田大学出版部、2009年

福田耕治他『EU/国境を越える医療専門職と患者の自由移動』文眞堂、2009年

■ 評価方法

授業時の報告と討議、レポートを踏まえて総合的に評価する

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
欧州統合理論の研究	中村 英俊	前期	2	火3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

いくつかの国際地域において、国民国家を超える(＝狭義の統合)現象ないしは国境を横断する(＝広義の統合)現象が観察できる。世界において、部分的ではあるが「戦争の不在」という現象を観察することもできる。

本講義では、ヨーロッパ地域における政治統合体としてのEUの事例を中心に、様々な地域統合現象の理論的考察・分析を試みたい。次のようなテーマを取り上げる予定。

1. 世界における「地域」(regions)——地域統合論と地域研究の異同性
2. 地域統合の理論と概念
 - (1) E・ハースの新機能主義
 - (2) K・ドイッチュの交流主義
 - (3) 比較地域統合論——J・ナイの『部分的平和』
3. ヨーロッパ統合の歴史と現状
 - (1) EUと超国家的制度
 - (2) 安全保障共同体としてのEU
 - (3) 民生パワーとしてのEU
4. 国際統合と国民統合——EUとUSAの「連邦制」
5. 地域機構と「戦争の不在」——APEC, ARF, ASEAN+3, SAARC, NAFTA, OAS, GCC, AU, EAC, etc.

■ 授業計画

- 第1回：オリエンテーション
第2回：地域統合論・欧州統合理論の概説
第3回：K・ドイッチュの交流主義アプローチ
第4回：E・ハースの新機能主義アプローチ
第5回：P・シュミッターの新機能主義と「スピル・オーバー」仮説
第6回：S・ホフマンによる統合論批判
第7回：J・ナイの比較地域統合論：1970年代
第8回：W・ウォーレスの「主権の共有」論
第9回：A・モラブチックの制度主義
第10回：W・マトリイの比較地域統合論：1990年代
第11回：E・アドラーとM・バーネットの「安全保障共同体」論
第12回：非ヨーロッパ地域への「安全保障共同体」概念の適用
第13回：「民生パワー」としてのEU
第14回：国際政治の中のEU
第15回：総括

上記テーマについて、リーディング・リストに基づく重要文献を読む。そして、ゼミ形式の講義では、ヨーロッパ統合の理論・現実について議論し、さらに比較研究の観点から、「アジア地域統合」の可能性と限界(あるいは「東アジア共同体」創設の条件)などについての議論も重ねたい。

■ 参考文献

- ・ 鴨田彦 (1985)『国際統合理論の研究』(早稲田大学出版部)
- ・ Adler, Emanuel, and Barnett, Michael (eds.) (1998) *Security Communities* (Cambridge: Cambridge University Press).
- ・ Deutsch, Karl W., et al. (1957) *Political Community and the North Atlantic Area: International*

Organization in the light of historical experience (Princeton University Press, 1957; reprinted, Westport, CT: Greenwood Press, 1969).

- Fawcett, Louise, and Hurrell, Andrew (eds.) (1995) Regionalism in World Politics (Oxford University Press) [菅英輝・栗栖薫子監訳『地域主義と国際秩序』九州大学出版会、1999年]
- Haas, Ernst B. (1958/1968) The Uniting of Europe: Political, Social, and Economic Forces, 1950–1957 (Stanford University Press, Stanford, 1958; reissued with a new Preface, 1968).
- Mattli, Walter (1999) The Logic of Regional Integration: Europe and Beyond (Cambridge University Press).
- Nye, Joseph S. (1971/1987) Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization (Boston: Little, Brown and Company, 1971; reissued with a new Preface by University Press of America, 1987).

■ 評価方法

授業での報告(レジュメの作成を含む)、議論(ディスカッション)への貢献度、レポートを総合的に評価する。

■ 備 考

地域統合論(ジャーナリズムコース)との合併授業。

欧州統合理論の研究(オープン教育センター設置「大学院EU・欧州統合研究テーマカレッジ」科目)との合併授業。

授業運営に際しては、Course N@viの機能を適宜利用する。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
Contemporary Issues in European Integration	中村 英俊	夏季	2	無その他

■ 授業概要・授業の到達目標

This course will provide an opportunity for Waseda graduate students to take an intensive course on European integration studies which is usually provided at a European university, such as the University of Oxford, the Free University of Berlin, and so on. EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ-Waseda) will invite one scholar from a European university for the summer intensive course.

In 2009, Dr Katrin Auel, DAAD Lecturer and Fellow in Politics, Department of Politics and International Relations, the University of Oxford, will come to Waseda for one week: the week commencing 24th August. Dr Auel will provide us with four substantial days of teaching, according to the following four major subjects:

- (1) Theories of Integration;
- (2) EU institutions and decision-making;
- (3) Enlargement; and
- (4) Representation.

On each day, she will give a lecture, followed by a discussion session in a seminar format. She will send us the reading lists and the questions/titles for assignments in late April. Students are required to prepare intensively for the summer course and to write at least four essays. This requirement will enable you to

understand the four lectures given by Dr Auel, and to participate actively in the discussion of the four subjects with your own prepared essays.

Professor Nakamura will co-ordinate the course as a whole, and will provide two preparatory classes. In 2009, these will be carried out on 25th April and 1st July. He will utilize the Course N@vi education system, to enable any student to keep abreast of the development of this course. The official language for this course is English, but any student can communicate with Professor Nakamura in Japanese on the fringe of this course.

■ 授業計画

[0] 25th April: preparatory class (A) by Prof. Hidetoshi Nakamura

[0] 1st July: preparatory class (B)

Summer Intensive Course by Dr. Katrin Auel in the week commencing 24th August

Day 1 (24th or 25th August): Theories of Integration

[1] Lecture (1) by Dr Auel

[2] Discussion (1-1)

[3] Discussion (1-2)

[4] Discussion (1-3)

Day 2 (25th or 26th August): EU institutions and decision-making

[5] Lecture (2) by Dr Auel

[6] Discussion (2-1)

[7] Discussion (2-2)

Day 3 (26th or 27th August): Enlargement

[8] Lecture (3) by Dr Auel

[9] Discussion (3-1)

[10] Discussion (3-2)

[11] Discussion (3-3)

Day 4 (27th or 28th August): Representation

[12] Lecture (4) by Dr Auel

[13] Discussion (4-1)

[14] Discussion (4-2)

[15] Conclusion by Dr Auel and Prof. Nakamura

■ 教科書

The reading lists and the questions/titles for assignments will be provided by Dr Katrin Auel in late April.

■ 評価方法

attendance, four essays, discussion

■ 備 考

You are able to send any prior question to Hidetoshi Nakamura through e-mail either in English or in Japanese.

■ 関連URL

For Dr Katrin Auel's profile, see:

<http://www.politics.ox.ac.uk/about/staff/staff.asp?action=show&person=171&special=>

For EU Institute in Japan at Waseda University (EUIJ-Waseda), see:

<http://www.euij-waseda.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
The Politics and International Relations of the European Union	ベーコン ポール・マルティン	後期	2	木 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

This course offers students a comprehensive guide to twentieth century European political history. It explains the circumstances in which the project of European co-operation began. Students will gain a clear understanding of the main institutions, policies and decision-making processes of the contemporary EU, with a particular focus on EU foreign policy.

The class offers a fair and honest appraisal of the political divisions that exist between influential members of the EU, and a balanced assessment of the strengths and weaknesses of the European approach to international relations.

There will be several concrete case studies of key events in international politics that have helped to shape the contemporary EU, and which have served to reveal the EU's strengths and weaknesses. These case studies include Rwanda, Bosnia/Srebrenica, Kosovo, the Iraq War, and the question of EU enlargement.

■ 授業計画

第1回：Introduction/The Evolution of European Political Institutions

第2回：Origins of WWI

第3回：Origins of WWII

第4回：Theories of European Integration

第5回：The European Commission

第6回：The Council of Ministers/European Council

第7回：The European Parliament

第8回：The EU and Human Rights

第9回：EU Enlargement

第10回：EU Enlargement Case Study: Turkey

第11回：The EU and Rwanda

- 第12回 : The EU and Bosnia/Srebrenica
 第13回 : The EU, NATO and Kosovo
 第14回 : The EU, the US and the Iraq War
 第15回 : Overview/Conclusions

■ 教科書

Michelle Cini, European Union Politics, (Second edition), Oxford University Press, 2007.

■ 参考文献

A comprehensive list of readings will be provided in the first class.

■ 評価方法

Class presentations, class comprehension exercises, two essays, class participation.

■ 備考

This class is taught entirely in English.

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
The Political System of the EU	舒 旻	後期	2	水 2 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

Has the European Union (EU) turned into a regional government without statehood? How to decode the politics of EU policy-making beyond classic integration theories? What are the roles of conventional political actors (such as voters, parties, and interest groups) in a multi-levelled governance structure? This course intends to provide students with the basic analytical tools to answer these important questions about the EU.

In addition to Hix's acclaimed textbook - 'The Political System of the European Union' (2005, 2nd edition, Palgrave), we are going to read several key articles in comparative politics literature of the EU.

The course is divided into three parts: (i) decoding the institutional structure of the EU, (ii) tracing the actors in EU politics, and (iii) linking structure and agency in EU policy-making. Following a seminar format, each student is required to conduct in-class presentation based on pre-assigned reading materials.

■ 授業計画

- 第1回 : Guidance and Introduction
 第2回 : The EU's Institutional Context
 第3回 : Executive Politics in the EU
 第4回 : Legislative Politics in the EU
 第5回 : Judicial Politics in the EU
 第6回 : Actor I: The Member States
 第7回 : Actor II: The Public
 第8回 : Actor III: Domestic and European Political Parties
 第9回 : Actor IV: Interest Groups and Think Tanks
 第10回 : Case I: The Treaty-Making Process
 第11回 : Case II: The Politics of EU Budget

- 第12回 : Case III: The Economic and Monetary Union
 第13回 : Case IV: The Political Economy of EU's External Relations
 第14回 : Case V: Referendums and European Integration
 第15回 : Summary and Evaluation

■ 教科書

Hix, Simon (2005) The Political System of the European Union, 2nd edition, London: Palgrave.
 Marks, Gary and Steenbergen, Marco R. (2004) European Integration and Political Conflict, Cambridge: Cambridge University Press.

■ 参考文献

Gabel, Matthew (1998) Interests and Integration: Market Liberalization, Public Opinion, and European Union, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Hix, Simon; Noury, Abdul and Roland, Gerard (2007) Domestic Politics in the European Parliament, Cambridge: Cambridge University Press.

Hug, Simon (2002) Voices of Europe: Citizens, Referendums, and European Integration, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Moser, Peter; Schneider, Gerald and Kirchgassner, Gebhard (eds.) (2000) Decision Rules in the European Union: A Rational Choice Perspective, New York : St. Martin's Press.

Thomson, Robert; Stokman, Frans N.; Achen, Christopher and Konig, Thomas (eds.) (2006) The European Union Decides, Cambridge: Cambridge University Press.

Van der Eijk, Cees and Franklin, Mark (1996) Choosing Europe? European Electorate and National Politics in the Face of Union, Ann Arbor: University of Michigan Press.

■ 評価方法

Attendance(20%)、Class Presentation(35%)、Term Essay(45%)

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇特論（入門）	秋葉 裕一	前期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

欧米の演劇の影響下に成立した日本の近現代演劇の運動には、日本および日本人の在り様に対する根本的な懐疑、批判が存在する。ベルトルト・ブレヒトの日本における受容もその一例と言えるだろう。この演習では、ブレヒトの生涯と戯曲作品に触れたのち、日本における具体的な受容を井上ひさしの例に跡づけて見る。

ブレヒトの問題意識は現代にも及び、その関心は幅広い。演劇や文学の研究者以外の受講者も歓迎す

る。映像情報を活用することが頻繁にある。授業時間をオーバーすることが少なくない。この点の了解を願う。

当学科目担当者は演劇博物館を拠点とする21世紀COE事業において、また後継のグローバルCOE事業において、「ベルトルト・ブレヒト研究とその日本における受容」を課題として研究を重ねてきた。問題意識と研究成果を演習の中で積極的に紹介したい。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス。ベルトルト・ブレヒトの生涯と作品について。
第2回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』前半を読み、映像資料を見る。
第3回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』後半を読み、映像資料を見る。
第4回：戯曲『コーカサスの白墨の輪』の考察と分析。
第5回：戯曲『肝っ玉おっ母とその子供たち』前半を読み、映像資料を見る。
第6回：戯曲『肝っ玉おっ母とその子供たち』後半を読み、映像資料を見る。
第7回：戯曲『肝っ玉おっ母とその子供たち』の考察と分析。
第8回：詩集『家庭用説教集』を読む。
第9回：詩集『家庭用説教集』の考察と分析。
第10回：井上ひさしの生い立ちと作品について。
第11回：戯曲『藪原検校』を読む。
第12回：戯曲『藪原検校』の映像資料を見る。
第13回：戯曲『藪原検校』の考察と分析。
第14回：予告された課題について、教場でレポートを作成する。
第15回：レポートについての評価と、評価基準の解説。

■ 教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

■ 評価方法

出席、授業への参加、レポートをもとに評価を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇特論（発展）	秋葉 裕一	後期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

欧米の演劇の影響下に成立した日本の近現代演劇の運動には、日本および日本人を異化して眺める立場なり、見方が存在する。ブレヒトと日本におけるブレヒト受容もその一例と言えるだろう。前期の「現代演劇特論」（入門）では、ベルトルト・ブレヒトの生涯と作品、そして井上ひさしを例に日本におけるブレヒト受容を扱った。後期は、違った角度から、ブレヒトの作品を眺め、また井上ひさしの受容例を考察する。

ブレヒトは1898年に生れ、1956年に亡くなった。20世紀のいわば前半を生きた演劇人である。しかし、作品の持つメッセージは現代の21世紀をも射程に入れている。その現代性と多様性を探りたい。演劇や文学の研究者以外の受講も歓迎する。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス。ベルトルト・ブレヒトの生涯と作品について。
 第2回：『暦物語』中の小説『実験』『傷ついたソクラテス』を読む。
 第3回：『暦物語』中の小説『異端者の外套』『年寄りらしくない婆さん』を読む。
 第4回：『暦物語』中の詩を読む。
 第5回：『暦物語』中の詩を読む。
 第6回：戯曲『ガリレイの生涯』を読み、映像資料を見る。
 第7回：戯曲『ガリレイの生涯』を読み、映像資料を見る。
 第8回：戯曲『ガリレイの生涯』の考察と分析。
 第9回：井上ひさしの生い立ちと作品について。
 第10回：戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』前半を読み、映像資料を見る。
 第11回：戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』後半を読み、映像資料を見る。
 第12回：戯曲『さらめく星座』前半を読み、映像資料を見る。
 第13回：戯曲『さらめく星座』後半を読み、映像資料を見る。
 第14回：予告された課題について、教場でレポートを作成する。
 第15回：レポートについての評価と、評価基準の解説。

■ 教科書

必要なテキストは授業担当者の側で準備する。

■ 評価方法

出席、授業への参加、レポートをもとに評価を行う。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇と多文化主義（入門）	澤田 敬司	前期	2	金 1 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本年度は、オーストラリア・ニュージーランド・カナダの多文化社会を構成する(1)「先住民」(2)「移民・難民」の自己表象、および他者表象を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化、ハイブリディティについて分析を行う。テキストには演劇と映画を均等に取り上げ、両者メディアの政治的文脈の違いについても議論を喚起したい。

■ 授業計画

- 第1回：ガイダンス
 第2回：ポストコロニアル理論の検討
 第3回：ポストコロニアル理論の検討
 第4回：ポストコロニアル理論の検討
 第5回：発表
 第6回：作品の鑑賞と分析
 第7回：作品の鑑賞と分析
 第8回：作品の鑑賞と分析

第9回：発表
 第10回：作品の鑑賞と分析
 第11回：作品の鑑賞と分析
 第12回：作品の鑑賞と分析
 第13回：作品の鑑賞と分析
 第14回：発表
 第15回：まとめ
 ※日程は変更する可能性がある

■ 教科書

教場で指示する。

■ 参考文献

『演劇学のキーワードズ』（ペリカン社） 佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』（早稲田大学出版部）

■ 評価方法

また、受講生の関心領域の作品も取り上げ、上記の議論との接点について考えながら、発表・討議を行う。

授業への参加、レポートを総合的に判断する。

■ 関連URL

<http://homepage2.nifty.com/wombat/>

※ 講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
現代演劇と多文化主義（発展）	澤田 敬司	後期	2	金 1 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

本年度は、オーストラリア・ニュージーランド・カナダの多文化社会を構成する(1)「先住民」(2)「移民・難民」の自己表象、および他者表象を取り上げ、それに込められた政治性や伝統・文化、ハイブリディティについて分析を行う。テキストには演劇と映画を均等に取り上げ、両者メディアの政治的文脈の違いについても議論を喚起したい。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス
 第2回：ポストコロニアル理論の検討
 第3回：ポストコロニアル理論の検討
 第4回：ポストコロニアル理論の検討
 第5回：発表
 第6回：作品の鑑賞と分析
 第7回：作品の鑑賞と分析
 第8回：作品の鑑賞と分析
 第9回：発表
 第10回：作品の鑑賞と分析

第11回：作品の鑑賞と分析

第12回：作品の鑑賞と分析

第13回：作品の鑑賞と分析

第14回：発表

第15回：まとめ

※日程は変更する可能性がある

■ 参考文献

『演劇学のキーワード』（ペリカン社） 佐和田敬司『現代演劇と文化の混淆』（早稲田大学出版部）

■ 評価方法

授業への参加、レポートを総合的に評価する。

■ 関連URL

<http://homepage2.nifty.com/wombat/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科 目 名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本の伝統演劇論（入門）	三宅 晶子	前期	2	月 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前年度に引き続き世阿弥自筆能本を取り上げる。

世阿弥は9本の自筆能本を残しており、その他に、臨模本1本、同時代の別筆本1本、計11本の能本が、室町前期のものとして現存している。世阿弥自筆能本の次に古い謡本は室町後期まで下るから、謡の資料としても格段に古い。これらは後の時代の単なる謡本ではなく、演出まで記した能本の形を持っている。もちろん、国語学的にも大変貴重な資料であると同時に、世阿弥当時の能がどのように演じられていたかを知ることの出来る、第一級資料である。

世阿弥自筆能本を底本として、現存する主な謡本との校合、詞章の解説、出典調べ、演出資料の調査など、能の作品研究に欠かせない調査・研究法の基礎をマスターすることを目的とする。

能にのみ用いる狭い研究方法ではなく、広く伝統演劇すべてに適用可能な、オーソドックスな方法論である。

担当曲を決めて、発表形式とする。

参加人数によっては、各人一曲、あるいは複数の者で一曲となる。

■ 授業計画

第1回：『世阿弥自筆能本』概説・能の作品研究の方法概説

第2回：担当曲決定、謡本の調査方法概説

第3回：担当曲1 諸本校合・校訂本文作成

第4回：担当曲1 注釈

第5回：担当曲2 諸本校合・校訂本文作成

第7回：担当曲2 注釈

第8回：担当曲3 諸本校合・校訂本文作成

- 第9回：担当曲3 注釈
 第10回：担当曲4 諸本校合・校訂本文作成
 第11回：担当曲4 注釈
 第12回：担当曲5 諸本校合・校訂本文作成
 第13回：担当曲5 注釈
 第14回：全体の見直し
 第15回：まとめ

■ 教科書

『世阿弥自筆能本集』(1997年、岩波書店刊)を使用するが、授業時に配布するコピーを代用することも可能。

■ 参考文献

岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』
 岩波日本古典文学大系『謡曲集上』

■ 評価方法

平常点・発表・レポートそれぞれ3分の1。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本の伝統演劇論（発展）	三宅 晶子	後期	2	月 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

前期「日本の伝統演劇論（入門）」に続き、金春禅鳳自筆能本・謡本を取り上げる。

世阿弥自筆能本について書写年代が古い金春禅鳳自筆能本（富士山）と、謡本の中から、担当者が適当な能作品を選び、諸本校合、典拠、詞章、演出などについての調査・報告、参加者による討議を行う。

■ 授業計画

- 第1回：担当曲1 作品研究上 作詞作曲面など
 第2回：担当曲1 作品研究下 演出面など
 第3回：担当曲2 作品研究上
 第4回：担当曲2 作品研究下
 第5回：担当曲3 作品研究上
 第6回：担当曲3 作品研究下
 第7回：担当曲4 作品研究上
 第8回：担当曲4 作品研究下
 第9回：担当曲5 作品研究上
 第10回：担当曲5 作品研究下
 第11回：世阿弥自筆能本の特徴
 第12回：金春禅鳳自筆能本の特徴
 第13回：金春禅鳳自筆謡本の特徴
 第14回：世阿弥と禅鳳の作品と能本・謡本
 第15回：まとめ

■ 教科書

『世阿弥自筆能本集』(1997年、岩波書店刊)を使用するが、授業時に配布するコピーを代用することも可能。

■ 参考文献

岩波日本思想大系『世阿弥禅竹』

岩波日本古典文学大系『謡曲集上・下』

■ 評価方法

平常点・発表・レポートそれぞれ3分の1。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本映画と演劇（入門）	藤井 仁子	前期	2	木3時限

■ 授業概要・授業の到達目標

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い(または出会い損ない)に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともありえます。

後期の「日本映画と演劇(発展)」と続けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：参考上映、解説、討議

第3回：文献輪読と討議(1)

David Bordwell, *Figures Traced in Light: On Cinematic Staging* (Berkeley: University of California Press, 2005). (予定)

第4回：文献輪読と討議(2)

第5回：文献輪読と討議(3)

第6回：文献輪読と討議(4)

第7回：文献輪読と討議(5)

第8回：文献輪読と討議(6)

第9回：文献輪読と討議(7)

第10回：文献輪読と討議(8)

第11回：文献輪読と討議(9)

第12回：文献輪読と討議(10)

第13回：文献輪読と討議(11)

第14回：文献輪読と討議(12)

第15回：全体のまとめ、討議

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』(集英社新書、756円)。

■ 評価方法

出席を重視し(30%)、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点すること考えています。

■ 備考

英文の読解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に関心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

＜オープン教育センター提供科目＞

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
日本映画と演劇（発展）	藤井 仁子	後期	2	木 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

演劇・舞台の伝統との関連で日本映画を論じた、英語または日本語の文献を輪読します。たんに両者の影響関係を扱うのではなく、異質な表象形式との出会い(または出会い損ない)に注目することで、「映画とは何か」という問いをさらに突き詰めて考えてみましょう。さしあたり映画学の専門的な論文を読みこなす能力の獲得を目指しますが、英語圏での日本映画研究の成果に接することで、自文化を他者の視点から再考する契機にもしてください。

具体的には、語り物の伝統を継承した無声映画期の弁士、溝口健二作品に登場する歌舞伎や新劇といったテーマを取り上げる予定ですが、詳しくは受講生と相談のうえ決定します。日本映画の場合と比較するために、必要に応じて外国映画にかんする文献を読むこともあります。

前期の「日本映画と演劇(入門)」から続けて履修することで、いっそうの学習効果が期待されます。

■ 授業計画

第1回：ガイダンス、資料配布、発表順の決定など

第2回：参考上映、解説、討議

第3回：文献輪読と討議(1)

Aaron Gerow, Kitano Takeshi (London: BFI, 2007). (予定)

第4回：文献輪読と討議(2)

第5回：文献輪読と討議(3)

第6回：文献輪読と討議(4)

第7回：文献輪読と討議(5)

第8回：文献輪読と討議(6)

- 第9回：文献輪読と討議(7)
 第10回：文献輪読と討議(8)
 第11回：文献輪読と討議(9)
 第12回：文献輪読と討議(10)
 第13回：文献輪読と討議(11)
 第14回：文献輪読と討議(12)
 第15回：文献輪読と討議(13)；全体のまとめ

■ 教科書

プリントを配布します。

ただし、受講生の希望によっては開講後に特定の書籍をテキストとして購入してもらうかもしれません。

■ 参考文献

適宜紹介しますが、以下はできるだけ早く各自で読んでおくべきでしょう。四方田犬彦『日本映画史100年』(集英社新書、756円)。

■ 評価方法

出席を重視し(30%)、訳読の出来に議論での発言を加味して総合的に評価します。授業期間中に関連作品の上映が行なわれる場合など、適宜レポートの提出を求め、出来に応じて加点すること考えています。

■ 備考

英文の読解力はもちろん高いに越したことはないものの、語学の授業ではないので、映画学に関心を持ち、かつそのための努力を惜しまぬすべての学生に開かれた授業とします。

前期の「日本映画と演劇(入門)」から続けて受講することが望ましいので、映画学の予備知識がまったくない場合、後期のみの受講は避けたほうが賢明です。

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
人形浄瑠璃文楽の作品世界（入門）	神津 武男	前期	2	火 4 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

「人形浄瑠璃文楽」の作品世界について講じます。具体的には国立劇場(東京)5月の人形浄瑠璃文楽公演で上演される作品および関連作品を取り上げます(演目未詳)。

浄瑠璃本は、人形劇の台本として近世日本の都市住民の娯楽であっただけでなく、近代ではアジアの植民地や南米の移民社会など、ひろく日本人社会で享受された、巨大な、おそらく唯一の江戸文学でした。人文学諸領域において検討されるべき課題と考えます。

なお講義では、近世期の原本(初板初摺本)の複写物を使用して、板本の変体仮名が判読可能となるように進めていきます。

■ 授業計画

第1回：人形浄瑠璃文楽概説(通史)

第2回：人形浄瑠璃文楽概説(研究史)

第3回：人形浄瑠璃文楽概説(研究の基本文献)

第4回：人形浄瑠璃文楽概説（古文献資料）

第5回：作品精読

第6回：作品精読

第7回：作品精読

第8回：作品精読

第9回：作品精読

第10回：作品精読

第11回：作品精読

第12回：作品精読

第13回：作品精読

第14回：前期のまとめ その一

第15回：前期のまとめ その二

■ 教科書

プリントして適宜配布。

■ 参考文献

神津武男「浄瑠璃本史研究」（八木書店、2009年）

■ 評価方法

第1に「レポート」で評価します。レポートの課題は、5月に東京・国立劇場小劇場で行われる人形浄瑠璃文楽公演（学生負担：4,000円程度を予定）を観ての自由論述とします。第2に平常点（参加意欲など）を基準とします。

■ 備考

国立劇場（東京）での文楽公演は、5月、9月、12月、2月（大学暦順）です。講義では直近に上演の作品を具体例として取り上げますので、受講生の皆さんは出来るだけ、文楽公演を観覧してください。

■ 関連URL

国立劇場（日本芸術文化振興会）HP <http://www.ntj.jac.go.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

（<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>）で、最新情報を確認してください。

<オープン教育センター提供科目>

科目名	教員氏名	学期	単位	曜日／時限
人形浄瑠璃文学の資料学的研究（入門）	神津 武男	前期	2	金 3 時限

■ 授業概要・授業の到達目標

「人形浄瑠璃文楽」を研究する際の、基本文献や資料の扱い方につき講じます。

同じく日本の伝統演劇と称えられる「能楽」「歌舞伎」に比して、近代の東京に活動の拠点を持たなかった「人形浄瑠璃」は、近代の学問体系の中でも出遅れていて、歌舞伎研究者の兼業に委ねられることが少なくありません。

一個に独立した研究分野たるにはどのような研究方法が求められるのか。近世期の原資料を駆使して、「人形浄瑠璃文楽」を研究するための方法・手法について、概説します。

基本文献である『義太夫年表 近世篇』の活用方法について習熟するとともに、その利用上の注意点について理解することを目標とします。

■ 授業計画

- 第1回：概論(人形浄瑠璃の歴史1)
- 第2回：概論(人形浄瑠璃の歴史2)
- 第3回：概論(人形浄瑠璃の研究史1)
- 第4回：概論(人形浄瑠璃の研究史2)
- 第5回：各論(基本文献『義太夫年表 近世篇』)
- 第6回：各論(基本文献『義太夫年表 明治篇』)
- 第7回：各論(基本文献『義太夫年表 大正篇』)
- 第8回：各論(基本文献『人形浄瑠璃舞台史』)
- 第9回：各論(原資料「番付」)
- 第10回：各論(原資料「絵尽」)
- 第11回：各論(原資料「浄瑠璃本」1通し本)
- 第12回：各論(原資料「浄瑠璃本」2道行揃)
- 第13回：各論(原資料「浄瑠璃本」3抜き本)
- 第14回：総論(まとめ1)
- 第15回：総論(まとめ2)

■ 教科書

プリントして適宜配布。

■ 参考文献

神津武男「浄瑠璃本史研究」(八木書店、2009年)

■ 評価方法

授業で取り上げる作品について上演史に関するレポートを作成して貰います。

■ 備考

国立劇場(東京)での文楽公演は、5月、9月、12月、2月(大学暦順)です。講義では直近に上演の作品を具体例として取り上げますので、受講生の皆さんは出来るだけ、文楽公演を観覧してください。費用は1部3-6千円です。

■ 関連URL

国立劇場(日本芸術文化振興会)HP <http://www.ntj.jac.go.jp/>

※講義要項の内容は、変更、追加される場合がありますので、シラバスシステム

(<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3011.htm>)で、最新情報を確認してください。

2010年度 大学院人間科学研究科学科目配当表

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導	—	天野 正博	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	人口学研究指導	—	阿藤 誠	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	生物圏生態学研究指導	—	太田 俊二	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導	—	森川 靖	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導	—	鳥越 皓之	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	社会人類学研究指導	—	矢野 敬生	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	水城環境学研究指導	—	井内 美郎	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	地域資源論研究指導	—	柏 雅之	
修士(2年制)	研究指導	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導	—	三浦 慎悟	
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	学習動機づけ論研究指導	—	青柳 肇	
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導	—	根ヶ山 光一	
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導	—	佐野 友紀	
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	建築環境学研究指導	—	小島 隆矢	
修士(2年制)	研究指導	人間行動・環境科学	社会文化心理学研究指導	—	山本 登志哉	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導	—	河西 宏祐	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導	—	蔵持 不三也	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導	—	店田 廣文	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	移住論研究指導	—	森本 豊富	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	家族社会学研究指導	—	池岡 義孝	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	都市社会学研究指導	—	臼井 恒夫	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	科学史・科学論研究指導	—	加藤 茂生	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	物質文化論研究指導	—	谷川 章雄	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	表象文化論研究指導	—	中村 要	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	政治社会文化論研究指導	—	村上 公子	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	技術文化論研究指導	—	余語 琢磨	
修士(2年制)	研究指導	文化・社会環境科学	地域文化論研究指導	—	竹中 宏子	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体発達科学研究指導	—	木村 一郎	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体構造学研究指導	—	小室 輝昌	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	生体機能学研究指導	—	今泉 和彦	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導	—	山内 兄人	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導	—	鈴木 秀次	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	統合生理学研究指導	—	永島 計	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	健康医学研究指導	—	河手 典彦	
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導	—	竹中 晃二	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	研究指導	健康・生命医科学	医療人類学研究指導	—	込内 琢也	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	福祉産業学研究指導	—	可部 明克	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	老年社会福祉学研究指導	—	加瀬 裕子	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	バイオエシックス研究指導	—	土田 友章	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論研究指導	—	吉村 正	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	社会保障政策論研究指導	—	植村 尚史	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	予防医学研究指導	—	町田 和彦	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	幼少児福祉教育論研究指導	—	前橋 明	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	緩和医療学・臨床死学研究指導	—	小野 充一	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	児童家庭福祉論研究指導	—	川名 はつ子	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	精神保健福祉論研究指導	—	田中 英樹	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	健康福祉支援工学研究指導	—	島山 卓朗	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	健康福祉管理論研究指導	—	扇原 淳	
修士(2年制)	研究指導	健康福祉科学	ソーシャルワーク論研究指導	—	岩崎 香	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	心身医学研究指導	—	野村 忍	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	認知行動カウゼンセリング学研究指導	—	根建 金男	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	学校カウゼンセリング学研究指導	—	菅野 純	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導	—	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	産業カウゼンセリング学研究指導	—	鈴木 伸一	
修士(2年制)	研究指導	臨床心理学	臨床心理アセスメント学研究指導	—	熊野 宏昭	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	感性認知科学学研究指導	—	齋藤 美穂	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導	—	石田 敏郎	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	福祉工学研究指導	—	藤本 浩志	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導	—	中島 義明	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	社会的実践認知科学学研究指導	—	宮崎 清孝	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	心理行動学研究指導	—	鈴木 晶夫	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	言語情報科学学研究指導	—	菊池 英明	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	知識情報科学学研究指導	—	松居 辰則	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	人間生体機能動態学研究指導	—	宮崎 正己	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導	—	百瀬 桂子	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	生態心理学研究指導	—	三嶋 博之	
修士(2年制)	研究指導	感性認知情報システム	対話情報処理論研究指導	—	市川 薫	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学研究指導	—	浅田 匡	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論研究指導	—	岩坪 秀一	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学研究指導	—	金子 孝夫	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導	—	金 群	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導	—	向後 千春	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論研究指導	—	スコット ダグラス	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導	—	永岡 慶三	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学研究指導	—	西村 昭治	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導	—	野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学研究指導	—	保崎 則雄	
修士(2年制)	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論研究指導	—	森田 裕介	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習(1)	4	天野 正博	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学演習(2)	4	天野 正博	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	人口学演習(1)	4	阿藤 誠	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	人口学演習(2)	4	阿藤 誠	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習(1)	4	太田 俊二	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	生物圏生態学演習(2)	4	太田 俊二	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習(1)	4	森川 靖	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境生態学演習(2)	4	森川 靖	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境社会学演習(1)	4	鳥越 皓之	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	環境社会学演習(2)	4	鳥越 皓之	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習(1)	4	矢野 敬生	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	社会人類学演習(2)	4	矢野 敬生	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習(1)	4	井内 美郎	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	水域環境学演習(2)	4	井内 美郎	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習(1)	4	柏 雅之	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	地域資源論演習(2)	4	柏 雅之	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習(1)	4	三浦 慎悟	
修士(2年制)	演習科目	地域・地球環境科学	動物行動生態学演習(2)	4	三浦 慎悟	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習(1)	4	青柳 肇	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	学習動機づけ論演習(2)	4	青柳 肇	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習(1)	4	根ヶ山 光一	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	発達行動学演習(2)	4	根ヶ山 光一	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(1)	4	佐野 友紀	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	建築計画学演習(2)	4	佐野 友紀	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(1)	4	小島 隆矢	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	建築環境学演習(2)	4	小島 隆矢	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	社会文化心理学演習(1)	4	山本 登志哉	
修士(2年制)	演習科目	人間行動・環境科学	社会文化心理学演習(2)	4	山本 登志哉	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(1)	4	河西 宏祐	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	産業職業社会学演習(2)	4	河西 宏祐	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(1)	4	蔵持 不三也	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	文化生態学演習(2)	4	蔵持 不三也	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(1)	4	店田 廣文	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	アジア社会論演習(2)	4	店田 廣文	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(1)	4	森本 豊富	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	移住論演習(2)	4	森本 豊富	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(1)	4	池岡 義孝	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	家族社会学演習(2)	4	池岡 義孝	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(1)	4	臼井 恒夫	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	都市社会学演習(2)	4	臼井 恒夫	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(1)	4	加藤 茂生	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学演習(2)	4	加藤 茂生	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(1)	4	谷川 章雄	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	日本物質文化論演習(2)	4	谷川 章雄	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(1)	4	中村 要	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化論演習(2)	4	中村 要	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(1)	4	村上 公子	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	ドイツ政治社会文化論演習(2)	4	村上 公子	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(1)	4	余語 琢磨	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	技術史・技術文化論演習(2)	4	余語 琢磨	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(1)	4	竹中 宏子	
修士(2年制)	演習科目	文化・社会環境科学	スペイン・ラテンアメリカ地域文化論演習(2)	4	竹中 宏子	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体発達科学演習(1)	4	木村 一郎	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体発達科学演習(2)	4	木村 一郎	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体構造学演習(1)	4	小室 輝昌	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体構造学演習(2)	4	小室 輝昌	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体機能学演習(1)	4	今泉 和彦	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	生体機能学演習(2)	4	今泉 和彦	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	神経内分泌学演習(1)	4	山内 兄人	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	神経内分泌学演習(2)	4	山内 兄人	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(1)	4	鈴木 秀次	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス演習(2)	4	鈴木 秀次	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	統合生理学演習(1)	4	永島 計	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	統合生理学演習(2)	4	永島 計	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	健康医学演習(1)	4	河手 典彦	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	健康医学演習(2)	4	河手 典彦	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	応用健康科学演習(1)	4	竹中 晃二	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	応用健康科学演習(2)	4	竹中 晃二	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	医療人類学演習(1)	4	辻内 琢也	
修士(2年制)	演習科目	健康・生命医科学	医療人類学演習(2)	4	辻内 琢也	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	福祉産業学演習(1)	4	可部 明克	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	福祉産業学演習(2)	4	可部 明克	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	老年社会福祉学演習(1)	4	加瀬 裕子	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	老年社会福祉学演習(2)	4	加瀬 裕子	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	バイオエシックス演習(1)	4	土田 友章	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	バイオエシックス演習(2)	4	土田 友章	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(1)	4	吉村 正	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント論演習(2)	4	吉村 正	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	社会保障政策論演習(1)	4	植村 尚史	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	社会保障政策論演習(2)	4	植村 尚史	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	予防医学演習(1)	4	町田 和彦	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	予防医学演習(2)	4	町田 和彦	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	福祉教育論演習(1)	4	前橋 明	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	福祉教育論演習(2)	4	前橋 明	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	緩和医療学・臨床死生学演習(1)	4	小野 充一	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	緩和医療学・臨床死生学演習(2)	4	小野 充一	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(1)	4	川名 はつ子	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	児童家庭福祉論演習(2)	4	川名 はつ子	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(1)	4	田中 英樹	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	精神保健福祉論演習(2)	4	田中 英樹	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(1)	4	畠山 卓朗	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	健康福祉支援工学演習(2)	4	畠山 卓朗	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(1)	4	扇原 淳	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	健康福祉管理論演習(2)	4	扇原 淳	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(1)	4	岩崎 香	
修士(2年制)	演習科目	健康福祉科学	ソーシャルワーク論演習(2)	4	岩崎 香	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	心身医学演習(1)	4	野村 忍	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	心身医学演習(2)	4	野村 忍	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習(1)	4	根建 金男	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	認知行動カウンセリング学演習(2)	4	根建 金男	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	学校カウンセリング学演習(1)	4	菅野 純	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	学校カウンセリング学演習(2)	4	菅野 純	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	行動臨床心理学演習(1)	4	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	行動臨床心理学演習(2)	4	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	産業カウンセリング学演習(1)	4	鈴木 伸一	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	産業カウンセリング学演習(2)	4	鈴木 伸一	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習(1)	4	熊野 宏昭	
修士(2年制)	演習科目	臨床心理学	臨床心理アセスメント学演習(2)	4	熊野 宏昭	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	感性認知科学演習(1)	4	齋藤 美穂	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	感性認知科学演習(2)	4	齋藤 美穂	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	安全人間工学演習(1)	4	石田 敏郎	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	安全人間工学演習(2)	4	石田 敏郎	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	福祉工学演習(1)	4	藤本 浩志	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	福祉工学演習(2)	4	藤本 浩志	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	情報処理心理学演習(1)	4	中島 義明	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	情報処理心理学演習(2)	4	中島 義明	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習(1)	4	宮崎 清孝	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	社会的実践認知科学演習(2)	4	宮崎 清孝	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	心理行動学演習(1)	4	鈴木 晶夫	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	心理行動学演習(2)	4	鈴木 晶夫	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	言語情報科学演習(1)	4	菊池 英明	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	言語情報科学演習(2)	4	菊池 英明	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	知識情報科学演習(1)	4	松居 辰則	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	知識情報科学演習(2)	4	松居 辰則	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習(1)	4	宮崎 正己	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学演習(2)	4	宮崎 正己	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習(1)	4	百瀬 桂子	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学演習(2)	4	百瀬 桂子	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	生態心理学演習(1)	4	三嶋 博之	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	生態心理学演習(2)	4	三嶋 博之	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	対話情報処理論演習(1)	4	市川 寛	
修士(2年制)	演習科目	感性認知情報システム	対話情報処理論演習(2)	4	市川 寛	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習(1)	4	浅田 匡	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育実践学演習(2)	4	浅田 匡	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習(1)	4	岩坪 秀一	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報意味論演習(2)	4	岩坪 秀一	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習(1)	4	金子 孝夫	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学演習(2)	4	金子 孝夫	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習(1)	4	金 群	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学演習(2)	4	金 群	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習(1)	4	向後 千泰	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論演習(2)	4	向後 千泰	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習(1)	4	スコット ダグラス	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術論演習(2)	4	スコット ダグラス	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学演習(1)	4	永岡 慶三	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学演習(2)	4	永岡 慶三	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習(1)	4	西村 昭治	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学演習(2)	4	西村 昭治	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習(1)	4	野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論演習(2)	4	野嶋 栄一郎	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学演習(1)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	教育コミュニケーション学演習(2)	4	保崎 則雄	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(1)	4	森田 裕介	
修士(2年制)	演習科目	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育論演習(2)	4	森田 裕介	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	環境管理計画学特論	2	天野 正博	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	地球生態学特論	2	太田 俊二	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	環境生態学特論	2	森川 靖	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	環境社会学特論	2	鳥越 皓之	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	民族誌学特論	2	矢野 敬生	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	人間環境変遷特論	2	井内 美郎	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	地域資源特論	2	柏 雅之	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	野生動物学特論	2	三浦 慎悟	
修士(2年制)	講義科目	地域・地球環境科学	開発援助実践学特論	2	天野 正博	学部合併科目
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	学習動機づけ特論	2	青柳 肇	
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	発達行動学特論	2	根ヶ山 光一	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	建築計画学特論	2	佐野 友紀	
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	行動理論特論	2	木村 裕	
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	発達科学特論	2	大藪 泰	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	建築環境学特論	2	小島 隆矢	
修士(2年制)	講義科目	人間行動・環境科学	社会文化心理学特論	2	山本 登志哉	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	産業職業社会学特論	2	河西 宏祐	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	歴史人類学特論	2	蔵持 不三也	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	アジア地域研究特論	2	店田 廣文	

課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	移民研究特論	2	森本 豊富	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	家族社会学特論	2	池岡 義孝	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	都市社会学特論	2	臼井 恒夫	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	科学史科学哲学特論	2	加藤 茂生	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	考古学特論	2	谷川 章雄	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	フランス表象文化史研究特論	2	中村 要	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	ドイツ近代国民国家特論	2	村上 公子	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	生活文化史研究特論	2	余語 琢磨	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	社会学説特論	2	西原 和久	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	自然人類学特論	2	藤田 尚	
修士(2年制)	講義科目	文化・社会環境科学	スベイン社会文化特論	2	竹中 宏子	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	生体発達科学特論	2	木村 一郎	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	細胞組織学特論	2	小室 輝昌	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	生体機能学特論	2	今泉 和彦	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	神経内分泌学特論	2	山内 兄人	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス特論	2	鈴木 秀次	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	神経機能学特論	2	永島 計	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	健康医学特論	2	河手 典彦	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	応用健康科学特論	2	竹中 晃二	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	ヘルスプロモーション特論	2	辻内 琢也	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	分子神経学特論	2	柳原 伸一	
修士(2年制)	講義科目	健康・生命医科学	福祉ロボット工学特論	2	可部 明克	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	老年社会福祉学特論	2	加瀬 裕子	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	生命医療倫理学特論	2	土田 友章	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	スポーツ健康マネジメント特論	2	吉村 正	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	社会保障政策特論	2	植村 尚史	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	健康福祉管理特論	2	扇原 淳	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	予防医学特論	2	町田 和彦	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	福祉教育特論	2	前橋 明	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	緩和医療学特論	2	小野 充一	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	児童家庭福祉特論	2	川名 はつ子	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	精神保健福祉特論	2	田中 英樹	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	健康福祉支援工学特論	2	島山 卓朗	
修士(2年制)	講義科目	健康福祉科学	ソーシヤルワーク特論	2	岩崎 香	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	社会病理学特論	2	野村 忍	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理査定特論Ⅱ	2	佐々木、大月	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理学特論Ⅱ	2	根建 金男	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理面接法特論Ⅰ	2	菅野 純	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	教育臨床心理学特論	2	菅野 純	学部合併科目
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理査定特論Ⅰ	2	熊野 宏昭	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理学特論Ⅰ	2	鈴木 伸一	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	臨床心理面接法特論Ⅱ	2	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	行動療法特論	2	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	臨床心理基礎実習Ⅰ	2	菅野・根建	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	臨床心理基礎実習Ⅱ	2	菅野・根建	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	臨床心理実習Ⅰ	2	嶋田、鈴木(伸)、熊野	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	臨床心理実習Ⅱ	2	嶋田、鈴木(伸)、熊野	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	心理療法特論Ⅰ	2	山口 創	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	心理療法特論Ⅱ	2	三浦 正江	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	学校臨床心理学特論	2	小林 正幸	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	行動医学特論	2	熊野 宏昭	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	社会心理学特論	2	浦 光博	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	心理学研究法特論	2	福井 至	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	心理統計法特論	2	笹川 智子	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	精神医学特論	2	赤徳 理絵	
修士(2年制)	講義科目	臨床心理学	心身医学特論	2	野村 忍	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅰ	2	菅野 純	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅱ	2	野村 忍	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅲ	2	根建 金男	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅳ	2	佐々木 和義	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅴ	2	嶋田 洋徳	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅵ	2	鈴木 伸一	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅶ	2	熊野 宏昭	
修士(2年制)	実習科目	臨床心理学	心理臨床現場実習Ⅷ	2	大月 友	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	感性心理学特論	2	齋藤 美穂	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	安全人間工学特論	2	石田 敏郎	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	生活支援工学特論	2	藤本 浩志	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	情報処理心理学特論	2	中島 義明	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	教授学習過程特論	2	宮崎 清孝	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	感情心理学特論	2	鈴木 晶夫	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	言語情報科学特論	2	菊池 英明	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	知能情報科学特論	2	松居 辰則	1年制合同科目

課 程	科目区分	研 究 領 域 ・ コ ー ス	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	人間生体機能動態学	2	宮崎 正己	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	感覚情報処理学特論	2	百瀬 桂子	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	視覚デザイン	2	市原 茂	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	生体心理学特論	2	三嶋 博之	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	対話情報処理特論	2	市川 寛	
修士(2年制)	講義科目	感性認知情報システム	MRIによるヒト脳機能画像研究特論	2	渡邊 丈夫	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教師学特論	2	浅田 匡	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	マルチメディア特論	2	金子 孝夫	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	ソフトウェア工学特論	2	金 群	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文作成法	2	グレイ ロバート	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	科学英語論文口演法	2	グレイ ロバート	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン特論	2	向後 千春	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション技術特論	2	スコット ダグラス	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学特論	2	永岡 慶三	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	インターネット科学特論	2	西村 昭治	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育開発特論	2	野嶋 栄一郎	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	言語教育方法特論	2	保崎 則雄	1年制合同科目
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	教育システム工学	2	野口 裕之	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	ワークショップデザイン特論	2	山内 祐平	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	情報メディア教育特論	2	森田 裕介	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	定性データ解析特論	2	岩坪 秀一	
修士(2年制)	講義科目	教育コミュニケーション情報科学	学習環境デザイン特論	2	尾澤 重知	
修士(1年制)	研究指導	教育臨床コース	学校臨床心理学研究指導	—	菅野 純	
修士(1年制)	研究指導	教育臨床コース	臨床認知発達学研究指導	—	佐々木 和義	
修士(1年制)	コース必修(演習)科目	教育臨床コース	学校臨床心理学演習(1)	4	菅野、大月	
修士(1年制)	コース必修(演習)科目	教育臨床コース	臨床認知発達学演習(1)	4	佐々木 和義	
修士(1年制)	コース必修(実習)科目	教育臨床コース	心理教育臨床実習	2	菅野、佐々木、大月	
修士(1年制)	コース必修(実習)科目	教育臨床コース	心理臨床事例実習	2	菅野、佐々木、大月	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育心理学特論	2	青柳 肇	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床認知発達学特論	2	佐々木 和義	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床心理学特論Ⅲ	2	熊野 宏昭	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	特別支援教育特論	2	佐々木 和義	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育臨床査定特論	2	大月 友	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	乳幼児発達心理学特論	2	井原 成男	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育開発特論	2	野嶋 栄一郎	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	発達行動学特論	2	根ヶ山 光一	2年制合同科目

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	インストラクショナルデザイン特論	2	向後 千春	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	学校臨床心理学特論	2	小林 正幸	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	応用健康科学特論	2	竹中 晃二	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	インターネット科学特論	2	西村 昭治	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	臨床心理学学校地域援助特論	2	大月 友	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	家族臨床心理学特論	2	菅野 純	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	学校臨床生徒指導学特論	2	嶋田 洋徳	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教育集団心理学	2	岡安 孝弘	
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	教授学習過程特論	2	宮崎 清孝	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	発達科学特論	2	大藪 泰	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	福祉教育特論	2	前橋 明	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	産業職業社会学特論	2	河西 宏祐	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	知識情報科学特論	2	松居 辰則	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	社会病理学特論	2	野村 忍	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	感情心理学特論	2	鈴木 晶夫	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	言語教育方法特論	2	保崎 則雄	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	言語情報科学特論	2	菊池 英明	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	児童家庭福祉特論	2	川名 はつ子	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	生体機能学特論	2	今泉 和彦	2年制合同科目
修士(1年制)	コース選択必修科目	教育臨床コース	社会文化心理学特論	2	山本 登志哉	2年制合同科目
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境管理計画学研究指導	—	天野 正博	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	人口学研究指導	—	阿藤 誠	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境生態学研究指導	—	森川 靖	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	環境社会学研究指導	—	鳥越 皓之	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	水域環境学研究指導	—	井内 美郎	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	地域資源論研究指導	—	柏 雅之	
博士後期	研究指導	地域・地球環境科学	動物行動生態学研究指導	—	三浦 慎悟	
博士後期	研究指導	人間行動・環境科学	発達行動学研究指導	—	根ヶ山 光一	
博士後期	研究指導	人間行動・環境科学	建築計画学研究指導	—	佐野 友紀	
博士後期	研究指導	人間行動・環境科学	社会文化心理学研究指導	—	山本 登志哉	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	産業職業社会学研究指導	—	河西 宏祐	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	文化生態学研究指導	—	蔵持 不三也	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	アジア社会論研究指導	—	店田 廣文	
博士後期	研究指導	文化・社会環境科学	移住論研究指導	—	森本 豊富	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体発達科学研究指導	—	木村 一郎	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体構造学研究指導	—	小室 輝昌	

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	生体機能学研究指導	－	今泉 和彦	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	神経内分泌学研究指導	－	山内 兄人	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	運動制御・バイオメカニクス研究指導	－	鈴木 秀次	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	統合生理学研究指導	－	永島 計	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	応用健康科学研究指導	－	竹中 晃二	
博士後期	研究指導	健康・生命医科学	医療人類学研究指導	－	辻内 琢也	
博士後期	研究指導	健康福祉科学	予防医学研究指導	－	野田 和彦	
博士後期	研究指導	臨床心理学	心身医学研究指導	－	野村 忍	
博士後期	研究指導	臨床心理学	認知行動カウセリング学研究指導	－	根建 金男	
博士後期	研究指導	臨床心理学	行動臨床心理学研究指導	－	嶋田 洋徳	
博士後期	研究指導	臨床心理学	産業カウセリング学研究指導	－	鈴木 伸一	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	感性認知科学研究指導	－	齋藤 美穂	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	安全人間工学研究指導	－	石田 敏郎	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	福祉工学研究指導	－	藤本 浩志	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	情報処理心理学研究指導	－	中島 義明	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	心理行動学研究指導	－	鈴木 晶夫	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	言語情報科学研究指導	－	菊池 英明	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	知識情報科学研究指導	－	松居 辰則	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	感覚情報処理学研究指導	－	百瀬 桂子	
博士後期	研究指導	感性認知情報システム	対話情報処理論研究指導	－	市川 薫	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	情報コミュニケーション科学研究指導	－	金子 孝夫	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	ネットワーク情報システム学研究指導	－	金 群	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	インストラクショナルデザイン論研究指導	－	向後 千春	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育情報工学研究指導	－	永岡 慶三	
博士後期	研究指導	教育コミュニケーション情報科学	教育開発論研究指導	－	野嶋 栄一郎	

スポーツ科学研究領域設置科目(2005年度以前入学者対象)

課 程	科目区分	研究領域・コース	科 目 名	単 位	担当教員	備 考
博士後期	研究指導	スポーツ科学	スポーツ人類学研究指導	－	寒川 恒夫	
博士後期	研究指導	スポーツ科学	スポーツ神経科学研究指導	－	彼木 一之	

早稲田大学はハラスメント防止に真摯に取り組んでいます。

もう一歩先のハラスメント理解のためのQ&A

解説

Q. ハラスメントって何ですか？

A. ハラスメントとは、性別、社会的身分、人種、国籍、信条、年齢、職業、身体的特徴等の属性あるいは広く人格に関わる事項等に関する言動によって、相手方に不利益や不快感を与え、あるいはその尊厳を損なうことをいいます。大学におけるハラスメントとしては、性的な言動によるセクシュアル・ハラスメント、勉学・教育・研究に関連する言動によるアカデミック・ハラスメント、優越的地位や職務上の地位に基づく言動によるパワー・ハラスメントなどがあります。

Q. ハラスメントって何で問題なのですか？

A. 人権侵害だからです。ごく気軽な気持ちでの行為や言動が相手にとっては耐えられない苦痛となっていることもあります。結果として、日常生活に支障をきたすケースも少なくありません。自分に置き換えて、問題意識を高く持つことが大切です。そのためにも正しい知識、理解が求められます。ハラスメント防止委員会では、「ハラスメント防止に関するガイドライン」を制定し、対応を定めるとともに、パンフレットやWebサイトで様々な情報を提供しています。是非活用してください。

ハラスメント防止委員会URL
<http://www.waseda.jp/stop/>

Q. 学生がハラスメントにあうのは、どんな場面ですか？

A. きわめて残念なことです。授業・ゼミ等がアカデミック・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの場、サークル等がセクシュアル・ハラスメントやパワー・ハラスメントの場になりえます。

Q. 学生が加害者になることもありますか？

A. はい、ありえます。たとえばサークルのコンパで性的な言動を繰り返したり、飲酒を強要したり、交際をしつこく迫った結果、相手が不快感を持った場合には、セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントになりえます。

相談

Q. ハラスメントをうけた場合、どこに相談すればいいのでしょうか？

A. ハラスメント防止室（相談室）に相談してください。開室時間、相談方法、連絡先等の詳細については**下記を参照してください**。

Q. ハラスメント防止室では何をしてもらえるのですか？

A. 現状について専門の相談員が詳細をうかがいます。かなりのケースが、この段階で気持ちに整理がつき、解決にいたっています。相手との関係について調整を希望する場合は、【対応策の検討】に進みます。その後、ハラスメント防止委員会の苦情処理案件の対象と認定された場合は、当事者からあらためてお話を伺い、相手方との調整が始まります。秘密堅持と被害者への報復等の禁止が明確に定められているので、安心して相談してください。また、外部の相談窓口もWebサイトで紹介しています。

Q. ハラスメントなのかわからないのですが、相談してもよいのでしょうか？我慢しようか悩んでいます。

A. 感情には個人差があるので人によってはハラスメントと感じないようなケースでも、本人の主観的な感情が重要な要素になり、ハラスメントになることがあります。まずは、ハラスメント防止室に相談してください。

Q. 友人から相談されているのですが？

A. 友人に相談されたら、まずは真剣に耳を傾けて下さい。そして、適切な対処のために、ハラスメント防止室などの専門窓口へ相談するよう勧めてください。

■相談窓口 ハラスメント防止室

相談は、電話・メール・Fax・手紙どの方法でも承ります。来室前なら匿名での相談も可能です。来室の際は必ず電話で予約をしてください。

【TEL】 03-5286-9824 *留守番電話機能つき

【Fax】 03-5286-9825

【E-mail】 stop@list.waseda.jp

【URL】 <http://www.waseda.jp/stop/>

【開室時間】 月～金 9：30～17：00

【事務所所在地】

〒169-8050 新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学 24-8 号館 2 階（相談室）

早稲田大学大学院人間科学研究科

〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15

電話 04-2947-6703 (ダイヤルイン)

FAX 04-2947-6801

<http://www.waseda.jp/human/graduate/>



早稲田大学大学院人間科学研究科

GRADUATE SCHOOL of HUMAN SCIENCES
WASEDA UNIVERSITY